

---

# 真理の原理

進士夜紳士

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真理の原理

### 【Nコード】

N9363N

### 【作者名】

進士夜紳士

### 【あらすじ】

『人間は元来、至極単純な生き物だった』

万物を構成する五種の元素と三つの属性。

現象を支配して根本原理を操る、総勢十五人のサバイバルバトル。  
主人公の西条司さいじょうつかさは、戸惑いながらも『真理の道』を歩んでいく。

最後の生き残りには、望みと真理を贈呈しよう。

## 第一話 ルール説明な夢（前書き）

一話の登場人物  
さいじょうつかさ

西条司：主人公

？？？：？？？

## 第一話 ルール説明な夢

まだ真夜中……なんだろうか？ それにしては、やけに暗すぎる気がした。

意識だけが覚めた、と誇張しても言いぐらいに。

薄暗いなんてもんじゃない。

夜陰の中で瞼を閉じ、さらに気が遠くなったような 底知れぬ黒。

寝ているのか、あるいは立っているのか、目を開けているのか、はたまた閉じているのかも分からない。

感じられるはずの手や足が見えていないのだから、そこに在るのかどうかも分からないのだろう。

何も掴めず、全てが墨色に染まり、匂いなんて無く、そして触れられない。こうしていると時間の感覚も無くなって、耳鳴りに近い静寂だけが感じられた。

とても曖昧で、けれども誤魔化しが利かない何か。

広大な海の上で波にたゆたう浮き輪にでもなった気分だった。心なし、不思議と落ちていていられる空間。

いつものアレとは……少しばかり印象が違う気がするし、寝起きにしては思考もクリアだ。

だとすると……もしかしたら、死んだらこんな世界なのかもしれない。

何一つとして存在しない、誰も居ない、見聞きできない一人きりで ひたすら永遠に。

考えるだけで、嫌になるけど。

「君は実に運が良い」

唐突に、そんな声が聞こえた。

それは若者のようできて老人のような、男性のそれに近しく女性に似た中性的な声色で語り、透き通る威圧感があった。

俺の心に直接呼びかけているかの如く、言葉の本質を理解した声。

「ああ、喋らなくて結構」

っていうか喋れないんだけどな。口が開いているか、喉があるのかも不確かなんだ。

今は黙読しているみたいに、心の中で思うだけに過ぎない。

「幸運なことに、君は『真理の道』に選ばれた初めての人間だ。ああ、もちろん拒否権は無い。君は選ばれただけで、自ら選んだ訳ではないのだからな」

あつ、ははは……なんだあ……これ、やつぱし夢だ。

悪いが俺は現実主義者なので、非現実的なことは一切認めていない。空想と実像の境界線ぐらいは、ちゃんと引いてある。今や大抵のことは科学的な根拠で証明できる時代だ、未知の事象を並べて他人の不安を煽るのも悪趣味ってなもんだろう。有り得ないことに対しては否定的になる、そういった二面性が俺にはあるのだ。それ故に『夢の中で意識が目覚める』なんてことが多々ある訳で。たしか、明晰夢……だっけか？ 夢を夢だと自覚できるってヤツだったと思う。

それなりに楽しくて、当たり前のようにマイペースにはいかないけれどもそれが自然で、そしてどうしようもなく 退屈な生活。そんな現実を起こるはずもない矛盾。この夢も、多分その類なのだろう。

ああ、そうだ……こうなったら、最後まで楽しむと決めている。どうせ醒めたら忘れちまう夢だ、誰に遠慮することも無い。とりあえず、アンタ誰だよ？

「私は無であり有、個にして群、虚であり全」

あゝ、はいはい。もういい分かった、それだけで理解しましたとも。

とにかく、アンタは神様ってことなんだな？

まあ、夢って何でもアリだよな……突拍子も無いことを、いちいち考えても仕方がない。大して面白くもないし、受け流すのが一番だろう。

それで、アンタは俺に何をしてくれるんだ？

「万物は五種類の元素で構成されている」

は？ 万物？ 五種類の元素？

ふうん……どこかで、聞いたことがある。

どこぞのゲームの中で……いや、小説の設定だったかも……たしか、五行思想だっけか。

元素、元素は……えーっと、木・火・土・金・水だろ？

「その通り、私としても理解が早いと助かる」

まるで俺の心の声を読んでいるみたいに、相槌を打たれた。自分以外に見透かされるのは堪らなく嫌な気分だ。

「その五種類の元素は、さらに三つの属性に分けられる。

木は『樹』、『空』、『風』

火は『炎』、『光』、『熱』

土は『地』、『岩』、『護』

金は『鉞』、『堅』、『雷』

水は『氷』、『流』、『癒』だ」

はあ……いよいよもって荒唐無稽な話になってきたぞ。  
何？ 三つの属性だって？

そんな矢継ぎ早に言われても、俺には訳が分からないんだが。

「君は幸運にも最初の一人。完全な状態で選択の権利が有る。選び  
たまえ、属性を。ただし、選べるのは一つのみ」

はあ？ 大体、真理の道って何だよ。

属性を選ぶって、何でんなことしなきゃいけないんだ？

「その属性を持って、君には『真理』に近づいてもらう。然る後に、  
君の他にも十四人の者を選定する」

……なるほどね。

展開的に、俺とそいつ等とを戦わせようなんて考えてんのか？

「然り。君達は属性を駆使し、最後の一人になるまで競ってもらう」

ははっ！ ちょっと面白くなってきた。

漫画や小説でも、こういう時はルールが重要。

……で？ 競うってどうやってだよ？

「一つ、相手を殺すこと。二つ、相手の真名を奪うこと。そのどちら  
かが満たされれば、君は真理に近づくだろう」

はいはい、殺すか奪うかは自由ってことね。随分と物騒なこった。  
んで、真名？ 真名ってのは何だ？

「真名とは万物の真の名。人間に対してもソレは変わらぬ。属性の

神託を授かった際に贈る、君の本質的な名前だ」

要は属性を選べば貰える称号ってことだな。  
さて、これが肝心。属性の使い方は？

「属性を唱えれば良い。それで、個々の能力は解放される」

ふーん……ん？

じゃあ、個々の能力ってのは？

「それは君の『願い』次第だ。君はこれから属性を選択する。その際、『何を願ってソレを選んだか』で願いが定まるだろう。即ち……君の世界、君の創造、君の願望で決まる」

俺の……世界？

いやいや、真面目に考えるなよ。所詮は夢だぜ？ 現実じゃない。  
適当に格好良いのを選べば、それでいいじゃんか。  
って待て、それより確認しなくちゃな。

死ぬやら奪われるやらのデメリットは分かったよ。

そんじゃあ、俺のメリットは何なんだ？ 最後の一人になったら、賞金でも貰えるってのか？

「君の『望み』を一つ叶える。富、名誉、死者の蘇生、望みに制限は無い」

はあーん、そいつは美味しい条件だな。

こんな異能力バトルで望みが叶うってんだ、くだらな過ぎて笑えてくる。それに、ありがちな話だ。どこぞの物語の中へと迷い込んだみたいに、現実味が無い。

まあ、退屈はしなさそうだけれど。



……少しだけ、ほんの少しだけでも真面目に考えてみようかな。  
他の異能力者とは、どーやったら会えるんだ？

「収束するように運命が重なる。そこで戦うかは、君達次第だ」

要は偶然出会ってワケね。

他は……特に無いな。

コイツの目的なんぞを訊いても、後々の面白みが減るしな。

さて、そんじゃあお待ちかねの属性を選ぶとしよう。

俺の願望で使えるようになるなら、イメージしやすいのがいいよな。

この中だと……『風』、『炎』、『雷』、『氷』あたりかな？

ピンとくるのは『炎』か。

日常生活で頻繁に使ってるし、なにより強そうだ。

どーせ夢なんだし、これでいいや。

「決まったようだな。では、君の名を訊こう」

西条司<sup>さいじょうつかさ</sup>、高校二年生の帰宅部だ。家族は三人構成、ペットなし。

趣味は散歩に小説、好きな食べ物はカレーで、血液型はO型だよ。

これだけ個人情報垂れ流してんだ、他に訊くことなんてねえだろ？

「……了承した。では、真名を贈ろう」

そう言って、誰だか知らない何かは、俺の芯に突き刺すよう呟いた。

「君の『真理』に、幸あれ」

その瞬間、俺の意識が溶けるように薄まっていく。

ああ……もう終わりか。夢にしては、まあまあ面白かったよ。

徐々に納まっていく興奮。冷め始める心。

消えていく意思とは対照的に、胸の奥底で一つの言葉が輪唱のよう  
うに聞こえた。

『ケレオス』

## 第一話 ルール説明な夢（後書き）

初めましての方は初めまして。

作者の進士夜 紳士です。

五作目の投稿です。

バトル物を書きたかったので、つつい投稿してしまいました。  
のんびりと更新していく予定ですので、温かい目で見て頂けると幸いです。

## 第二話 覚醒と自覚（前書き）

二話の登場人物

さいじょうつかさ

西条司：主人公、属性は『炎』

なしまつばさ

名島翼：友達

## 第二話 覚醒と自覚

「……………」

変な 夢を見た。

薄っすらと目を開けた俺は、いの一番に、そう思った。

そのまま天井を数十秒間見詰めて……無意味に手足を動かしてみる。

動く、見える、聞こえるし、感じた。

長く吸って、ゆっくり息を吐く。数回瞬きをして、やっとこさ現実を実感。

「……………くだらねえ」

夢なんてのは、所詮記憶の整理だ。俺からあんな奇想天外な話が生まれるなんて、軽く自己嫌悪をしたくなる。うーん、昨日読んだ小説の影響だろうか。それとも寝る前に見ていたテレビの仕業なのか？

なんにしても、まあ夢の内容は一言一言をハッキリと覚えていた。普段なら数秒たらずで忘れてしまうのに……これは、なかなか珍しいケースと言えるだろう。

最後に聞こえた『ケレオス』ってのが意味わかんないけれど、話の流れ的に俺の『真名』ってヤツなんだろうな。真名……真名ねえ。

「って、そんな事を考えてる時間はねえんだよ」と

俺はチラリと目覚まし時計を確認して、ベッドから起き上がり学校の制服に着替えた。

学校指定のワイシャツやネクタイ、ズボンを着ている最中に、段々と頭がシャッキリとしてきて、あのルール説明のような浮世離れた対話を打ち消してくる。

いや、実際に夢なんだけど。

「よっし着替え完了、と」

声に出して指差し確認。そして腕時計をチェック。さて、平常通りの起床とはいえ、登校までに残された時間はまだまだたっぷりある。余裕を持って日々を送りたい俺としては、このまま一階へ行き父さんや母さんとニユースでも見ながら朝食を済ませるのが平常ル―チンなのだが。

でも……まあ、不思議なことに試してみたくなるってのが思春期って訳で……ほら、誰にだってあるだろう？ 思春期特有の価値観ってモンが、心のどっかで自分を特別視してる感覚ってのがさ。

「あゝ……うん」

俺は自分の部屋を見渡して、他に誰も居ないことを確認した。少し汚い勉強机、少量の漫画に大量の小説が詰め込まれた本棚、木製のクローゼットと真っ白いベット。こういう馬鹿なことをする時に、一人部屋であることを嬉しく思う。

ゴクリと生唾を飲んで、右の掌を正面に突き出す。無残な結果になると分かっているけど、妙な緊張感が高まっていく。

えーっと、たしか……能力を使うには『属性』を唱えるんだっつたよな。いちいち声に出さなければいけないとは、随分と魔法チックな能力だ。あるいは必殺技っぽくて格好良い。だからこそ、それだけ自爆する確率も上がる訳で。

「……ええい、迷うな西条司！ 男だろう己は」  
そうと決まれば物は試し、だ。どうせ誰も見てやしない。何も考えないで、そつと呟くだけ。

「え……『炎』」

………シーン。

何事も、起きなかった。

アホだ。

俺は今まさに、顔から火が出せるぐらいに赤面していた。

さ……寒い、いや熱いッ！ 想像以上に恥ずかしい！ つーか、

洒落にならん！　こんなところ誰にも見せられねえよ！　朝っぱらから何やってんだ俺はっ！？

だけれど後悔の念にベツトの上で悶えるのと同時に、心の隅っこでは何となく安心していた。

ああ、そうだよ。これが現実。これがリアルで、俺の居る世界だ。変わらない平凡に万歳。

「はは……んだよ、やっぱし夢だ」

そりゃそうか、いきなり手から炎が出せるようになるのなら、この日本が平和になんてなる訳がない。

夢見る少年が必ずブチ当たる庶民の壁に高さを感じ　少し落ちて着いて、ちよっぴり残念で。

天井に向かって『くだらねえ』と再度呟いて、俺は両親と一緒に朝食を平らげ、重々しく学校へと歩き出した。

登校中に通る小さな公園は、アイツとの暗黙の集合場所になっている。

ふと目を移すと、出入り口付近に在る黄赤色のレンガに腰を掛けて、今日もアイツの方が先に来ていた。アイツは俺のことを見つけるなり、手に持っていた携帯ゲーム機をパタンと閉じて、小走りで近寄ってくる。

「お早う、司くん」

「……うーす」

いつも通りの変わらない挨拶を交わす。

さて、改めて身辺整理をしてみよう。このヒョロとした小柄で軟弱そうなヤツの名前は、なしまつばさ名島翼。俺とは学校の友達であると同時に、小学校からの付き合いだ。いわゆる幼馴染みな関係であり、家

が近いつてんだから仕方なく一緒に登校している次第だ。

これが女子だったらかなり萌える展開なんだが……非常に口惜しいのだけれど、コイツ男なんだよなあ。

長い前髪が鼻先まで伸びていて、俺からだと言ったと翼の目元は確認できない。いい加減、髪切れよ……つと説得するのも、だいぶ前から諦めた。誰しも譲れない自尊心はある。コイツの場合は、それが前髪だったという話なのだろう。

朝の挨拶もそこそこに、俺達は公園から歩き出して現在進行形で青春を謳歌しているはずの学校を目指した。

「パケットモンスターホワイト、ついに発売したね！今度は3Dマップだよ、3D！飛び出す立体映像だよ！」

「はあん、時代と共にゲーム会社も進化するもんだな……ま、俺は興味ねーけどよ。パケモンは金・銀で卒業してるし」

そう、翼は重度のゲーム愛好家で、新作ゲーム発売日の翌日は決まってゲームの話題を出してくる。その内容たるやゲーム性やストーリーについてなんて序の口、果てはゲームスタッフのこだわり具合に至るまでの何でも御座れだ。

最近の俺はもっぱら小説しか読んでいないので、翼が多弁するゲームの話題にはついていけないのだけれども……当の本人は嬉々として満面の笑みなので、まあ満更でもない。こっぴどく自爆をして、落ち込み気味な気分でも盛り上げてもらおう。

俺も昔はよく遊んでいたんだが、中学二年生あたりからゲームの面白みを感じなくなっちゃった。今も尚、急速的な高度経済成長し続けるゲーム会社と漫画家達についていけなくなった。とでも言えば、斜に構えていて格好が付くのだろうが、実際はそんなこともない。『ゲーム好き』子供』とかいう固定概念は持ち合わせていないし、別に高校二年生の分際で大人ぶっている訳じゃないんだがな。ただなんとなく、文体から色彩形容を想像するのが好きになっただけだ。特別な理由なんて、ありはしない。

「え、パケモン面白いのになー。二人ならトレードとかバトルと



かできるのに……司くんってゲームやらないし、漫画とかも全然読まなくなったよね」

「今は小説の方が面白いからな。ゲームとか漫画って絵がついてるだろ？　なんか想像が制限されるって言うか、イメージが固定されんだよな」

「ふーん。そんなもんかな？」

「その点、小説は文字だけだから。自分で想像するから頭の運動にもなるし、漢字にも強くなれるぞ」

「へえへえ、トリビアー」

一昔前の流行語で適当に空返事をしているところを見ると、この手の説法をコイツに話しても無意味なようだ。せっかく活字中毒仲間にしてやるうかと思ったのに、なんかムカつく。

「はん、ゲームもいいけど……際限なくなるほどやんなよ。ゲームは一日一時間、つって言うだろ？」

「名人の名言だね。いやあ司くんは相変わらず古いね。今の時代は『一時間やって十五分休憩』ってループが作られてるんだから、いいの」

「お前さ……ぜってえ目が悪くなんぞ」

「たはは、心配してくれてアリガト。でも未だに両方とも2・0の正常値なんだ。それに素晴らしいゲームと共にこの両目が朽ちるのなら、それもまたイイ」

感慨にふける翼に「……あつそ、ならもう止めねーよ」と返す。

繰り返される、登校中の会話。日常のちよつとしたエッセンス。

よって何度も同じ話題を出すという妥協は避けたい。ほぼ毎日顔を突き合わせてる為、常に新鮮味が要求されるのだ。何か、他の話題で翼が興味を示しそうな出来事はないだろうか。そう考え自らの記憶を巡回させていると、思い当たる事柄が一つだけあった。

「……あつ、そーだ。今日な、実は翼好みの夢を見たんだよ」

「え、どんな？」

単調と歩くだけの暇つぶしに、俺は夢の内容を話した。

建前はリアクションが知りたくて。本音は、鼻で笑って欲しかった。いかにもデタラメな与太話だと、共感して欲しかったんだ。

説明中に、何故か『ケレオス』とかいう真名だけは言い淀んでしまったけれど、わざわざ正確に伝えなくても不都合はないだろう。なんつったって夢の話だしな。

俺が夢の内容を話し終えると、翼は驚いたようにパチクリと瞬き（前髪の揺れ具合から判断）をして、さながら未確認生物を目撃したかのように俺を見詰めた。

「な、なんだよ翼。言いたいことがあるんなら包み隠さず言ってくれ」

「いつ、いや……び、ビックリだよ。僕、司くんって夢の中でも現実的なんだと思ってた。なんなの？ その夢。レベル1で旅立った勇者が、いつの間にか魔王になって帰ってくるぐらいに有り得ないんだけど」

「うつ」と短く唸り、今更ながら夢の全容を赤裸々に語ってしまったことに、とても恥ずかしくなる。

バツカでえ、何マジになって話してんだか。

「いやいや、夢だから。現実の話じゃないからな。か、勘違いすんなよ、俺は夢見がちなメルヘン青年じゃないぞ」

「えゝ。でも、『属性』……だっけ、自分の部屋で唱えたんでしょ？」

ぐわわあ！？ 余計なことまで喋っちゃった！

「そそ、それはだなっ！ なんとなくって言うか、青臭い思春期の暴走と言うか……」

「いやゝ、それにしても面白い夢だよな」

俺の言い訳を無理やり無視して、興味を示した幼馴染はご機嫌な調子で話し続ける。

「『真理の道』って言うの？ それが何なのかは分かんないけど、『属性』っていう概念は面白そうだね。そーだなー、僕だったらどの『属性』を選ぼうかなあ」

「っ……はあ……俺は鼻で笑って欲しかったんだけどな」

「『雷』とかってカッコイイよね、なんか強くて使い勝手が良さそうで。あとは『空』かなあ、空とか飛べちゃったりして。そしたら学校に登校するのも早くなったり……いや、それよりも……」

テンションが徐々に低くなっていく俺を放って、翼は一人で妄想を膨らませている。こうなっちまったら何を話し掛けても無駄だ。右耳から入ってダイレクトに左耳へ通り抜けてしまう。

翼は数分間あれやこれやと呟いて、ようやく思い出したように俺へと声を掛けた。

「そう言えばさ、司くんって『炎』を選んだんだよね」

「……え、ああ、そうだけど」

「部屋で呪文を唱えた時って、どんな感じでやったの？」

嘘だろオイ……公道で、しかも立派な高校生が妄想話を膨らませやがった。もうやめてくれ違う話題に移りたい。かと言って、話を振ったのは俺だしなあ。テンション上げ上げのコイツを無碍にすることも出来ないし……。

ここは事実だけを簡潔に言っ、一刻も早く話題を切り上げてしまおう。

「何も考えないで唱えたんだよ。結局、炎も何も出なかったけどな」  
自分で言っ、て馬鹿らしくなってくる。けれど、翼は俺の返答に反応して益々興奮していた。

「それだよ、それ！ さっきの夢の話だとさ、出す時に『願望』しないと駄目なんじゃないの？」

「……はあ？」

なんだって？ 名島翼お得意のゲーム脳だろうか？

「えっと、だからさ！ 何かを願って『属性』を選ぶんでしょ？」

「ん、ああ、そうだけど」

「唱えた時にさ、司くんが何も考えてなかったから、何も出なかったんじゃないの？」

……まあ、それは……そう、なのだろうか？

「おや？ この流れ……もしや、ちょっと待て！

「オイオイ、まさか俺にもう一回『アレ』をやれとか言わないよな？」

「え？ やってくれるんじゃないの？」

「ふ、ふざけんなっ！ やるわけねーっつーの！

「あんな恥ずかしいこと、人前で出来るか！？ 否、出来ないね。断固辞退するッ！

「翼は『ねえー？ まだー？』みたいな顔をして、俺のことを覗き込んでやがる。完璧に他人事だ。こんのお、ニヤニヤしやがってっ！

「ふ、ふざけたこと抜かすなあああー！」

「俺は翼から逃げるように、怒鳴りながら学校まで走り去った。サカスのピエロじゃあるまいし、人前の道端で道化になるには勇気が足りないッ！」

「昼休みは昼寝の時間。それは俺の習慣であり、規則的な生活の一部に組み込まれている。食後の眠たい時に寝られる幸せ。それを学生時代の内に味わい尽くしたいのだ。クラスメイトの皆は、そんな俺の『こつちに近寄るなオーラ』を察しているのか、率先して睡眠妨害などをする輩は居ない。俺の正面に座ってる翼も、いつも構ってないからか新作の携帯ゲームに熱中している有り様だ。」

「ここで俺の独白から予測される勘違いを正しておこう。俺は、友達が居ない訳ではない。あえて作らない訳でも、モジモジして作れない訳でも、気の合う相手が居ない訳でもない。他の休み時間では翼やその辺の奴等とも適当に話すし、男女関係無く話し掛けられれば普通に応えられる器の持ち主だ。いやまあ、女子と話す機会はない

のだけれど。

よし……そろそろ寝る、か。

丁度良い高さの教科書を枕代わりに、寝顔を見せないようハンカチで顔を覆って……瞳を閉じる。

次に目覚めるのは、携帯でアラーム設定をした授業開始五分前だ。安らかな振動で俺を起こしてくれるはず。

だがしかし、今日に限っては例外が起こった。

俺が机に突っ伏してウトウトと安眠体勢に入っているところを、

大音量の校内放送で叩き起こされたのだ。

「んだあ？」と不機嫌そうに顔を上げる。いきなりの校内放送とは何とまあ稀なことだ。他のクラスメイト達も驚いたのか、雑談で喧噪としていた教室が、一転して静まり返った。

『あー、ゴホン。本日、午前中に一年生の教室で体調不良者が多発しています。流行の風邪かもしれないので、全校生徒は速やかに下校すること』

同じ連絡事項を復唱して二回。言うだけ言って校長による校内放送が終わると、再び教室の中が騒がしくなった。

教室内は『えー、なにになに？ 新種のウィルスじゃね？ 超こえー』とか、しょうもない話し声が行き交っていて、俺の生活習慣はまたしても妨害されてしまう。

ったく子供だなー、新種のウィルスならもっと大々的に警告されるっての。いちいち騒ぐようなことかよ などと、心中で相槌を打ってみる。駄目だ、不毛だ。

仕方がないので、俺は貴重な昼休みをボーッと過ごすことにした。放心でもいい、休み時間ぐらい勉強のことは考えたくない。不幸中の幸いか、俺はクラス替え時のクジ引きで決定された席順において、特等席に近い窓際をゲットしているのだ。ぼんやりするには打ってつけの場所だろう。

まどろむ瞳で窓の外を眺めてみる。青空と雲が7対3の比率……絵に描いたようなほのぼの日和だ。そんな中、無自覚に思い浮かんできたのは……どうしてか、あの夢の出来事。夢物語をじっくりと吟味して、『馬鹿な妄想だな』と結論を出す。

荒唐無稽でデタラメな話。早いとこ忘れてしまった方がいい。

そうは思うが、無意識を意識すればするほど、あの真名だけが俺の心に残り続けていた。

頭の裏側に張り付くような、言葉。まるで、忘れてはならない大切な事のように。

あつという間に時間が流れて、今は夕暮れ時の放課後だ。

翼はパソコン部へ行き、俺は帰宅部へと赴く。

……まあ、普通に家に帰るだけなんだけどさ。

俺の住んでいる所は何の変哲もない一軒家で、二階建ての多少古びた外装。ま、自分の部屋もあるし、それなりに恵まれている方なのかもしれない。

家の外は住宅街になっていて、若干道が細い。道路は車二台分がギリギリ走れる横幅になっていて、周辺地域の通学路というだけあって制限速度も三十キロだ。

それでも結構頻繁に事故が多発している地区なので、俺は馴染みのある現地住民しか知らないような、もっと細い裏道を通学路に選んでいる。ちよつとした遠回りになるのだろうが、気にはならない。物思いに耽りながら歩くのは好きなんだ。

住宅を挟むように伸びる、細長い一本道。人通りも車の騒音もなく、考え事するには打って付けのお気に入りポイントだった。

一方通行ですらない、通行禁止の歩行者専用。ここなら車は走っ

てこない。道路交通法で走ることが許されない。

そのはずだったのに

キキッ！！ と猛々しくドリフトをして、俺の正面に車のボンネットが見えた。

それだけならまだしも、前方の車は……動いているように見える。逆に俺は不意の異変に面を食らって、身動きが出来なかった。なす術もなく、立ち尽くすしかない。

足が竦んだ。

まず、脳の処理が追いつかない。俺は何をされ、何になってしまっ  
うのか。頭の中が空白で埋め尽くされている。

普通なら通らない道。

普通なら通れない道。

そんな一般常識が通じるレベルの物事ではないことは、明確すぎた。

ガンッガンッ！ と左右の壁に衝突しながらも、荒々しい車は徐々に速度を上げていく。

アクセル踏みっぱなしの、暴力的な走行音が聞こえてきた。地に  
着けている靴底からは、迫り来る恐怖の振動を感じ取っている。

交通事故、病院、死亡、葬式、決別、忘却。

「ッ！？」

何、だ……何なんだよこれ、何でこんな事になってんだよ！ 洒  
落じゃすまされねえぞ、こんなこと！！

とか、突っ込む口上すら呑んでしまう。それ程どうにもならな  
く、それ程どうしようもない。

冗談じゃ、ない。

俺はやつとのこと我に返って、周囲の状況を確認した。

この裏道は、車一台分の幅しかない。

距離にすると300m程度で、俺はそのちょうど真ん中に居る。

僅かに振り返って、横道に逃れられる場所を探すが……見当たらない。車を阻んでくれる電柱すら皆無な、嫌になるぐらいの一本道くっそ！ 出口まで戻れねえ！ たとえ裏道の出口へ駆けたところで、車の速度に適うはずもない。

「っ……は……はっ……はっ……」

心臓の鼓動が、急かすように音を立てて速くなる。

両サイドのブロック塀は高く、跳躍すればギリギリ手が届く範囲。

駄目だっ！ ブロック塀に跳んでよじ登っても、間に合うかどうか……分からない。

頭で連想される事柄は、よじ登っている最中に真横から轢かれ、跳ね飛ばされる俺の姿。数mに渡って転がり、絶命する未来。

く、車のボンネットに飛び乗るか！？ ……ば、馬鹿なこと考えでんじゃねえ！ そんな映画みたいな真似、出来るわけねえだろーがっ！

八方塞がり。

挙動不審に踏ん切りが付かず、右往左往している間にも車は走り来る。

「ヒャーハアアアッ！！」

狂ったように 事実、狂乱しているのだろっ。運転手から発せられた奇声が、俺の耳元まで届いた。

「っ……嘘、だろ？」

なに考えてんだよ、エンジンの音が高いぞ。今更ブレーキを掛けたとしても、もはや衝突は免れないだろっ。その四輪駆動の乗用車は、間違はなく人を殺せる速力に達していた。

「はっ……はあ、はあ」

正気を維持する為の処理能力に、身体が酸素を求め軽い過呼吸に陥る。高まる動悸を鎮められない。全身が身の毛立ち、肺が凍りつく。

人間は見た目以上に脆くて、どう頑強に鍛えたところで……車に



轢かれてしまえば、死んでしまうのだ。

あっさりと、至極簡単に、死んでしまう。

それが現実。それがルール。それが人。

自分自身の、在り方。

そうだろう？ 自称現実主義者の西条司。十七年間の短い人生で、俺自身が認めたことだろう？

「……わかってんだよ、んなことは」

落ち着け。落ち着いて、考えろ。

四方八方逃げ場なし、跳躍するだけの脚力なし、そんなもって俺は根性なしの腑抜け野郎だ。

どうせ怯んで動けそうにない体なら、いつそ無駄なことはせず、諦めてみるか？ そう考えたほうが、楽なんじゃないか？

都合の良い時だけしゃしゃり出てくる神様や、万分の一の奇跡を信じるよりも、よっぽど現実的だろう。

無理すんなって、覚悟決めろよ。

くたばっちまう、覚悟を。

畜生、そうだ……ああ……俺、死んだのかも。

何一つやらないまま、何もできないまま もう、死ぬんだ。

足掻くことも放棄し、淡々と受け入れるように、生きてきた日々に別れを告げて。

そう諦めた時、途端に時間の流れが遅く感じた。涙とか冷や汗とか怒りなんか湧いてこない。昼休みと同じような 虚脱状態。

視界がぼやけて、白い靄が掛かる。

育ててくれた両親、親友の翼、親戚の人達 さようなら。

驚くかな？ 泣くかな？ 寂しがるかな？ もしかしたら、全部してくれるのだろうか？ だったら嬉しいような悲しいような、そんな気分。

思い返してみれば、俺は充分自由に生きてた。世の中を『自分のルール』に沿って下して当て嵌めて、やりたいことをやってきたつもりだ。

輪廻なんざ信じてねえ。地獄も天国も嘘っぱちだ。一度きりの人生、生きたいように生きてやる、そう決め付けていた。

今日だって、そうだ。

一人の下校、くだらねえホームルーム、よく分からなかった午後の授業、昼寝を妨害された校内放送、そこそこ楽しかった午前中の授業、登校の時に翼と話した夢物語、いつも通りの朝の公園、家族との朝食、寝起きの天井、そして……そして。

体中の感覚が消え失せた　とてつもなく暗い、夢。

『夢の話だとさ、出す時に「願望」しないと駄目なんじゃないの?』

『属性を唱えれば良い。それで、個々の能力は解放される』

『君の世界、君の創造、君の願望で決まる』

靄が晴れ、ドクンッ！　と、心が強く脈を打つ。眼が見開く。急速に音が近づき。血が煮える。

指は動く、目だって見える、耳も聞こえるし、体温すら感じた。死んでない。

俺は生きてる。俺は死にたくない。なら俺は……どうしたい？

求めてないなら、受け入れるな。

願ってないなら、突き飛ばせ。

望んでないなら、拒絶しろ。

自分のルールに従えよ　現実主義者ッ！

「まだだッ！　諦めるには……まだ早い！」

試していないことが……一つだけある。

そうだとも、こんな所で、俺は死ねない！

俺は……死なないっ！！

右の掌を照準代わりにし、左手でそれを支えて、あたかも『何か』を撃ち出すかのような体勢で、車の助手席側に設定する。踏ん張れよお、俺の脚部。今だけでも震えるんじゃないやねえぞ。

炎は 自身で上昇気流を発生させる。

それじゃあ駄目だ！ 真上じゃなくて、真横に出せっ！！

その為の工夫、その為の想像力。

イメージするのは、強力な火炎放射。

想像できる最大限の炎。

鉄をも溶かす紅蓮の業火。

それを収束させて、一直線にして包むイメージで 撃つ。

俺は車を燃やしたい。俺は生きることが望む。俺の世界は、こんなことじゃ終わらない！

「おおおおおお！！ 『炎』ッ！！」

瞬間 俺の視界は朱に染まり、あたかも太陽を直接目にするように、眩しかった。

掌から放たれた赤い台風 『炎包』は、俺の真横を螺旋状に伸びて突っ込んできた車に命中。その炎を拡散せず、“貫通”し助手席側だけを燃やし尽くした。

ガガガガッ！！ と激しい音を鳴らして、半分だけになった自動車は止まらずに数メートルを走り続ける。

目は、瞑らない。怖くは、ないからだ。

『炎包』によりポツカリと空いた巨大な穴は、俺の体を悠々と通り抜けていく。

穴は切断面のように綺麗に焼かれていて、それが逆に運転手の存命を表していた。

思い描いていた……イメージの通りに。

出た……出せた。

アスファルトと鉄が混ざり合う焦げた臭い。震える足を他所に、俺は自分の掌を見て、痛いぐらいに握り締める。

「ゆ、夢……夢じゃ……ない、のか？」

分らない。なにもかも分らないけれど、今は別のことを優先させる。

俺は早鐘のように打つ心臓を抑え、停止している車へと近づいた。構造的に片方だけになった自動車は文句なしに沈黙しているように、火花が舞い散っていたりテレビでよく見る爆発などは起こらないようだ。

半壊した助手席側から運転席を覗くと、ガクガクと震えている運転手が居た。

二十代半ばぐらいだろうか、紺のスーツを着こなしたサラリーマン。動揺して青ざめているが……生きている。ちゃんと息を吸って吐いている。

人殺しにならなくて、済んだ。済ませられた。

少し安堵したけれど、時が経つにつれて沸々と怒りが込み上げてくる。

当たり前だ、殺されかけたんだ。叫んでもいいだろう？

俺は穴の空いた助手席側から運転手を引きずり降ろす。相手のことも考えず、力任せにだ。

そのまま胸倉を掴んで揺さぶる。

「て、てめえ！ な、何考えてやがんだっ！？」

「……あ……い……」

運転手は、ただ震えていた。

その表情は、先程まで奇声を上げていた人物とは似ても似つかなくて、酷く脅えている。目の焦点さえ定まっていな。

まるで自分が仕出かした事に困惑してるかの如く、運転手は口を開いた。

「……な、なんで、こ、こんなこと、を……して、るんだ」

「ああ！？ そりゃこっちの台詞なんだよ！」

「ひつ……ひい……」

苛立ち混じりに男を突き飛ばす。俺もコイツも、とてもじゃないが、まともに考えられそうな精神じゃない。

警察、110だったか。ズボン越しに携帯電話を握った。

とりあえず、連絡すれば良いのだろうか？　それで事情を話して、コイツを捕まえて……くそっ……駄目だ、そうじゃない。何をどう説明すんだよ、これを見て。轢き殺されそうになったところを手から炎出して助かりました　なんて、信じてもらえる訳がない。悪戯扱いされるか、下手をすれば俺まで警察署で缶詰だ。

運転手が……いや、俺自身が冷静になる為に、互いが落ち着くまで待った。

日没なんて久しぶりに見ちまった。そして何度目かになる質問。

「で？　なんでこんな道を走ってんだよ」

「……分かりません」

少しは冷静になったであろう運転手に対して、俺は右手をかざしながら詰問していた。

主導権はこちらにある。このやり方じゃあヤクザみたいだけどな。そうやって凶器をチラつかせて脅すように何回も質問したが、答えは『分からない』の一点張りだ。

にっちもさっちもいかないので、俺は違う観点から訊いてみることにした。

「じゃあ、何で俺を襲ってきたんだよ」

「……分かりません。あなたを見たら、何故か分からないんですけど、感情が高ぶってきて……」

そんな理由で轢かれたら堪ったもんじゃないっつーの！

けれども、これ以上コイツを威嚇しても……埒が明かないよな。

「……感情が高ぶるって、一体どんな風にだよ」

そんなこと訊いてもしょうがないけれど、警察に突き出す前に話を訊いておきたかった。論より証拠、時間が経つにつれてこちら辺を誤魔化される訳にはいかない。俺はズボンの左ポケットの中で、携帯電話を操作して録音ボタンを押す。

「こ、興奮っていうんですかね……と、とにかく、心が熱くなったような……激しくなったような……」

人を轢きたくなるほどの興奮状態？ そんなことが有り得るのだろうか。いや、でも実際にそう証言してるし……言わば衝動犯なのか？ だとしたら問答無用で警察送りなのだが……心が、熱く……ねえ。

「……あ？ ち、ちよつと待て！ 今、なんて言った！？」

「ひつ……え、そ、その……興奮っていうか」

「そこじゃねえ！ その後だ！！」

「ひいゝ、す、すみません、ごめんなさい。あ……あと、そ、その後……こ、心が熱くなった、ような」

……心が『熱い』、だと？

熱い、あつい、熱、ねつ 『熱』！？

感情のほとばしり、狂うほどの激しい高ぶり……もしかして……

『熱情』、『熱狂』か？

俺はもう一度、自分の掌を見詰める。

『収束するように運命が重なる。そこで戦うかは、君達次第だ』

もしも、あの夢が本当だとしたなら。

……既に、始まっているのだろうか？

### 第三話 試行錯誤からの強襲（前書き）

三話の登場人物

さいじょうつかさ

西条司：主人公、属性は『炎』

さくまたいが

佐久間大我：属性は『樹』

### 第三話 試行錯誤からの強襲

やけに気が滅入る翌日の朝。自宅のリビングにて、俺はテーブルに並べられた朝食のパンに手を付けず下を向いて呟いた。

「……なんか俺、今日は体調が悪いから……学校休むよ」

腹を抱えて、わざとらしく険しい表情を作っていた俺へ両親が心配そうに訊いてくる。

「え……あらやだ、大丈夫？　司がそんなこと言うなんて、初めてじゃないかしら？」

「ううむ珍しいな。やっぱり、出張の件は断ろうかな……腹の調子は大丈夫なのか？　司」

小学生のような嘘　に騙される両親。かく言う俺はというと、早寝早起きが習慣で健康優良児的な生活を送ってきたので、風邪などのウィルスに犯されることは滅多にない。

ちまたで流行のインフルエンザ？　そんなモンが世間にはあるんですか？　ってな具合で無病息災な訳だ。だから年がら年中元氣ハツツな俺に、両親がこうやって危惧するもの無理はないけれど、今朝のコレは……悪いが仮病な訳で……わりかし仲の良い親を言いくるめた罪悪感なのか、いい感じで憂鬱な気分へとシフトさせていた。

「大丈夫だよ、母さん。まったく大袈裟だなあ。父さんも、せっかく何日も準備した長期の出張なんだから、会社に迷惑かけたら駄目だって。ちょっと腹が痛いだけだからさ、こんなの一日寝たら治るって」

「だがなあ……うーむ……うん、そうか。まあ司も高校生だしな。体調管理も勉強の一環だ。じゃあ母さん、家のこと頼んだよ。連絡、ちゃんと入れるから」

「ええ、こっちはこっちで何とかするから大丈夫。いってらっしゃい、お父さん」



「いつてらっしゃーい。名産の仕送りヨロシク」

「やれやれ、こんな時だけ現金なヤツだな。まったく誰に似たんだか。というか名産を期待するのはいいけど、まずは体調を治してからだぞ」

「へーい、分かってるって」

そんな冗談交じりな会話で過度な心配を掛けない程度に言い繕って、出張という名目の単身赴任へと旅立つ父さんを見送った俺は、そそくさと自分の部屋に引きこもった。

暫くして玄関からドアの閉じる音、開けっ放しの窓からゴロゴロとトラベルキャリアバッグを転がす音が遠くなる。ほとんど聞こえなくなっただころで、俺は嘆息をついた。

父さんは出張へ旅立ち、母さんは一階で家事でもしているのだろう。

で、考える時間は、たつぷりある訳だ。

今、俺が何よりも優先して考えるべき問題は……決まってる、昨日のことだ。思い返せば数分にも満たない、あの出来事。

結局、あ後は 運転手の名前と電話番号を訊き出して、そのまま徒歩で帰らせた。車が半壊していたので当然といえば当然の処置なのだけれど、轢かれそうになったことに対して一切お咎めが無いのには……とある理由があったからだ。

予想では、あの狂気に支配された運転手は『熱』の使用者に操られていた可能性が高い。俺のことを捉えた途端、心が熱く激情したという感覚。それが『熱情』、もしくは『熱狂』だとするならば、あくまでも運転手は被害者という位置付けなのだろう。偶然通り掛って巻き込まれた、それこそ“一般人”にすぎない。そんな人に、あれ以上の追及をしても、これから先の状況が改善される訳じゃないよな。

事態を進展させるには、まとめる必要がある。

俺が置かれている状況……十五人の『属性』使用者による、サバイバルバトル。

夢物語の現実化。デンジヤーなりアリティが、俺の中にある。

そう、密かに自慢の一つだった皆勤賞を取り逃しても、俺には試す時間が欲しかったんだ。

ああ……さようなら皆勤賞、来年に宜しく。内申には響いてくれるなよ。

心の中でそつと呟いて、俺は父さんが使っているお気に入りのお灰皿を取り出すと、あまり整頓されていない勉強机の上に乗せた。机の隅には台所から持ってきたコップに並々と水が入っている。これは念の為の緊急消火用である。さらに机の引き出しからお古のノートを取り出して、最後のページだけを破き 用意周到の準備完了。

『収束するように運命が重なる。そこで戦うかは、君達次第だ』

あの言葉が本当ならば、もう何の考えなしに外へ出るのは下策だろう。街中をうろつくだけでも俺みたいな『属性』を使う奴と偶然出くわす確率が上がるってんなら、それだけ襲われる可能性も……高くなるはずなんだ。

その点、自分の部屋だったらある意味閉鎖的な空間のようなものだし、誰にも迷惑が掛からない。誰に出くわすこともない。結構な妙案だろ？ これって。

根っからの現実主義者である俺は、『バトル中に突然覚醒』的な展開はまったく信用してないし、『説明役のお助けキャラが登場』みたいな楽観視も出来ない。フィクションはフィクション、現実とは現実、区別と差別が肝心なのだ。

俺の身に何が起きているのか、『属性』とは何なのか。自らの実感を伴い、考えられるパターンを把握し、適応する為の条理を立てる。

昨日のアレが夢でないのなら 自分自身で、『力』を試す必要があった。

「さてと……そんじゃあ……ぼちぼち、始めますか」

首を回し、手首足首のストレッチ。気合を入れて肩を回す。  
そう、実験開始だ。

実験その一、『属性』を出せるかどうか。

俺は右手の人差し指を正面に突き出した。頭の中を真っ白の空っぽな状態にして、己の想像力を出来る限り掻き立てる。

イメージするのは、ロウソクの炎。

小さく、長く持続させる感覚。

「……『炎』」

言った瞬間、ポウと俺の人差し指からイメージ通りの炎が現れた。その淡く揺らめく小さな火は、紛れも無く現実の実物。

「っ……は、はは……マジ、かよ」

改めて凄い　というか、一日経っても出るんだな。

やはり、俺が自動車を半壊させたというのは幻覚でなかったらしい。半信半疑だった気持ちの天秤が、目の前の事実に傾いていく。魔法やオカルトなんざ信じちゃいないが、こうして自分の目で確かめたのなら……もう言い逃れは出来ないよな。切り替えて、受け入れるしかない。

俺は破いたノートの切れ端を左手で持ち、その火が灯っている人差し指に近づけてみた。すると、ただの紙は切れ端の方から呆気なくチリチリと燃え始める。

「う、うお……」

白から黒へと変色し、炭になったノートの燃えカスがパラパラと灰皿の中に落ちていく。

……ヤバイ、なんつーか面白い。

小説や漫画のような常軌を逸した現象に高揚した俺は、次々にノートを千切っては左手の人差し指、右の掌、左手の小指で『炎』が出ることを確認した。描いたイメージ次第では、五本の指から同時

に『炎』を灯すこともできるようだ。必殺技っぽくてカッコイイ。翼が見たのなら、さぞかし羨ましがることだろう。

「よし……んなら、これはどうだ」

イメージするのは、人魂の炎。

ピンポン球サイズで、宙に浮かせる感じで。

「……『炎』」

唱えた結果は、不発。

うーん、どうやら空中にいきなり『炎』を出すことは出来ないみたいだ。

「じゃあ次」俺はノートの切れ端を手でつまんで持ち上げる。ブランブランと宙吊りになっている形だ。「イメージ通りになるよ」……

……『炎』」

ボツと音を出して、手でつまんだ方とは逆の、ぶら下がっている下側から『炎』が出た。

ふむふむ、俺の体や触れた物から經由しないと発炎しないらしい。根本的な原理は不明なままだけれど、分からないことをどれだけ考えても時間の浪費だろう。そもそも『属性』自体が怪奇現象みたいなモンだし……とりあえずは保留ってことで。

第一段階クリア。オツケー、なんだかテンション上がったぞ！

実験その二は、効果と範囲についてを調べてみよう。

今しがたの通り右手の人差し指に『炎』を出し、今度は左の掌を近づける。

別に血迷ったワケじゃない。わざと火傷するほどDMでもない。

俺は、恐る恐る真上から炎に近づけていく。

「……………あれ？ 熱く、ない？」

通常ならノートが燃え始める位置まで達しているというのに、俺の左手は熱さを感じていない。

一旦、炎から掌を放して皮膚の表面を確認すると、これといって

火傷とかにはなっていないようだった。

「それじゃあ」と、今度は限界まで近づけてみる。お……おう。これは中々、度胸が試されるな。幼少期の好奇心による失敗ならまだしも分かるが、高校生になってからの自爆ではダサすぎる。

慎重に、ゆっくりと、即座に離せるように。

「うつ……ん？」

炎はグニヤリと、まるで金属に押し当てたように拡散して、俺の掌を見事に反発していた。熱は感じてないし、痛みもない。全くの無害、か。

なるほどね、自分自身の『属性』で損傷はしないんだな。あ……そう言えば、車を焼いた時も俺に燃え移らなかったし……っていうか、鋼鉄が鉛細工のように溶ける『炎』のクセに、間近に居た人体が溶けない時点で……おかしい？ いや、考察の余地もない。化学も仰天の異常事態だよな。

うーむ、どういう原理かは分からないけれど、現状だけは理解しておこう。これも検案事項の仲間入りだ。

そんな感じで第二段階もクリア。しかし謎は深まるばかり、だけれど……なんかワクワクが止まらねえ！

実験その三、そろそろ『属性』とやらの干渉についてを見定めておこうと思う。

はい、取り出したるは本物のロウソクで御座います。タネも仕掛けもあります。デパートで売られている、何の変哲もない長いロウソクです。

えー、このロウソクに、何も無い所から火を付けてみようと思います。マッチも着火マンも持ってませんよ。

いきます。一、二の、三！

「……『炎』」

ほらこの通り、火が付きました。おっと、まだ拍手は結構です。

ショーは始まったばかりですから。

えゝ、続きましては、このロウソクに灯った火へ、掌を付けてみようと思います。

はい、御覧の通り、俺の掌にはタネも仕掛けありません。何も持っていない素肌です。

いただきますよゝ。一、二の、三！

「あつついッ！！！！」

熱いのかよ！

そこは熱いのかよッ！！

さっきみたいに、火傷しないんじゃないの！？

小芝居してた俺が馬鹿みたいじゃん！

……ゴホン、まあでも、これで大方ハッキリした。

『属性の炎』は一度でも俺の皮膚や触ってる物から離れると、通常の炎へと変わるんだ。こういうのは二次災害っつーのかな。触れば熱いし、火傷を負うことになる。

「フーフー」

さっきは一瞬だけで助かった。俺は掌に息を吹きかけながら、悶々とする。

俺自身では消せない……干渉外の炎。

これは注意しておかないと、危ない気がするな。

そんなこんなで『炎』の試行錯誤をしていると、いつの間にか窓の外は赤く染まり夕方になっていた。

「……ああゝ、なんか疲れたし……腹減った」

特に運動をしていた訳でもないのに疲労とは、これいかに。つっても人間、何時間も座りっぱなしで集中してたら疲れもするよな。なんとなく精神力が磨り減った感じ。

昼食もそっちのけで『炎』を試していたので、お腹はもうペコペコだ。

普段なら母さんが呼びかけてくれるのに、今日は何も聞こえてこなかった。俺なんかに構わず買い物にでも行つてたのだろうか？だとしたら薄情な母親だなあ。

ま、色々とする時間が増えて助かったんだけどね。それに仮病で看病しろとか……俺は何様なんだかな。

「あと少しで晩飯だけど、間食すつか」

高校生とはいえ、こちらら育ち盛り真っ盛りなのだ。一日四食で丁度いいぐらいの胃袋を満たしてこようじゃないか。ついでに母さんへ元氣アピールでもしておこう。明日からは学校に行かないと、だしな。

調子よく椅子から立ち上がって、一階の冷蔵庫に向かおうとした。まさにその時 唐突に、視界がブレた。

カタカタカタ……カタカタガタ……ガタガタガタツ！

あつという間に横揺れは激しくなり、俺はバランスを保てなくなつて膝を着く。

「お、おおう、地震かつ！」

それも、結構、強い。震度四か五だろうか？……いや、もっと大きいかもしれない。小説やらをジャンル別に整理された本棚がドミノのように倒れ、机の上に置いてあったコップの水がバシャバシヤと床にこぼれる。さらには天井に設置してある電灯さえも左右に大きく揺れていた。おいおい、ここまで揺れるのは……ちよつと経験したことないぞ。

それから数秒して、段々と小刻みな振動が収まってきた。

「……やっと、収まったか？ ……漫画と小説……いや、母さんが心配だ」

近年稀に見る大地震。それも本棚が倒れるほどの地震なら、食器棚などの家具も倒れているかもしれない。震度を確かめる為のテレビもリビングにしかないし。

俺はゆっくりと立ち上がり、乱れた自室を放置して一階に下りた。

そう……この時の俺は、分かってなかった。

この『真理の道』は、サバイバルバトルなんだってことを、正確に実感していなかったんだ。置かれていた環境の認知が 偏に甘かった。

目先の『力』に気を取られ、生殺与奪のルールを理解しようとしていなかった。

昨日は死にかけていたっていうのに……意識を、逸らしていた。

『一つ、相手を殺すこと。二つ、相手の真名を奪うこと。そのどちらかが満たされれば、君は真理に近づく』

夢を見てから一日経って、その言葉の真意を、俺は否が応にも……思い知ることになる。

薄暗い一階のリビングに着くと、その惨状に啞然としてしまう。予想していた通り。台所の食器棚は倒れ、フローリングされた床にはガラスの破片や白い粉が散乱していた。こりゃあ片付けるのに時間が掛かりそうだ。



「母さーん！ 居ないのかー？」

大声で呼び掛けてみたけれど、返事は無い。

……なにか、嫌な予感がする。もどかしさに似て、胸の奥がザワツク。

出かけているのか？ それなら安心するんだけど。

「……ふうん、アンタが西条司？」

「……」

妙に甲高い声を真後ろから掛けられて、心臓が飛び出しそうになった。

振り向くと、見知らぬつり目の少年が、そこには居た。

身長は俺よりも一回り低くて、どこか中学生っぽい感じ。濃い緑色のＴシャツに黄土色のズボン、どちらも少年の背丈には合ってなく、ダボダボに着こなしている。おかっぱ頭による幼い印象とは裏腹に、似付かわしくない陰湿な表情でニヤニヤと笑っていた。

ともかくにも……状況整理、だ。場所、俺の家。コイツ、どう考えても見覚えのない奴。考えられるのは母さんが呼んだお客さんの子供つてとこだが、そんな話はこれっぽっちも聞いていない。仮に聞かされていたとしても、“大地震直後”で平然としていられるコイツは……まともじゃない。

「ねえー？ アンタが西条司かって訊いてるんだけど」

目を見開いて驚いている俺を気にも留めないで、その少年は一方的に問うてくる。まるで俺の疑問には関心がなく、返答のみを求めているかのようだった。

「おーい、反応ないな、もしかしてショックで壊れてんの？」

「……お、お前……誰だよ」

状況が状況だけに、遠慮なしの質問返し。ここは俺の家だ、お前は誰だ。シンプルな疑問。

だが、コイツが喋ったのは、別の答えだった。

「アンタさ、無闇に『属性』を使い過ぎだよ。車燃やすとか、マジで目立つよ?」

「なっ!?!」

『属性』に、燃やした車。こいつは……まさか!

「お、お前はっ!」

「ふう……ようやく気付いたようだね。間抜けっというか鈍足というか……まあいいや。憶測で見切りをつけるには、まだ早い。どーも初めまして、ボクの名前は佐久間大我、さくまたいがこう見えても立派な高校一年生。ははっ! アンタの方がセンパイだねえ。えーと、ちなみにボクの『属性』は……まだ内緒」

相手が名乗った瞬間、俺は咄嗟のバックステップで後ろに飛んでいた。恐怖ではなく、ある種の直感に近い警戒心から体が動く。ついさっきまで『属性』のことを調べていたからか、『未知に対する用心深さ』ってヤツが勝手に働いた。

佐久間と名乗るコイツは、そんな俺を眺めて感心した風に手を叩く。

「はははっ! なんだ反応いいじゃん。それに、そこそ冷静だ。ボクが想定していたよりも、単細胞ではなさそうだね。アンタって『火』の連中なんでしょ? しっかし馬鹿だよ、バトルでもないのにあんな人目がある裏道で『属性』を晒すなんてさ。“この地震を起こした奴”もそうだけど……漫画だったら間違いない。最初に死んでるって。知能が足りてないにも程があるよ。いやもうホント、初っ端からやめてよね。興奮めもいとこだからさ」

捲くし立てる声は、明らかにこの状況を楽しんでいた。

今から行うことが、待ち遠しくて仕方のない子供を見ている気分。「お前……なんで、俺の家を知っているんだ?」

「なんでって……そりゃ同じ学校だったし? 今の時代、顔と名前が分かれば住所だって分かるんだよ。ははっ、便利なもんさ、守秘された個人情報なんて数分足らずで暴露できる。ただし……やり方を知ってれば、だけどね。お利口な規則に縛られた学校で、のうの

うと暮らしてるだけの連中じゃあ、マネできないよ」

そいつは嫌な時代になったもんだ。というか、学校の特定は……ちっ、昨日の現場を目撃されていたのなら、俺の制服も見られてたってか。つくづく昨日は厄日だったらしい。

ともあれ、悔いる反省は後回しだ。

「……家の鍵は、どうしたんだ？」

西条家の掟では、たとえ誰かが家に居たとしても鍵を掛けることになってるはずなのだが。

「うーんと、『属性』で開けた。それ以上は企業秘密ってことで。つていうか、どうでもいいっしょ、そんなこと。こうやって入られた以上、家の鍵なんて気に掛けてる場合じゃないんじゃない？ もっと先の為になるように、有用に考えなよ、センパイ」

ふざけてやがるっ！ 勝手に他人の家に入りやがって、せめてインターフォンとか使えっつーの、この不法侵入が……！

「クソッ……それで、何が目的なんだよ」

俺が威圧感を込めて言うのと、それは佐久間にとって待ちかねた台詞だったらしく、嘲笑を含めた調子で応える。

「喧嘩を売りに来たんだよ、低脳！ と……まあぶっちゃけ、アンタが最初に見つけた能力者だったから、ボクの力を試したかったつてのもあるんだけどね。難易度を計るつていうか、何に対しても見積もりは大事だからさ。人生省エネで生きたいっしょ？」

「は……はあ？」

「だーかーらー、アンタも見たんでしょうが。相手を殺すか、真名を奪うかの競い合いってヤツ。ヒューッ！ スッゲー面白そうじゃん。まるで漫画の世界じゃん。丸つきりアニメの領域じゃん。平々凡々な日常にグッバイ確定じゃん！ 十五人の参戦者が居て、不可解なルールが規定され、最後に報酬を貰うってプロセスがなんとも腐った社会じみてて気に入らないけど、誰かに従うのもコレきりだ。『属性』が本物ってことは、ボクが叶える『願い』も本物ってことになるからね。そう、なんだって叶うんだ。無限の金も、最高の名

声も、極上の生涯すら 思いのまま。退屈で腐敗しきって糞つま  
んない生活なんて捨ててさあ。ボクは、やりたくてやりたくて殺  
りたくて……しょうがないんだよ」

「……………」

返す言葉を失う。

コイツ、狂ってやがる。

普通、力を手にしたからって、ココまで堂々しないぞ。

それは世の中に未練が無いように。

犯罪行為に 余念が無い。

違法行為に 抵抗が無い。

異常行為に 動機が無い。

良心の呵責とか、全然感じねえのかよ！

「っ、はあ」

機械的に、沸騰しかけた頭を振る。

いや……いい。熱くなるな。今は、とにかく、話し合うことが重  
要なんだ。

「一応、訊いておく……そっちに和解する気は、あるのか？」

そう言つと、佐久間は嘲笑っていた表情を豹変させ、初めての苛  
立ちを見せた。

「あーもー五月蠅いなあ！ まーだ話し合うの？ 喧嘩を売りに来  
たって言うてるでしょうがっ！ ボクの言ってること、伝わってな  
いのかよ。そーゆーのムシャクシャして、苛々するんだよ。脳まで  
腐った屑が多すぎるって。ゴミみたいな低脳が溢れてんだよ、世の  
中。イライライライライラ……………」

ぶつぶつと、佐久間は病的な言い回しを続け「ん、そーだ。いい  
ことを思いついた」と、思い立ったように、床に散らばっている白  
い粉を指す。

「コレ、何だと思う？」

「……何って、ただの粉だろーが。小麦粉とかの」

何がそこまで可笑しいのか、佐久間はコロコロと口元に笑みを作

る。その姿は中学生にしか見えない。なんというか、マイナス方面に感情表現が豊かな印象だ。切羽詰った俺とは対極的である。“こ  
ういったこと”に、慣れている感じ。だからなのか、こいつが口を  
開くたびに、俺はイラついている。たまらない不快感を覚える。

「はっ、はははっ！ アンタの家には常備小麦粉が落ちてるって  
いの？ そーじゃないっしょ。どこその連中みたく無知で無恥にな  
らずに考えなよ……アンタにとって、それは『とても大切な  
モノ』なんだからさ」

佐久間に促され、もう一度考えてみると……たしかに、床に散ら  
ばった小麦粉は不自然だった。何でこんな所に落ちてるんだ？ 食  
材やら調味料やらは、冷蔵庫とかに収納してあるはずなのに。

「お前が、バラ撒いたんじゃないのか？」

「あゝうん、半分解」

「……半分？」

「そう半分だよ……それじゃあ足りない。話変わるけどさ、アンタ  
のお母さんは何処に行ったのかねえ」

コイツは……さっきから何を言ってるんだ？ 言いたいことが分か  
らない。意図がまったく伝わらない。粉と母さんと、何が関係して  
るんだ？ 話が繋がらない。かみ合わない。繋がりにたくない。頭に  
入らない。思考という思索を停止させたい。

今、想像していること それは、違うだろ？

「あー！ につぶいなあゝ。アンタさ、推測とか推理とか苦手なん  
じゃない？ だったらもう……正解、言っちゃおうかなあ？」

佐久間は、俺を見据えて、舌なめずりをしながら、こう言った。

「アンタの母親は 『美味しかったよ』」

ゾワリと、背筋が凍る。瞬時にして血流が冷え切った。

ま、さか……まさかっ！

「あ、ああ、ああ……テンメエエエッ！！」



ビキビキと、佐久間の服の下から這い上がってきたのは 樹木。

「……え、枝？」

「正解。コレがボクの属性で『樹』の正体。触れた者を吸い尽くして、ボクの栄養に変える能力。例えば……アンタの母親を“根こそぎ喰った”ようにね」

こちらの神経を逆撫でする音圧。

殺してやりたい、殺してやりたいが……熱くなったら俺が死ぬ。

今は我慢して、耐えて、抑えて、怒りを凝縮させる。眼を凝らせ、相手を見極める。

俺は聖人君子じゃない。少しでも隙を見せたら 殺してやる。

必死に冷静さを取り繕って、俺は口を開いた。

「……いいのかよ、簡単に自分の『属性』を教えて。秘密じゃなかったのか？」

「いいんだよ、別に。難易度測定は終了。アンタ雑魚っぽいし、なりより攻略法も思いついたし、どーせ……ココで殺すんだからさあつ！」

口元の歪んだ笑みはそのままに、佐久間の薄く開いた眼は殺意の色に替わった。

初めて受ける『人間の殺意』という突き刺すような寒さが、俺を襲う。ここまでの『分かりやすい敵意』は、経験したことがない。

感じる恐怖に、思わず膝が震えてくるが……俺は逃げない。絶対に、逃げる訳にはいかない。

佐久間という対象に一点集中しすぎて、時間という観念が研ぎ澄まされていく体感。

俺は右の掌を、佐久間の身体へと向けた。これは照準。内側に溜め込んだ怒りを吐き出し、車のように……燃やす為の。

「あつれえ？ いいのかなあ？ ココってアンタの家だよね。そんな事したら、家が燃えちゃうよお？」

これ見よがしに両手を広げ、ますます嫌味ったらしく笑みを浮かべる佐久間。

「……ぐっ！」

予想外の行動に、唸る。たしかに、ここで『炎包』なんて撃ったなら、俺の家が倒壊してしまうのかもしれない。住宅街の一軒家良くて全焼、悪くて隣の家に引火だ。

なら……どうする？ 俺は、どうすればいい？

「ぷっ、ははっ！ やっぱし来ないんだ。うんうんそうだよ、この拍子抜けの臆病者が。いつまでも下らない現実にしがみついてるから、そうなるんだ。大切な家族？ 住まう家？ その為だけに、命を張る？ 笑わせるね。本当に、笑わせるよ。家なんて、『おぎやあ』と産まれた瞬間から決まりきった環境じゃないか。子供に決定権なんて存在しない、はなから拒否権などあり得ない、有無を言わせない外堀なんだ。家族だって何の価値も無い、他人でしかない役所で認可された薄っぺらい書類上の関係。世間に対するステータスの一部分にすぎないのさ。要らなくなったら捨てるだけ。面倒になったら放り出す。親にとっての子供なんて、そんな“物”なんだよ」

「……それは、違う」

「いいや、違わないね。体裁、世間体、見栄え 親なんて、そんなことを気にしてるばかりさ。子供に意志を通わせない、自我を持たせない。血筋を盾にし、がんじがらめに縛り付けて押さえつける。勝手な理想で押し潰して欠点を許さない。だから従う為に、ボク達は仮面をつけるのさ。幾重にも被さった分厚い仮面をね 餌を貰う為に、あるいは暴虐を受けない為に、社会に順応する為に。それこそ息を止め自分自身を殺しながら。親なんてコレクションを自慢するコレクターと同じだ。いや、それ以下の存在だろう？ そして、そんな『風潮』が、そんな『環境』が、世間には溢れている。家庭、学校、近隣 世界に。溢れて、淀んで、枯れ果てた拳句、腐ってる」

佐久間は、振り返るかのように昏々と語った。

「……正直、飽き飽きなんだよ。周囲を窺う生活にも、利用された



り操られたり、その『環境』に便乗する人間にも。まあ、アンタにはどうでもいいか……もうすぐ死ぬんだし。さあ、どうしたんだい？ お喋りは終わったよ、ボクに『親』を殺された西条センパイ。来ないの？」

「……………」

それは、まるで何かの意地に根付いているかのような思考回路。俺は、ことさら何も言う気がなかった。言う意義も、言う値打も、コイツにはない。

ただし、無性に、殴りたい。

一発入れないと気が済まない。曲がったモンを叩き治す。それだけは、疑いようのない事実だ。

いつでも動けるよう、射殺さんばかりに、その視線をぶつける。

「ふう……ボクの話聞いても、まだ来れないか。あゝ、やめやめ。もうヤメた。待つのはなし。アンタってウザイ、遊ぶ気も起きない。いかにもボクが嫌いな『平和が大好き』って面構えだ。仮面だらけの世界で何が楽しいんだか、笑っていられる人間だ。だから一線を越えられない、“こつち側”にはこれない。アンタは死ぬ。ボクの踏み台としてね」

佐久間はケラケラと笑う。歪んだ作り笑いで、盛大に、必死に。ひとしきり笑い……一転して、本心とばかりの無表情に至る。

「殺される覚悟はいいかい？ それじゃあ、ボクの方から殺しにくよ……『樹下』！」

鼓膜をつんざくようなビキッ！ という激しい音がした。俺は咄嗟に両手で首と片目をガードする。

だがしかし、依然として聞こえるのは、地を這うような違和感だけ。佐久間の身体には何の変化も見られない。

いや……違う。そうじゃない、よく観ろっ！

メシ……メシメシ……メシ。

音の発生源は、足！？

「くっそおッ！」

ザン！！

軋んだ床から間一髪で後ろに避けると、先程まで俺が立っていた所から、猛々しく樹木が生えてきた。その先端は鋭く、綺麗に削られた鉛筆のように尖っている。

退避するのに数秒遅れていたら……串刺しだったろう。

その姿を想像するだけで、血の気が引く。

「はははっ！ 凄い凄い、よく避けれたね」

佐久間の足元を見ると、靴底から膝に掛けて細い根っこが何十本も絡みついていていた。どうやら、その根っこは床下まで伸びているようだ。

『属性』の特性 自分の体や触れている物を経由しないと発現しない。

そう……『属性の根っこ』は床を突き抜けて地面を移動し、俺の下で炸裂するように生えてきたんだ。

こうなると、皆勤賞を逃してでも実験した甲斐があった。『属性』について知る前の俺だったなら、あの世行きだ。

だけれど、ある程度の予測はできたとしても躲せたのは奇跡に近い。再度攻撃されたら、同じように避けれる保証なんて無い。

なら どうする？ どうしたいんだよ、現実主義者。

ここまでされて、死ぬかもしれない状況で、それでも慈善を尊重すんのか？

違う、そうじゃないだろ。殺されるのを黙って待つほど、今の俺は無力じゃない。

殺される前に進め。死ぬ前に足掻け。日和見止めて樂觀すんな。

俺には……躊躇ってる余裕もねえだろうがッ！

「おおおおおお！！ 『炎包』！！！」

俺は佐久間に向けて、昨日の『炎包』を放った。

具体的なイメージをしている時間が足りなかったので、威力は若

干落ちている気がするが 相手は『木』で、俺は『火』、当たりさえすれば燃え貫く、これで終わるはずだ！！

「はははっ！ 甘いつてアンタ！ 『樹高』！！」

大音量で打ち鳴らされた太鼓さながらの地響き。

突如として佐久間の足元から樹木が生えてきて、天井ギリギリの高さまで佐久間を押し上げた。

狙いが外れた『炎包』は、生えてきた樹木にぶつかって、その威力を消されてしまう。接触した部分だけで鎮火されたのは不幸中の幸いか。

円形状にポツカリと空いた木が自重を支えきれなくなり、斜めにしな垂れ崩れ掛かる。樹木の天辺に居た佐久間は、動揺することなくストンと静かに着地した。

信じられない。どういう肝っ玉してんだコイツは。読み取った表情からは恐怖を感じさせない。

「っ、まだ、まだあ……っ！」

守ったら負ける。とにかく攻め続けるお！

二撃・三撃と同等の力で『炎包』を放つが、『樹高』の前に呆気なく躲される。

俺の直線的な攻撃が、読まれている……？

畜生ッ！ これじゃあ何回やっても変わらないじゃねーか。

最初から上空を狙って撃つか？ いや、相手が『樹高』を唱えなかったら意味が無い。どこるか俺自身が隙だらけになっちまう。

「ん、もう終わり？ はははっ、そうなんだとしたら……アンタ、弱すぎるよ。キレたら勝てると思ってた？ 残念、お約束のご都合主義は双方が等しい実力差でないと、まず起きないよ。気合だけで乗り切れるほど、現実の難易度は容易じゃないからね」

クソッ、言われなくたって嫌になるぐらい分かってる。

必要なのは、この経験値をひっくり返せるほどの攻撃法。真つ当な手段じゃなくてもいい、実力差を埋める何か。

ましてやコイツは俺の『属性』を測っている最中だ。油断を突く

チャンスは今しかない。

「ふう……いつ『属性』が使えるようになったのかは分かんないけど、ちゃんと練習してないの？」

作戦を巡らせ、歯噛みしている俺とは対照的　佐久間は摩耗されていく物体を見るように、極端につまらなそうな感じで俺を眺める。

「こんなんじゃ実戦とは程遠い気がするしなあ……はあ……計算外だよ、西条センパイ。まあ楽と言えば楽なんだけど……正直言つて興冷めかな。選ばれた人達が皆、ボクみたいなエリート揃いかと思つたら、実際は身体能力が中の中で『属性』の使い方に関しては下の下だとはね。そもそものが、お話になってないし」

「……生憎と、お前とは違って人間相手に『属性』を使うのは初めてなんだよ」

「え？　そーなの？　ダメだつてそれじゃ、意味無いじゃん。ボクなんか授かつてすぐに試したのに。練習するなら人間相手が一番だよ。戦う敵も人間なんだからさ」

「あ……？」

おい待て……今、何て言つた？

「アンタも聞いたでしょ？　昨日の校内放送。ほら、一年生の体調不良者続出してヤツ。ぶっ……はははっ！　救急車で運ばれてる奴等もいたみたいだし、ざまあみろつてね！　アレ、やったのボクなんだ」

プツンツと、こめかみ辺りで糸が切れる音を耳にする。

ああ……完璧に、頭にきたんだらう。血が上りに上り、あとは下るだけ。

可笑しなことだけれど、感情のサークルが臨界を廻って、逆に冷静になつちまつた。

冷静に、ブチ切れた。

だから、まずは……一発！！

計略は十二分、自信は重畳、怒気は溢れんばかり。俺は右の掌を佐久間に突き出した。

「へえ……やっと、本腰を入れたのかな。これでボクとしても楽しめそうだ」

「……ほざいてろ。期待に背いてやるぜ、佐久間大我」

イメージするのは 縦横無尽な鞭。

威力は落ちてもいい、正確さと自由度が欲しい。

膨らませる想像は、炎の屈折と炎の拡散。

それは……実験済みだっ！

「おおおおおおおおお！ 『炎鞭』！！」

「また馬鹿の一つ覚えかよ！ 『樹高』！」

佐久間は再び足元から木を出して自身を高く持ち上げた。

レーザーの如く真っ直ぐに伸びていった俺の『炎鞭』は、このままでは樹木に衝突してしまう。だからアイツは繰り返す。直線的な攻撃を同じ回避パターンで避け続ける、何度何度も繰り返す。

それこそが……俺の勝機！

「おおおおあああああッ、いつけええええええ！！」

「えッ！？」

俺は左の掌を使って、放出した『炎』を 屈折させた。

無論、掌は熱く無い！

そうだ、自分の能力では傷つかない。その特性を、利用する！

左の掌で屈折した炎は、直線的な角度を変えて 佐久間の右目上のマツゲに命中した。

ジュウ。熱されたフライパンを皮膚に押し付けたような音。

「があ、ああああ！ あああああっ！」

佐久間は必死に顔を拭いながら、せり上がった木から床へと転落した。

一メートルほど落下した佐久間は、顔に直撃した火を消す為にゴロゴロとたたき回る。

待てよ……こんなもんじゃない。

この程度じゃ、許さねえぞ！

「おおおおおおお！！」

俺は雄叫びをあげながら、右手で再び佐久間を照準に捉える。

これで決める……お前は、ここで終わらせる。殺してやる……お前に殺された、母さんの、ように……？

構えていた手が　震えた。

「うゝわあああああああ！　『樹陰』！！」

そう唱えると、佐久間の正面に『樹高』とは比較にならない大木が三本も生えてきた。そうして佐久間の姿は、大木が邪魔をして俺の視界からは見えなくなる。

マズイ　体勢を、立て直すつもりか！

「ぐつうつうつう……熱い……うう……熱い。イ、ラ、イラ……イライライラア！　ああ、西条、司あ……！　ぜ、絶対に、絶対に殺してやる！！」

閉ざされた大木の向こう側から佐久間の激昂が聞こえたが、んなこと構うかつ！

「つ……逃がすかよ！　『炎包』！！」

渦を巻く赤い螺旋。

轟々と目の前の大木を焼き払うが……そこには既に佐久間の姿は無く、漂う煙のように忽然と消えていた。

誰も居ない。

「　　待てよ」

……おい、佐久間の野郎は、何処に行った……俺は、まだ、何もしてねえんだぞ。

怒りの捌け口、嘆きの行く末、憤りの出口。そいつらを、どうするんだよ。

ふざけんなよ、おい。

「待てつつてんだろーが!」

虚しい独り言が響く。

荒らされたリビング。飛び散った木々の破片。粉々に割れたガラス。引き裂かれたソファ!。むせ返る焦げた臭い。扉が開けっ放しの玄関。途方もなく薄暗い、外。

さっきまでの戦いが、まるで絵空事だったかのように、静寂が訪れる。

……ぐっ……駄目だ。

逃げられた。

俺は……敗北したんだ。

日が落ち、暗い部屋で 膝を抱えて頂垂れる。

顔を上げられない。

ひどく奥歯が痛む。目がしょぼしょぼと熱い。嗚咽のしすぎで、内蔵がむせ返りそうだ。

母さん。

優しかった、母さん。

佐久間は言った、『親にとっての子供は世間に対するステータスの一部分にすぎない』と。んな訳あるか。そんな理屈、誰が認められるっていうんだ。

俺が高校に入学して帰宅部になっても、反対せずに『やりたいことが見つかるまで、好きにしてい』と言ってくれた母さん。

毎日食事を作ってくれた、家事をしてくれた、教えてくれた、叱ってくれた、褒めてくれた、心配してくれた、こんな俺を……育ててくれた。

今までは、それが親として当然の義務なんだと、そうやって自分

勝手な勘違いをしていて……居なくなつて初めて分かる。とても……大切な存在なんだ。

そこに利害関係なんて無い。あるはずが無い。世間様なんて、最初っから気にしちやいねんだよ。

血を通わせ、心も通わせる。いつだって傍に居た、俺という年輪の中心。芯の強さをくれたんだ。

そんな母さんに……親孝行なんてしていなかった。肩もみや、誕生日プレゼントだって買ったことすらない。親不孝だよな、今更こんなこと考えるなんて。

俺は……母さんに対して、何もしてこなかったんだ。今までも……これからも……？

『君の望みを一つ叶える。富、名誉、死者の蘇生、望みに制限は無い』

ああ……分かつてるよ。

やるべきこと、やらなくちゃいけないことは、ちゃんと分かかつてる。

縋つてでも、しがみつきながら前を進むしかないことは。今は信じられることを信じて、前を向かなきゃいけない。

感傷に浸る……なんて言葉では濁さない。久しぶりに、少し、泣いてただけなんだ。情けないけれど親の死に目だ、勘弁してくれよ。煤だらけの服で、雫を拭う。

大丈夫だ……そうだとも、振り向いてたまるか。

“道しるべ”は決まつてる、俺は佐久間みたいに狂っていない。願いを叶えて、母さんを生き返らせる。

一分でも早く、一秒でも早く。

こんなデタラメな話　俺がぶっ壊してやる……！！



## 第四話 現実の衝突（前書き）

四話の登場人物

さいじょうつかさ

西条司：主人公、属性は『炎』

なしまつばさ

名島翼：友達

しきじょうれいみ

志木城怜実：クラスメイト

#### 第四話 現実の衝突

人間というのは、突詰めれば残酷な生き物なんだと 思い知らされた。

どんなに辛い事があっても、時間が経てば次第に慣れていく。心には太い杭が刺さったままだけれど、不思議と身体は動かせる動いてしまえるんだ。

一時間前の出来事を心模様まで再現できないように、焼付いた思いは色と形を便宜に変えていく。生きていく為の、都合の良い改ざん。どうしてもなく薄まる記憶。このまま生活していけば、やがては忘れていつてしまうのだろうか。

分からない。分かつともしたくない。

けれど、忘れるほど漠然と暮らすことを許されない立場にある訳で。

俺は佐久間に強襲された翌日も学校を休み、半壊した我が家の保全作業をしていた。悲しい事実を消そうと 或いは覆らない結果を有耶無耶にしようと、食事や睡眠すら無視して無我夢中に没頭したんだ。

ああ……それでも憶えている、一昨日のことを。

結果的に、佐久間には逃げられたし、俺は追うことができなかった。あまりの受け入れ難い日常をまざまざと見せ付けられ、心と体が反応できなかつたんだと思う。

襲来した『樹』を操る能力者、母さんを殺されてしまったこと、溢れる怒りや胸の痛み そんな激情が津波のように押し寄せて、心ごと吞まれてしまった。今となつては思考どころではない、頭が真つ白だ。苦笑すら起きやがらない。

平和だった俺の家は、今や『樹』によって床から木が生え、黒々とした焦げカスがそこかしこに散らばり、さながらジャングルハウスの様相を呈していた。出張している父さんには……絶対に言えな

いよな。色々、もう元通りには出来ないのだから。

そう……俺の母さんが、死んだ。

粉になった母さんを必死に掻き集めて、急いでキッチンボールに移したのだけれど　手遅れだった。いくら信者の如く神様に祈っても、白い粉から人間には、どうやったって戻せやしない。片道切符の変換不可能。今日が昨日の明日なら、起きてしまったことは変えられないんだ。現状を認識して、現実を直視して、現況を背負って進むしかないのだろう。

だけど、悲観するには　まだ早い。元に戻す方法は、まだ残されているのだから。

『属性』という能力を持った者同士の戦い。

最後の一人になるまで生き残り、このふざけた『真理の道』とやらを終わらせること。相手を殺すか、真名を奪うか。生殺与奪の戦いに勝利すること。

そして、俺の望みを叶える。母さんを……生き返らせる。

もしも運命が収束するならば、もう後手には回らない。

靴を履き、鞆を肩に掛け、扉を開け放つ。

「今度は、俺から攻める番だ」

決意を固めて、俺は二日ぶりの学校へと向かった。

随分と懐かしい外の空気を吸って、俺は考え事をしながら歩いていく。

抱える悩みは山ほどある。

まずは、俺の“正体”について誰がどの程度知ってるか、だ。

佐久間の話しぶりでは、俺が車を半壊させたところを偶然目撃していたようだった。そこから住所やら名前やらを調べたって言うて

た気がする。命の危機だったとはいえ、外で『属性』を使ってしまったのは……今にして思えば悪手だったのだろう。そこは佐久間の言う通り、外では無闇に『属性』を使わない方が良さそうだ。

まあ、今更後悔しても遅いのだけだ。

でだ、どの程度『属性』の能力者に目撃されているのかは分からないが、こうやって外をブラブラと歩いていけば、勝手に向こうから姿を現すだろうと踏んだ。自身が餌になる罠作戦ってヤツだな。あてのない地道な聞き込み調査なんかに比べれば、なんとなく効率的な気がする。最低でも俺の正体は『樹』の佐久間と『熱』の能力者には知られている訳だから、何かしらの接触があってもおかしくない。

サバイバルバトルにおいて、その二人の対処こそが先決すべき事柄なのだろう。偶然出会って言われても、相手が能力者だということを知らなければ戦うことすらできないルール。順序として、まずは能力者を見つけることから始めないといけないんだ。そういう観点で見れば、俺の正体が一方的にバレているのは宜しくない。

車を燃やした現場。それを目撃した能力者の、“あぶり出し”が必要だ。

そして、同じ能力者と戦ったとして……相手を殺すか、真名を奪うかになる訳だが。

俺は家の床を保全しながら、冴えない頭を回し一日かけて悩みに悩んでみた。

搾り出した結論……なるべくなら、殺したくはない。それが俺の選り出した答えだった。

相手が殺意を持ってこちらに来ようとも、俺が相手を殺してしまったのは、やっていることは佐久間と同じになるだろう。強襲された時は頭に血が上ってしまい、佐久間に対して殺意を持ってしまったけれど、落ち着いて振り返ってみると、自分がやろうとした『行為』に身震いする。

人を殺すって……冗談じゃねえぞ。

できることならば、佐久間にしても他の能力者にしても 無力化して真名を奪う形で終息させたい。それが甘えや油断だって事は分かってる。緊張感が欠如してるって言われても、反論できない。けれど、人を殺めてしまったら、本当に後戻りが出来なくなりそうだった。

母さんを殺されて、この衝撃。それなら、俺が誰かを殺してしまったら……正直言って、想像したくないほど怖い。自分が自分じゃなくなるようで、凄く怖いんだ。

「お早うさん、司くん」

「……………」

失敗した、と思わず口から出そうになった。

気が付くと、俺はいつもの公園に着いていて、そこには当たり前のように翼が待っていた。

バカ、考え事なんてしてるから周りに目がいなくなるんだ。

「あれれ？ ちょっと……返事が無い、ただの友達のようなじゃないか、どうしたの司くん。まだ風邪、治ってないの？」

翼はピヨンと座っていたレンガから下りて、ギョツとしている俺のことを心配そうに覗き込む。いかん……構う訳にはいかない。

否応無く連想される、『熱』の能力者。その能力者に操られて、突っ込んできた車。そうだ……今、翼を巻き込む訳にはいかないんだ。

足を止める。

「いや、大丈夫だ、もう治った」俺は言葉少なに紡ぎ出す。「……」

あー、その、なんだ。突然なんだが、頼み事……聞いてくれるか？」

「ん、何？ 司くんからの頼み事なんて、珍しいね」

「あ、ああ……」

にこにこ、邪気のカケラもない。

平穏で、ゆるやかで、暖かくて。

その、あまりにも自然な雰囲気、今の俺にはギャップに感じてしまう。

日常と非日常の壁が、あまりにも高い。叫び声が届かないほどに、よじ登れないほどに、遙か遠い。単純に翼が羨ましくて、眩しすぎて見れない。

なんで、こんなことに。何故……誰か、教えてくれよ。

どうして……いつまでも、こんな会話を楽しんでいたいんだ。いつもの、ありふれたことなのに。

全てを、投げ出したいほどに。

クソッ……くそ、くそっ！ おら、言えっ。一時的にでも、『当たり前』を破棄しろよ。翼を巻き込まないんだろうが。

この瞬間にも、佐久間や『熱』の能力者に襲われるかもしれないんだぞ？

怪我を負わせてしまうかもしれない、心が傷つくのかも、それだけじゃなく、母さんのように……。

「っ、あ、あのな、翼」

知らせるな、無視しろ、むしろ突き放せ。いい加減に、切り替える。

早く、捨てろよ。

翼に『絶交してくれ』って言えば、簡単な話だろ？

「司、くん？」

「……その、えっつと……あのさ、暫く……登校するの、別々にしないか？」

畜生……捨てられない。どうしても、この繋がりを断ち切れない。惨めったらしく日常への生命線を持ち続けて、『俺は正常だ』と自己陶醉している気分だった。

俺って……うんざりするぐらい、弱いのかな。

「え。別にいいけどさ、なんで？」

「あ……その、ほら、俺ってば久しぶりに風邪引いたじゃん？ しかも二日間もよ。だからっていうか、ちょっと鍛える為に早朝ラ

ンニングしようかと思ってるんだよね。つーことで、多分明日から登校時間が遅くなると思うし、遅刻しそうになるまで待たせるのも悪いし、なんなら別々にしないか、ってことで」

こんな時だけ言い訳が思いつく頭が情けない。

翼は少しの間をおいて「うん、いいよ。病み上がりなんだから無理しないでね」と笑顔で了承してくれた。相変わらず物分りの良い奴である。

そうこうして、俺達は最後になるのであろう横並びの登校を再開した。

翼と遭遇した以上、もう囷作戦は中断せざるを得ない。それに、少なくとも佐久間大我は同じ学校の後輩……一年生だ。学校に來ているという確信はないけれど、確認だけはしておきたい。

「そっかあ、でも司くんが早朝ランニングとはね」。もうすぐ秋だから？ スポーツに開眼しちゃった？」

「……まあな、そんなところだよ」

俺は嘘をついた事による心苦しさで若干暗くなりかけたが、それを察したかのように翼が軽い調子で切り出してくれた。

「あつ！ そーだ。そう言えば、昨日の新聞って見た？」

「……いんや、見てないけど。何か面白い記事でもあったのか？」

この二日間、『炎』の練習やら家の補修をやっていたので、ニュースや新聞の類は全くとっていいほど見ていなかった。異常に引きずり込まれた今、『俗世間の出来事なんてどうでもいい』なんて考えていたのもある。

「たはは、実は僕も父さんから教えてもらったんだけどね。なんかさー、この辺に半分だけになった車が乗り捨てられてたんだって。ほら、僕達がよく通ってる長い裏道ってあるでしょ？ あそこに捨てられてたんだってさ。運転手も居なかったみたいで、怪奇現象だくって新聞に載ってたよ」

「っ！？」

やばい。

目眩がした。揺れる心を、抓った痛みで強引に戻す。

ちよつと待て、嘘だろオイ！

たしかに俺は燃やした車を放置していたけれど、まさか新聞に載るなんて思ってもいなかった。ってか、考えてる場合じゃねえだろ！俺は平静を取り繕いつつ、翼に訊いた。

「それ……も、目撃者とかって、いるのか？」

「いや、それが残念なんだけど、細かい内容は書いてなかったよ。僕達には衝撃の事実！　なんだけど、やっぱり地方のローカルネタだからね。隅っこの方にちょこつと載ってただけみたい。それにしてもなんでだろーね、ホントに怪奇現象なのかな？　それともオカルト？」

た、助かった。肩に掛かった強張りが解ける。

極端な例えだけれど、『高校生が車を燃やしてた』なんて書かれていたなら、その瞬間に一発終了だ。開始早々に正体公開とか、間抜けを通り越してアホすぎる。

「でね、切断面が綺麗に溶けてたんだってさ、こうスパーッとナンバープレートごと半分に。あんな細い道で、だよ？　たはは、これってなんかのフラグだと思わない？　まさか、全人類を脅かす魔王の降臨だったりしてっ！」

「……………」

色々とゲーム的な妄想を繰り広げホンワカしている翼とは真逆に、俺は全神経を研ぎ澄ませていた。

運命なんて曖昧な言葉を信じるつもりはなかったが、この車半壊の騒動で『世の中に異常』が増えちまった訳だ。怪奇現象然り、オカルト然り、常識外の出来事が新聞というメディアで知れ渡ってしまった。それは、意図せず『属性』の能力者を探し当てるのに……好都合な情報なのだろう。疑り深い奴なんかは、たったそれだけで『能力者の仕業』だと感付くかもしれない。運命が収束する、ね。そのルールを疑っていた訳じゃないけれど、いよいよ真実味を帯びてきた感じた。



一挙手一投足が命拾いになる、この環境。安心する事なんてできないし、気が抜けない。まるで薄氷の上を歩いているような感覚。翼とは最後の登校になるだろうから、楽しく雑談して終わるつもりだったのだけれど　とうとう、学校に到着するまで俺が笑うことはなかった。

「　　」

無意識のうちに足を止める。教室に入った瞬間、鋭い視線が俺を突き刺した。

『視線が突き刺す』というのは比喻だけれど、まるで親の仇でも見るような底知れぬ重圧が身に掛かる。神経質になっていた俺は、即座にその相手へと目を移した。

探し当てるまでもない、すぐに見つけられる。俺と同じ、窓側に座っている女の子。

たしか名前は……志木城怜実しきぎれいみだったか。

単なる勘違い、って訳じゃなさそうだな。

目を離さず、じっと俺のことだけを睨みつけている。射抜くよりも強烈な圧迫感。

チクシヨウ、一体全体なんだってんだ。俺が何かしたのか？　ろくに話したこともないのに、朝っぱらからそんな目つきで睨まれる謂れはないぞ。こっちはただでさえピリピリしてんだ、タチの悪い冗談なら止めてくれって。

俺が苛立って睨み返したのを確かめると、志木城はスラリと長い黒髪を対照的な色白い指ですえて、静かに席を立ちこちらに向かつて近づいてきた。

……むう、俺は訳も分からず立ち尽くすしかない。

女子にしては長身の部類、ちょうど俺と同じくらいの身長だろうか。雑誌のモデルになりそうな体系で、キツチリと着こなした制服上履きなのにコツコツと踵を鳴らす歩き方。そんなプロポーションの持ち主が、俺の真ん前で止まる。睨んだ目つきは何事も無かったかのように消し、いつもの淡泊な表情に戻って。

「お早う、西条くん」

と、至極まともに挨拶された。

おいおい……こいつは、驚いた。もしかして、初めて声を掛けられたんじゃないか？

そう思うもの仕方ない。なんたつて志木城怜実はクラス内で浮いていて、いわゆる『お嬢様』みたいなポジションを与えられている。学業は成績優秀、見た目においては容姿端麗、噂ではお金持ちらしいなんて言われていて、性格のイメージはプライドが高くて完璧主義者ってな感じなのだ。

勝手なイメージで語ってしまうのには理由があつて、志木城は常に人を寄せ付けない孤立状態にいる。誰かと楽しく話しているところなんて、まず目にしたことがない。休み時間は難しそうな本を読んでいるか、退屈そうに窓の外を眺めているかである。まさに喋りかけるなオーラ全開の奴なのだ。だからといって別段無口で病弱キヤラな訳でなく、授業中の態度は優等生そのもので教師受けもかなり良いから厄介だったりする。

そんな訳で、触らぬ神に祟りなし ではないけれど、いつまで経つても馴染まないポーカーフエイスの無干渉を維持し続けている志木城に近づく者など居らず、男子からはモテるにモテれず、女子からは話しかけ難く、そして男女共にミステリアスな女子生徒といった印象なのであつた。俺を含めたクラスメイト達は、精々遠くから『今日も綺麗だなあ』と眺めることしか出来ない。規律正しく校則を順守する、模範を象徴したような生徒。

もしも俺が志木城の環境に身を置いたならば、とてもじゃないが耐えられないだろう。寂し過ぎて三日以内に登校拒否になる自信が

あるね。だが、当の志木城からは儚げな寂しさなど露ほども感じさせない、涼しそうな面持ちをしていた。喜怒哀楽が損壊してそんなテンプレート。

一人で居ることが平常であるかのように      どことなく冷めた視線。

あたかもエベレストに咲く高嶺の花のように      人の手には触れられない。

周りの同年代と比べると、大人びた隔たりがあるように思えた。

「無視とはご挨拶ね。……お早うって言っているのだけれど、聞こえていないのかしら」

凜とした声で威嚇して、蔑むような瞳で俺を見据えている。

「いや……聞こえてるよ。その雰囲気だと、爽やかな朝の挨拶って感じじゃなさそうだけだな」

「ふっ、それはそうね」

志木城は静かに口元を綻ばせ、そのまま俺の横を通り抜けた。

「『属性』、屋上で待ってるわ」

すれ違い様にボソリと囁かれた一言で、俺の脳内は完全に動転してしまった。

なん、で？      なんで志木城が、『属性』なんて知ってた？      ヤツも……『属性』の能力者？      っていうか、何で俺が能力者だってバレてんだよ！？      いや、それよりも、何よりも。

「あっ、おい！！」

「うわわっ……え、え、なに？」

パニックに陥った俺が振り向いた時には、志木城はとつくに教室を出た後だった。

代わりに驚く翼。手には携帯ゲーム機。どうやら熱中していたところを邪魔してしまったらしい。

「ああ、違うんだ、すまん。なんでもない」

「び、ビツクリさせないでよ……うげっ、僕のポケモンやられてるし！ ジムリーダー戦で残り一匹、しかも弱点タイプで体力半分以下って……たははは、腕の見せ所じゃないか」

操作ミスなど物ともせず、ピコピコとゲームをしながら脇をすり抜ける翼。慣れた感じで、前方を確かめず自分の席へと向かっていく。

ほんと、器用な奴。

そんな素振りを見たお陰か、だいぶ落ち着いてきた。すーっと深呼吸。

二日ぶりだが、変わらない騒がしい教室を見渡す。誰一人として先ほどのやり取りを気に留めてない。何も、分かっちゃいない。

『属性』を持った人間の力。試さずにはいられない魅力。暴虐と残酷さ。良識からは程遠い非常識。

無茶苦茶にされた、俺の家。

あれを……学校で？

ふっざけんな！ 冗談じゃねえ。また一般人を巻き込むつもりなのかよ！？

ギョツと拳を作る。

そんなこと、させるものか。すぐにでも後を追えば うん？

ちよつと……待て。いずれにせよ、志木城は俺の正体を知っていたならば、登校を待たずに不意打ちでも闇討ちでも仕掛けられる

なんなら、さつき突っ立って俺を簡単に殺せたはずだ。それをせず、わざわざ自分の正体を晒してまで屋上に呼び出したりして……何が目的なんだ？

人目を気にしていたとしても、何かが解せない。腑に落ちない。チャイムが鳴り、教室の時計は朝のホームルームの時刻を指していた。このままこうしていたら、先生に捕まりかねない。つーか、迷っている場面じゃないだろ。

「すまねえ翼、急用ができた。俺は遅刻ってことにしといてくれ」  
「へ？ あ、ちよつと司くん！」

俺は鞆だけ机に置いて、足早に屋上へと向かった。

『属性』の能力者なんて放置できない。物語がポンポン進んでいくようで、なんだか癪だが……決着なら、早々につける。

だけど、できるなら話し合いで……和解したかった。

「あら、意外と早かったわね。もう少し時間が掛かると思っていたのだけれど……西条くんは見た目通り、短絡的思考なのかしら」

急いで屋上に辿り着くと、志木城は腰まで届きそうな長い黒髪をなびかせて、開口一番に罵倒を吐いた。晴天な空の下、屋上を取り囲むように設置されている落下防止用フェンスに身体を預けている。それだけで絵になるというか、見蕩れてしまいそうな感じだ。こんな状況じゃなければ、だが。

俺は力チンとした頭を努めて落ち着かせ、誰も入れないように後ろ手でドアを閉めた。ピリピリした空気。警戒しつつも、志木城へと近寄っていく。

校則では立ち入り禁止、しかも授業中とあってか俺と志木城以外は誰も居ない。屋上。誰にも見られない場所、広々とした一帯。戦うのであれば、これほど好条件な空間なんてそうはないだろう。

「……で、何の用なんだよ、志木城。授業までサボって。俺、こう見えて割かし真面目な生徒なんだけどな」

咄嗟の事態にも反応できるように、糸を張り詰める感じで緊張させた。

「わざわざ訊くまでもないでしょう？　ここへ呼び出した時点で、そして西条くんがノコノコと現れた時点で、意味は理解しているはずよ」

いきなり呼び出しておきながら、自分から明かすつもりは無いら

しい。

「そうかよ……なら単刀直入に訊くぞ、志木城。お前は『属性』の能力者か？」

俺の台詞など三年前から予想済み、といった顔で志木城はクスリと笑う。微笑というよりは冷笑に近い。しかし可愛いと言うよりかは綺麗だ。　　って、そうじゃない！　　気を引き締める西条司っ！

「ふふっ。ええ、そうよ。その通り、賢明ね。だけれど勘違いしないで西条くん。今はまだ、戦おうとは思っていないわ。あなたを屋上まで呼び出したのは……そうね、二人きりで話しがしたかったからよ。互いに疑問を氷解させる為の、質疑応答ね」

その軽々しい態度に、不用意に拍子抜けしてしまった。

「……そう、なのか？」

「そうよ。それとも西条くんは　　戦いたくて仕方がないほど短気で好戦的なのかしら？　　だとしたら、私の中で認識を改めなくてはならないのだけれど」

志木城は不敵に笑いながら、俺の出方を窺っている。交戦か談話か、どちらにでも対応できると言わんばかりに。

「……いや、そんな事はない。それでも、我慢強さには定評があるんだよ」

「あらそう、寛容で無難な生き方なのね。億劫とも取れるけれど」  
「大きなお世話だ」

いくら話したことがなくて、よく分からないヤツとはいえ、戦わないならそれに越したことはない。極力話し合いで解決できるなら、それが最上なのだから。

「それじゃあさっそく……志木城は、なんで俺が能力者だと分かったんだ？」

新聞では俺の名前どころか、高校生なんてキーワードすら無かつたらしいじゃないか。佐久間と同じように、俺が『属性』を使うところでも見られていたんだろうか？

「別に、簡単なことよ。あなた、昨日と一昨日、学校を休んだでし

よう。あのろくでもない担任教師は風邪とか言っていたけれど、仮にその情報がフェイクだったとして、車が半壊された記事が載っていたのが昨日。それに加え、あなたは学校に来た途端に殺気立った私を睨み返した。ピーンときた私は、普通の人なら分かり得ない単語で鎌をかけた。結果、あなたはバカ丸出しで過剰に反応したと。さらには自白まで添えてね。結論、西条くんは『属性』を行使することができる。以上、証明終了」

人差し指でズビシと指される。まるで探偵に暴かれる犯人にでもなった気分だ。

……あー……要するに、俺はまんまと嵌められたってわけか。つとに、我ながら滑稽だぜ。

「だけどさ、引っ掛かっというんだけど　鎌かけたつつつても、俺が能力者である確率なんて高が知れてるじゃないか？　本当は単なる風邪で、睨み返したのは不機嫌だったからとか……というか、間違ってたかどうかするつもりだったんだよ」

「はあ……あなた馬鹿？　それならそうで、『ごめんなさい』と『口封じ』で済ませれば良いだけじゃない」

ため息混じりに、しれっとそんな事を言う。

ぐっ、端整な顔立ちのクセに口を開けば毒舌家とか……普段から猫かぶりすぎだろコイツは。

「ああそーかい、俺が馬鹿なのはよく分かった。んで？　志木城は何の目的で呼びつけたんだよ」

「目的……そうね、一つは協力をお願いよ」

狙いすましたかのように風が吹く。場の雰囲気が変わり、やっと本題に入るらしい。

「ねえ……西条くんは、佐久間大我という男を知っているのかしら？」

「っ！？」

またしても、俺は動揺してしまう。

な、何で、志木城から佐久間の名前が出てくるんだ？

「呆れた……本当に分かりやすい顔をしてるのね。相手をしているこつちがバカみたい。あなた、隠し事ができないタイプじゃないかしら」

「う、うつせえ。そんな事どうでもいいだろうが。つか、俺が佐久間を知ってるから何だつてんだよ」

「言つたでしょ、協力よ。煩わしいから何度も言い直させないで。」

まあ……知っているのならば話しは早いわね。こんなことを西条くんにお願ひするというのは、なんだか屈辱的だけれど……私と一緒に、佐久間大我という男を倒して欲しい」

「それって、つまり」

「共闘の申し出ね。それ以外にある？」

共闘、ね。

……いや、俺も佐久間とは戦うつもりだったんだが、何で志木城がそんなことになつてんだ？俺の知らない所で、なにかしらの接点があつたのだろうか。

「あの男は危険よ。無差別に人を犠牲にして、関係ない人を巻き込んで、それを楽しんでいる。強者が弱者を蹴るようにね。それを愉快犯と呼ぶことが正しいのかは分からないけれど。ともかく、このままにはしておけない。既に警察では解決できない、介入できない『何か』なのよ。でも、ああ……不安にならないで頂戴。佐久間は『あの事件』を起こしてからというものの、学校を休んでいるわ。何故かは分からないけれどね」

そこで、一先ず区切る。志木城は生温い風で乱れた髪を丁寧に直した。

「元々、私一人で佐久間を倒そうとしたのだけれど……“力の相性”が悪過ぎて、逃げてきたの。今思えば自業自得、無策に突っ走つた結果ね。感情に任せて……無策に、ね」

握り締めた手を震わせて、志木城は口惜しそうに下唇を噛んでいた。

志木城も佐久間と戦つて……逃げた？ だいたい相性が悪いって



……？

飛び交う言葉。組み立てる状況。疑問を残すな、すがりつけ、戯言で片付けるな、脳内を整理しろ。

「だからこそ、私以外の『属性』が欲しい。鉄をも溶かしうる熱量。あなた……西条くんは、“火の元素”のどれかなのでしょうか？ だとしたら、木の元素である『樹』に対しては少なからず有効なはずよ。私に協力して、役に立ちなさい」

「ちょ、ちょっと待て、頭が混乱してきた。……えっと、どれが何に有効とかってあるのか？ 俺も佐久間とは一度戦闘したんだけれど、打ち消されしかなかったぞ？」

俺の『炎』は『樹』に対して、燃やしはしても貫通まではしなかった。佐久間との戦いは、あくまでもイーブンの拮抗状態だったんだ。いや、むしろ相手の虚を突いたからこそ撃退できたようなものだろう。あのまま戦い続けたとして……はたして、どのくらいの勝率があつたのだろうか。

考えるまでもない、そもそも人殺しとしての経験が、覚悟が違ふんだ。負けてるに、決まってる。

「は……？ あなた……今の話、本当なの？」

志木城は怪訝そうな顔をした後、再び俺を睨んできた。けれどもそれは教室の時とは違う視線。

凍えるような 無表情に近い、伶俐な顔。念願していた期待を真っ向から裏切られたような 剣呑とした瞳。

その目には、憶えがある。  
敵意。

俺はゾゾッと背筋から鳥肌が立って、口内中の水分という水分が消え失せたかのように渴いていた。

息が白くなりそうな長いため息について、志木城は口を開く。

「……あなたを呼んだもう一つの目的だけれど……やっぱり、説明

だけじゃなくて試させてもらっわ」

辟易とした声でそう言くと、志木城は両の手を正面へと突き出した。掌を丸めて、“何か”を包み込むような、空洞を作って。

うつ……季節はまだ九月上旬なのに、屋上はやけに寒い。急に寒波が到来したかのようなのだ。

「私、足手纏いなら要らないの。この先も生き延びたいのなら、西条くんの本気を見せなさい」

「ッ!？」

日中にも拘わらず、途端に気温が下がっていくのを肌で感じて、俺は臨戦態勢に入った。

「『氷』」

志木城の方を凝視すると、掌の中で次第にパキパキと音を鳴らしながら　氷の剣が形成されていく。

全長は約1メートル弱。手にした氷の剣は装飾が綺麗な西洋の剣を模していて、刀身は薄い水色に透けドライアイスのような白い靄を出し続けている。レイピアというよりはブロードソードやサーベルといった形状に近い。

スツと、その氷剣を上段に構えて、志木城怜実は告げた。

「それじゃあ、軽く『属性』の自己紹介といきましょうか。私の『氷』は氷の剣　触れた物を凍てつかせ、凝結させる。絶対零度のアイスソード」

おいおいっ……急にどうしたってんだ!？　俺が言ったことに、何か落ち度があったのか？

「っ……た、戦わないんじゃないかったのかよっ!？」

志木城は自分の『属性』をベラベラと喋っているが、俺にやり合う気は無いんだっての!

「私だって、そのつもりだったわよ。でも……『相生』相手に後れを取っているようじゃ、ハッキリ言ってお話にもならないの。天敵となる条件を満たしていない。つまるところ協力以前の問題なのよ、あなたは。まあ、お互いに敵同士なのは変わらないのだし、いい機

会だからレクチャーしてあげるわ 実践でねッ!!」

言うだけ言って、志木城は上段に構えていた氷剣を振り下ろしてきた。

「うお……とッ!」

ブンブンと大雑把に振っている氷の剣をギリギリの距離で躲して、俺は後方に退き数メートルの間隔を取った。避け切れなかったのか、ワイシャツの裾に触れた箇所が凍りついて重さを増している。

志木城はというとクルンと氷剣を持ち直しただけで、追撃するような真似はしてこなかった。

「マ、マジかよ……!」

少し掠っただけでも力チ力チに氷結する、だって?

もしも、コレが俺の体に当たったら……クソツタレ! 冗談じゃないっ! 誰だ、志木城を『高嶺の花』とかいった輩はっ、棘だらけに毒まみれの食虫植物もいとこじゃねえか!!

考えろ、死にたくない。生き延びる為に必死になれ!

絶対零度ということは……たしか、-270 以上ってことだ。人体なんて、触れた瞬間に粉々にされる。

皮膚が、血が、筋肉や骨まで凍って 砕かれる。呆気なく死ぬ。

人間は、それだけ脆いのだから。

そして、その氷剣を振るう志木城は……俺を殺す気だった。分かり合おうとも、話し合うこともせず、一方的な敵意で。

佐久間と、同じように。

しかし、同じなら。

同じ轍は、二度踏まない。

「手加減……できねえぞ?」

「ふふっ、意外と優しいのね。でも安心しなさい……そんな余裕なんて、一瞬たりとも与えないから 『氷雨』!」

志木城が剣を持っていない左手を頭上に掲げると、晴天の空から直径2cmの霰が現れる。

一つ、二つ、霰は数を増やしていき、遙か上空で急斜面を滑るよ

うな角度から俺目掛けて降り注ぐ。  
ぐっ……数が多すぎて避けられない！ 『属性』を……使うしかねえ！！

イメージするのは、巨大な炎。

下から上への上昇気流。思い浮かべたのはキャンプファイヤー。何人も通ることを許さない、絶対的な防壁。

掌を、前方の地面に突き出した。

「おおあああああ！ 『炎壁』！！」

俺は自分の体を守るように、高さ5メートル程の炎の壁を作る。氷の塊なら、コレで溶けるはずだっ！

そんな淡い希望とは裏腹に 霰は大きさを変えず炎の壁を通り抜けて俺に直撃した。

「がっ！ ぐっ！ イッテエッ！？」

全身を殴打する無数の飛礫。マンションの三階から石を投擲されたような衝撃に、堪らず亀のように丸くなってしまう。

その体制は 余りにも隙だらけだった。

俺が激痛に耐えかねて蹲っている間、志木城が緩慢と近づいてきて 再び氷剣を上段に構える。

誰がどう見ても、チェックメイトの図である。

「……これで終わりね。『相克』相手だとしても、あなたは弱すぎる。残念、予定変更ね。西条くんには個人的な恨みが無くて悪いけれど、違う人を見つけることにするわ」

「なにを ゴフッ！」

脇腹に強烈な蹴りをくらう。先程の攻撃も相俟って、力なく仰向けにされた。

倒れている俺へ、徐々に上段から氷の剣が近づいていく。

薄っすらと開けた目から、おぼろげに志木城の顔が見えた。期待、困惑、恐れ……その表情は、よく分からなかったが。

「さようなら」

寂しそうな声は、確かに聞こえた。  
痛みからか、鳴り止まない耳鳴り。

……ああ……死んだ。

時の経過が、ミリ秒単位でコマ送りのように遅くなる。

死ぬ……死んだ？ 何のドラマも躍進もない、こんな所で？

俺……このまま凍って、砕けるのか？

母さんに戻せないまま、佐久間を見逃したまま。

叶えたい望みを果たせないままに、全てを諦めるってんのか？

こんな顔の女の子に殺されて。

い、嫌だ！ んなこと、認められるかつ！

大体、さっきから何なんだよ！ あいつ等の能力は！

『樹』は相手を吸い取って粉にする？ 『氷』は剣で触れた物を

凍らせる？

ふっざけんな！ そんなの、全部デタラメじゃないか！？

俺には、そういう力なんて、無いんだぞ。

どうして……どうして俺だけ不公平なんだよ……いつも何時もイ

ツモ。

ふ・ざ・け・ろおっ！！

ガンッ！

志木城が振り下ろした氷剣は、俺ではなく屋上の床に命中していた。コンクリートに霜を這わせる剣先。

俺は素早く寝返りを打って、紙一重の距離で躲すと 痛む体を引き摺りながら、再び後方に飛んだ。鞭打つ節々が悲鳴を上げているのが分かる。持って数分、立って居られれば上々。

志木城は追い討ちをかける訳でもなく、そんな俺のことを見据えていた。

「ちっ……一思いに殺ってあげようとしたのに、結構粘るのね」

「うるせえ！ 人殺しに一思いもクソもねえんだよ！」  
もう出し惜しみはするな。

相手を倒すこと、燃やすことだけ考えろ。

「っ、『炎包』！」

意を決し、脚部へ向けて赤い炎を吐き出す。が

「その程度……精神力の浪費ね」

たったの一振り。氷剣が触れただけで、霧散した。

「クソッ これなら、どうだ！ 『炎鞭』！」

今度は敢えて狙いを外し、そして左手を用いて角度変化による攻撃を行った。それでも

「見え透いた手は止しなさい。魂胆がバレバレよ？」

まるでバトンのように氷剣をクルンと一回転させ、か細い炎は掻き消される。

近寄る死の恐怖。追い詰められる情念。

「鬼ごっこも……これで終わり、かしら？」

指が、金網に掠った。

「うッ!？」

そこは逃げ腰が行き着く果て 四隅の端。気付けば、逃げ場が断たれていた。

「けれど私も鬼じゃないわ。最期の言葉ぐらいは、ちゃんと聞いてあげる。だから今から十秒間だけ、足りない頭を使って考えなさい」  
「っ……分かってんのかよ、志木城！ 人を殺すって、どういふことなのか！」

「10、9、8」

正気か、この野郎……！

そもそもだ、何でこいつの氷剣には『絶対零度』とかいう特異性があるんだ。

志木城の『氷雨』は俺に命中したけれど、痛いだけで凍らなかった。佐久間の『樹下』も俺を串刺しにしようとして、吸い取ろうとしなかった。

「7、6、5……」

何故だ？ 考えろっ！

どうして俺には、あんな特殊能力が無いんだ。

「4、3、2……」

整理しろ！ 頭を働かせろ！ 同じルールで戦う以上、必ずヒントはあるはずなんだ！

使った技は『炎包』『炎鞭』『炎壁』。どれもこれも、『炎』の派生系で氷剣に匹敵する威力が無い。

……待て、ちよつと待て。

それだけか？ 俺が使った技は、本当にそれだけだったか？ 何か……大事な技を、忘れてやしないか？

「1」

疲労度合いから、無自覚のうちに避けていたこと。それは

「……ぷっ……はははっ！ なんだよ、そういうことか！ はははははっ！」

「劣勢すぎて狂ったの？ 西条くん」

「はははっ！ 違う、そうじゃないんだ。やっと……やっとスターラインに立ったって感じなんだよ。リタイアすれすれの瀬戸際で、ギリギリの崖っぷちにきて、ようやくだ。呆れちまうよな、ホント」馬鹿らしくて笑っただけなんだ。

そう……俺は自分自身で抑制して。相手に真っ直ぐ飛ばす『炎』のプロセスを、てつきり省略しているだけなんだと思っていた。

だけど、そうじゃない。俺は最初から、最終兵器を使っていたんだ。

左手を添えた右手で、志木城に狙いを定める。

「志木城。避けるか、その氷の剣でガードしろよ。お前がどうかは知らないけれど、俺は人殺しなんて真っ平御免なんだ。抵抗して、反抗して、何がなんでも防いでくれ。今度の技は 段違いだぜ？」……何よ、その強気。気に入らないわ」

言葉ではそう言いつつも、志木城は身構える。慎重を期した行動

原理。

そうだ、それでいい。これで、全力を出せる。

本来なら、『炎包』なんて言葉は必要なかったんだ。

俺の世界、俺の創造、俺の願望は最初から決まっていた。

『属性を唱えれば良い。それで、個々の能力は解放される』

あの時の俺は、何を願った。

『日常生活で頻繁に使ってるし、なにより強そうだ』

ああ……俺は最初から、“強さ”を求めて『炎』を選んだんだ。  
ただ純粹なだけの、力を。

イメージするのは、混じり気の無い炎。

想像できる最大限の炎。

鉄をも溶かす紅蓮の業火。

それを収束させて、一直線にして包み込む。

解き放つ、想いの強さを

「おおおおおおおお！！ 『炎』ッ！！」

唱えた瞬間、『炎包』とは比較にならない炎が射出された。

俺の視界は朱に染まり、日の光を見るように眩しい。

志木城は直後の火炎に驚いたようだったが、現状を理解し氷の剣を突き出した。

「はあああああッ！！ 『氷』！！」

バシユウウウウウウウウッ！！

唸るような音を上げて、それぞれの『属性』が激突する。

弾け、混ざり、溶かし、氷らせ、また弾ける。

一体……何秒間続いたんだろうか。

紅蓮の業火と絶対零度の衝突は、蒸気という形で屋上全体を埋め尽くした。



互いに見聞きしたこともないような空前絶後のエネルギーがぶつかり合って、濃い霧が視界を遮る。

ガクンッ。

俺は『炎』を出し尽くして、踏ん張りきれずに膝を折ってしまう。三日連続徹夜をしたような疲労感と虚脱感。精神力が半端なく消耗されていた。

「あつ、ん、のお」

っ……くそっ！ 動け、動けよ！ まだだ、まだ志木城が来るんだ！

ところが、気力そのものが根こそぎ奪われる。疲れ果てた、寝たい、眠りたい、楽になりたい。今にも決壊しそうな心。

その時、前方からゆっくりと……しかし着実に歩いてくる気配がした。

蒸気の靄から姿を現したのは 俺と同様に、疲弊した志木城の姿。

力が、入らない。

足が、動かない。

腕が、上がらない。

瞼が、閉じちまう。

もう、駄目か……クソッ。

「はぁ……はぁ……はぁ……西条、くん……あなた、合格」

そう言っ、俺と志木城は糸が切れたように 二人して屋上で倒れた。

## 第五話 五行思想への理解（前書き）

五話の登場人物

さいじょうつかさ

西条司：主人公、属性は『炎』

しきじょうれいみ

志木城怜実：属性は『氷』

## 第五話 五行思想への理解

「……………んあ」

目を覚ましたのは、日没前の放課後だった。真上を漂う雲が茜色に染まり、薄暗い空をチラホラと星が煌き始めている。『ああ、寝すぎたんだな』と思う一方、なんだかよく分からない充足感が満ちていた。そういえば、まともに眠ったのは久しぶりだった気がする。

「あい、イテテ……………」

ぼやけた頭。朧げな目。屋上の硬いコンクリートで寝ていた所為か、体の節々がズキズキと痛い。寝違えたりしていただければいいんだけど。

「うわ、なんだこれ……………重っ」

10キロの鉄アレイでも身に着けたような体を起こして立ち上がる。不意に視線を上げれば、少し離れた所に志木城が居た。

ドアに背部を預けてもたれ掛かり、ダランと両腕を垂らして立っている。

「随分と遅いお目覚めなのね。やけに独り言が多いし、呑気に悠長なこと。自覚が足りていないのかしら。これがサバイバルバトル中だというのは、分かっているの？」

憎まれ口にはツとした。

……………そうだった、今は爆睡している局面じゃないよな。

改めて志木城の方を見やると、相変わらず俺を見下すような、冷淡そうな視線を向けている。それは睨むというよりは呆れた感じに近い。あの氷の剣も、今は持っていないようだ。

もう交戦の意志はないのだろうか？ 俺は酷使した身体を労わるうともせず、息を整えて訊いた。

「志木城。お前、倒れる前に『合格』って言ってたよな。それってさ、俺とは戦う気が無いってことでもいいのか？」

「ええ……………そうね、及第点だけれど合格にしてあげる。『相克』相

手に相殺するなんて、まさに『相侮』ね」

「……はい？　そうこく？　そうぶ？　何じゃそりゃ」

聞いたことがない単語をポンポンと使わないで欲しい。なんつーか、いきなりゲームの世界に迷い込んだ気分になっちまう。翼なら大喜びして興奮するんだろうが、生憎と俺は常用単語しか知らない日本人だ。

キョドリながら疑問符を頭に浮かべていると、志木城はウジ虫を見るような目を向けて侮蔑した。

「西条くんって、やっぱり馬鹿なのね」

「カツチーン。オイこら！　もう一回勝負するか、おお！？」

馬鹿に馬鹿とか言うなバーカ！　馬鹿って言った方が馬鹿なんだよ！

「はぁ……元気だけは人一倍。愛と勇気だけが友達なのかしら」

「友達ぐらい居るっつーの！　アンパン顔の奴と一緒にするんじやねえ！」

友達だろ？　クラスの連中とは喋りはするけれど、放課後とか休日も遊ぶ奴になると……翼とか……あと、名島とか。

いくら名前を分離させても、思い出せたのは一人しか居ないという有様。ちくしょう、泣きたくなる。

「今、頭に思い描いた人……それは本当に、あなたの友達なのかしらね。一方的な押し付けは相手に迷惑よ。表面上だけ取り繕った友達は、親しいとは言えないでしょう？」

「うつせえ！　たった一人の友達まで減らそうとするな！」

「たった一人？　だとしたなら、それは友“達”ではなく友“人”でしょうに」

「くそつ、したり顔しやがって……しまいには喚くぞ！」

「赤ん坊のように自尊心の欠片もないのね。まあいいわ、ともかく足手纏いにならないように説明してあげるから……早くこっちに来なさいな。さっき言った用語の意味、知りたいんでしょ？」

出来の悪い生徒を受け持つ先生のような嘆息をもらして、志木城

は腰を下ろしながら手招きをした。

む……まあ話す気があるのなら、やぶさかではないぞ。

無防備なのかなあ。俺は志木城に近づいて、ずるずると同じように座った。多少の距離を開けて楽な体制の胡坐で、志木城は多少の汚れも気にせずといった感じで乙女座り……え、ああ……うん、それだけだ。

「なにかしら、いやらしい視線を感じるわ」

「い!？」

いや、いや違うんだ。美肌のふとも目に目がいってしまふのは、もはや男のサガである。決してやましい気持ちなどではないはずだ。「ねえ西条くん……人の噂も七十五日と言っけれど、実際はどうなのかしらね」

「な、なんでこのタイミングで、そんなことを訊くんでしょう?」

「別に、深い意味は無いわ。あくまで世間話のつもり。ただ、一度でもスケベキャラが定着してしまった男子は女子から疎遠にされるでしょうね。そういう水面下のネットワークにおいて、男子より流通している節があるから。良くも悪くも、彼女達は情報伝達能力が高いのよ。そして悪評ほど嬉々として拡散される傾向にある。そうね……始めは口を利いてもらえなくなり、そのうち無視されて陰口の的になる辺りが妥当な路線かしら。それこそ七十五日と言わず、卒業してからもずっと」

「勘弁して下さい! 俺から青春を奪わないで下さいっ!」

罪の償いに全力で頭を下げる男、それが西条司なのだった。

……駄目だ、どうやって弁明しても全然カッコ良くならない。

「あら、どうして謝るの? 私は質問と空想を述べているだけなのに。ふふっ、可笑しいわね、不思議と気分が良いわ。今なら長期間タダでジュースが飲めそうなくらい」

暗に口の端を吊り上げる志木城怜実。確実に性格は悪そうだった。

「くっ……血肉を削った五百円までなら、何とか」

「……意外と貧乏な苦学生なのね、あなたって」

軽く弱みを握ったことに満足したのか、志木城は薄笑いを止めて本題を話し始めた。

「そうね、まずは“この状況”について、どの程度理解しているかを訊くわ。西条くんも、あの夢を見たのでしょうか？ とても不愉快な　まるで試されているかのような、夢。だとしたなら、五行思想ぐらいは知っているわよね」

「ああ、それは知っている。木・火・土・金・水だろ？」

「そうよ。元は古代中国の自然哲学の思想ね」

それは……知らなかった。てっきり日本の陰陽道とかが発祥だと思っていたけれど、そうじゃなかったのか。

「その五つの元素は、万物の根幹とされているわ。互いに影響し合い、混ざり変化して、循環する。そうやって物を作り出し、同時に壊していくの。じゃあ次に、『相生』は分かるかしら？」

「そう、せい？」

「……もういい、一通り説明するわ。『相生』とは元素を生み出す陽の関係。例えば……ねえ西条くん、『火』はどうやったら生まれると思う？」

「へ？ 火？ 火って言ったら……ライターとかガスコンロ？」

ボカンツとグーで頭を殴られた！ 高校二年生の女の子につ！

「空気を読んで発言して欲しいわね。何で五行思想の話で文明の利器が出てくるのよ。『木』に決まってるじゃない」

あつ……駄洒落だ。思わず吹き出しそうになったのだけれど、また殴られるかもしれないので自重しておく。痛いのは嫌だ。

「自然の摂理に従い、『木』は燃えて『火』を生む。故に『相生』の関係が成り立ち『木生火』と言う。本来なら『樹』の佐久間に対して、あなたの『炎』は効力を持つはずなのよ。負ける要素が無いほどにね」

まあ、言われてみればその通りなのだろう。俺だってそう思ったけれど、現実としては相殺されただけで『樹』は貫通しなかった。つまり、この『真理の道』とやらは単なるパワーゲームだけじゃない

いつてことなんだ。

俺達の知らない、隠されたルールが存在する。

「おそらく、佐久間相手に相殺しかされなかったのは、単純に西条くんのイメージが足りない所為でしょうね」

「イメージが足りない……どういうことだ？」

「これは私の推測だけれど、西条くんが佐久間と戦った時、あなたは『樹』を燃やすことしか考えていなかったのではないかしら。意識して、または無意識に手加減したのではないの？」

「……………」

その可能性は、ある。佐久間が強襲してきたのは俺の家だったし、何より俺自身に明確な殺すイメージなんて無かった。恨んで怒って見境つかず、傷つけてやるって思いだけで、死を望むまでは。

だけど、それじゃあ

「相手を……殺す覚悟で、使えってことなのかよ」

「ええ、そうとも言えるわね。さっきの『炎』のように、手加減出来ないほど追い込まれてからでは遅すぎる。死人に口は無し　やられる前には、やるしかないの」

突き放すように、言い切った。まるで、自分はずっとに覚悟したかのような言い草だ。

なんだか、ム力つく。

「……悪いがお断りだ。相手が殺すつもりでも、俺は誰も殺したくない」

後戻りできなくなるからな、と俺がそう言うと志木城の目つきはより一層鋭くなった。

「だと思っただわ。戦っている最中も急所を外していたし、『炎』を出す前に忠告だっでしていた。なにより、殺されかけた相手の話を何の疑いもなしに顔面どおり鵜呑みにする生き方。まったく……甘すぎるのよ、あなたは」

甘すぎると、繰り返す。

「西条くん……西条、司くん。いい加減に、今居る現実を再認識し

なさい。日常なんて捨てなさい。甘い砂糖は、多量の塩で辛くしなさい。殺し殺されるの意識を……持ちなさい。あなたの世界は、一変したのだから」

一変した？ いいや、そうじゃない。そんな訳がない。

「違うね、『俺の世界』は変わらない。悪いが……俺は現実主義者なんだよ。いくら有り得ない非日常な出来事に振り回されてるからって、狂気と道徳の区別くらいはつく。変わったのは、狂っちまったのは お前の心情だけだ」

淡々とした俺の口調に、ついに耐え切れなくなったのか、志木城は立ち上がって激昂した。

「あなたは、何処まで……っ。叶えたい願いは無いの！？ 守りたい人は？ 大切な人は居ないの？」

「叶えたい願い？ ……あるに決まってるだろ」  
そつと、呟く。

「守りたい人？ 大切な人？ ……居るに決まってるーが！」  
人間生きてりゃ、放っておいても大事なモンなんざ山積みになる。両手から零れ落ちそうなくらい、一杯あるに決まってるだろ。誰だって失いたくない、奪われたくない、殺されたくない、無くしたくはないんだ。

「だけどな 誰かを殺してまで、叶えたい願いじゃねえっ！！」  
誰かに殺意を向けられて、自分自身が殺意を抱いて、気付いたんだ。

「俺には、人を殺せない」

たとえ相手を殺してまで生き残れたとしても、心が罪悪感に縛られたままでは、断じて平穩な生活は訪れないだろう。永久に、後ろめたさからは逃れられないんだよ。日溜りに泥水をぶっ掛けるような行為 そんな毎日は、嫌だ。はた迷惑な条理を押し付けるんじゃない、仕方がないで済ますな、大概にしろ、ふざけんなよ。

「俺は、誰も殺さない……！」

志木城と俺は、互いに目を逸らさなかった。両者共に、意固地な



思想だ。

数分間睨み合って、意外なことに先に折れたのは志木城の方だった。

「はぁ……もういいわ、諦める。西条くんが『敵』であることは変わらないし、人それぞれの考え方があるものね。これ以上無駄な説得はしない、時間が惜しいわ。精々、死なないように頑張ることね」  
そうは言ったが、胸中では納得していなさそうな仏頂面だ。志木城はその顔のまま、再び腰を下ろして説明し始めた。

「……『相生』は話したから、次は『相克』ね。『相生』とは真逆の意味で、元素を滅ぼす陰の関係。西条くんが作った『炎壁』を、私の『氷雨』が突破したのは覚えている？」

「……ああ」

まだ体中がズキズキしやがる。こりゃあ服の下は青アザになってるかもしれない。

「西条くんはこう考えていた。『普通なら氷は炎で溶けるはずだ』とね」

「……読心術も得意とはな、才色兼備は伊達じゃないってか」

「お世辞を言うぐらいなら、お金を頂戴」

オイ、そりゃどんな錬金術だよ！？ 迂闊に褒めることもできないのか、お前は！？

「……で、真面目なところ、どーなんだよ。なんで氷が溶けなかったんだ」

「それは、私達の力が常識という概念から外れているから、でしょうね。何一つ無いところから氷を創り出す。何の変哲も無いところから炎を生み出す。どれもこれも、科学という分野では語れない非常職だわ。西条くんだって疑問には思わなかったの？ どうして『炎』が真横に出るのか、とか」

「は？ それは俺が火炎放射をイメージしてたからじゃ」

「ないわよ。そもそもガスもガソリンも存在しないのに、真横に出

るわけないじゃない」

「……ですよね」

理論で推し量れない何か。それが『属性』ということなのだろうか。

「要はイメージの強弱と五行関係の問題よ。私は『水』、西条くんは『火』、『水』は『火』を消す。故に『水克火』と言う。理解した？ 私の方が西条くんよりも遙かに強いということを」

つまり、逆に言うとなんと志木城は相性最悪ってことなのか。それが『炎壁』を通り抜けても『氷雨』が消えなかった理由。

いや、ちょっと待て。

「でもよ、最後の衝突では相殺できてたじゃないか」

そう言っていると、志木城はばつが悪そうな表情になった。思い返すのもアンニュイな感じで。

「あれは……例外。私が西条くんを侮っていただけよ。『相侮』と言って、相克の反対を表しているの」

「反対？ 真逆は『相生』じゃないのか？」

「そうではなくて、これはベクトルの話。つい今しがたの状況は『火侮水』、簡単に言えば火が強すぎて水が蒸発することよ。だけれど勘違いしないことね、あれは力量を見誤って油断しただけなんだから」

業腹といった感じに俺を睨む志木城。いや、別に自慢してる訳じゃないんだし、そんな赤くなってるまで目くじらを立てんなよ。ったく、これだからプライドが高いヤツは扱いづらいんだ。

「いいから、さっさと先に進めろよ」

「っ……そうね。その内、嫌でも思い知らせてあげるんだから。それで……そう……最後は、『相乗』だったわね。これは何となくでも、想像がつくでしょう？」

「相乗効果の『相乗』か。ってことは」

「元素を滅ぼす『相克』の関係が過剰になった状態よ。私の『氷』が西条くんの『炎』に一方的に勝ってるみたいだね」

あゝはいはい。察するに負けず嫌いなね、志木城は。いちいち優位性を主張してくるヤツだ。こうやって俺にレクチャーしてんのも、絶対的な力関係が成立しているからだろう。よく分かったから、早く説明してくれ。

「もう一つ『比和』と言うのもあるのだけれど、これは省略するわ。キヤパシティの低い西条くんの頭に詰め込みすぎても無駄だしね」

「お前はいちいち悪口を挟まないと喋れないのか！？ だから友達が居ないんだよ！」

「あなたと一緒にしないで頂戴。居ないのではなく作らないだけよ。高校時代の友達なんて、コネクションとしては利用価値が薄いものだから。たかだか三年間の付き合い、学業に支障をきたさない程度で相手をしていれば充分よ」

「……ハッ、どーだかな。友達つてのは作るの難しいんだぜ。相手にだつて選ぶ権利はあるだろーよ」

「あら、差別と選別なんて下らないわね。私は等しく侮蔑しているというのに。それに、私が是と言えは是になるのよ、世の中は」

「お前は王様か！？ んな訳あるか！」

「ふふふつ、なら実際に試してみる？ ……ふともも」

「お友達になつて下さいっ！」

「嫌よ鬱陶しい、断るわ」

「自分で誘っておきながらー！？」

とか言うやり取りはさて置いて、閑話休題。

「さてと、じゃあ理解度テストとして、西条くんには私達の関係性を言ってもらうわ」

「俺達の……関係性？」

「私と西条くん それに佐久間との有効関係を、言ってみなさい」いきなり質問されて戸惑ってしまった。

俺は教えられた単語をフルに使って、頭に元素つきの五芒星を思い浮かべる。

えゝと、有効関係だから『相生』と『相克』だよな。元素は『火』

、『木』、『水』だ。

「……俺は志木城に『水克火』で不利、佐久間には『木生火』で有利だ。んでもって、志木城は佐久間に『水生木』による不利、だろ？」

「……ふむ、応用力“だけ”は人並みなのね。脳まで猿以下ではなくて安心したわ」

カッチーン。

オマエ、イツカ、ナグルゾ。

目尻をピクピクと痙攣させている俺を捨て置いて、志木城は座り直し姿勢を正した。

形から入るタイプなのか、どうやら大事な話題に移るらしい。

「それじゃあ最後のレクチャーよ。まあ、これが一番重要とも言えるわね。私達の能力について」

おもむろに、志木城は掌を前に出す。

「……『氷』」

唱えた瞬間、志木城の掌には小さな氷の結晶が収まっていた。キラリと、伸ばした背筋が微かに揺れる。

「お、おい！ 大丈夫なのかよ」

「無用な気遣い、ご苦労様。顔に似合わず、心配性なのね……私なら、平気よ」

どう見ても平気そうじゃない。途切れ途切れに言葉を紡ぐ志木城。怜実。弱っているのだろうが、高慢な振る舞いは崩さない。すぐにピンと肩肘を張った。

「……私との戦いで気が付いていたようだけれど、『属性』の使い方にはピンからキリまであるわ。語彙を使って発現することもできるし、今のようにイメージだけで唱えることもできる」

俺も、それは家での実験で分かった。ロウソクみたいな炎を出した時だって、イメージして『属性』を唱えることで具現化したんだ。「ここで重要な事は、『属性』の特殊能力ね。佐久間の『樹』、私の『氷』や西条くんの『炎』みたいに、自分の願望が叶う特殊能力

は『属性』を唱えるだけで発現し、語彙は不要となる」

まさしく、あの夢で願ったことが 現実になる力。単なる自然現象だけじゃなくて、不可知を混ぜ込んだ異能。

「さつきも話したけれど、イメージには強弱があるわ。いわば心の力、『相手を殺すイメージ』と『相手を倒すイメージ』では雲泥の差があるのよ。まあ、西条くんには幾ら言っても堂々巡りみたいだけどね」

ああ、俺は考え方を変えないからな。甘いと言われようが、油断と言われようが、構わない。

「で、語彙を使う場合はイメージする時間を省略することが出来るわ。ただし、前提条件として正しく頭に浮かんでいなければ……不発に終わる」

人間は語彙を言えば、同時に映像も思い浮かぶ。『火』と口に出せば、自然と色や形も思い描く。だから語彙のイメージを定着させる為には、一度は実物を見て想像を固めなければいけない。逆に言い換えれば、脳に記憶された映像と語彙が一致してるのなら、新しくイメージをすることなんて省略できる。

「想いの強さが力に直結するのなら、その代償は……教えるまでも、無いわよね」

「精神の、疲労」

「正解」

それはつまり 精神力と想像力が試される、戦いだ。

現実感が伴わない話だけれど、今更基準と比較している余地は残されていない。無理矢理にでも理解して、戦わなければ生き残れないんだろう。

それぞれ願いを 叶える為に。

志木城は氷の結晶を静かに握って、人肌の体温で溶かした。

「これで、私のレクチャーはお仕舞いよ。何か質問は？」

言いながら、志木城はパンパンと紺色のスカートについた埃を落として立ち上がった。俺も倣って立ち上がってみる……よし、僅か

ながら体力は戻っているみたいだ。ああいや、この場合は精神力が……どっちでもいいけど。

「そんじゃあ一つだけ、質問だ」

真っ直ぐに、志木城の目を見た。

これだけは確かめておかなければいけない。

「お前が最後まで残ったら……何を、願うんだ？」

そう訊くと、志木城は見るからに影を落とした。

「……それは今……どうしても、訊くこと？」

「ああ……この際だ、丁度いい機会だから打ち明けておく。俺は、佐久間に殺された母さんを蘇らせたい。それが俺の望みなんだ。譲れない、絶対に母さんを生き返らせる。だから、これ以上に大事な願いかどうか、訊いておきたいんだ」

「……あなたのお母さん“も”、佐久間に？」

頷く。別段、驚きはしない。こいつが佐久間の話を持ち出した時点で、何かしらの犠牲 恨みが、あるはずなのだから。

殺したくなるほどの、憎しみ。

「……そう。それなら私の事情も教えないと、フェアじゃないわよね」

志木城は俺を見据えて言い渋っていたようだったが、やがて決意したように口を開いた。

この志木城怜実が、命というリスクを懸けて戦う理由。

「それは」

それは、偶然その場に居合わせてしまった。そして未だに脅えきっている、クラスメイトからの証言だった。

志木城曰く、聴取するのにも時間が掛かったらしい。

佐久間のクラスメイトであるその『傍観者』は、まるで“この世の物ではない事象”を目の当たりにした心境だったそうだ。

右往左往する挙動不審な瞳。要領を得ない、か細い声。

そんな独り言のような呟きを整え、志木城は独自の推察を交えた“経緯”を、淡々と話し始めた。

朝のホームルーム後　廊下。授業前に起きた、あまりにも束の間な異変。

見慣れた、なんら代わり映えのない日常風景のひとつコマ。佐久間は“いつも通り”、素行の悪い生徒達に絡まれていた。

まるで誰にも悟らせないかのように、壁となり囲う五人組。

無論、その空間に友情などあるはずもなく、あるのは僅かな悪意だけ。自分が馬鹿にされない為の、仲間という群れから外されない為の、下らない防護と見栄の張り合い。

この場に居るのは、イジメる側と……イジメられる側。さらには、次なる標的にならないよう見て見ぬフリを続ける傍観者。

そう、分かり易く解せば『喝上げ現場』に他ならない。それが佐久間大我にとつての生活　学校においての『環境』だったそうだ。輪の中心を除いて、ゲラゲラと嘲笑する不良。その内の一人が、軽い面持ちで喋りだす。

「んでえ？　お気に入りのタイガちゃんよ。オメエの財布はいつになったら札が入ってくんだ？　もうオレらってば高校生だかんさー、これっばつちのゼニじゃ満足して遊べねーんだわ。分かる？　こんだけじゃ足んねーつつてんだよ、オラ」

空になった佐久間の財布で、持ち主の頭を叩く。

最初は軽く、そして次第に強く　しかし騒ぎにはならない程度に。

「……………」

けれど、佐久間は何一つとして言わない。横一文字に口を塞ぎ、押し付けるように瞼を閉ざすのみ。じっと耐え、抵抗の意志も素振

りさえも表さない。遠くから眺めるだけの傍観者共と同じく、授業開始のチャイムを待つばかり。

授業さえ始まってしまえば先生がやってくる。そうすれば、この不良達も大人しく席へと戻るはずだ。取られる為に入れておいた小銭が取られただけで、何も問題はない。

群れには餌だけ与えればいい。餌で関心を引けば、殴られなくて済む。

短い人生で得た教訓。

だが そんな典型的だった日常は、あっけなく崩壊する。

「ギャハハハ。てかさー、こんだけ言ってんのにまうだ諭吉持つてこねーってさ……お前、もしかしてナメられてんじゃねーの？」

「だよなあー、ダッセ」

「い、いや、ありえねーだろ。オレがコイツに？ ちよつ、笑えねーって」

「つーかマジ笑えねーし。今月の『回収係』ってお前だろ？ タイガちゃんに調子乗らせすぎたんじゃねーの。ただでさえ山分けなんだし。ちゃんとやってくんねーとオレらも困るんだよな」

「あー、かつたるい。最近小遣い減らされたしよー……なんなら、あと一人増やすか？」

「ッ」

矛先が転換。仲間内から揶揄され、財布で叩いていた不良の手が止まった。

「……ざけんなよ」

それは逆恨みで、佐久間に負い目は無かった のかもしれない。空になった財布は、不良が握り締めたことで形を変えた。

「安く見てんじゃねえぞお、ゴラアッ！！」

「ッがあ！」

拳が頬へ当たり、輪の中心から飛ばされる佐久間。そのままの勢いで床に倒れる。



高校では、初めての暴力。

傍観者が騒ぎ出す。しかしチャイムはまだ鳴らない。仕事として対処する、セルフオートな先生は来ない。

佐久間は薄くつり目を開け、立ち上がった。痛い表情を作ること出来たが、一度でも殴られてしまった以上、もう演技で歯止めをかける必要はなかったのだろう。

ああ……やつぱり、また傷ついた。小学校の頃も、中学校の時も、あの家でも、ココですら。

何をやっても、受け入れられない。

だからといって抗う訳でもなく、佐久間は棒立ちのまま動かない。止めようとならない傍観者も、騒ぎを面白がっている不良達も、何もかもを見ていなかった。

その妙にうるたえない佐久間が気持ち悪かったのか、不良は再び怒りだす。

「文句あんのかテメエツ!!」

叫びながら握り締めた手を上げる。迫りくる拳。佐久間は気付かれないように笑う。

ああ、これでコイツらは居なくなる。校内での暴力事件 退学ないし停学は免れないだろう。いい気味だ。自らの手を染めるまでもない。腐った果実は、勝手に枝から落ちるだけ。

痛みを覚悟した、その時

「ちよつとアンタ達! 何してるのよ!!」

今日に限って現れないはずの『助け』が、きた。

否、きてしまった。

佐久間の最も嫌いな人種……憎むべき、偽善者が。

「……二日前の校内放送、覚えてる？」

「佐久間が起こした事件か」

「そう、一年生に体調不良者が続出した事件よ。そこに 私の妹も居たわ」

ドクンツと、心臓が跳ねた。

嫌でも思い起こす 粉末になった母さんの姿。

「佐久間は『樹』の効果範囲を実験する為に、無差別に近くに居た一年生で試していたのでしょうね。目眩がする子、貧血がする子、そして……植物状態になった子」

志木城は過去を悔やんでいるように、グツと目を閉じている。そんな姿を見るのは初めてだったし、だからこそ何よりも妹が大事なのだということを暗示していた。

「『樹』は、一方通行の力よ。奪うだけ奪って、戻すことは出来ない。だから、私の願いは一つきり 『妹を治す』、それだけよ」

それは、俺の願いと同質の……重くて大切な願いだ。優劣をつけることなんて、できない。

「私が『属性』に目覚めたのは、五番目。事件があった翌日だったわ。それからすぐに妹の異変と『属性』を結びつけて、躍起になって調べた。原因不明の植物状態なんて、普通に考えれば起こり得はしないのだから。私には、非現実の方を受け入れるしかなかったのよ。そして……佐久間に辿り着き、一人で戦った」

その結末が逃走。五行思想では『水生木』で不利。それ故に俺の『火』が必要だったと。佐久間を倒す為に、佐久間を殺す為に。

それは怨恨だったが、今の俺には無碍にすることは出来なかった。俺が殺さないことを選んだのなら、志木城は殺すことを選んだのだから。そんなのは死刑制度の有無と一緒に、分かち合えない平行線だ。

「彼……佐久間は吸い取った栄養を、間違はなく自分のモノとしていたわ。ねえ西条くん、佐久間の身長……高校生にしては、小さくはなかった？」

「そう言えば……たしかに」

一瞬、中学生かと思間違った。同じ高校生とは思えないほどに背丈も低かったし、声も幼かった気がする。

あたかもそれは 成長が止まっているかのように。

「っ！！ あいつは……！」

「そうよ、佐久間の『樹』は不老不死の吸収能力。吸えば吸うほど若くなる。さらに自らの糧として『樹』にも反映できてしまう。西条くんにも分かるでしょう？ それがどれだけ厄介なことなのか」精神力を問う戦いで、自分以外の補給機関が存在する。おまけに『属性』の強化も付いてるなんて。

そんなの……ほとんど最強、無敵じゃないか！？

「時間が経てば経つほど、この戦いは佐久間の思惑通りに……有利に運んでいってしまうでしょうね。だから」

志木城は、手を差し伸べた。

「一緒に……戦いましょう」

志木城の『氷』では佐久間に勝てない。

だけど、俺の『炎』と志木城の策があれば、勝てない相手じゃない。い。

もう、母さんや志木城の妹みたいな犠牲者を増やしちゃいけないんだ。

佐久間は……俺が倒す！

俺は決意のもと、差し出された手を握って、共闘の結託をした。

それは氷のように冷たい手じゃなくて、人としての温もりがあったと思う。

「あ……」

思い違いでも何でもよかった。俺の覚悟を受け取って、志木城は初めて微笑んだ気がしたんだ。

地平線に赤く落ちる光に照らされて。今まで見た、誰よりも綺麗な笑顔で。

「良かった。今夜は……寝かさないから」

……は？

## 第六話 竹頭木屑（前書き）

### 六話の登場人物

さいじょうつかさ

西条司：主人公、属性は『炎』

しきじょうれいみ

志木城怜実：属性は『氷』

さくまたいが

佐久間大我：属性は『樹』

## 第六話 竹頭木屑

「良かった。今夜は……寝かさないから」

「……………は？」

たぶん今の俺は、想像している以上の間抜け面になっていることだろう。

あの、志木城サン？ 一体全体ナニを仰っているので御座いましょうか。

えーっと、今は夕暮れ時の放課後な訳で、ここは誰も居ない屋上な訳で、俺と志木城はガツチリと手を繋いでいる訳でっ！

目の前に居る志木城怜実は才色兼備な美人でありながら、今は見たこともないほどの笑みを浮かべている。

「っ……………!？」

意識した途端、自身の体温が急速に上昇していくのが分かった。

一言で表すなら、顔真っ赤。

いや、いやいやいや、これは何かの誤解だっ！ ほらあ！ 早く佐久間を倒さないといけないから、これから夜通しで探索しに行くってことなんだろう？ 寝かさないって、そういう意味合いなんだよな？ な……そうだよ、な。まったく、志木城サンは言動が紛らわしいんだってえの。思春期の男子をおちよくるんじゃありませんっ！

……………はあ……………ふう、ようやく冷静さを取り戻してきた。やつぱし混乱した時は状況整理に限る。

しかし落ち着いて考えると、少しムカついてくるぞ。一方的に馬鹿にされてるみたいで、ちよつとばかり納得いかない。仕返ししてやりたい気分だ。志木城には散々つばら罵倒されてるし、たまには俺からイジメてもバチは当たらないだろう。

「……………お前さ、その台詞は色々と誤解を招くと思うぞ？ 年頃の女

子なんだから、軽々しく『寝かさない』とか言うなよ」

さあ焦れ、俺みたくリングのような顔になるといいさ！

ところが志木城の表情は、柔らかい笑みから口の端を吊り上げるような嘲笑へと変わっていた。

「あら？　西条くんは何を誤解をしているのかしら？　まさかとは思うけれど　あり得ないとは思うけれど、今の私の発言で如何わしい妄想なんてしていないわよね」

「……………　すみません。何も誤解してません」

「なぜ謝るのかしら。やましい事でも考えていたの？」

「ちがつ、そうじゃない！」

「ふふふ、本当に分かり易い顔。そういう人はね西条くん、足掻けば足掻くほどボロが出るのよ。おませさん」

「~~~~っ」

羞恥の倍返し。志木城は口喧嘩でも優等生らしかった。

っていうか、そろそろ握手してる掌まで熱くなってきたんだけど。ぎゅっと握られている手には力が込められていて、俺側からでは解けそうにない。

「あ、あのさ…………　志木城。そろそろ手、放してくれないか？」

「　『氷』」

突如として握手をしていた俺と志木城の手が、外側だけ氷付けになった。

いや、冷たい！　これ、かなり冷たいから！

「ふふっ、これで今日は逃がさないわ。単純思考がアダになったわね、西条くん」

「お、お前、何でこんなことしてんだよ！　スッゲー冷たいんだけど！？」

「あらそう、私は冷たくないわ。言ったでしょ？　あなたを逃がさない為よ。これから佐久間を撃ちに行くのだから、手駒の手綱は握っておかないとね」

「あのなあ…………　別にこんなことしなくても逃げねえよ！　ったく、

せつかく共闘の握手だと思ってたのに」

「共闘というのは憎み合うぐらいが丁度いいのよ。仮にも命を預けるのだから、余計な馴れ合いはよしでしょう」

オイコラ待て、今まで俺のことからかって楽しんでた奴が吐く物言いじゃないだろ。

「今度は不服そうな顔。そうね……尻尾を巻いて逃げないと言うのなら、解除してあげなくもないわ」

「……時間が無いんじゃないのかよ。遊んでんなら帰るぞ。断りづらい嫌味なんて言ってる場合か？」

「ふん、分かってきたじゃない」

そう言つと、志木城は膜のように張っていた『氷』を、あっさりと溶かしてみせた。俺は即座に手を放す。ヒンヤリと外側だけ冷えていたが、密着していた掌だけ妙に温かい。僅かながら変な感覚に戸惑ってしまう。

こいつ、いきなり何のつもりだったんだろう。いつでも『氷漬けにできるぞ』って脅迫なんだろうか？ 照れ隠し……って訳じゃないよな。うん、そんな肝っ玉じゃない。

「で？ 『寝かさない』とか豪語するぐらいだ。そう言うからには佐久間の居場所は分かってるんだろうな」

まさか『今から徹夜で探そう』なんて言わないよな……だとしたら本気で帰りたくなるけれど。

「当たり前でしょ、心外ね。粗忽な西条くんじゃあるまいし、その程度はちゃんと調べてあるわよ」

粗忽で悪かったなあ粗忽で。

「彼の居場所は自宅 では無いわ」

「違うのかよ！ ってか待て、逆に何で自宅じゃないんだ？」

という俺の疑問を半ば無視する形で、志木城は早々に答えを言い放った。

「私が戦って負けた場所であり、私達にとって最もアンフェアなフ



イールド……………森林公園よ」

太陽が落ち、穏やかな風が街道の木々を揺らしている。薄暗い夜道に街灯の明かりだけがポツポツと等間隔で光っていた。

そんな並木道を、俺と志木城は学校から三十分は掛かるだろう森林公園へ向かって歩いている最中だ。

「なあ志木城、俺は家に誰も居ないからいいんだけどよ……………お前は親に連絡しなくていいのか？」

時刻は夜の七時を過ぎている。少なくとも優等生のお嬢様が出歩く時間帯ではないはずだ。

しかし、先行して歩いている志木城は大した動揺もせず、俺に背を向けたまま応えた。

「連絡なんてしなくていいのよ。高校生なのだから、夜遊びぐらいしてもいいじゃない。それに今、両親が心配しているのは……………私じゃなくて妹よ。私が一日くらい帰らなくても、気にも留めないんじゃないかしら」

投げやりな調子で返した志木城は、歩くペースを一切緩めない。

俺からだとその表情までは分らなかったが、大体の察しはついた。

クラスから浮いていて、プライドが高く毒舌完璧主義者の嫌なヤツ。家でもそんな性格だったのなら、親から煙たがられているのかもしれない。なんにせよ、他人である俺が口を出す所でもなさそうだ。そのぐらいのデリカシーは、俺にだってある。

けれど、それでも志木城が切実に願っていること。

植物状態である妹の回復。

……………出来ることなら、俺もその願いを叶えてやりたい。

でも、それは同時に俺の願いを消すことにも繋がってしまう。二人同時には、あの日常に帰れはしないのだから。

叶えられる願いは一つだけ。夢の中でルール説明をしていたアイツは、そう言っていた。

母さんを蘇らせる。その代わりに、志木城の妹は治らない。そんな決着の仕方があっていいんだろうか。少なくとも、大団円にはなりはしない。

俺は歩きながら、必死に考えていた。

俺や志木城……誰もが笑えるハッピーエンド、その願いを。

「着いたわ」

程なくして、俺達は森林公園に到着した。

この森林公園は北と南にそれぞれ出入口があり、園内にはそこら中に雑多な木々が生い茂っている。それでも散歩道はキチンと整備されていて歩きやすいし、マイナスイオンたっぷりということもあって、平日・休日関係なく大勢の人で賑う公共施設だ。かく言う俺も何度か来たことがある。というか、この近辺の小中学校では定番の遠足コースに指定されている為、行ったことがない無い奴の方が珍しい。

ちなみに、俺と志木城は北の出入口前に居る。そのまま中には入らずに、近くのベンチへと腰を下ろした。言わずもがな、決戦前の作戦会議だろう。

ベンチの横に設置されている街灯の光が、まるでスポットライトのように俺達を照らした。

不思議と、緊張はしていない。一人じゃないから、なんだろうか。

「西条くん、携帯電話を寄越しなさい」

「あ？ いや、別にいいけどさ。何をするつもりなんだよ」

「二度は言わないわ、早くしなさい」

こいつ、有無を言わせねえ王様気取りか。まあいいけどさ。

「っと、はいはい」

俺はポケットから携帯電話を取り出して志木城に手渡した。すると、志木城も自分の携帯電話を持ち出して、凄まじい速度でボタンを押しだした。こちら辺は普通の女子高校生と変わらないんだな。お高く留まつてる割りに、メカ音痴ではないらしい。

やがて、志木城は携帯の操作が一通り終わったのか、投げつけるように俺へとつつ返した。ったく、他人のなんだから丁寧に扱えてーの。

「赤外線通信で西条くんの電話番号を貰ったわ。これから二手に分かれるから、これは緊急用の連絡手段として活用するわよ」

「ああ……なるほどね。森林公園は範囲も広いし、そっちの方が探しやすいよな」

「そんな訳無いでしょ。佐久間の居場所なんて、最初から分かっているわ」

「へ？　じゃあ何で電話番号なんて交換したんだよ」

俺が疑問符を頭に上げていると、志木城はわざとらしく溜息を吐いた。

「はあ……ねえ西条くん。佐久間は何で森林公園に隠れていると思う？」

「え？　えーと、森っぽくて隠れやすいから？」

「20点ね。赤点だわ」

「う、うつせえ！　罵るぐらいなら、さっさと教えろってんだ！」

「短気は損気よ、西条くん」

「怒らせてんのは誰だっ！」

「自分でしょ。私の所為にしないで頂戴」

志木城は俺の目の前で指を立てながら、答えを口にした。

「一つ、森林公園という場所は休日にな人が集まってくる。佐久間の“栄養摂取”として、非常に効率がいいのよ」

栄養摂取という言葉には腹が立つが……たしかに、ここは佐久間が動かなくても勝手に人が寄って来る所だ。人を吸って力が得られ

るのなら、絶好のポイントだろう。

「二つ、この森林公園自体が、佐久間のテリトリーで防壁なの」

「ん？ どういうことだ？」

「彼の『樹』は、幹や枝、地中の根茎を介して相手の生気を吸い取る……この意味、分かる？」

「っ！！ ちよつと待て……まさか。」

「そう、佐久間は森林公園の木々に根を張って、木に触れた人から吸い取っているのよ」

「なっ！？」

俺は勢いよくベンチから立ち上がって、森林公園を目視した。

そこは見渡す限りに雑木林が生えていて、本数なんてとてもじゃないが数えられない。

これが……全部、『樹』だって？

「もちろん、今の時間帯は人が居ないから、『樹』を解除しているかもしれないけれどね。まあ……だから位置の特定も簡単。広範囲に根を張れる場所 森林公園の中央広場に、佐久間は居るわ」

説明は終わりといった感じで、志木城もベンチから立ち上がった。制服のポケットに自分の携帯電話をしまう。

「私は先行して北の入り口から、西条くんは外側をグルリと周回して南の入り口から。それぞれ中央広場を目指しましょう。で、私が携帯にワンコールしたら到着と接触の合図、ツーコールしたら不意打ちの合図よ」

わざわざ時間を空けて裏から回り込む、それって。

「つまり……志木城は囲ってことかよ」

「ええそうよ。私の『氷』は佐久間に吸収されるだけだし、良くて相殺が限界でしょうね。佐久間に攻撃できるのは、今のところ西条くんの『炎』だけ」

あくまでもクールに喋る志木城に、正直言ってムカついた。

「お、お前っ！ 人にはあんだけ忠告しといて、自暴自棄になつてんのか！？ んな作戦、同意できる訳がねえだろうが！」

下手をしたら死ぬぞ！ 相性最悪の相手に強がつてんじゃねえよ！ そんなことなら、まだ一人で突っ込んだ方がマシってもんだ。

「……佐久間は狡猾で残忍な下衆よ。虚を突かなければ、絶対に勝てはしない。誰かが囷になるしか、倒す方法が無いのよ」

「だからって！」

「私だって妹に何かをしたいのよ！ 西条くんの足手纏いにだってなりたくない。これ以上、妹のような犠牲者を増やしたくはないの……！」

「……っ」

訴えるような志木城に、俺は何も言えなかった。

もしも今、俺と志木城の『属性』が逆だったなら、俺は素直に納得できていただろうか。

自分の無力を齒噛みして、他人に全てを委ねる。じっと黙って動かないで見ているだけ。

そんなの……無理だ。

「分かった、ならもう止めねえよ。けどな……お前が戦うことには反対だ。あくまでも囷、佐久間の注意を逸らすのが大前提だからな」  
これ以上の譲歩は出来ない。守れないなら今からでも共闘破棄にしてやる。

俺のそんな心構えが伝わったようで、志木城はコクリと頷いた。

「分かっているわ。それじゃあ……行きましよう。決して木には触れないように」

志木城は北口から森に入り、俺は外側をなぞるようにして南口へと向かう。

佐久間との最終決戦場、森林公園の中央広場へ。

靴底で味わう土の感触は久しぶりだ。

南の入り口を通り抜け、俺は中央広場へと歩を進めていた。

左右には歩道を避けるようして木々が植えられている。いつもなら觀賞しつつ新鮮な空気を取り入れたいところなんだが、今はそういう風に考えられなかった。あたかも呪いの樹のような、不気味で不穏な雰囲気を感じてしまうからだ。

生ぬるい夜風も、葉っぱ同士が掠れ合う音も、その割れ目から覗ける月でさえも。

何もかもが、敵に思える。

「……らしくない、よな」

なんとなしに呟いて頭を振った。

ここまで来て怖じ気づくな、弱音なんか吐いてんじゃねえぞ西条司。

これから命懸けで……戦おうとするのなら。今更、引き返すには遅すぎる。

俺は竦みそうになった足を速め、斜めを突っ切るように歩道から外れた最短ルートへと進みだした。どのみち不意を打つのであれば、姿を隠さなければいけない。保守された通り道で、ばったりと鉢合わせなんかしたら台無しになっちまうからな。

「……………」

ふと、ただ無心に歩いているのも何なので、この流されっぱなしの境遇について考えてみることにした。

属性を使える十五人の能力者。相手を殺すか、真名を奪うかで勝ち取る願望。それぞれの思いと目的。

そもその元凶 佐久間は、何の為に戦っているのだろうか。

他人を傷つけて、誰かを殺してまで実現させたい望み。

学校では苛められていると聞いた。自分の家には帰っていないらしい。

大抵の高校生にとって、学校とは一種の社会で、家は安らげる場なのだ。

それが無く、有ったとしても居心地が悪いものだとしなら……どうなるのか。

自分が必要とされていない感覚。居ても居なくても変わらないという錯覚。生きている人間を、そこら辺の木屑と同じに捉える人格。嫌な予感が、脳裡を掠めた。

ブブブ、ブブブ。

「っ……きたか」

震えるポケット。マナーモードでの着信。すぐさま切れたワンコール。

それは、志木城からの合図に違いないだろう。

怨敵 佐久間大我との戦いが、始まるうとしていた。

到着を報せるワンコールがあつてから三分後、俺は音を立てないよう注意して中央広場へと辿り着いた。二人からは少し離れた所……木の木陰から、その様子を窺っている。

広場は真ん中にある噴水を始点に丸く開けていて、今は俺達以外の人が居ない。夜ということが功を奏しているのだろう。通行人が居ないのは俺達にしてみたら好都合だ。手はず通りに進めば、最小の被害だけで収められる。

それなのに。

「……あの野郎、やる気満々じゃねーか」

志木城はすでに氷の剣を手にしており、天高く上段へと構えてい

た。

対する佐久間は陰湿な笑みを作ったまま、丸腰といった感じでポケットに手を入れている。遠くから見ると、おそらく『樹』は発動させていないようだ。余裕の表れか、単なる気の緩みか。いずれにせよ、理想的な戦況なのは確かだ。

佐久間は何故か緑色の帽子を斜めに深く被っていて、俺の位置からだ特徴的なつり目を見ることが出来ない。その容姿は以前出会った時よりもさらに若くなっている。今は……小学校高学年並みの背格好だ。ユルユルのシャツを限界まで腕まくりにし、ズボンの裾は何重にも折り返していた。

間違はなく、何人かを吸った後だ。

くっそ……！ 志木城の嘘つきめっ！

先程の作戦会議が全くの蛇足であるかのように、志木城は怒気を帯た顔付きで対峙していた。とてもじゃないがツーカー目なんて期待できない。というより、携帯電話を操作できる状況じゃない。身を潜めてさえいなければ、舌打ちでもしたい気分だ。

志木城の度量を信用しすぎた。相対していても冷静でいられると、疑わなかった。

っ、どうして気が付かなかったんだ。考えてみれば分かりそうなもんだろ。志木城にしてみれば、佐久間は妹の仇だ……恨ましい、訳が無い。

こうなってしまった以上、俺だけで佐久間の隙を見極めなければいけないだろう。

右手を佐久間の方へと向け、俺は『炎』のイメージを増幅させた。佐久間と志木城は互いに睨み合ったまま、ジリジリと不可視の戦意だけが渦を巻いていく。

少しの沈黙の後、先に口を開いたのは佐久間の方からだった。

「……おっかないな、そんな顔で睨まれても形勢は変わんないってば。アンタの『氷』じゃ、ボクの『樹』には勝てない。っていうか、この間だつて逃げるのに精一杯だったじゃないか。ボクとの実



力差を思い知ってむざむざと。ねえ、みすみす死ににやって来たとも思えないしさ……………アンタ、何しに来たわけ？」

「決まっているでしょう。あなたを……………殺す為よ。今日はその為に来たわ」

ギリギリの理性を保ち、志木城は佐久間へと殺意をぶつける。

その姿勢は今にも飛び掛りそうだったが、そこは流石に理知的だったようで、迂闊な行動には至っていない。

とうの佐久間は小学生には到底似合わない素振りで、背筋を曲げ口元を歪ませた。

「ぶっ……………はははっ！ 殺す？ 誰を？ ひよつとしてボク？ はっ……………はは、はははははは！！ それってさあ、ギャグで言ってるの？ それとも、ボクを笑い死にさせる作戦なの？ ぶっ、くくく……………だったら大成功だよ。ボク、お腹痛くて死にそう」

耐え切れないように一頻り笑ってはいるが、笑顔の裏では徐々に苛立ちが膨れていくのが分かった。こいつ……………本当は笑っていない。「はあゝあ……………これじゃあ折角“わざと逃がして泳がせてた”のが、無駄骨になっちゃったなあ。ボクとは相性が良かったから、アンタは最後に美味しく食べようと思ってたのに……………上手いかないもんだね、世の中は」

互いに潰しあって、漁夫の利を得る。それは確かに能率的な策なのだろうが、佐久間は根本的なところで勘違いをしている。

人間には怨嗟の念があるということを、少しも考えていない。自分が争いの輪を作ったことを、まるで分かっている。

牙を研ぐには……………お前は、被害を出しすぎたんだ。

重く、ただ重く、一言一言を確認するように、志木城が訊いた。

「最後に、質問よ。あなたが『吸った』一年生の中に、一人だけ植物状態の子が居たわ。それは……………故意？」

その問い掛けは、まさしく最後の負担。

沸騰しかけている心の、ストッパー！

「はあん？ もしかして……………ああ、なんだ、そういうこと。アンタ、

あいつの知り合い？　なるほどね、だからそんな顔してるんだ」

「いいから答えてっ！」

志木城の悲痛な心情を煩わしいと言わんばかりに、佐久間は口を開いた。

「あー、はいはい。あいつの名前……たしか、志木城だったかな。

ピーチクパーチクとボクの周りを飛び回りやがって。よく知りもしないくせに、偽善を振りかざして特にウザかったな。嫌いなんだよね、点数稼ぎの独善は。聖人ぶった仮面被って、わざとらしくアピールする奴。自分が正しいとか、思い込んでる連中。ボクはね、そういうのが大っ嫌いなんだ。だからさあ……」

ベロンと舌なめずりをして、答えた。

「不味そうに『喰って』やったよ」

告げられた瞬間、志木城の中で蓄積されていたモノが　弾けた。かかげた両手が、撃鉄の如くに振り下ろされる。

「アアアアアア！！　『氷』！！」

「ははッ！　徒労なんだよ！　『樹』！」

ガンッ、と硬い物を打ち付けたような激突音が響いた。

佐久間に飛び掛って氷剣を振り下ろすよりも先に、ガードした二の腕に『樹』がコーティングされる方が早い。

ツリーアーマーとでも言うのだろうか。指の末端から肩に掛けて隙間無く、木が外面を包んでいる。手首や肘といった関節部のみは駆動できるよう、ある程度ゆとりが設けられていた。

「あ……くう……っ！」

次第に、志木城の氷剣が形を崩し溶けていく。『水』として染み渡り、『木』に吸収されている。

自然の流れ、木は水によって養われる　故に『木生水』。

全身全霊の一撃である『氷』が、呆気なく壊されていく。志木城の思いと共に。



佐久間は志木城の首に当てていた手を外し、防御に徹しようとしたが　時すでに遅し。

「うつ！？」

咄嗟の事態に、佐久間の表情が驚愕へと変わった。首を絞めていた手は、志木城の『氷』によって氷結されていて、放そうにも放せなかったのだ。

志木城はというと流石に状況判断が早く、俺が呼び掛けた直後には『氷』で上半身を全て凍らせていた　生身となった、佐久間の手首ごと。

『水克火』に『木生火』。

さあ、ルールに従えよ。

俺の『炎』は、佐久間にだけ直撃する！

ボアオオオオオウウウウツ！！

放出された『炎』は赤い渦を巻き、唸りをあげて真っ直ぐ伸びる。

「じゅ、『樹』……『樹』ツ、『樹』！！」

必死に唱える佐久間。だが、志木城の氷を吸収する時間など、ない。

「ぎっ……いいいあ、あああ！？」

佐久間の腕に命中した『炎』は、分厚くコーティングされていた『樹』を難なく焼き払い、皮膚を焦がし、肉質部を溶かし、骨までもを残さず燃やし尽くした。

これが本来の『相生』。佐久間の両腕は『氷』で固定されていた手首だけを残して、この世から消え去る。

「あ、あ、あぎやあああああああ！？」

あまりの激痛に佐久間は仰け反り、ビタンビタンと広場の床でのた打ち回った。

もう隠れる必要も無い。俺は勢いよく木陰から飛び出して、志木城を庇うように前へと立つ。

志木城も自身の『氷』を解除してから立ち上がり、首に巻きついていて佐久間の手首から先を不快そうに投げ捨てた。

「こほ、ごほっ！ はあ、はあ……西条、くん……私も、一緒に焼く気だったのかしら？」

「んな訳あるか、信賴してやったんだ。志木城なら乗り切ってくれる、そう思ってた。それに……『共闘』というのは憎み合うぐらいが丁度いい』んだろ？」

「ふんっ！ 随分と意地悪なのね」

「良く言っぜ、それはお互い様だろうが。で……怪我は大丈夫なのか？」

「平気。西条くんをイジメられるくらいにはね」

「そいつは上等っ！」

俺と志木城は互いに憎まれ口を言っ、転げ回っている佐久間を見定めた。

もがき苦しむ佐久間は、ひたすらに叫んでいた。

それを可哀想だとは思わない。こいつの『やってきたこと』は、今味わっている何倍もの苦しみを生んだのだから。それは肉体的な意味じゃなく、精神的に。殺すつもりはないけれど、そのぐらいの痛みは受けるべきだと思う。そうでもしないと、俺の気持ちも抑えられそうにない。

佐久間が跳ねる内に、深く被っていた帽子が外れ、その細いつり目があらわになった。

……ちよつと待て。右目の上に、火傷の痕が残ってるじゃないか。あれは二日前、俺が佐久間を撃退した時の傷だ。

『樹』の特殊能力は……不老不死の力じゃなかったのか？

いや、俺も実際に佐久間の傷が治っている場面を目で見ていた訳じゃないし、志木城の説明も的確だったから疑問にも思わなかったけれど。

「お、おい志木城……」

「ええ、どうやら彼は、『吸収』するだけで治す力は持っていない

「ようね。属性の特殊能力がそこまで万能でなかったのは、私も計算外だったわ」

「じとー。」

「……な、何よ？ 何か文句ある？」

「……………」

「さらっと前言撤回しやがって……いや、別にいいけどさ。ちよっと間違えたからって、そんなに顔を赤くして拗ねるな。」

「あああああ熱いい！ 熱いいいい ツ！！！」

「う、嘘だろ……おい」

「恐れるべきは、佐久間の精神力だった。」

「何が、佐久間大我という人間を動かしているのか。両腕を焼損したというのに、片膝を着きながらもヨロヨロと立ち上がった。常人なら気絶していてもおかしくないほどのダメージは、与えたはずだ。それにも関わらず起き上がり、今は無き両腕を目にしている。」

「ぐう……くつ、うう。こ、こんな……こんな腕じゃあ、もう、駄目だ。ボ、ボクの世界が……無くなっちゃうよぉ！」

「泣きじゃくる、引きつった声。」

「その殺気が、その狂気が、爆発しそうなほどに高まっていく。」

「俺の背中がゾクゾクと身震いを起こす。いたる所から冷や汗がどつと溢れ出した。本能による警報。四方八方から拳銃で狙われ脅されているような……得体の知れない感覚が込み上げてくる。油断していると、吐いちまいそうなほど、気持ちが悪い。」

「な、何で、どうしてボクだけが……こんな目に……遭わなくちゃいけないんだあ！」

「来る。何かは分らないが、佐久間から膨大な感情が吐き出され」

る。

確信に近い　勘が働いた。

「ボ、ボクが……居られないなら……もう要らないい！　みんな、まとめて消えろお！」

「志木城、屈めッ！！」

「え、ちよつと！？」

「『樹海』！！」

瞬間　俺の視界は、緑色に覆われた。

信じられねえ、ありえないだろ。一本、二本、三本と、樹齡の長そうな大木が地面から生え出てくる。

木々は佐久間を中心として円形状に広がりながら、驚くべき速度で生え俺と志木城に目掛けて迫ってきた。眼前の光景から頭に連想されるのは、『樹下』による串刺し。

広範囲による『樹下』、空き間も無く生い茂る大木は……今度こそ、避けられない。

っそ、どうする、どうすればいい！

この状況で後ろの志木城を守りつつ、なんとか打開しなければいけない。もう考えている時間はねえ、属性の語彙を使っただっ！

イメージの省略、使った技の中でなんとかする。頭働かせろよ俺！樹の特性、炎の使い方。

あとは……応用の問題だ！

「間に合ええっ！　『炎壁』！！」

俺は右手を地面に押し付け、『炎壁』を撃った。

それは成長の過程。土から木が生えているのなら、種や根の瞬間に燃やすしかない！

「足が……あつつい！」

「頼む、あと少しでいい！　氷を使うのだけは止してくれっ！」

「っ……………」

志木城は高温に耐えながらも頷いてくれた。

ズドドドドドドドドツ、という騒音と共に、僅か数秒足らずで俺達の周囲が大木に埋め尽くされてしまった。

その太い樹木によって遮られ、佐久間の姿が見えなくなる。周辺の街灯が倒されたのか、一気に明かりも消えてしまう。

目を開いていても、そこは闇。暗いということが、ここまで怖いとは思わなかった。

……なんとか……生き残れたのか？

結果 木々は俺と志木城の真下には生えず、延々と森林公園中を包み込んで終息した。

段々と、両目が暗闇に慣れていく。ちょうど真後ろには、志木城の姿があった。

「大丈夫か、志木城」

「……え、ええ、無事よ。ありがとう」

志木城はあつという間の出来事に対応できず、屈んだままパチクリと俺を見ていた。ちくしょう、こんな時だけ礼なんて言いやがって……氣い抜けちまうじゃねーか。

とにもかくにも、まずは大木に囲われたここから抜け出さなければいけない。

俺は体制を立て直そうと、深呼吸をしようとした。

だけれど……そんな落ち着ける時間なんて、くれるはずも無かった。

「『樹勢』」

ボソリと呟かれた一言を契機に、俺の真横から凄まじい速力で丸太棒のような樹が生えてきたのだ。

「が、はあっ！」

吐き気を催す痛打。

もろに、わき腹へと当たってしまい、俺は息も出来ずに悶絶する。ぐっ！ 痛つてえ。それに、この鈍い音……やばい、肋骨が折れたか？



堪らずヨタヨタと後ろに下がるが、佐久間の猛攻は終わらない。  
畳み掛けるように、襲いくる。

「『樹枝』」

「っ！？ んなろおおおおお！」

今度はわき腹に激突した丸太から次々と枝が生えてきて、俺の服や皮膚を貫いてきた。

反射的に両手で顔面と首だけは守ったが、むき出し同然だった左足の腿や右肩に鋭い枝が突き刺さった。

「いつ、つうつう……！」

ジワジワと、ワイシャツの上から血が流れ出てくる。白の生地を赤が侵食し、染め上げていく。

刺さった枝は直径にして2cmぐらいの針だ。半端でなくとも痛い。

いつ、どこから生えてくるか分からない木と枝。しかも周りを木々で覆われて、何処に居るのかも分からない佐久間。

戦局は、相変わらず絶望的だった。

「……み、みんな……みんなボクを否定する。両親には、見放され

……学校の奴等には、馬鹿にされて……じ、自分の居場所なんて……

……どこにも、無いんだ」

だけれど、一筋の光明か、呪詛のように呻く声が聞こえた。

声のする方角は、俺の正面から5m程度の場所。

大木によって周りが覆われ、佐久間の姿は捉えられない。それでも聞こえてくるのは、胸をえぐるような声だった。

「ち、小さかった頃の体は、手に入れたんだ……あとは、ボクの世界だけ……ボ、ボクを受け入れてくれる世界だけなんだ！ あとちよつとで叶う。もう少しの、辛抱なんだあ！」

俺は傷の痛みよりも、心が痛かった。佐久間の周りに居た奴等は、どうしてこうなるまで放って置いたんだ。心配・思いやり・関心……人によって強弱はあれど、それは芽生えるはずなのに。

いいや、許せないのは……それだけじゃない。

気に食わないんだ、佐久間の弱い心が。他者と相対そうとしない、無関心な生き方が。

俺の思いを伝えたい……言ってやりたいっ！

「おおおおおお！ 『炎』！！」

周囲を照らす烈火の赤色。累計三発目の『炎』は、俺の精神力をごとそりと奪って佐久間までの道を作った。ポツカリと空洞の開いた樹木が、幹という支えを失い左右に薙ぎ倒されていく。

腕が垂れる。足が震える。今すぐにでも、横になって眠りたい。

喉の奥がカラカラになりながらも、俺は一步一步を踏みしめるように、佐久間への道を歩んだ。

晒された佐久間の様子は、血だらけの俺に酷く脅えていた。地べたに尻を着いて、自分で退路を断っておきながら、両足をバタつかせ俺から遠ざかるうとしている。背には自分で創った木があるというのに。

「う、うわああああ！ くるな、来るなあ、『樹』！！」

今度は自身の体中に『樹』を巻き付かせて、鉄壁な防御体勢に入った。

俺は左足を引き摺りながら、そんな佐久間の目の前まで近づいていく。

そこまで、属性なんて力が頼もしいのか？ 安心できんのかよ。顔すら覆ってまで……『樹』の殻に閉じこもりやがって。

両親に見放された？ そうかい……だからなんだってんだ！！

学校の奴等に馬鹿にされた？ 違うつ！ テメエが齒向かわなかつたんだろーが！！

「お前……誰かを殴ったこと、無いだろ。本気になって喧嘩したことなくて、無いんだろ。そうやって無表情な木みたいに仮面被って生活して、誰にも相手にされてこなかったんだろっ？」

「……う……るさい」

ぼそりとした返事は聞こえたが、俺は平然と話し続けた。

「誰かに拒絶されるのが、怖い。今より嫌われるのが、そんなに

怖いのか。だからその場しのぎで表面上だけ取り繕って、やり過ごすして、本気で相手にして無かったんだろう」

「……う、うるさい！」

佐久間の願いが　脆い心が、許せない。

『真理の道』で力を得たから強くなった　そんなのは、ただの思いつきだ。

傷つけられたから傷つけて、憎らしかったら今度は殺して、見捨てられちゃったら……居なかったことにする。

ふざけやがって、そんな理屈で良心が捨てられんのかよ！　納得できっか！

「自分を受け入れてくれる世界を作る、だと？　ざけんなっ！　悪いが……俺は現実主義者なんだよ。そんな『お前だけに優しい世界』なんざ、お断りだ！」

「だ……黙れ！　知った風なことを言うな！　心も体も痛くて、毎日が辛くて、いつも苦しくて……ボクがどれだけ耐えてきたのか、何も知らないくせに……！」

「それが、お前の言い分か」

現状に抗おうとは、思わなかった。誰かに助けを求めようとは、しなかった。痛いのを受け入れて、辛いのを甘んじて、苦しいのを我慢して。測って立ち回って誤魔化して。そうやって溜め込んだまま、一人で生きてきたんだな。

俺は拳を握り締め、覚悟を決めた。

カチンと。その時、無数の歯車が噛み合うように、俺の『願い』が定まった。

俺と志木城、母さんや志木城の妹……それに、この佐久間も。

『真理の道』に連なる全てを、救う答えが。

イメージするのは、燃え盛る拳。

志木城が屋上でやってのけた『氷の握手』のように、俺の拳に『

炎』を纏わせる。

「……『炎』」

それは想像した通り、ボウ！ という着火音を上げて拳に体现した。

「西条くん、駄目っ！ あなたも吸われるわよ！？」

後ろから志木城の声が聞こえるが、構わない。

以前、佐久間と戦った時は、相殺するだけで精一杯だった。それから佐久間は養分を吸収し続け、『樹』の糧にしているはずだ。この体中に絡みついた『樹』は、さっきの『樹海』のような一本一本が分散された力じゃない。志木城が心配するのも無理はないだろう。

ああ……普通なら、勝てないかもしれない。

だけれど、『属性』は思いが強ければ勝る。

佐久間の殺意と、俺の願い。

どちらが強いのかを 証明してやる。

こんな性根の曲がった奴に、負けてたまるか。

「上辺だけで語るな。本音で喋りやがれ、佐久間大我。嫌われたっていいんだよ。初めは弱くったっていい。自分自身が本気で感情をぶつければ、それでいいんだ。そうやって何度倒れても立ち上がって、折れそうになっても真っ直ぐに、もっと強くなっていくんだろうがっ！」

俺は、息を吸い込んだ。思いの丈を、ぶつけないから。

「だから……『誰かの所為』にして逃げてんじゃねえ！ その分だけ遠ざかるのが、何で分からねえんだよ！ 何でも分かった風に悲観して絶望すんのが賢いだなんて思うな。要らない人間なんて居ない。勝手に秤に掛けて見下してんじゃねえぞ！ 齒を食いしぱりやがれ。ちゃんと地面に足つけて、真正面から向き合ってみせろ！」

「うるさい喋るな黙れえ！」

「『樹』なんて名乗ってるならなあ！ 根っこ張って生きてみるおっつー！」

「黙れええええエエツー！」

森林の中、俺の拳と佐久間の額が、激しく衝突した。

## 第七話 交錯する願い（前書き）

### 七話の登場人物

さいじょうつかさ

西条司：主人公、属性は『炎』

しきじょうれいみ

志木城怜実：属性は『氷』

さくまたいが

佐久間大我：属性は『樹』

男：属性は『地』

## 第七話 交錯する願い

「おおおおおおおおお！！」

「アアアアアアアアッ！！」

互いの咆哮が木霊する、樹海と化した森林公園。俺の炎拳は佐久間が突き出した額と激突し、『樹』による吸収能力と鬨ぎ合っていた。

ビキリと激痛が走る 殴った拳が裂けそうだ。

脳を守る頭蓋骨。その硬さは手の骨の比ではない。さらには木の外殻によって覆われているのだ。そこに強く打ち付けたなら、それだけ反動も大きい。下手をすると、ヒビが入っているのかもしれない。

「つつうおおおおおッ！」

だけれど今は、物理的な話は邪魔だ。

殺意と願い。どちらの思いが強いのか、どちらの思いが勝るのか

ただそれだけが、証明されようとしていた。

押しも押されず押し付けあう意思。

決着だ。

木は燃えて火を生む。

想いを乗せた上で、『相生』と成す！

「燃えろおおお！！」

それは侵食していくかのように……徐々にはあるが、俺の拳が佐久間の『樹』を燃やし顔面へとめり込んでいく。

イメージしていく。心の中で、『木生火』を強く思い描け。

人は燃やさない。だが、お前の根っこに纏わりついた『樹』は燃やさせてもらうっ！

「おつらあああああ！！」

密着した状態で拳を限界まで振り切り、強引に佐久間を殴り飛ばした。

「っがぁ……！」

その衝撃により、佐久間は後方にある木に後頭部を叩きつけた。少しの間を置いた後で、体中の力が抜けていく様が見て取れる。体格差で言えば、大人と子供の殴り合いのようなものだ。呆気ない気もするが、恐らくは立ち上がってこれないだろう。まるで長年放置されてきた草木のように、佐久間の体を包んでいた『樹』は腐敗した焦げ茶色に染まり、ボロボロと枯れ落ちていく。

「っ……はぁ……はぁ……これで、勝った、のか？」

俺自身、一日に四発もの『炎』を使ってしまった所為か、これ以上の戦闘は実質的に不可能だ。戦うどころか全身の筋肉がピクピクと痙攣して、指一本だって動かせない。

あぁ……もう、座ってもいいよな。

俺は耐え切れずに、その場で膝を折ってしまった。

「いっつー……っそ」

今頃になって、やっと痛覚が働き始めたようで『樹勢』と『樹枝』によるダメージがフィードバックされてくる。

自身の制服に目をやると、右肩や左もも以外にも所々が破けていた。こいつは結構エグイ。

だけれど、脈動とした熱のような痛みのおかげで、気を失わなくて済んだのは逆に有り難いな。

「し、志木城……た、立てるか」

上手く、ろれつが回らない。辛うじて擦れた声を出して後ろを振り向こうとしたが、寝違えたように首が動かなくなった。

「ええ、立てるわ。佐久間のこと、倒したのね……お疲れ様」

後ろからそんな声が聞こえて、スタスタと軽い足取りで志木城が俺の真横を通過する。

険しそうな表情のままに。心の準備を済ませたと言わんばかりに。何かを、するつもりだ。

「しき、じょう……もう、決着は、ついたはずだ！」

必死で呼びかけるが、志木城は歩みを止めない。



「……西条くん。私はね、妹をあんな風にした佐久間が許せないの。それに……佐久間が私達に真名を教えるとは思えないわ。なら、今の内に殺すしかないじゃない」

淡々とした口調で、気絶している佐久間へと近づいていく。

「ふ……ざ、けんなつ！ お前が、殺しちまったら、意味なんかねえんだよ！ 佐久間だけじゃなく、お前も日常に戻れなくなる！ 重い罪悪感を背負うんだぞ、分かってんのか！」

それでも、俺の呼びかけが虚しく聞こえるほどに、志木城は歩を進める。

「構わないわ。人にはそれぞれの価値観や主義主張がある。西条くんは西条くんの考えで戦えばいい。私も私の考えで戦うわ。共闘は……ここまでにしましょう」

くっそ、動け、動けよ足！

いくら力を入れても、体に命令しても、ピクリとも動きやしない。ぐっ……いいや……まだだ、簡単に諦めんな！ 喋れるんなら、叫び続ける！

「待て、志木城っ！ お前、本当に心の底から、相手を殺したいと思ってるのか？」

ピタリと、ようやく志木城の足が止まった。

「……どういうこと、かしら？」

「お、お前が、俺と屋上で戦った時……あの止めを刺す瞬間、わざと氷の剣を遅く振り下ろしていたんじゃないか？ 俺が、避けられるように」

そして、俺に考える時間を与えてくれた。戦う為のヒントを、『炎』をイメージする時間を、くれたんじゃないか。

志木城は首を振り、演技のように鼻で笑った。

「思い込みも、そこまでくると滑稽だわね。違うわ、単に私の筋力が足りていなかっただけよ」

そっじゃない！ だって、お前は軽々と振り回していたじゃないか。

あの一瞬だけ、躊躇ったんだ。

「佐久間と戦った時、お前の『氷』は……お前の思いは、佐久間の殺意と相殺できていなかった。本当は最初から殺す気なんて、無かったんじゃないのか？」

「いいえ、佐久間の『樹』が予想よりも強く育っていたから……競り負けたのでしょね」

俺と佐久間がそうだったように、イメージが強ければ『相生』相手だって相殺できていたはずだ。そう言ったのはお前だぞ、志木城！！

「じゃあ……なんで今のお前は、怖がってるんだよ」

俺には、志木城の肩が震えているのが見える。今にも崩れてしまふような細い体が。『人を殺す』ことに慣れていない 女の子の姿が。

悲しそうな、その表情が分かるんだ。

「違うつ。私は、怖くなんて無い。何も……恐れてない！」

こちらには振り向かず、消え入りそうな声だけが聞こえた。

ああ、間違いない。志木城怜実は、迷っている。

「嘘言うな！ 大体おかしいんだ、こんな話。ちよつと前まで普通の高校生だったヤツが、殺すだの何だのって……デタラメにも程があんだよ」

何度でも言つてやる。『真理の道』だかなんだか知らないが、好き勝手に俺達を巻き込まないで欲しい。

迷惑してんだよ、こっちは。誰の許可得てやってやがる。ただの学生なんだよ、俺達は。いい加減にしとけ、俺の周りでやるんじゃないよ！ どいつもこいつも、助けなくなっちまうだろうが！

「悪いが……俺は現実主義者なんだよ。そんな非現実的な考え方なんて、認められるかつー！」

「仕方ないじゃない、こうなったんだから！ こういう風になちゃったんだから！！ もう……元には、戻らないもの。あなたのお母さんだって、私の妹だって、どちらかしか助けられないのよっ！」

「潔く決め付けるな、悲観してんじゃねえよ！俺は、絶対に諦めない。母さんも、志木城の妹も、佐久間や目に見えない被害者だつて救ってやる！」

「ふ、ふふ……ふふふ……付き合つて、いられないわね。それは、机上の空論。眩しいばかりの理想論。願いは一つきりなのよ？どうやったつて、無理じゃない。あなたの言っていることは、希望を錯覚させるだけの、まやかさに過ぎないわ」

「違う、無理なんかじゃない。俺は、その『願い』があつたからこそ佐久間に勝てたんだ」

あいつの行き場の無い殺意を、負かしたんだ。

不幸で最悪な結末も、幸福で最高なフィナーレも、目指さない。

俺が望むのは、最上の答えだけだ。  
全てを救う方程式。

「俺の願い、俺の望みは

『

、

』だ！」

「……………え？」

志木城はやつとこちらを振り向いて、俺が何を言つたのか理解していないような、困惑した表情を見せた。

けれど、言葉の真意は伝わったようで、心の中で俺の台詞を繰り返し熟考しているようだ。

「ち……ちよつと、待つて……それつて、いや、でも……」

受け入れがたい真実のように、何度も何度も思考している。

だが、俺の考えに穴は無いはずだ。

誰も死なないし、誰も傷つけない。そんな理想を現実にできる願い。たった一つの想いで、全てをひっくり返す裏道だ。

自分の中で結論が出たのか、志木城は考えるのを中断して、スーッと気が抜けていった。

「……はあ……普通、そんな考え思いつく？いえ、盲点だったわ。ある意味、こんな状況が私を狂わせていたのかもしれない」

驚きを通り越して呆れた調子で返され、俺はニヤリと笑う。

「だろ？ この方法なら、犠牲者や被害者なんて出るはずが無いんだ」

「……そうね。でも、それは逃げていることにならないのかしら」  
「それでいいんだよ。『逃げる』って言うのは、大局的見れば得策なんだから」

俺は柔らかくそう言って、再び気を引き締めた。

「……この方法が正しいと思うなら、もう佐久間を殺すのは止める。両腕は封じまし、これで無力化したようなモンだろうが」

「……………」

志木城は、黙って俺に近づいてくる。

真っ直ぐに見詰める顔が、とてつもなく怖い。

そんな志木城は俺の真正面で立ち止まり、優しく触るような仕草で、俺の肩に手を置いた。

「西条くんのクセに生意気なのよ……『氷』」

「ばっ！ イッテー！！」

志木城は俺に突き刺さっている右肩の枝を、勢いよく引き抜いた。そんなことしたら血が……って、あれ？ 出てない？

「応急処置の力サブタよ。傷口は炎症になりやすいから……表面上の血液だけ、凍らせたわ」

「うぐぐ、それならそうと、抜く前に教えてくれよ」

「あらそう、じゃあ左足も抜くわよ」

「ちよっ！ 待て！ 心の準備があ……あ、ああ！」

左足の枝も容赦なく引っこ抜かれて止血された。体が動かないのでは、なされるがまだ。

あまりの痛さに目に涙を溜めるが、ギリギリのところで耐え、なんとか粒を落とさなかった。

「あら、頑張ったじゃない男の子」

「……虐め過ぎだぜ女の子。俺の手当ては、もういいから。ついでに……佐久間の両腕も、頼む」

「ええ……分かったわ」

今度こそ、今度こそ志木城は素直に頷いてくれたと思う。  
この戦いで、死者を出したくはない。出す意味が無い。

だから、佐久間を出血多量で死なす訳にはいかないんだ。

一応、俺の『炎』で焼いたから止血はされているかもしれないが、  
念には念を入れて欲しい。

志木城は佐久間の両腕にも『氷のカサブタ』を掛けて、再び俺の  
元へと帰ってきた。

「……で？ これからどうするのよ」

目だけを動かして辺りを見渡すと、森林公園はその名の通りに森  
と化して木で埋め尽くされているのが分かった。

そうだな、とりあえずは警察に連絡するとして、俺達は……こり  
や脱出するのにも一苦労だ。

えっと、まずは出る方角を確かめてつと、星とか年輪で分かるん  
だっけか……いや、そんな事を言っても仕方ないよな。ここは中央  
広場だ、真っ直ぐ突き進めば何処かしらの出口には着くだろう。

そんなことよりも、まずは言わなくてはいけないことがある。

今後の為に、そこそこ重要なことだ。

俺は言い難そうに咳払いし、重々しく口を開いた。

「ここで漫画みたいに格好良く決め台詞を言いたいんだけど……悪  
い、志木城。肩貸してくれ、一人じゃ立てそうにない」

「………はあー……情けない」

そうして、俺と志木城の長い長い一日は終わったのであった。

同日、午後十一時。西条司、並びに志木城怜実が帰宅した後の話  
である。

樹海へ変じた森林公園を、悠然と歩く男が一人 現れた。

ボサボサの髪。身体は比較的に細いが、背丈は高い。整った体系に、しなやかな筋力が備わっている。

その男は、突き出す雑木林をザッザッと軽いステップで避けながら、難なく中央広場まで到達していた。

「はっはっはー！ だいぶ派手にやつてるじゃん。こりや明日はニュースだわな」

男の声や調子は軽々しく、とても戦場跡には相応しくなかったが、どこか侮れない露骨な雰囲気をもし出している。

男は気絶し寝そべっている佐久間へと近づくと、全身を舐め回すように観察した。

「はっはーん。いつか消そうとは思っていたんだが、まさか『樹』がこんなガキンチョだったとはな。しかも先客が居やがったか。この焼け跡は……『火』か？ そりやあまた、運が悪かったなあガキンチョ。いんや？ ある意味、運が良かったのかもしれないが」

飄々と喋っている声に起こされたのか、佐久間の体がピクリと動く。

「……う、うう……ボク、は……」

「うおつとお、その状態でまーだ動けるのか。ったく誰がやったかは知らんが、随分と手ぬるい事をしやがるもんだ。中途半端に両腕ふっ飛ばしかたらって何だつてえの。生きてりやそんなもん、どうにかなっちまうのによ。どうせ潰すんなら喉潰せ、喉。なんも喋れなくて初めて無力化したことになんだろうが。それに証拠隠滅も…… なっちやいねえなあおい。こいつは端から隠す気がねえのか、それとも気付いていないだけなのか。まあ……後者だわな、この場合は。疲れて焦って追われてたのかは知らないが、無用心にも程があんぜ。そもそも頭が回る“奴等”なら、警察権力にだって頼りはないだろうよ。どういう奴等が、何をして、こうなったのか状況判断だけで丸わかりだ。はっはー、どうやらこの戦争、甘ちゃんも参戦しているらしい」

一通り検分し終わったのか、男は気だるそうに腰を屈め、軽蔑を含んだ視線で佐久間を眺めた。

「なあおい、生きてつかー」

あまりにも自然に、まるで道端の猫を撫でるかのような仕草で、グリグリと止血された傷痕を抉る。

「あゝッぎいいー!？」

「よつす、眠気覚ましには心地いいだろ？ この無差別野郎が」

侮蔑。それを楽しむ男が言葉を紡いだ。

「よおガキンチョ……目え覚めたんなら聞いてけや。ちよつとした小話だ」

既に無抵抗であることは見れば分かる。

断ることなど、出来るはずも無かった。失った腕の先から、激しい痛みを感じている。神経を焼かれるほどの苦しみが、波状のように押し寄せてきたのだ。

しかし、そんな痛みにもがく佐久間を他所に、男は独り言の如く昏々と語りだした。

「……勧善懲悪って、知ってたか？」

真横で呟くその物言いに、佐久間は思わず男を見た。

見て 戦慄した。歩道の煉瓦ブロックをひっくり返し、縦横無尽に生えている樹木。血だらけで腕が無い少年。こんな光景を目の当たりにして、平然でいられること その恐怖。苦しみの悲鳴をかき消すには十分すぎるほど、この男は異様だった。

「善を尊き、悪を滅する。ありやあな、嘘なんだわ」

世間話のように、男は切り出す。

「善悪なんざ誰かが決めたモン、道徳つつーのはご都合主義な人間が敷いたレールだろ？ 好き勝手に定義されて従って、そんでもって甲乙つける。大衆は善に媚<sup>こび</sup>り、悪を憎むってな寸法だ。あー……おい、呆けてんじゃねえよ」

苦痛に昏睡しかけた佐久間を、グリリと無理矢理起こす。

「ぎゃ、あああゝあッ!」

涙を流す佐久間を見て、男は満足げに「よし」と頷き、話を再開した。

「つまりだなあ……正義も悪も、実はケツコー適当なんだわ。適当つつーか曖昧？ まあ言葉の便宜はよく知らねえけどよ。アレだ、ええと、どっちも大差ないっていうか、なに名乗ろうが関係ないって感じた」

目を閉じることが出来ない。瞬きさえも許されない。佐久間は目の前の男に、怯えていた。

「弱きを守り、強きを挫く 誰が言ったのかなあ、そんなこと。お前ぐらいのガキンチョなら知ってたんだろ？ ほら、日曜の朝っぱらからやってるアレだよ、アレ。『正義の味方』の絶対条件ってやつだ。でもよ、ちつとばっかし考えてもみるよ。強きを挫くってオマエもうそりゃあ……ただの『弱い者イジメ』になってるじゃねーか」

この男は、一体誰に話し掛けているのだろうか。もしかすると、自分自身に説いているのかもしれない。

「一度でも挫いちまった強い者ってのあ、もう弱い者なんじゃねーか？ そんでもって道理に従ってる大衆と、それに背いている少数派の悪党。どっちの方が形勢不利かなんて、論じるまでもないだろうが。したら正義の味方ってんのは、今度は弱い者を守んねーといけないんじゃないか？ 立ち位置でコロコロ変わるモンを正しいだとか悪いとかって、そりゃなんの冗談だよコラ。自分の信じるナニかに、訳分からん善悪の価値付けんじゃないよ。なんてえのは……小中学生の理屈だ。もう分かってんだろ？ 正義は、絶対じゃない。ついでに悪も、絶対じゃない」

男は喋り続ける。返事や相槌は求めていない。

「昔っから悪党が好きなんだよ、おれは。だからいつも穿った目でヒーロー番組を見ちまう。んで、懂れるはずの『正義の味方』に、首を傾げちまった。お陰でこの様だ。なあおい、笑っていいんだぜ」

佐久間は、ぶるぶると震えた。自分がしてきたことを、思い返し



ているのだろう。

否、今更ながらに後悔しているのかもしれない。  
ずっと殻に籠って来た。

まともな親も、友と呼べる者も、無条件で手を差し伸べてくれる  
誰かも……居らず、拒んだが故に。

腐った木の実と見下した。枯れた落ち葉と見下げ果てた。樹とい  
う自分とは関係の無いものと、見切りを付けた。

ばっさりと、切り取る。

だから……こんな時なのに、誰にも助けを乞うことができない。  
光を与えてくれる人が、水を注いでくれる人が、養ってくれる人  
が……向こう側から歩み寄って、現れなかったから。

求められていないのなら、要らないと思った。

何処を見渡しても他人、人様、世間様。

無関係なら、構わないと。

傷つけ殺し、肥やしにした。

優しくして欲しい。殴らないで、虐めないで、嫌わなくて、無視  
をしないで。慕われない、頼りにされたい、愛されたい、笑顔を向  
けて……そのの、どこがいけないのだろうか。

変えたいと願った。変わりたいと祈った。

だからこそ奪って殺してまで勝ち続けると、決めていたのに。

「あ……ああ……ああ……」

それは常に受身で在り続けた罰か。

腕、顔、胸　どの痛みなのか分からないまま、目頭だけが熱く  
なっていく。

佐久間は泣き、男は笑った。

「はっはー、勘違いってやつだな。おれは自分が『正義の味方』だ  
とか言い張るつもりはねーよ。自ら進んで悪を裁くとか、ヒーロー  
気取って悪者退治だとか……っは、考えてもいねえ。いやほらだっ  
て面倒臭いしな。大人になって仕事してりゃそこまで暇にもなれな  
い訳よ、これが」

根っからの悪党は好きだぜ、安心しろ　　そう言いたげに、男は紡ぐ。

しかしそれは、悪と正義、言い換えればそれらを付随する“人”にのみに適用される温情。

ただ、と男は続ける。

「ただおれは、“正義”　っつーもんは持つてる自信がある。揺らいじゃいけない、誰だつて持つてる信念だ。人の為じゃなく、おれの為に。何が正しく、何が間違っているのかを判断する。だからよお……」

初めて、その男は語尾を強めた。

「おれが許せねえのは、正義も悪も人も無い　　無差別野郎だけだ」

男はそつと、大地に手を当てる。

「お前はよ……『力』を持つには、未熟過ぎたんだ。存在理由がな　　っちゃいない。それが許されるほど、世の中甘く作られてはいねえのさ。自分の正義も持てない屑野郎は、地獄にでも逝って反省してこいや……『地』」

瞬間、ピシリツと音を立て、佐久間の下に地割れが発現した。

「うつ、うわあああああー!!」

佐久間の身体が支えを失って、地球の重力に従い、底が見えない地中へと呑み込まれていく。

「あゝあ南無南無、成仏しろよ」

男は踵を返して、森林公園から離れていった。

その表情は、死者を偲ぶものでは無く……愚劣に等しい嘲り。

「正義は必ず勝つ　　ってな」

西条と志木城は、この事実を、まだ知らない。

## 第七話 交錯する願い（後書き）

西条の願いですが、あえて伏字とさせて頂きました。ストーリーが進むにつれて公開しようと思います。それでは、今後読んで頂けると幸いです。

## 第八話 日常生活における忠告（前書き）

### 八話の登場人物

さいじょうつかさ

西条司：主人公、属性は『炎』

しきじょうれいみ

志木城怜実：属性は『氷』

なじまつばさ

名島翼：友達

よしだくるみ

吉田久留巳：クラスメイト

## 第八話 日常生活における忠告

わき腹の痛みで目を覚ますと、いつも通りのちょうど良い時間に起きていた。

睡眠とは偉大で、昨日はピクリとも動けなかった身体に、多少なりとも活力が戻っている。

「……うう……く……って、イテテ」

ムクリと立ち上がって大きく背伸びをすると、筋肉の収縮によってズキンと痛みが増した。打ち身が数箇所、浅い掠り傷に、深い刺し傷。いくら止血されているとはいえ、本来ならば即行直行病院送りの大怪我なのだろう。

そんな鋭い痛みにも耐えつつも、渋い顔したままの寝巻き姿で俺は静かに階段を下りた。

わりかし広がったりリビングには、真ん中を円形状にくり抜かれた木が数本並んでいる。その周りを塞ぐようにガムテープで覆われた床。どこのエコハウスだよ、ったく。これで電気水道ガスまで使えなくなっていたのなら、完全にお手上げ状態だったのだろう。目に見える被害が床下だけで、外見的には普通の一軒家に思えるのも救いどころだ。

これを毎朝見る度に、嫌でも現実だということを実感させられる。  
「はぁ……」

俺は沈んだ気分で溜息を吐き、洗面台で歯磨きと洗顔を済ませた。蛇口を閉める前に朝ご飯（水）をコップに入れ、自分の部屋へと向かう。

結局、昨日の夜は情けないことに、志木城の肩を借りたまま家で戻ってきた。

「……なによ……これ」

この惨状を目にした第一声がそれだった。志木城は啞然と言うか、

呆然と見ていたんだと思う。むき出しになった木が床下から生えてんだ、驚かない方が変だろうよ。でもまあ、その辺の面倒な説明は全部後回しにして、とりあえずは志木城に俺の体を部屋まで運んでもらった。

「っ、重たい……西条くん、少しは、自分でも歩きなさいよ」

「無茶、言ったって」

もちろん二階へと上がる階段で往生したのは言うまでもないことだろう。今後に控えているであろう戦いは、せめて倒れない程度には余力を残しておかなければいけないと痛感した。

俺の願いに賛同した志木城は、協力関係を継続することに了承してくれた。

まあ……これで改めて一蓮托生ってヤツになった訳だ。

志木城に言わせれば『単に確率の問題よ。一人より二人の方が叶う確率が高いだけ。勘違いしないで、あなたなんて何時だって倒せるんだから』だそうだが。

それにしたって有り難いし、凄く嬉しいことには変わりない。

仲間が増えただけでも、この絶望的なサバイバルバトルに希望の光が射し込む。

相談できるし、話し合える。それだけで随分と楽になった気がする。

そんな訳で、俺は自分の部屋から一階へ降りると、リビングの椅子に座って志木城の指示通りにテレビをつけた。

まずは情報収集、だそうだ。俺はニュース番組にチャンネルを合わせると、早速昨日の森林公園が映し出されていた。

見出しは『度重なる怪奇現象！一夜にして増えた森林！？』なんて書いてある。

一応、目撃者証言等は無く、評論家達が都合のいい解釈で、現象に対する説明を入れていた。

……良し。俺や志木城、佐久間の話は一切出ていないみたいだ。どうやら佐久間もあの後に逃げたのかもしれない。

だけど、それよりも気になることが一つ。

中央広場に、巨大な地割れの痕跡があったらしい。

勿論、俺にそんな記憶は無い。

これは早速だけれど、志木城に相談する必要があるな。

俺はテレビを消して、残り二組となる予備のワイシャツとズボンを取り出した。

なるべくなら病院へ行きたかったが、今は現状確認が優先されるだろう。

肋骨が折れているのか、わき腹が結構痛むが、別に歩けないわけじゃない。

俺は一人だけの朝食を食べて、登校の準備をした。

今日は金曜日で、九月上旬にしては日差しが強くて随分と暑かった。

「い、つつ……」

ズキズキと痛むわき腹を押さえながらの登校は、いつもより大分時間が掛かっていた。

つたく、もう少し回避能力が高ければ良かったんだけど、生憎と俺は一般の高校生な訳で、反応速度には限界がある。

このダメージでは次のバトルが過酷になるかもしれないが、まずは対話から入っていこう。

こんな『属性』なんて力、誰も望んじやいないはずなんだから。

「ん？ あれは……」

前方には、俯き加減で携帯ゲームをしながら歩いている翼が居た。あつ……そうか。

俺は今日から翼とは別々に登校するんだった。

何ともまあ、危なっかしい感じで器用に歩いてるな……

はあー……なんか翼とは随分と温度差を感じる。

たった三日で、日常ってここまで激変するモノなのか？

正直言って、展開が急すぎてついていけない。

『真理の道に選定された』って、凄まじい貧乏クジじゃないか？  
いやいや、駄目だ駄目だ。こんなこと考えて現実逃避しても、意味なんか無い。

とにかく、今は前向きに出来ることを精一杯やるだけだ。

教室に着くと、俺は孤立している志木城に近づいた。

……遠目から見ると、完璧に美少女なんだけだな。

「おい、志木城」

「……何よ」

俺が呼びかけると、志木城は不機嫌そうに窓の外からこちらに視線を移した。

あれ？ 何か頬が少し腫れている。

「どうしたんだ？ その頬」

「別に……いいじゃない」

志木城は居心地が悪そうに、またもやそっぽを向いてしまった。

「いや、協力している以上、全然良くななんて無いぞ。まさか……敵か！？」

「ばっ、馬鹿じゃないの！？」

慌てふためいている志木城を見て、俺は自分の失敗に気が付いた。  
……しまった……ここ、教室だった。

俺は慌てて周りを見渡すと、クラスメイト達が奇異の眼差しでこちらを見ていた。

何か！ 何か言い訳をしないとっ！

「い、いや、ゲームの敵がねっ！ 強くってさー！」

俺は周囲に聞こえるように、わざと大声で志木城に話しかけた。  
頼む志木城！ ノリで合わせてくれっ！

「ふ、ふーん。そうなのね。で、だから何？」



……こ、怖い。怖いよ志木城サン。

かなり適当な感じで一緒になって誤魔化すと、大半は志木城の威圧的な表情を見て脅え、翼はゲームという単語にヒットして俺達に寄って来た。

「え？ なになに？ 珍しく司くんがゲームを始めたの？」

興味津々に聞いてくる翼だったが、さっき言ったのはあくまでも誤魔化す為の方便なので、なるべくなら反応しないで欲しかった。でもまあ無視するわけにもいかず、なんらかの相槌は打っておかないといけないよな。

志木城は不機嫌そうに無口モードに入ってるし。

「あー、いや、そうなんだよ。実は志木城と通信ゲームやっててさ。敵が強くて倒せないって話をしてたんだ」

「へえー、何てゲーム？ っていうか司くん、いつの間に志木城さんと仲良くなったの？」

「な、仲良くなってるってないわっ！」

「……志木城。そんなに強く否定しなくてもいいんじゃないか？」

あと、突然こっち向いて睨むなよ。

「なんか息もピツタリって感じだねー。漫才を見ているみたいだよ。ちよっ翼！？ そんな事を言うとお火に油だぞ。」

いじり慣れていない志木城は、途端に顔を赤くしていく。

「だ、黙りなさい！ 用が無いなら自分の席に帰りなさいよ！」

いや、用って言うか……相談しに来ただけだ。

何だかほのぼのとした空気になってしまったので、気を引き締める為に翼には退場してもらおう。

俺は翼にヒソヒソと話しかけた。

「翼………頼むから、空気読め」

「え？ ……あ、そういうこと。はいはい、なんだか邪魔しちゃったかな」

ゲーム脳が発達している翼は、先程の一言で全てを察した様で、一瞬だけ恨めしそうに俺を見てからスゴスゴと去って行った。

うん。まあ知らない方がいい事はある。翼にはずっと幸せな勘違いをしてもらおう。

俺は志木城に向き直り、真顔を作ってから改めて話し掛けた。

「志木城、相談したいことがあるんだ」

もうこれ以上は目立ちたくない様で、志木城は素直に頷いた。

「……ええ、分かったわ。昼休みに屋上で話しましょう」

昨日のこと、これからのことを。

と言うわけで、今は昼休み。

俺と志木城は目立たないように別々に教室を出て、屋上に集合していた。

「で、どういっつもりなのよ」

昨日と同じで、相変わらず屋上の床は冷たい。

俺は何故か正座をさせられて、足が冷えていくのを感じていた。

……何だコレ？ 心身ともに寒いんだけど。

「いや、こつちが聞きたいんだが。なんでお前はそんなに仏頂面で俺を正座させてんだよ」

「っ！ そんなの教室での話に決まってるでしょ！ 一体何を考えてるのよ！？」

「あれは……すまん。でもほら、その類はどうしたんだよ。どっかにぶつけたのか？」

俺がそう言くと、志木城は嘆息交じりで問いに答えた。

「……両親に叩かれたのよ。『こんな時間まで何をやってたんだ！』とか言われてね」

そうか、昨日俺の家に着いた時点で、時刻はすでに夜の十時過ぎだった。

それから自分の家に帰ったのなら、さらに遅い時間になったのだろっ。

「ただ、逆に考えればちゃんと両親に心配してもらえた訳で……  
「それは……良かったな」

「良くなかったわよ。まったく、思いつき叩かれたから跡が残  
っちゃうし、ハッキリ言っただけ最悪の気分だわ」

「言葉では憎まれ口を言ってるが、表情は満更でもないみたいだ。  
まったく、素直じゃないヤツだな。」

「で？ まさか、それだけじゃないんでしょ？」

「ああ、今朝のニュースの件だ」

「……地割れのことね。あれは、私にも分からないわ  
問う前に答えられてしまった。」

「あれは自然に発生したモノなのか？ いやいや、そんな事は有り  
得ない。」

「となると、十中八九『属性』の使用者か。」

「だとしたら……佐久間はどなたなんだ？」

「くそつ、こんな事になるなら、引きずってでも佐久間も連れ出す  
べきだった。」

「目立たない様に『樹海』を消してくれると考えていたのが、逆に  
裏目に出てしまった。」

「今頃になって、佐久間を放置したことに軽い罪悪感を感じる。」

「私も判断がつかないから、今日の放課後に森林公園へ行こうと思  
っているわ」

「あー、それなら俺も行く。佐久間のことが気になるし」

「いいの？ 私から見ても、西条くんは病院に行っただけがいいと  
思うんだけど」

「たしかに肋骨は痛むが、痛み止めの薬でも飲んでおけば多分大丈  
夫だろ。後で保健室に行っただけで済むよ」

「そう……なら、倒れない程度に無理しなさい」

「へいへい。精々こき使ってくれよ。」

「で、もう一つの相談なんだけど」

「何？ まだ何かあったの？」

むしろコレがメインなんだが。

「実は……俺の正体を『熱』の使用者にバレてるかもしれない」

「……は？」

俺は完全に呆けている志木城に、覚醒した初日の出来事を事細かに伝えた。

「つまり、『熱情』を掛けられた運転手に轢き殺されそうになったから、『炎』を使って車を半壊させた」と

「要約するとそうなるな」

志木城は眉間に細い指を沿え、軽く息を吐いた。

「……………迂闊、浅はか。そんな言葉がお似合いね、西条くんは」

「う……………マジで凹む」

反論できないし、まだ罵倒された方が気持ち的にマシかもしれない。

「そうなる、たしかに可能性としては随分と高いわね。だけど、逆に考えれば初日以外は、まだ襲って来てないんでしょう？」

「ああ。『まだ』って言うか、あれから四日間しか経ってないけどな」

外に出ていたのなんか、初日と昨日の二日間だけだ。

「そうね…………一週間は様子見をした方がいいのかもしれない。それ以上経っても仕掛けてこないようなら、誤信の可能性が高いわ」

「誤信？」

「単に勘違いよ。仮に『熱情』が自動発動だしたら、『熱』の使用者が相手を直接的に見る必要は無いってこと」

「催眠の類ってことか」

「そうよ。だけど、これからは西条くんの私生活にも、注意と警戒が必要よ」

そう言つと、志木城は俺を指で指して質問してきた。

「これは基本戦術なんだけど、『属性』の使用者の私生活は、どうしたらいいと思う？」

またコイツは唐突に質問するなあ…………えーと、これは佐久間にも

忠告されたことがあったな。

「外では力を使わない、だろ？」

「そんな低レベルなことは聞いていないわ。それは前提条件でしょ？ もう少し頭を使いなさいよ」

ぐっ、ム・カ・ツ・クツ！

えーと、だとすると？ それとは別に意識しないといけないことがあるのか。

……ちよつと待てよ？ 志木城は俺の正体をどうやって暴いたんだっけ。

「ひよつとして……日常を……崩さないこと？」

「そうよ。それが一つ目。私が西条くんを見つけた時の様に、日常の『綻び』を見せた人が、『属性』の使用者として怪しいわ」

皆勤賞候補が学校を休むとか、登校していた時間を遅らせるとか、小さくても『綻び』を見せること。

つまりは変化。

「つてことは、昨日のサバタージュとか、夜の徘徊なんかも相当不味いんじゃないか？」

「その通りよ。でもあれは緊急事態だったから、例外として捉えることね」

佐久間の吸収能力、その犠牲者を増やさない為の例外、か。

「そして二つ目、これは一つ目とは真逆で、わざと目立つことよ」

「へ？ そんなことしたら余計にバレるんじゃないの？」

「はあー……西条くんは本当に説明しがいがあるわね」

「い、いいから教えるよ！」

「たとえば、今日の森林公園なんかが良い例よ。明らかに『属性』を発動させた形跡がある。だけど、ソレの正体が『属性』だと分かっているのは、同じ使用者だけなのよ。西条くんが『属性』の使用者で、何も知らずに今日のニュースを見たら、どう行動すると思う？」

「……とりあえず、森林公園には警戒する。あとは相手の能力を調

べる為に、直接見に行く……か？」

「その通り。下見と調査、その二つを誘発することが出来るのよ。あまり感心できるやり方じゃないけどね」

なるほどな。あとは森林公園に近づいた人を遠目からチェックするだけで、使用者を絞れるかもしれないってことか。

流石に志木城は頭がいいな。

改めて敵に回さなくて良かったと思う。

「じゃあ、俺達が森林公園に行く時は……」

「ええ、警戒しつつも日常を崩さない。尚且つ出会った人には要注意」

……何だか凄く難しい注文だな。

でもまあ、日常を崩さないってのは正直言って助かる。

始まって五日目だが、ビクついてコンビニに行けなかったんだよ。これで堂々とビニ弁が食べられるぞ。

それに……翼とも登校できる。

まあそれは一週間後の話だが。

「ところで、最後の相談なんだけど、『属性の使用者』って言いにくくないか？」

「……まあ、長ったらしいわね」

「だよなー！ 前々から考えてたんだけど、『属者』っていう風に省略しないか？」

「はあー……好きに呼べばいいでしょう。……時々、何で西条さんと共闘したのが分からなくなるわ」

こうして、長かったようで短い昼休みは終わった。

五時間目の授業中。

俺はついに肋骨の痛みを上げ、クラスの保険委員と保健室へ向かっていた。

昼休みまでは結構我慢できていたんだが、次第に痛みは増していき、今では呼吸するたびにズキズキとする。

「悪いな、吉田。保健室まで付き添ってもらって」

「あつ、い、いいよ、き、気にしないで」

うーん、俺的にはこの微妙すぎる距離が気になるんだが。

この奥手そうな子は吉田久留巳よしたくるみといって、クラスメイトの保険委員だ。

あんまり話したことは無いけれど、男女問わずの人気者らしい。こうやって改めて容姿を見ると、清楚な感じが滲み出ている様なセミロングの黒髪で、スタイルもいいから人気があるのも頷ける、かな。……顔も結構可愛いし。

俺が教室で手を上げた際にも、男子諸君の突き刺さる様な視線が肋骨よりも痛かった。

まあ、そんな訳で保健室に向かっているんだが……

「あの……な、何かな」

「いや、別に」

「……」

「……」

何だろつ、必要以上に警戒されている気がする。

教室を出てからというもの、吉田が先行して歩いているが、俺が距離を詰めようとする途端に早歩きになる。

この一定間隔の距離、実に10mはあった。

ははは……あれだ、これって、いわゆる嫌われ者ってヤツじゃない？

俺ってそんなに嫌なヤツだったかな。

せめて、志木城よりは人間的に出来てと思うんだけど。

今日はトコトン凹む日みたいだ。

「し、失礼します」

吉田が保健室のドアを開けると、俺もそれに続いた。

真っ白い空間で独特の薬の匂いがして、どこか落ち着く。

「あれ……先生は居ないのか？」

「みたい、だね」

保健室は無用心にも抜け殻状態で、俺達以外は誰も居なかった。

「まいったな。痛み止めの薬が欲しかったんだけど……」

「あ、ち、ちよつと待ってて。あたし、場所とかなら分かるから。

えつと、どこが痛いのか？」

「肋骨。多分ヒビが入ってるか、折れてると思う」

「わ、わっ！ な、なんで学校に来てるの！？ す、すぐに用意するから、待ってて！」

そう言つと、吉田は慌てながらもテキパキとした動作で、棚の薬箱を開けている。

うーむ、さすがは保険委員だ。見事な手際で、痛み止めの薬と湿布を取り出した。

「あ、あの、これが痛み止めの薬で、湿布」

「サンキュー」

俺は手渡された薬を保健室に備え付けてある蛇口の水で飲むと、上着をはだけて肋骨に湿布を貼ろうとした。

「う、うわー！ い、いきなり脱ぐなんてっ！」

あつ……しまった。女子の前だった。

吉田は手で顔を隠しながら、足をバタバタとさせていた。

「あー、すまん。もう湿布は貼ったから、こっちを見ても大丈夫だ」

そう言つと、吉田はゆっくりと手を外して、赤い顔をしながらモジモジとしていた。

「……と、取り乱しちゃって、ご、ごめんなさい」

「いや、俺の方こそ気が回らなかった」

「……」

「……」

互いに沈黙が流れて、空気が重い。

なんか、志木城とは違った意味で話し難いな。

微妙に避けられてるっぽいし。



「あ、あの」

静寂を破って話し掛けたのは、意外なことに吉田の方だった。

「い、痛み止めが効くまで、保健室のベッドで休んだ方がいいよ。あ、あたしは、もう教室に帰るから」

「うん。色々と有難うな」

吉田は心配そうにこちらをチラチラ見て、保健室を後退りながら、きちんとドアを閉めた。

ふうー、まともに話したのは初めてだったけど、優しいし中々良い性格をしてるみたいだったな。

俺は吉田に言われた通り、保健室のベッドに横になった。

あー、気持ちいい。

何で保健室のベットって、家よりも寝やすいんだろ。

学校っていう環境が、さらに睡眠欲を倍増させているんじゃないだろうか。

特に最近は『真理の道』を考えていて、まともに寝れていなかったし、すぐに意識がウトウトとしてくる。

こーやって眠くなると、時間の感覚って分かんなくなるよな……目を閉じて、完全に意識が落ちる寸前に、俺は僅かだが小さい眩きを聞いた気がした。

「……………」『治癒』「」

## 第九話 治癒されてデートの予定（前書き）

九話の登場人物

さいじょうつかさ

西条司：主人公、属性は『炎』

しきじょうれいみ

志木城怜実：属性は『氷』

## 第九話 治癒されてデートの予定

「西条くん、ちょっといいかしら」

放課後。掃除当番で最後まで教室に残っていた俺は、唐突に志木城から声を掛けられた。

「ん？ ちょっ！ おおっ」

まともな返答をする間もなく、強引に手を引っ張られる。

「お願い……ついてきて」

何だろう……今日の志木城は心なし口調も柔らかくて、穏やかな表情をしている。

いつもとは正反対の態度。

疑り深い俺は、何かのトラップだと思ってしまう。

「……なあ、どこに連れて行くんだ？」

「ふふふっ、人の居ない所よ」

となると、『属者』に関する相談か？ それにしたって、手まで繋ぐことはないんじゃないか？

……何を考えているのか分からない。

フワフワとした足取りで歩く俺は、例のごとく立ち入り禁止の屋上に着いた。

屋上から展望できる景色は、夕焼けに照らされていて凄く綺麗だ。立ち入り禁止の校則が無ければ、生徒の人気スポットになっていたかもある。

……うん。だから、放課後なんて時間帯に、見晴らしの良い屋上に居るのは俺達だけだった。

吹き抜ける様な心地よい風が、志木城の艶美な長い髪をなびかせる。

俺は強引に繋がれた手を解き、改めて志木城に聞いた。

「で？ こんな所に呼び出して、何の用だよ」

「……………西条くんと初めてまともに会話したのは、ココだったわ

ね」

志木城は質問に答えず、思い出話の様に語りだした。  
俺の目を覗き込むように見て、真摯な顔をしている。

……まあいい。ここは黙って聞いてやろう。

「私はね。あなたの事をずっと見下していたのかもしれない。……  
謝らせてほしい。本当に、本当にごめんなさい」

……は？

いやいやいや、ちょっと待て待て！

おかしいだろ志木城！？ 普段なら口が裂けても言わないことを、  
スラスラと話して！

ど、動揺するっていうか、た、対処に困るだろーが！

目を見開いて驚いてる俺をよそに、志木城は話し続ける。

「私だけで佐久間と戦った時、正直言っただけで心細かったわ。孤立して  
いる自分の存在が矮小に見えて、でもプライドが邪魔して誰の助け  
も求められなかった。……分かってる、私の性格が悪いってことは  
承知しているの」

俺の目の前に居たのは、高慢ちきなお嬢様ではなく、しおらしい  
美少女だった。

あまりのギャップに当惑する。

「そんな時、あなた……西条くんが助けくれたわ。一緒に佐久間  
と戦って、私を守ってくれた。……本当に、嬉しかった」

な、何だ！？ 何だこの状況！

一体全体どうしたんだ志木城！？

っていうか、どうしたんだ俺っ！ メチャクチャ心臓が高鳴って  
るんだけど！

先程とは違い、優しくそつと手を握ってくる。

志木城の顔は、夕焼けに照らされているのか、少し赤い気がした。

「……だから、改めて御礼をしたいの」

完全なる上目遣いで覗き込んでくる志木城。

俺の心臓が、バクバクと音を鳴らしているのが分かった。

女子に対する抵抗値がゼロの俺は……もう、されるがまだ。

「……目を……閉じて」

うつ！ マジか！？ 本気と書いてマジと読むのか！？

今更ながら考えると、ここは誰も居ない屋上な訳で、このシチュエーション的に、ここに、これってキス？

いやいや、いくらなんでもマズイだろ！

「あの、志木城！」

「黙って……最後まで、言わせないでよ」

囁く様にピシヤリと問答を拒否してしまった。

ああ……駄目だコレ。

もう無理限界耐えられない。俺の理性は天に昇った。こーなったら流されるままだ。

目を閉じて、興奮している鼻息を抑える。

「……いくわよ」

宣戦布告の様に告白されて、破裂しそうな心臓が止まる。

あわ、あわわわ、お、落ち着け！ 俺はもう高校生だ、高校生なんだっ！

無限とも思える沈黙が流れる。

……………く~~~~っ、駄目だ！ 緊張しすぎて狂いそうだ！ ち

よっぴり目を開けよう。

俺は薄っすらと目を開けると、そこに見えたのは恥ずかしそうに唇を突き出している志木城の姿ではなく。

恐ろしく冷たい瞳をして、氷の剣を上段に構えている志木城だった。

「死になさい」

「うわああああアアアッ!!」

ガバツ! と飛び起きて、勢いよくベットの上に立った。

依然として心臓はバクバクと音を鳴らしており、冷や汗を大量に出している。

「はあ! はあ、はあ……」

ちよつ! え、え? 待て、いや、落ち着け。

さっきのつて………夢?

つていうか、ココはどこ、俺は誰?

「起き上がりから随分と騒がしいわね。不愉快だわ」

「ヒイツ!」

突然声を掛けられて、条件反射的に仰け反ってしまった。

「………私と会って早々に悲鳴を上げるとは、自分の立場を分かってるじゃない」

「し、志木城?」

俺は声がした方を見ると、壁にもたれかかって両腕を組んでいる志木城を見つけた。

えらく機嫌が悪そうに、仏頂面でこちらを睨んでいる。

「な、何でお前がココに居るんだ? つていうか、ココは何処?」  
駄目だ、夢に引きずられて完全に混乱している。

「はあー……西条くん。あなたは一度、死になさい」

うおっ! 軽いデジャヴを感じる。

志木城は両手を解いて、額を手で押さえて嘆息していた。

「ボケるには若すぎるんじゃないの? あなた、五時間目の授業中に保健室へ行ったんでしょ?」

「……へ?」

あつ、そう言えばそうだ。

高い視線から周りを見渡すと、ココは正に保健室以外の何物でもなかった。

つていうか、ベットから下りなきゃ。

ストンと着地して、上履きを履く。

あゝ、徐々に思い出してきたぞ。たしか、吉田に保健室まで付き添ってもらって、痛み止めの薬が効くまでベットで休んでたんだ。それで、それから……

「……今、何時？」

「……六時半よ」

ヤッベー……授業どころか、放課後の下校時間じゃん！  
いくら寝不足だったからって、これは寝すぎだわ。

いやゝ、でも良く寝たなー。痛み止めも効いてるみたいで、肋骨も全然痛くないし。

「ふぁーあ。で？ 何で志木城が保健室に居るんだ？」

「っ！ 『氷雨』！」

「うおわ！ い、イテエ！ ガツ！ いきなり、霰を、飛ばすんじゃない、ねえ！」

ガンガンツと小さい氷の塊が体に当たる。

数は少なかったが、見事に全弾命中していた。痣にはならない程度だが、寝起きにはキツイ攻撃だ。

にもかかわらず、志木城の怒りは収まる気配を見せないで、顔を真っ赤にしている。

「あ、あなたねえ！ 私との約束を忘れたの！？」

「はあ！？ 約束？」

ちよ、ちよつと待て、約束、約束……放課後の約束……あつ……  
森林公園……

「ごご、ごめんっ！ 忘れてた！」

素で忘れた！ これは完全に俺が悪い。

俺は志木城に向かって、深々と頭を下げた。  
だが、志木城のゴミを見るような目と、冷淡な声は変わらない。

「……そんな事で、この私が許すと思ってるの？ 大体、謝罪のポーズが違うわ」

「うつ……どうすれば宜しいでしょうか？」

「日本人の誠意、それは即ち土下座よ」

ぐっ……コイツ……調子に乗りやがって。

だけど、俺が忘れてたのが悪いんだし……

俺は情けなくも保健室の床で土下座をした。

「こ、これで宜しいでしょうか？」

「……ふっ、悪くないわね」

ドカッと平らになっっている俺の背中に座られた。

ごっ、これ、かなりキツイんだけど、り、両足から血液が無くなっ  
ていく。

背中から軟らかい感触がしたが、固い床に押し付けられてる足が  
強烈に痛いっ！

「あ、あの……いつまで続けるんでしょうか？」

「黙りなさい。許可無く喋ることを禁じるわ。私が納得するまで、  
誠意を見せなさい」

怖い、怖いよ志木城サン！

ってか重いよ！ は、早く退いてくれ。

お前……お嬢様じゃなくて女王様なんじゃね？

くっ、喋ることも禁じられたし、本当に納得するまで続けるつも  
りなのか！？

「西条くん……約束は本当に忘れてたの？」

「本当だつて！ 他意は無いんだボフッ！」

俺が弁解しているところに、突然ゲンコツが振ってきた！

「許可無く喋るな、と言ったのよ」

いやいやいや、お前が話かけてたじゃん！？

今のは誰だつて答えるって！

っと、ツツコミを入れると殴られそうだから言わないけど。

「今日の放課後に行こうとしたのが、全部台無しになったわ。ホン  
ト、西条くんは低俗低学歴の役立たずね」

ぐぐぐ……こ、こいつ、言いたい放題だ。

ん？ っていうか、まだ六時半なら行けないことも無いんじゃない  
ん？



「私はね、今日は早く帰らなくちゃいけないのよ」

俺の気持ちを读んでいる様に、志木城が話し続ける。

「昨日……両親に散々心配されたから、今日は七時までに帰宅しろって言われているの」

「……………」

それは……良いことで、今の俺には羨ましいことだった。

スツと背中から重みが消える。

「だから、今日は中止。西条くんも大人しく病院へ行きなさい。肋骨……折れてるんでしょ？」

多分な。今は痛み止めで大丈夫だが、呼吸するたびに響くようじや、この先が思いやられる。

この先の、戦いに。

志木城はコツコツと上履きを鳴らしながら、ドアへ向かっていった。

「私も今日は帰るわ。誠意として後三分は土下座してなさい。あと……今日の罰として、夜に電話を掛けるから、ちゃんと出るのよ」

そう言って、スタスタと保健室を去っていった。

一転して保健室は静寂に包まれ、チリチリと先程の霰が溶ける音だけが聞こえる。

俺は言われた通りに、土下座のままで考え事をしていた。

……馬鹿だな俺は。俺から一緒に行こうとしたのにすっぱかして、拳句の果てに約束を忘れていたなんて。

低俗低学歴とか言われても反論できねえよ。

しかも、アイツは俺が寝ているところを起こさないで、保健室でずっと待っていてくれたし、最終的には許してくれたんだと思う。

はあ……迷惑かけっぱなしじゃん。情けねー。

その時、フウーンフウーンとか愉快的なメロディーを鼻歌で出しながら、保健室の先生が帰ってきた。

気分良さにガラガラとドアが開く。

まあ……先生の正面には土下座している俺が居る訳で……

「……ちよつと！ 何してんの？ 何で土下座？」

「……誠意です」

俺は土下座を解かないで、キツチリ三分間床に伏し続けた。

うん。これは言い訳だ。

俺一人が悪かったし、志木城には何の責任も無い。

夜八時、俺は荒々しく保全された家のリビングで、ビニ弁を食べながら一人反省会をしていた。

結論、俺は病院で診断を受けられなかった。

……いや、ちゃんと行こうとしたよ？ 道すがら迷子になっている子を助けたり、信号で詰まってるお婆ちゃんを助けてた訳じゃない。

普通に病院に行つたんだ。

うん。だけど、病院は大抵夕方の五時には閉まっている訳で、ボーズンとしていた俺は諦めて家に帰るしかなかったんだ。

ああ分かってるって、俺の考慮が足りなかったんだ。

ちゃんと保健室で悟っていれば、こんな事を考えないでよかったんだ。

テーブルの上には俺の携帯電話が置いてある。

志木城からの着信を今か今かと待ち侘びている様に、静かに沈黙していた。

いや、だから今日は完全に俺が悪かったし、言い訳なんて男らしくないのは分かってんだ。

肋骨はまだ痛くないし、戦闘が起きても大丈夫、とかそんな事じゃないのも分かってる。

だけど、あの時の志木城は最後の良心で言ってくれた気がするんだ。

それを裏切っていいものかどうか……

ピリリリッ！

ほらきた、きたぞほらっ！ 地獄の鐘の様に、携帯電話からけたましい音が鳴っている。

ゴクリと生唾を飲んで、俺は通話ボタンを押した。

「もしもし……西条です」

『もしもし、志木城よ』

うむ。声色から判断するに、保健室の時よりはクールダウンしているみたいだ。

「どどど、どうした？」

『……西条くんこそどうしたのよ。何を動揺しているの？』

「い、いや、何でもないんだ」

『……あらそう。そう言えば、診断結果はどうだったの？』

うう……痛いところをピンポイントで攻撃された。

どうしよう……誤魔化すか、正直に言うか。

ええい！ 決めたぞっ！

「すまん、志木城！ 病院が閉まってて治療出来なかったっ！」

『知ってるわよ。この辺の病院は五時に閉まるんでしょ？』

ガクツと一気に足から力が抜ける。

「おまつ、お前！ じゃあ何で診断結果とか聞くんだよ！？」

『言っただしょ、今日の罰として電話を掛けるって。ふふふっ、ど

う？ 罪悪感で一杯になった？』

は、嵌められた！ 俺の自己憐憫とか反省会とか言い訳とか、全部計算通りってことかよ！ タチ悪いなオイッ！

……まあでも、機嫌が直ってそうでなによりだ。

「あー、はいはい。後悔したし反省したよ。ゼーんぶ俺が悪かったで？ 用件はそれだけなのか？」

もう疲れた。一刻も早く眠りにつきたい。

明日から休日だし、久しぶりにゆっくり休みたい。

だけど、志木城はそんな心情を無視して冷淡な声で言った。

『そんな訳無いでしょう。森林公園の件が残ってるじゃない。明日

の朝九時に学校に集合しなさい。一分でも遅れたら、土下座一時間の刑よ』

ブチッと一方的に通話は切られて、俺は携帯電話を置いた。

……えーと、つまりは今日行けなかったから明日に変更すると、そういう訳か？

ん？ あれ？ ちょっと待てよ。明日って土曜日の休日だよな……休日ってことは私服な訳で……これって……つまりはデートじゃね？

「う、うおおおおおお！？」

マジか！？ いやー、待て待て、落ち着けて！ もう一度状況を整理してみよう。

登場人物、俺（男子）と志木城（女子）。

場所、森林公園。

状況、私服で二人つきり。

うおーーーーー！ どう考えてもデートじゃん！

ヤベ、ヤベエ！ な、何を着て行けばいいんだ？ あーくっそ、ファッションとか興味なかったから、服とか全然ねえよ！

こ、香水？ 香水とか必要なのか？ 鞆！ 鞆はどうしよう？

学校の鞆じゃあ駄目だよな！

だーっ！ それよりも、そんな事よりも、体を綿密に洗わなくちゃ駄目だ！

よく分からないテンションで、俺はお風呂場に直行した。

後々になって考えると、思春期真っ盛りの馬鹿がそこに居た。

上着を脱いで、鏡の前で己の肉体をさらけ出す。

貼ってあった湿布をペリペリと剥がして、軽くポージングを取ってみた。

うん。普通過ぎるくらいに普通だ。

細くも無く、太くも無く、実に平均的な高校生の姿だった。

「……あれ？」

鏡に写っている自分に、一種の違和感を覚えた。

右肩の傷痕……わき腹の腫れが……無い？

ズボンを脱いで、左の足を見てるが、右肩と同様に血の力サブリタが剥がれていて、痕すら残っていなかった。

……何これ？ ということ？ 『属者』の特性？ いや、だとしたら佐久間の火傷も治っていたはずだ。

だとすると……志木城が怖すぎて、恐怖の力で回復した？ いや、それは馬鹿だ。

……分かん。謎すぎる。

こうして数分間考えていたが、俺はどうやっても結論に辿り着けず、頭の隅の方に追いやってしまった。

ああ……そうだ。まさかこの回復が『癒』によるものだったなんて、この時は考えもなかった。

## 第十話 失敗は成功のもと（前書き）

十話の登場人物

さいじょうつかさ

西条司：主人公、属性は『炎』

しきじょうれいみ

志木城怜実：属性は『氷』

とりやまひろし

烏山博：新聞記者

## 第十話 失敗は成功のもと

今日は土曜日で、時刻は朝の八時半。

俺は学校の正門前で、ぼんやりと空を見上げていた。

雲一つない空に、自然と晴れやかな気分になる。

九月上旬の為か、穏やかな涼しい風が若干肌寒く感じたが、体温は燃えるように高かった。

ああ、緊張している……もうガツチガチだ。

小中学校と男だらけのムサイ輪に入っていた俺は、女子と二人つきりでデートなんてしたことも無く、今日という偉大なる一步に対して期待に胸を膨らませていた。

服装は、散々悩んだ挙句に灰色のジーンズと、黒のミリタリージヤケットというありきたりな選択をした。

ちなみに、鞆や香水は無し。森林公園ということで手ぶらにしたかったし、香水はそもそも持っていなかった。

うーん……至って平凡だとは思うが、ファッションに詳しくない俺にはコレが限界だ。

そもそも『現実主義』とか自称しておきながら、メディアに対する関心が薄すぎる。

テレビとかもニュースしか見てないし……これは反省だな。

そうして、ドギマギと過ごすこと二十五分。

約束の時間に近づいてきて、ようやく志木城の姿が見えてきた。

「う、わ……ヤバ」

思わず感嘆の声をあげてしまう。

志木城の長い髪はそのままだったが、白と青のワンピース、それと同色のストライプニーソという驚異的な組み合わせで現れたのだ。

……絶対領域が熱いっ！

志木城はスタスタといつも通りのペースで近寄ってくる。

「時間前に着てるなんて感心ね。そんなに土下座の刑が怖かったのかしら？」

「……ああ、怖いとも」

お前の絶対領域がなっ！

もっ心臓がバクバクですよ。なんともまあ……目のやり場に困る。

「ところで、肋骨の具合は大丈夫なの？」

「え？ ああ大丈夫、っーか大丈夫になった。何だか知らないが、治ったみたいなんだよ」

コンコンと自分の肋骨を叩いてアピールをしたが、逆に志木城は気持ち悪そうに俺を見てきた。

「う……西条くん……ついに痛覚まで馬鹿になったの？」

「『まで』って何だよっ！ 頭だつて馬鹿じゃない！」  
言っちゃ悪いが平均より上だぞ！？

……あくまで学力じゃなくて成績の話だが。

「これ、これ見るよ」

俺は右肩だけはだけで、今は無き『樹枝』による傷痕を見せた。

「……どういうこと？ 男のくせに肌が綺麗だわ」

「そっちじゃねえよ！ 傷！ 傷痕のことだ！」

志木城はようやく悟ったらしく、俺をジロジロと観察する。

うう……は、恥ずかしい。

「……たしかに、私のカサブタが消えているわね。それどころか……傷痕すら残って無いじゃない」

「な？ たぶん、肋骨も同じ感じで治っていると思う」

観察し終わった志木城が、俺だけに聞こえる様に小さく呟いた。

「どう考えても『属者』の仕業ね。おそらく『水』の『癒』だわ」  
「っ……！」

俺が驚愕していると、唐突にボカンと頭を殴られる。

「なに驚いた顔してるのよ。当たり前でしょ？ そんなに人間は便利に出来てないわよ」



タンコブが出来そうな頭を擦りながら答える。

「いや、だって！　つーか、何で『癒』って分かるんだよ！？」

憤然として質問すると、またしても頭を殴られた。

……これで累計三発目だ。全て全力のグーパンで殴られているので、かなり痛い。

「声が大きいわ。場所を弁えなさい」

「……ヤバッ！」

俺は自分の失態を把握して慌てて辺りを窺うと、幸いなことにまだ人通りが少なく、間一髪誰もこちらを気にしていなかった。

「ふうー……なんとか助かったみたいだな。すまん志木城」

「……はあー……もういいわよ。折角だから、話ながら行きましよう。……叩きすぎて脳細胞が死滅したのかしら？」

最後の一言は小さすぎて聴き取れなかったが、俺は気にせずに森林公園に向けて歩き始めた。

「……聞いてる？　西条くん」

「う……ぬう」

近い、近いよ志木城サン！

俺達は『属者』関連の話をしながら、森林公園へ向かっていた。

そう……だから、必然的に隣り合わせの至近距離で話している訳で……

緊張してロボットの如くぎこちなく歩いていると、手や肩が触れそうになる。

……ぐっ、我ながらとんだチキンハートだった。

志木城は俺とは違い、何食わぬ顔で説明を続けている。

「だから、元素にはそれぞれ性質があって、『人体を治す』なんて事が出来るのは『木』か『水』ぐらいなの」

凄く大事なことを言っている気がするが、なかなか頭に入ってこ

ない。

「『木』の性質は成長と発育。つまり佐久間の『若返り』なんかが該当するんだけど、彼の特殊能力に不死の効果は無かった……そうになると、残りの『属性』が怪しいんだけど、『空』や『風』に治す能力があるとは思えないし……やっぱり『水』しかないわ」

うーん、そもそも俺には性質が何なのかが分からないんだが……話の腰を折っても進まないし、ここは最後まで聞いておこう。

「『水』の性質は命の泉。これはそのままの意味ね。私が『氷』で、残りが『流』と『癒』だから、西条くんの傷が治っているのは『癒』の『属者』でしょうね」

癒し、治癒……だから『人体を治す』、か。

「ちよつと待て、じゃあ何か？　俺が『癒』と接触したつてのかよ。悪いがそんな覚えはないぞ？」

「……そんな覚えはないつて、ただ単に寝てただけでしょーが。偉そうに言わないで欲しいわ」

ぐつ、一番偉そうなヤツが言うなっ！

志木城は数秒間思考して、手で口元を隠した。

「……まあ、『属者』はある程度予想できるけどね」

マジかつ！　お前、実はエスパーなんじゃないか！？

つと、咄嗟に興奮しそうになった感情を抑えて質問した。

「……誰なんだ？」

「それは……今はまだ内緒よ。色々……事情がありそうだしね」

……頭の良い志木城がそう言うなら、その通りなんだろう。含みを持たせて気になるけど、この件は志木城に委任しておこう。

俺は仕切りなおす様に話題を変えた。

「ところで、さっき話してた性質って言うのは何なんだ？」

「性質とは元素の象徴。根幹、現象と言い換えても良いわね。たとえば……西条くんの『火』は灼熱の性質を表しているのよ」

「……要するにそのまんまってことか」

「その認識でいいわ。『金』なら金属、『土』なら大地、といった

所ね」

ふーん……元素の象徴、ね。

「なあ……前から思ってたんだが、志木城は何でそんなに詳しいんだ？」

これは出会った頃からずっと思っていたことだ。五行思想？ 性質？ 普通の高校生なら中二病のヤツくらいしか知らないだろ。

「そんなの常識の範疇でしょ。というか、あの夢を見た時点で、信じた時点で勉強ぐらいするんじゃない？」

……そーですか、流石は才色兼備な優等生。無知蒙昧な俺とは根本的に頭の出来が違うみたいだな。

「西条くん……前」

「ん？ おわっ！」

考え事をしていた俺は、ドンツと丁字路のところでぶつかってしまった。

勢い余って、コンクリートの地面に尻餅をついてしまう。

「おっと、すまねえな。よそ見してたみたいだ。オマエ、大丈夫か？」

声がした方に視線を移すと、上下ジャージ姿の坊主頭が俺に手を差し伸べていた。

いかにも野球が得意そうな、ガッチリとした体格をしている。俺は差し出された手を取って立ち上がった。

見た感じ同年代っぽいので、軽く謝罪する。

「こっちこそごめん。考え事してたから前を見てなかったんだ」

「そっかそっか。おーし、じゃあお互い様ってことで。オマエ、高校生か？」

「え？ ああ、高校二年だけど」

「おっ！ タメじゃん、良かったー、年上だったら敬語使わなきゃと思ってたんだよなー」

……初対面にしては、随分と馴れ馴れしいヤツだな。先輩に対す

る敬意は払っているようだが……

と、坊主頭は志木城に気が付いたようで、ボカンツと効果音が聞こえそうなほど顔を真っ赤にした。

「な、何だあ？ このベッピンさん、オマエの彼女か？ かー羨ましいっ！ デート中かよ！」

「あ、い、いや、あの、その……」

「全然違います。私とこの人はただのクラスメイトで、そういう関係じゃありません」

「……………」

「はははっ！ そんなハツキリと否定しなくても……………あれ？ 目に涙が。」

「貴方も怪我をされていないようですね。大事が無くてなによりです。……………それでは、私達は用事がありますので、これで失礼します」

志木城はお嬢様の様に華麗に踵を返して、一人で歩き出した。

俺と坊主頭は凍りついた様にその場でポカーンとしている。

「ってちよつと待て、俺は行かなきゃ駄目だろ！」

「ちよつ！ 待てよ志木城！」

俺は志木城の後を追って走った。

その時、遠ざかる後方から『志木城さん……………可憐だ……………』と聞こえたのは、果たして気のせいだったのだろうか？

「……………うわ〜」

森林公園の北門に着いた俺達は、富士でもないのに『樹海』を目にしていた。

「一昨日は夜だったので意識してなかったが、こうして明るいうちにまじまじと見ると、その異常性が分かる。」

「ほぼ隙間無く地面を埋め尽くしている樹木。ある木は枝分かかれの様に生え、ある木はコンクリートの下から逞しく生えている。」

そこに散歩コースという概念は無く、すでに一種の獣道と化していた。もちろん門は封鎖されており、黄色いテープや注意書きの看板などが立っている。

休日になり、ニュースにも報道されたとあって、パラパラと野次馬が居た。……これでは中に入ろうとすると目立つな。中央公園まで行けないかもしれない。

「どうする志木城。これじゃあ中に入れないんじゃないか？」

「……そうね。少し誤算だったわ。やっぱり昨日の内に行っておくべきだった」

「悪かったつて。それとも、また土下座でもすれば良いのかよ」

「いえ、別に嫌味で言った訳じゃないわよ。それに、西条くんに土下座されても状況は改善されないし……そうね、夜まで待てば行けるかもしれないけど、さすがにリスクが高すぎるわ」

「まあ、それはそうだけど」

今はまだ野次馬として見る事が出来るが、夜になれば話は別だ。どう考えても『属者』として疑われてしまう。

そんな訳で、俺達は注意書きの看板通りに黙って立ち尽くすしかない訳で。

土曜日、クラスメイトの女子と二人きり、森林公園。言葉だけ並べれば高揚せずにはいられないシチュエーションなのに。

「……………はあ」と、隣の志木城から嘆息が吐かれる。なんか辛い。もうさ……………帰る？」

「そんな訳にはいかないでしょう。何かしらの収穫がなければ、それこそ本当に徒労だわ。西条くんと違って、私は暇じゃないの。いから足りない頭を働かせなさい。そうね……………妙案一つにつき、その寝癖頭を撫でてあげるから」

容赦のない辛辣な返し。凹んじやうぞコラ。

「う……………うつせ」

「まったく、『撫でてあげる』というキーワードに照れてしまう辺り、俺は永遠に志木城の毒舌から抗えない気がする。」

「あー、すいません。そこのお二人さん」

突如声が掛かって振り向くと、二十台後半ぐらいのオッサンが立っていた。

茶色いハンチング帽を被り、腕まくりされたヨレヨレの白いワイシャツに、スーツ用のズボンを着用している。優男っぽい体系。やたらと腰が低そうなのは、猫背の所為なんだろう。温和そうな人柄でニコニコと笑みを絶やしていない。

俺は志木城との会話でゲンナリした顔を向け、「はい、何ですか？」と返事をした。

「えーと、こういう者なんですが……」

手渡された名刺を見ると、『オカルト総合新聞 編集部 烏山博』とりやまひろしと書かれている。

はあ…… オカルト総合新聞ねえ、聞かない名前だ。

「あの、新聞の勧誘でしたらお断りなんですけど」

「ち、違います！ そうじゃないんです。少し、お話を聞きたいだけでした……その、宜しいですか？」

烏山と名乗る男は、神父の様な丁寧な口調と安心感を与える優しい笑顔で、手にメモとペンを持っていた。

……つまり、取材ってことか？

「い、いいですけど」

って痛っ！ 記者さんから見えない所で、志木城が俺の背中を抓っている。大丈夫、分かっているって、ボロは出さないよ。

「本当ですか！ それは良かった。いやー、有り難いです。先程から他の方に声を掛けているのですが、一向に答えてくれなくて困っていたんです」

まあ、所詮は有象無象の野次馬だからな。見物だけすんだら帰る人が多いんだろう。

記者さんは満面の笑みで、嬉々として質問してきた。

「じゃあ、知っていたらで良いので宜しくお願いします。……森林公園がこうなる前は、一体どういう施設だったんですか？」

「えっと、普通に森林浴が楽しめる散歩コースでしたよ。休日には結構人が来てましたね」

「そうですか。では貴方も来た事がありますか？」

「ええ……たまにですけど」

「ふむふむ」

サラサラと慣れた手つきでメモに書き込んでいく。

「……そのペン、カッコいいですね」

「ん？ ああこれですか、実はオーダーメイドで世界に一本しかないんですよ。私の自慢の品ですね」

「へえ」

ペンにはメタリックな銀色のライオンが装飾されており、凄くカッコいい。

「えーと、じゃあ次の質問です。こうなったのって、何時頃からなんでしょうかね？」

「……たぶん、一昨日じゃないですか？ 昨日の朝にはニュースで報道されていたので」

「あー、そうだったんですか。すみませんね、私ニュースとかあまり見てなくて」

オイオイ……それでも新聞作ってんのかよ。

「ところで君達は近くの高校生？」

「え？ はい、そうです」

ってイッテー！！ これ、この回答は志木城的にNG！？ っていうか抓らないで喋れよ！

……っうー、今度は気をつけないと。

「ほうほう、じゃあ今日は見物で？」

「あ、はい、そうです。結構お気に入りポイントだったので、気になって……」

「この惨状ですものね……心中お察しいたします。では最後の質問

なのですが、地割れのこと……何かご存知ですか？ 超常現象とか、怪奇現象とか」

　　と冷静に冷静に。動揺しちゃ駄目だ。

「いいえ、テレビで流れた以上のことは知りませんよ」

「ふうーむ、そうですね。いや、助かりました。本当に有難うございます。これ以上お時間を取らせる訳にも参りませんので、これにて失礼致します」

　　記者さんが深々とをお辞儀をして立ち去ろうとした時、突然今まで黙っていた志木城が話し出した。

「……待つて下さい。私からも質問して宜しいでしょうか？」

「え？ あ、はい。大丈夫ですよ」

　　記者さんも面食らったようだが、笑顔で了承した。

「そのペン……私も作ってみたいんですけど、一体何処のお店で作られたんですか？」

「あーこれですか、実は友達に工具を作っている人が居るんですよ。恥ずかしながら、デザインだけ渡してその人をお願いしたんです」

　　ふーん、じゃあお店で頼んで作ったんじゃないんだ。

「絵が……とてもお上手なんです」

「ハハハ、そう褒められると照れますね。ゴホン……それでは、今度こそさよならです」

　　そう言って記者さんは去っていった。なんだか優しそうな人だったな……

　　再び俺と志木城の二人だけになり、途端に志木城は仏頂面の顔になつてこちらを見てきた。

「……………何よ？」

「いや、なんつーか、さっきといい今といい、学校の外では喋り方を変えてるんだなーって思った」

「これでも世間体は気にしているのよ。西条くんとは違ってね」

「……その割には学校で孤立してるじゃねえか」

「学校の世間体は成績よ？ 教師や保護者は成績しか見てないんだ



から」

「……身も蓋も無いな」

お嬢様の処世術ってか？ 色々と大変そうだな。

「そんなことより、これからどうするのよ。森林公園には入れないし、情報も得られなかったわ」

「うーん、そうだな……」

当面はやることも無くなったし、時間もまだある。俺は精一杯の勇気を振り絞って言った。

「……デートでもするか？」

すると志木城は間を空けず、空気を吐く様に自然と答えた。

「却下よ」

## 第十話 失敗は成功のもと（後書き）

ゆっくり書いていたら、随分と日常パートが長くなりましたね。  
次回からは、もう少しアクション要素を入れていこうと思います。

## 第十一話 熱烈に告白（前書き）

十一話の登場人物

さいじょうつかさ

西条司：主人公、属性は『炎』

しきじょうれいみ

志木城怜実：属性は『氷』

なじまつばさ

名島翼：友達

よしだくるみ

吉田久留巳：クラスメイト

どうじまもとちか

堂島元近：野球部のエースピッチャー

## 第十一話 熱烈に告白

休日を泥の様に眠って、今日は月曜日。

様子見を兼ねて散歩や買い物で外をブラブラと歩いていたが、結局のところ『熱』の『属者』が襲撃してくることは無く、つかの間の平和を過ごした。

「ふあ~~~~あ」

少し遅めに登校しながら、思わず長いあくびが出てしまう。

それもそのはず、俺の家は現在図らずも一人暮らしになっていた。つまり、家事を一人でやらなければいけないのだ。

勿論ある程度は出来るんだけど、洗濯物が意外と大変だった。見よう見まねで白い服と色つきの服を分け、よく分からない分量で洗剤を放り込んで、洗濯機をぐるぐると回す。外に干して、夕方に取り込んで、しわを伸ばして綺麗に畳む。

言うは易く行なうは難し、だ。これを毎日やっていたかと思うと、改めて母さんを尊敬してしまう。

俺自身、食事は全く作れないので、近所のビニ弁で過ごした……今の時代に感謝だ。

まあ、そんな生活は大変なんだけど、新しい発見も沢山あって凄く勉強になった。

……そういう訳で、俺は高校生にして良くも悪くも一人暮らしを堪能していた。

場所は変わって学校の正門。

生徒達が正門から靴箱に向かっている中、一人だけ正門で立ち止まっている野球部員がいた。

「ん？ アイツは……」

朝連終わりだろうか、白い野球部のユニフォームを着用していたが、その顔と坊主頭には見覚えがあった。

土曜日に丁字路でぶつかったヤツだ。タメだとは聞いていたけど、まさか同じ学校だったとは……

うーむ、自分のクラス以外の人って全然詳しくないんだよな。

俺が訝しく坊主頭を見ていると、向こうもこっちに気が付いたようで、例の如く馴れ馴れしく話しかけてきた。

「おーっ！ この前の！」

チッ、メンドクサイのに捕まっちゃったな。ここは適当に受け流して、さっさと教室に行こう。

「……何やってんだ？」

「へへっ、正門でやることは一つきりだぜ！ それは……待ち伏せだっ！」

「……………」

ああ、分かった。よく分かった。アレだ、お前……さては馬鹿だな？

なんつーか、常識的に考えて、学校の正門は他にもやることがあるだろうに……例えば待ち合わせとか……あれ？ 同じレベルじゃね？

「……で？ こんな朝っぱらから誰を待ち伏せてんだよ」

「あん？ 誰って……し、ししし、志木城さんに決まってるだろっ！」

「……………は？」

え？ 誰だつて？ 聞き間違いか？

「すまん。もう一度言ってくれないか」

「だ、だから！ 志木城さんだつーの！ ほら、オマエと一緒に居た子だよ。ったく、何回も言わせんな！」

何顔赤くしてんだよ。……オイ、まさか、そういうことなのか？ 「悪いことは言わん……志木城だけはやめておけ。アイツ、口悪い性格最悪なんだぞ？」

「ああ？ んな訳あるかよ！ 昨日、野球部のヤツから『才色兼備で深窓の令嬢』って聞いたぞ！」

おい、言つてて気付かないのか？ 性格について少しも触れてないことに……

「だから、普段は口悪いんだって」

「嘘つくんじゃないよ。この前だって、そんなこと無かったじゃねえか」

「いや、あの時は世間体を気にして……」

「だーもう！ うるせえ！ オマエは彼氏でも何でも無いんだろ？ なら、オレは恋に生きるって決めたんだ。この気持ちは誰にも止められねーぜ！」

恋は盲目というかなんというか、こりゃ俺が何言つても無駄だな。さて、どうする。このまま教室へ行つてもいいんだけど、事の顛末を見届けたい気もする。

よし、ここは……

俺は坊主頭から少し離れて、他人のフリをすることにした。

うん。志木城が殺しそうになったら、止める役が必要だしな。

おっと、噂をすれば志木城の姿が見えてきた。登校には早すぎもせず遅すぎもせずの丁度いい時間だ。

「うつ……よ、し……よおし！ オッシャア！！ オレは、やってやる。成し遂げてやるぜ！ おーし、やるぞっ！！」

坊主頭は自分の頬をパンパンと景気良く叩いて気合を入れている。うつ、なんか他人事なのに、凄くドキドキしてきたぞ。

「し、ししし、志木城さん！ 少しお時間を頂いてもよ、宜しいでしょうか！」

「……………」

うつゝ、疑われてる疑われてる。案の定、志木城の目は敵を見る様な鋭いものにならっていた。

しかし、坊主頭は気付かずに話し続ける。

「オレの名前は堂島元近<sup>どうじまもとぢか</sup>、二年D組で野球部のエースピッチャーやっています！ き、今日は！ し、志木城さんに、伝えたいことがあります！」

堂島はどもりながらも必死に言葉を紡いでいる。

しかし自己紹介から告白って、尋常じゃない速さだよな。これが本当の一目惚れってヤツなのかな……

少なくとも、俺にはマネできない。

「あなたが好きです！！ オレの彼女になって下さい！！」

「……………」

うおー！ ホントに言っただけ！

変化球無しのストレートと真ん中だ！ そのあまりにも真剣な眼差しは、普通の女子だったら心が揺らいでしまうかもしれない。

まあ……………うん。普通の女子だったらな。

「あなた……………堂島くん、って言っただけしら」

そこで、初めて志木城の口が開いた。少し警戒心は解いているみたいだが、相変わらず凍てつくような瞳をしている。

ゆっくりと、人差し指で堂島を指した。

「登校の邪魔よ。死になさい」

ガラガラガシャーン。

離れていても、堂島の心が壊れる音が聞こえた。

完全にフリーズ。堂島は何が起こったのか理解できずに凍っている。

赤から青、青から白。

堂島は、見るも無残に顔面蒼白で立ち尽くしていた。

もうそりゃ真っ白に、燃え尽きるように。

「西条くん。そんな所で見てないで、さっさと教室に行くわよ」

「は、はひい！」

容赦ねー！ 志木城サン容赦ねーです！

志木城は堂島を無視して、何食わぬ顔でスタスタと歩き始めた。

ああ……だから忠告したのに。これが志木城の本性なんだ。ギャップ萌えなんて次元を超越してんだよ。

俺は心の中で念仏を唱えて、志木城の後を追った。  
後ろから堂島の恨めしげな視線を感じたが、気にしない気にしない。

朝から一悶着があつて、ようやく教室に辿り着いた。

志木城は自分の席に座り、いつもの様に窓の外を眺め始めた。

……いや、別にいいんだけどね。今更俺がとやかく言つても、ハッキリ言つて大きなお世話だろう。友好關係つて自分で開拓するもんだしな。

俺も自分の席に座つて、鞆から教科書を出して机に入れた。

あつ……そうだ。改めて吉田にお礼しておこう。ほら、義理人情は大事つて言うし。

席を立ててドアの近くに居る吉田の席に行った。

「吉田ー」

「え？ わつわ！ 西条くん！？」

別に不意打ちのつもりは無かつたんだが、突然声を掛けられて吉田は下を向いてしまふ。むうー、顔が見えなくなつてしまった。……相変わらず嫌われてんなー。

「えーと、この前は有難うな。吉田の痛み止めが効いたみたいで、もう肋骨とか全然痛くないから」

男子からの視線は痛いが……

「あ、う、うん。良かった」

「ホントに助かった。……えつと、そんじゃあな」

俺は足早に自分の席へ戻つた。うん、これでオツケー。たぶん嫌われてるから、もう話す機会も無いだろう。ちよっぴり残念だけど、人の嫌がることはなるべくしたくないしな。



「お早う、司くん」

「……うーす」

翼も俺の前の席に座って、嬉々としてゲームの話題を振ってきた。  
「聞いてよ司くん！ パケモンホワイト全クリしたよー」

「はえー、まだ買って一週間ぐらいじゃねえか」

「これぐらい余裕だよ。プロは学校休んでプレイするんだから」

「……はあー……なんつーか、それって本末転倒じゃね？ せつかく金出して買ったんだから、もちつと長持ちさせろよ」

「違うんだなー。こーゆーのは勢いが大事なんだよ。長期間だとモチベーションが下がるんだよねー」

「ふーん。まあ、勢いで小説読むことはあるかな。そんなもんか」

「そんなもんだよ」

これだよ、俺の周りにはこんな話ばっか。恋愛話なんて滅多に無い、つーか相談されたことも無い。……普通の高校生はこんなモンだよな？

「じゃあ朝のホームルームをやるぞー」

チャイムが鳴り、担任の先生がやってきて定例行事を始める。

一人一人名前を読み上げられて、行儀良く返事をしていくクラスメイト達。

俺の学校は一クラス40人程度で、A組からF組までの計六クラスある。この辺では結構大規模な学校だ。単純計算で一学年240人も居るもんだから、部活でも入っていない限り、他のクラスの連中とは交流しないのだ。そんな訳で、部活にも入っていない俺は、正直言って自分のクラスメイトを覚えるだけで精一杯だった。

「よーし、全員出席してるな。そんじゃあ連絡事項を言うぞー。今週から文化祭の準備が始まるから、クラスの中から実行委員を決める。誰か立候補いるかー？」

もう文化祭の季節か。しっかし実行委員なんてメンドクサイこと、今の俺には出来ないよな。つーか誰一人として手を挙げてないんだ

けど。志木城なんて『私、関係ない』みたいなツラで外見てるし。

「誰も居ないのかー。じゃあ先生が勝手に決めるぞー」

「ええ~~~~~」

クラス全体から大ブーイング。そりゃそうだろう、誰だって放課後の遅い時間まで残りたくないよな。

と、そこに手を上げる生徒が一人。

「あのー、あたし、やります」

「おつ、吉田か。よーしよし、流石は学級委員だな」

……すげえ。文化祭の実行委員なんて、内申で評価されないことなのに。誰かが貧乏クジを引かないように率先して立候補するなんて、まるで生徒の鏡だな。……出来た娘だ。

「それじゃあ吉田。今日の六時間目は丸々ホームルームだから、適当に進行するように。先生はテストの採点してるから、まとまったら教えてくれ」

「あ、はい。分かりました」

オイ教師！ お前も少しは手伝えよ！ 生徒の自主性とか、ただの仕事放棄じゃねえか。

……あーもー、吉田の性格も相俟って、応援したくなってきた。

時は流れて昼休み。

早々と昼食の惣菜パンを平らげた俺は、午後のお昼ねタイムに突入しようとして机にうつ伏せていた。

「おーい、西条！ 人がきてんぞー」

唐突にクラスメイトから呼ばれて顔を上げる。

んあ？ 誰だよ俺の安眠を邪魔するヤツは。って、あれは……

俺がドアの方を見ると、制服姿に着替えた堂島が居た。……何の用だろ。ってかアレから回復したのか？ それはそれである意味凄いな。俺だったら学校早退して一週間引きこもるレベルだぞ。

ムクリと立ち上がって教室を出ると、堂島がいきなり俺の手首を掴んできた。

「……ちよつと、付き合ってくれるか？」

有無を言わさない短い台詞。威嚇する様な鍛えられた腕。獲物を逃がさない鋭い目つき。

……なんだこの剣呑というか、不気味な雰囲気は。俺はなんとなく予想してみる……あー……やっぱ今朝の件だよな。ヤな予感しかしないけど、ここは誤解を解く意味でも行っただほうがいいかも。

「分かったよ。行くから手を放せって」

……力が入ってて痛いんだよ。

校舎裏……なんて初めて来た。

割かし広くて雑草だらけな地面に、掃除されていない黒ずんだ校舎の壁。

昼休みのこんな所に人なんて居るはずも無く、俺と堂島は互いに様子を窺うように対峙していた。

「で？ 一体何の用だ」

大体予想できるけど。

俺は安眠を妨害されたので、微妙に気分が悪かった。早く済ませて眠りにつきたい。

堂島も今朝とは違い、目に見えてイラついている。

「とぼけやがって……オマエのクラスメイトから聞いたぞ。オマエ、西条って言うんだよな」

「へ？ ……まあそうだけど」

「テメエ……し、志木城さんのこと……す、好きなんだろう？」

「……ふうー」

やっぱそういう感じに勘違いしてきたか。

「誤解だよ、誤解。俺と志木城はそういう関係じゃない」

「っ！ 適当なこと言ってるじゃねえ！ 最近付き合いたしたって聞いたんだよ！ クッソが、おかしいと思ってたんだ。休日に二人

つきりでデートしてるし……あの志木城さんがあんな喋り方してるし……今日の朝だって……ぐっ！ 清楚な志木城さんを汚しやがって」

「だーから、違うつて言つてんだろ。全部お前の勘違いだつての！」

「ほーほーそうかいそうかい。じゃあ、これ以上志木城さんに近づくなよ。つーか、オレの邪魔すんな！」

堂島は次第に語気が強くなって、責め立てるように俺を非難してくる。

言い争うつもりなんて無かったけど、そんなに言われたら俺まで感化されてしまう。

「別に邪魔なんてしてねえだろーが！ 大体、俺が志木城と仲良くしたつてソレはソレ、コレはコレだろ」

個人の感情なんて制限できる訳が無い。誰が誰と付き合おうと、それはその人の自由だろ。……いや、俺にその気は無いけれど。

「ざっけんな！ 好きな女子が他の男子と居たら、気に掛けない方がおかしいじゃねーか」

「だから、俺はそんな関係じゃないつて言つてんだろーが！ 会話をループさせんなよ」

「……じゃあ何か？ 好きでもないのに休日にデートすんのかよ」それは……『属者』に関連することだから、言えない。俺と志木

城だつて、今は協力関係だ。そう簡単に疎遠には出来ない。

「友達だよ友達。友情、フレンド、友人関係。それでいいだろーが」

「納得できるか！ 男女間で友達とか嘘っぱちだ！」……もー疲れた。早く教室に帰りたい。

「はあ……何が目的なんだよ……堂島」

「オレはオマエだけには負けん！ つーかオマエが志木城さんと付き合うなんて、絶対に認めないっ！ 勝負しろ西条！」

何なんだよコイツ……夕日の中で殴り合うつもりか？

「そんな熱血展開に付き合ってもらえるか！ あー、もう午後の授業始まるから帰るぞ！」

「逃げんのか！？」

「勝手に言ってる。俺は帰る」

悪いことなんて一つもやってないのに、何でこんなに言われないといけないんだよ。不条理すぎんだろ。

俺は今度こそ堂島からの恨めしげな視線を無視して、駆け足で教室に戻った。

そして六時間目のホームルーム。

先生が居ない教室は混沌としていて、クラスメイト達は各々好き勝手なことをしている。

雑誌や漫画、ゲームにお喋り、真面目に勉強してるヤツ。

……仕事放棄した結果がコレである。全くもって自業自得だったけど、責任を取らされるのは教師ではなく、教壇に立っている生徒だった。

「み・ん・なー！ あたしの話を聞いてー！」

吉田は綺麗な声で、児童と化したクラスメイト達に呼びかけていた。

結果、人徳もあつて一部の生徒は沈静化するが、まだ言うことを聞かない奴等が居る。

残っているのはガラの悪い奴等で、必死に吉田が呼びかけても大声で遊ぶことを止めない。

うーむ、不憫だ。出来ることなら手伝ってやりたいけど、俺が出しゃばると嫌われるしな。ウズウズしながら静観するしかないのか

……

と、そこで志木城が静かに席を立った。ゆっくりとガラの悪い連中に近づいていく。

って、ちょっと待て待て！ お前、そんな怖い顔して何する気だ！  
俺が止める間も無く、振り下ろされる掌。

パシーン……

時が止まったように静まり返った教室に、乾いた音が響く。  
言わずもがな紅葉ビンタ、平手打ちである。

打たれたヤツは数秒間ポカーンと唖然とした表情をしていたが、  
次第に眉を顰めて怒りに変わっていく。

「……何すんだテメエ」

「この時間はホームルーム。あなた達が遊ぶ時間じゃないわ。五月  
蠅いから黙らせた、それだけよ」

うん、正論。正論なんだけど、そんな言い分が通じる訳が無く。

「だからって暴力ふっていいのかよ！ テメエだって……」

「成績表と内申」

「……ああ？」

「これ以上の騒ぎを起こすなら、私はこのことを先生に報告するわ。  
ふふっ、あなた達の成績で内申もズタボロ……将来はさぞ有望な職  
に就くんでしょうね」

「っ！ んだが、お前のこともチクルぞ」

「片や才色兼備な優等生、片や粗悪な不良達。……先生はどっちの  
意見を尊重するんでしょうね」

「……」

意気消沈して押し黙る不良達。

そして、クールビューティーは何事も無かったかのように、自分  
の席へ戻った。

学校の世間体は成績。それは志木城が言った台詞だ。まさかこん  
な所で実感するハメになるとは……

志木城……恐ろしい子っ！

「吉田さん、続けて」

「え、あ、うん。はい」

そんなこんなで、やっとまともなホームルームが始まった。

「えっと、じゃあ多数決の結果、二年A組の出し物は漫画喫茶に決定します」

準備に時間が掛かる文化祭。それを如何に簡略化させるか、で皆の方向性は固まった。

教室の外枠と看板を作り、家から漫画を持ち寄る。テーブルを集めてクロスを掛け、適当にジュースを買って終わり。これほど楽な出し物はそうそう無いだろう。

見張り兼ウエイトレスが二人、お会計係が一人。常駐させる人数も三人と、お手ごろになっている。

まあ、それでも下準備や書類整理で大変なことには変わらないんだけど。

「今日の放課後、出来れば誰か一人手伝ってくださいーい」

どうしよう。凄く手伝ってあげたいけど、教室に嫌いな男と二人つきりって拷問だよな。他の男子達も勇気が出ないのか渋っている。

「私……やるわ」

ぬぁ！ 志木城！？ 何故お前が手を挙げるんだよ。何の気まぐれだ？

「あつ、志木城さん……有難う。宜しくお願いね」

吉田も驚きながら感謝をしていた。

情けなくも、俺は口を出す機械が無くホームルームを終えた。

掃除当番を終えて放課後。

俺は志木城の忠告通り、日常の『綻び』を見せないように帰宅することにした。

上履きを脱いで靴箱に入れようとしたが、一枚の紙がそれを邪魔していた。

題『果たし状』。

「…………ふー、オーケーオーケー、大丈夫だって、俺は幻覚を見てるわけじゃない。」

努めて冷静に折りたたまれた紙を開く。

『西条司へ。今日の放課後、校舎裏に來い。正々堂々と決着をつけよう。もちろん、逃げても構わん。だが、それは男として最低の所業である。漢ならば戦え！ 意地と誇りを見せろ！ 堂島元近より』  
「…………何コレ？」

いや、内容は理解できるよ？ 果たし状でしょ、コレ。けどさ…………今の時代にやるヤツがいるかってーの！！ 古いんだよ全体的にー！！ 『漢』って何だよ！ 普通に男って書けよ！ つーかどこまで暴走してんだあの馬鹿はー！！

「…………くだらねえ」

俺は上履きを履きなおして教室へ向かった。

志木城を呼ぼう。もー俺だけじゃ駄目だ。当の本人に登場してもらって、メチャメチャに言われるといい。

階段を上がって廊下に出ると、タイミング良く志木城が歩いていた。

「おーい、志木城」

「…………何よ。手を振って近寄らないでくれない？ 汚らしい」  
ぐっ、攻撃する対象が違うぞ！ 俺じゃなくて堂島、堂島に言うてくれ。

俺は昼休みの出来事を言って、手に持っていた『果たし状』を見せた。

「…………で？ だから何なのよ」

「いや、だから、志木城にも来てもらってだな…………」

「嫌よ。冗談じゃないわ。そんな低俗低学歴単純馬鹿に付き合ってる時間は無いわ」

うおわー、単純馬鹿が追加されてるぞ堂島！

「んなこと言ったって、俺じゃあどうしようも…………」

「西条くん、あの夢…………まだ覚えてるかしら？」



遮るように志木城が質問してきた。

俺は周囲を確認して答えた。

「あの夢って……あれだよな。覚えてるけど……」

「つか忘れられない。一言一言全て記憶している。」

「『収束する様に運命が重なる』この意味、言われなくても分かるわよね」

「あん？ 偶然出会ってことだろ？ それが何……ってまさか」

「全てを疑いなさい。可能性を否定しないで。裏切られる覚悟を……持ちなさい」

「それって……堂島が『属者』だって言いたいのか？ あの単純なヤツが？」

「分からない。でも、推測して無駄になることは無いはずよ」

「だったら、尚更一緒に行った方がいいじゃねえかよ。一人よりも二人の方が……」

「私は私でやることがあるのよ。西条くん一人で対処なさい。それに……弱いパートナーは要らないわ」

やることって文化祭の準備だろ？ ったく、こうなった志木城はテコでも動かなそうだし……

「分かったよ。俺一人で行ってくる。それと……断る方針でいいんだな」

「……何がよ」

「告白だよ告白」

俺がそう言くと、志木城は不機嫌そうにそっぽを向いてしまった。

「……そのぐらい気付きなさいよ。……私の答えは、今朝に出したわ」

「そーかい。じゃ、ちよっくら行ってくるわ」

「ええ……倒れない程度に無理しなさい」

へいへい。精々こき使ってくれよ。

俺は駆け足で校舎裏に向かった。

心構えをして、覚悟を決めて。

## 第十一話 熱烈に告白（後書き）

登場人物が増えて、だいぶカオスになってきましたね。キャラが被らない様に頑張りたいと思います。

そろそろ長編になってきたので、誤字脱字やらが在りましたら、指摘して頂けると幸いです。

それでは、次回は決闘です。

## 第十二話 熱暴走で冷めた関係（前書き）

### 十二話の登場人物

さいじょうつかさ

西条司：主人公、属性は『炎』

しきじょうれいみ

志木城怜実：属性は『氷』

よしだくるみ

吉田久留巳：クラスメイト

どうじまもとちか

堂島元近：野球部のエースピッチャー

## 第十二話 熱暴走で冷めた関係

黄昏時の教室。

彼女は一人きりで、思考する様に目を閉じていた。教室の奥、窓側の席に座っている。

そこは私の席なんかじゃなくて、もっと後ろの方。

そう、彼の席。

「あつ……志木城さん」

彼女は私に気付いたみたいで、綺麗な笑顔を見せる。

それは作り笑いなんかじゃなくて、単純に私が来たことによる安堵と歓喜。

……羨ましい。私もあんな風に笑える日が来るのだろうか。少なくとも、今は出来そうにない。

「待たせちゃったかしら。吉田さん」

言いながら、私は一つ前の名島くんの席に移動した。

椅子だけを回転させて、吉田さんと向かい合うように座る。

「うつん。ちょうど今から始めようとしてたところ」

机の上に生徒会へ提出する書類が置かれる。出し物の内容、見取り図に予算見積書、外装や看板等の必要機材の手配書。どれもこれも記入自体は一人で出来そうだけれど、偏りが無いように客観的な意見が欲しいってことかしら。

「うつんと……じゃあ、あたしが見取り図と機材の手配書を書くから、志木城さんは出し物の内容と予算見積書をお願いできる？ お互いに書き終わったらチェックしよ」

「ええ……分かったわ」

さりげなく分量の少ない方を私に割り振る。……優しいのね。

「ねえ……折角だから、お喋りしながら作業しない？ 私、吉田さんと話したかったんだけど……」

「えっ、ホント？ 嬉しい！ あたしも志木城さんとはずっと話し

「たかったんだ！」

私の言葉に何の疑問も抱かない。本心を隠さないで、感情のままに微笑む。

「……………それで、今まで、どうやって。」

私は得体の知れない感情を押し殺して、紛らす様に力リ力リと書類に記入していく。

吉田さんも変わらないペースで記入しながら、切り出すように口を開いた。

「あたしね……………志木城さんって暗い人だと思ってたんだ」

ふーん、別に間違ってたないわ。閉鎖的に過ごしてたし。

「今まで同じクラスだったけど、誰かと楽しく話してないみたいだったから」

ああ、そう、それは事実。私は学校に行くことを義務だと認識している。だから、必要以上に干渉しないし、干渉されない。成績という世間体を守りながら生活していく。それが私の学校生活。

「でもね、最近……………違うなって感じたの」

「違うって？」

「うん。志木城さん、本当はもっと明るいい人なんだと思う。あたしの思い込みかもしれないけど、西条くんと話してる志木城さん……………すごく楽しそうだった」

「……………それは、吉田さんの思い込みよ。彼は頭が弱いから、丁寧に相手をしてるだけ」

「ホラ！ 前までだったら、相手にすらしてなかったんじゃない？」

「……………どうかしらね」

別に図星ではないけれど、適当にはぐらかす。話したい本題はそこじゃない。

「そういう吉田さんこそ、西条くんに対して随分と意識しているみたいじゃない」

「えっ！……………そ、そんなことないよ！」

その割りには動揺してるわね。……………本当に分かりやすい。彼と同

じぐらい、思っていることが顔に出るタイプ。

「……どうしたの？ 吉田さん。手が止まっているみたいだけど……」

「あつ、いや、その、ごめんなさい。ちょっと考えごととして」

「……そう。彼のことを嫌いなら、私が代わりに言っておげまじょうか？」

「そ、そんなんじゃないの！ あ、あたし、西条くんが嫌いってわけじゃなくて……」

「あらそう。ごめんなさいね。私の勘違いだったみたい」

「……うう……」

軽々しく言った私に、吉田さんは少しの嫌悪感を覚えたようだった。

「……………」

互いに沈黙して、再び書類に目を移す。

……一体、私は何をやっているんだろう。

こんな追い詰めるような言い回しをする気じゃなかった。私の中に渦巻く感情が、自然とこうさせてしまったんだ。

……くだらない、らしくない。これ以上の不毛な考えは、私自身に支障をきたす。

私は核心を話すべく、筆記用具を置いて、ゆっくりと口を開いた。

「単刀直入に……聞いてもいいかしら」

「……何かな？」

正面に真っ直ぐな瞳が見える。それは鏡を見ている様に澄んでいて、一切の濁りが無い。

私は心を覗かれている様な感覚に一瞬躊躇して、幻覚を振り払うが如く言葉を紡いだ。

「あなた……『属性』を使えるわね？」

「よう。逃げずに来たみたいだな」

夕焼けが学校全体を赤く染めているが、この校舎裏だけは例外だった。

校舎裏は昼間と違い、太陽が傾いて校舎の影で覆われている。

相変わらず人の姿が無く、俺の正面には一人の男しか居なかった。今朝と同じユニフォームに加え、野球帽を被って仁王立ちをしている。

堂島元近……野球部のエースピッチャー。

確かに、改めて見るとその貫禄は十分だった。

鍛えられた体に鋭い眼光、これでグローブでも装着していれば完璧だったろう。

投手にとって、その姿は決着をつけるための装備。モチベーションを上げる為の、決闘用の姿。

「……勘違いするな。俺はお前と話し合うために来たんだ。決闘なんぞをしにきた訳じゃない」

対して俺は、制服であるワイシャツにネクタイ着用と、どう見ても喧嘩をする格好じゃなかった。

「ああ？ オレには話すことなんて無いんだよ。つべこべ言わずにさっさと来いっ！」

準備万端、堂島はいつでも飛び出せる様に構えるが、俺にその気は一切無い。

「そっちに話が無くて、俺には有るんだ。……言いたい事は二つだけ」

興奮している堂島を無視して、俺は右手を前に出して、数を示すように指を立てた。

「一つ、お前の恋路を邪魔するつもりは無い。俺は志木城と付き合いってる訳じゃないし、志木城に悪影響なんて与えてない」

勘違いなんだ。ちゃんと話し合えば、分かり合えるはずなんだ。

だが、俺の話を理解した上で堂島は喋る。



「……そんな事は関係ない。オマエが志木城さんの傍に居続けるなら……それだけで、闘う理由になる！」

くそっ、どこまでも暑苦しいヤツだな。

仕方ない。出したくはなかったが、切り札を使わせてもらう。

「なら二つ目だ。本当は本人に言ってもらいたかったんだが、断られたんでな。……堂島、志木城はお前と付き合うつもりは無いそうだ。今朝の問答、それが全てなんだよ」

「……っ！」

堂島は、さすがに落ち込んだのか、手を強く握り締めて頂垂れている。

暫くして、呟くように小さな声が聞こえた。

「……だ、ら、ど……した！」

「………え？」

「だからどうしたってんだ！一回断られたから、『はいそうですか』っていくわけねーだろーが！！オレは恋に生きるって決めたんだ！この程度で納得できるか！」

「なっ」

「オレの悪い所は全部なおす！今は駄目でも、いつか……いつかは志木城さんに相応しい男になってみせる！たかが一回の失敗で……引いてられないんだよ！」

「ちよっ！待て……」

「オレの情熱は誰にも止められねーんだ！この熱い思いをぶつけて、全てを叶えてみせんだよ！だから……オマエは邪魔だあ！」

堂島は弾ける様に距離を詰め、大きく振りかぶって拳を叩き付けた。  
てきた。

「っ！うおおお！」

間一髪でガードが間に合った。

助走をつけた拳は、俺の顔面に届く前に掌で受け止められる。

「つつい！」

突如、受け止めた掌から違和感を感じ取って、俺は素早く後方に下がった。

痛い？ …… いや、そうじゃない…… これは……

俺は恐る恐る確認すると、受け止めた掌はジンジンと赤く腫れていた。まるで…… 火鉢を当てられた様に。

だが、堂島の手には何も持っていない。それは、尋常ならざる体温によるもの。

「西条…… 志木城さんから手を引く気が無いのなら…… 勝負しろ。手加減なしの真剣勝負だ。一応忠告してやるが……」

野球部のエースピッチャーは、決闘というマウンドに立った。

「オレに触ると…… 火傷するぜ？」

「ち、違うよっ！」

咄嗟に出た台詞は、肯定ではなく、不明でもなく、否定。それは…… 答えとしては十分すぎた。

「そう…… やっぱり、あなたが『癒』だったのね」  
途端に青ざめていく顔。

ああ…… 思い出しているのだろう、生殺与奪のルールを。可哀想に…… まだ、経験していないのね。

「ど、どうして……」

辛うじて絞り出されるか細い声。私が大声を出すだけで気絶しそうなほど、今の彼女は脆くて儚い。

威圧的にならないように、私は淡々と答えた。

「もう気付いてるでしょうけど、私も『属性』を使えるわ。あなたと同じ『水』で、『属性』は『氷』」

「う…… っう……」

吉田さんの体がカタカタと震えているのが分かる。

警戒する以上に、私のことを恐怖の対象としてるみたいね。

私は止めを刺すように言った。

「そして……西条くんは『炎』よ」

「ッ!？」

グラ……

椅子から倒れかけた吉田さんの体を、私の両手で支える。

「安心なさい。西条くんは、まだあなたが『癒』だとは知らないわ」

「う、うう、どう……して、西条くんまで……」

「彼と私は協力関係なのよ。だから、吉田さんが『癒』だと分かったの。……根拠は二つあるわ」

これ以上吉田さんを混乱させない為に、少しずつ紐を解くように喋る。

「一つ、西条くんと吉田さんが保健室へ行った時間。西条くんが保健室で応急処置を受けた後、あなたは五時間目に帰ってこなかったわよね？ 西条くんの話では、手当てだけしてあなたは教室に帰ったはず。……さて、真面目なあなたは一体何処に居たのかしら」  
「うう……」

答えは簡単。吉田さんは、ドアの外で西条くんが寝るのを待っていた。そして、眠りについてから『癒』を掛けた。

「二つ目。今朝、西条くんが言ってたわよね？ 『痛み止めが効いたみたいで、もう肋骨とか全然痛くない』とか何とか」

「そ、それが、どうしたの？」

「続けてあなたはこう言ったわ。『良かった』ってね。普通、肋骨が折れてる人間が、痛み止め程度の薬で『痛くない』とは言わないのよ」

「あつ……」

「あなたは事前に知っていたんでしょ？ 西条くんの怪我は、あなたの『癒』で治したってことを。……痛み止めの薬を出せる保険委

員さん」

「……………」

「沈黙を肯定と受け取るわ。……吉田さん。私達は、別にあなたを貶める為にこんな事をしたんじゃないの。一つだけ……一つだけ聞かせて頂戴」

それが重要になる。戦うか否かを分ける質問。

「あなたが叶えたい望みは何？」

「ちよつ！　ちよつと待て！」

俺は情けなくも火傷をしている右手を正面に突き出す。

突撃する勢いを殺されて、堂島は明らかに不機嫌そうになった。

よし、と俺はその隙に素早く喋る。

「おまつ、お前……『属性』なのか？」

「んだあ？　つーか『属性』って何だよ」

しまった……『属性』は俺と志木城の造語だった。

「えつと、『属性』を使える者ってことなんだけど……」

言った瞬間、堂島の目が見開かれる。畏怖さえ覚える驚愕の表情。数秒間彫刻の様に停止して、そつと顔に手を当てる。

「……くくく、ははっ、ハハハハアッ！！」

何がおかしいのか、堂島は狂ったように笑い始めた。

歡喜、戦意が混ざり合った笑み。

「そつかいそつかい。そーゆーことかい！　ハハッ、西条も『属性』を使えたのか！　フハッ、神様も随分と粋な計らいをしゃがる」

ゾクリ、と背筋が凍る。この感じには覚えがあった。

狭い裏道、俺の家、屋上、森林公園で経験したことが甦る。

「これはオレへの試練ってワケか。西条はオレの願望を叶える障害ってワケなのか！　へっ！　いいぜえ、ヤッてやるよ！　高ければ

高いほど、乗り越えてからの達成感があるってもんだっ！」

押し留められた感情が、再び熱を持つ。

「よっしゃあ！ これで手加減なしの遠慮なしだ！ 正々堂々……行くぜえー！」

「くそっ！ ちょっとは話を聞きやがれー！」

堂島は俺の言葉を見殺して、ピッチャーに相応しく、投球フォームに入った。

ともすれば美しい投球フォームだったが、今の俺には絶望的な想像しか出来ない。

ヤバイ……何か来る！

「……『熱球』ー！」

「うおー！」

『熱球』は、野球のボール大の石に、炎を宿して放たれた。

俺は直撃する寸前のところで、倒れる様にうつぶせて避ける。

速い……速すぎる。今の熱球は、俺の目でギリギリ捉えることが出来るほどの速さだった。

さっきは堂島の動作が予測できていたので避けられたが、次はどうなるか分からない。

目で捉えることと、体が反応することは違う。圧倒的にタイムラグがあるのだ。

ガンッ！

と、その時に俺の後方から激しい音がした。

「ば、馬鹿な……」

俺の数十メートル後方には、コンクリートの壁で囲われたポンプ室がある。

その壁に……先程の球がめり込んでいる。

かなり離れた距離にも関わらず、速度を落とさず、威力を上げて

「第二球……行くぜえ！ 『熱球』！」

地面に落ちている石を拾い上げ、堂島は再び熱球を放った。

「動っけ！」

俺はうつぶせになった体勢から、素早く寝返りを打って二球目を躲す。

ドスン！ 学校の屋上からボーリング球でも落とした様な音がした。

横目で確認すると、さっきまで俺がうつ伏せていた所に球が埋まっている。

深さ約3cm。

もしもあれが頭部に直撃したら……

「冗談じゃねえ!!」

俺は素早く立ち上がった、堂島に注意しながら状況を整理する。

相手はずっと警戒していた『熱』の『属者』。『熱球』という遠距離での攻撃が出来る。体温調節が何かで、触れると火傷する。

っ！ いやいやそうじゃない！ 『属者』同士の戦いは相性が重要だ。『相生』と『相克』を思い出せ！

頭の中に元素つきの五芒星を思い浮かべる。

……待て……ちょっと待て……アイツって……『火』じゃない？

「あ、あたしの……望み？」

「そう、吉田さんの望み。最後まで生き残れた時の報酬。……正直に答えて欲しい。とても大切なことなの」

吉田さんは必死に考えて、日が落ち始め教室に影が差すようになつて、ようやく口を開いた。

「分からない」

「……え？」

拍子抜け、してしまった。

「分からないって……どういうこと？」

「あ、あたしは、今の生活に望んでることなんか無くて……うっん、そうじゃない。状況に流されてるだけなんだと思うの」

望みが無い？ 一つも？

吉田さんは、放心している私を見て話し続ける。

「いつも誰かの為に行動して、感謝されて凄く嬉しい。困ってる人は助けてあげたい。友達だって居るし、家族だって優しい。好きな人も……ちゃんと居るし」

そんなこと、そんな普通のこと……

「それで突然こんな事に巻き込まれて、今までずっと『属性』は隠してたんだけど、西条くんが怪我してるって聞いて、居ても立ってもいられなくて、それで……」

「ちょ、ちょっと待ちなさい。望みが無い？ お金とか、名誉とか、叶えたいことも？」

「え？ ……うん」

嘘だ。

そんな人間が居るはずない。人は何かしら望みを抱えている。小さくても大きくても、悩みや不安が望みに変わる。それが……無い？ 現状に満足しているってこと？

「嘘言わないで！ 本当のことを、言いなさい！」

「ひ……ほ、ホント、ホントだよ……」

思わず席を立って、吉田さんに怒鳴り声を上げてしまった。

……ああ、そうか。今、ハッキリと分かった。

この教室に入った時から感じていた、私の中に渦巻いている得体の知れない感情。

私は……吉田さんに嫉妬してるんだ。

私に無いものを沢山持つていて、誰からも慕われている。

一見して弱く見えるけど、心は誰よりも強い。

そんな彼女が、羨ましくて、眩しくて……妬ましい。

「……ごめんなさい。謝るわ」

吉田さんに軽く頭を下げて、私は椅子に座りなおした。表情は感情を消して。どこまでも冷徹に。

もう、いい。個人の感情、望みにケチはつけない。私は、私の成すべき事をするだけ。

「それで……吉田さんは戦う気があるのかしら」

「……うう……それは、今ここで？」

「そうじゃないわ。少なくとも、私にその気は無い。私が言っているのは、この先の話よ」

「……………」

吉田さんは再び沈黙してしまう。

静かに諭す様に、私は語った。

「私と西条くんは、すでに二回もの死線を越えてきたわ。幸いなことに私に怪我は無かったけど、西条くんは……分かるわよね？」

肋骨の骨折、右肩と左足に刺し傷。そんな事がこれからも続く。

いえ、この瞬間も行われているのかもしれない。

「どう、して……志木城さんも、西条くんも、どうしてそんな事が出来るの！？ 痛い思いをして、知らない人と戦って、相手を傷つけて！ そんなの……おかしいよ！！」

吉田さんの、今まで溜めていたモノが溢れ出す。

「志木城さんは痛くないの？ 苦しくないの？ 嫌な思いはしないの？ おかしいよ、そんなことっ！」

そう、そうね。私も西条くんに言われて気が付いたわ。少し前までただの高校生だったのに、『真理の道』に巻き込まれて、殺すやら殺されるやら。でも、だから……

「だから私達は戦うのよ。被害者や犠牲者を出さない為に。もちろん、私達を含めてね」

「む、矛盾しているじゃない！ 今までだって苦しめられて、これからも苦しんで、そんなことって……」

「お願いだから聞いて頂戴。私と西条くんの願いを、全てを救う答えを……それは『よ、』



「……………え？」

吉田さんは叫ぶのを止めて、私の言ったことを理解できずにいた。ええ、その気持ちは凄く分かるわ。馬鹿らしいし、あまりにも呆気ない。

現実逃避だし、ある意味私達の現実が一番近い。私利私欲を捨てた答え。

でも、これが最善なの。これ以上も以下も無い答えなのよ。

私は分かりやすく事情を説明した。他の誰にも聞かれないように、吉田さんにだけ囁くように。

「それが……志木城さん達が戦う理由？」

「そうよ。だから誰にも負けない。負けられないのよ」

私は一呼吸おいて、最後の質問をした。

「この先は、今まで以上に過酷な戦いになるわ。吉田さんに戦う覚悟が無いのなら、大人しく真名を言いなさい。私達の力になるのなら……歓迎するわ」

「あ、あたし……あたしは！」

その問いから逃げることは許されない。

この先は絶望への飛び込み台。一度落ちれば帰ってこれない監獄。

少女は真っ直ぐ志木城を見た。

透き通る様な瞳に、強い決意を携えて。

そこに、一切の迷いは無かった。

## 第十二話 熱暴走で冷めた関係（後書き）

最近の投稿は、やたらと長文になってまね。  
見直すのも一苦労です。

それでは、次回はついに『熱』と『癒』の決着です。

## 第十三話 風前之灯（前書き）

### 十三話の登場人物

さいじょうつかさ

西条司：主人公、属性は『炎』

しきじょうれいみ

志木城怜実：属性は『氷』

よしだくるみ

吉田久留巳：属性は『癒』

どうじまもとちか

堂島元近：属性は『熱』

### 第十三話 風前之灯

「オラオラア！ 逃げてばっかじゃ勝てねえぞ！」

「うるっせえ！」

埋没していく太陽を他所に、校舎裏では灼熱の戦いが繰り広げられていた。

俺はネクタイを脱ぎ捨てて、ワイシャツを腕まくり。ようやく戦闘態勢に入った。

石を拾い上げて『熱球』を放つ堂島。

それに対して、俺は反復横跳びの要領で躲し続けていた。

幸いなことに、堂島は変化球を投げていなかった。直進、直線の真っ直ぐなストレート。それなら球が速くても、俺にだって避けられる。

たとえ避ける方向を先読みされたとしても、躲せる確率は左右下と合わせて三分の一。分の悪い賭けじゃない。

今はとにかく時間を稼ぎたかった。堂島の弱点を見極める為の時間……

石を拾って投球するまで約4秒。足元には無数の石。もしかしたら、決闘前に堂島が用意したのかもしれない。何れにしても、球切れを期待しない方が良さそうだ。

遠距離攻撃に対する作戦。

パツと『熱球』を打ち返そうと思ったが、すぐに却下。

手近にバットの代わりになる物が無いし、相手のストライクゾーンはキャッチャーじゃなくて俺だ。

ただでさえ捉えられない球を、避けてから打ち返すなんて、無謀以外の何物でもない。

次に『炎壁』でのガードを考えたが、これも却下。

熱球に纏われた炎なら相殺できるかもしれないが、石そのものまで消すことはできないだろう。

エースピッチャーから放たれた石……想像するだけで絶句モノだ。なら、俺の遠距離攻撃は？

駄目だ。たとえ俺が『炎包』や『炎鞭』を出しても、良くて同士討ち、悪くて死合終了で負ける。手加減のイメージと、急所以外を狙うのに時間が掛かり過ぎるんだ。

俺に相手を殺す選択肢は無い。あくまでも話し合う機会が欲しいだけなんだ。ならば、違う方法を模索するしかない。

……リスクを覚悟して接近するか？

堂島との距離は約10m。一球だけ躲せれば詰められる距離だ。

『炎』を纏わせた拳なら、堂島に触れても火傷をしないかもしれない。

「何をブツクサ言ってやがる！」

「ッ！？」

驚くべきことに、堂島の手には石ころが二つ握られていた。

石ころと言っても、掌を目一杯広げないと持てない大きさだ。

もう……迷っている時間は無い！

「おおおおおッ！」

堂島に向かって一気に駆け抜ける。

俺の雄叫びを聞いて、堂島は一瞬硬直したが、投球フォームはそのままに『熱球』を撃ってきた。

二つの石を投げるなら、狙いは定まらないはず！普通に投げれば左右に分かれるはずなんだ！

このまま正面で突っ込む！

「甘いんだよ、西条お！！」

振り下ろした方向は正面ではなく、左！

一つは有らぬ方へ飛んでいき、もう一つは俺を目掛けて飛んできた。

「っそおおお！！」

勢いを殺さずにスライディングして躲す。

頭上に熱球が掠る感触がした。思わず身震いするが……捉えたぞ

っ！

足腰に力を入れて、アッパーカットの様に起き上がりの一発を見舞う。

イメージする時間は無い、語彙を使う！

狙いは振り下ろされた右肩。

「『炎拳』！　くらあえええ！！」

「『加熱』ッ！！」

堂島も語彙で応じるが、もう遅い。炎は相殺するかもしれないが、俺の拳は通るはずだ！

しかし、拳と肩が触れた瞬間

『属性』が暴発した。

ライターを二つほど用意してみよう。

片方ずつ手に持って火をつける。

火の大きさは関係ない。

正面で二つの火を合わせてみる。

それは至極簡単な足し算で、二つの木が根っこで絡むように、土が土に加わるように、金属同士が混ざるように、水が増えるように……火が、強くなる。

「あゝ ああああッ！！」

「ガアアアアッ！！」

どちらの悲鳴か分からないほど叫ぶ。

俺の右拳、第一関節から第二関節の中間が堂島の肩に触れた瞬間、肘までの感覚が無くなった。

皮膚が赤くなって水泡が出来る。その水泡が蒸発して黒くなる。

痛覚が働いていれば、間違いなく激痛に分類されるだろう。

だが、俺は地べたをゴロゴロと転げ回るだけで、痛みは全く感じ

ていなかった。

いや、正確に言えば気が付いていなかった。生涯で最も痛い感覚で、ワケが分からなかったんだ。

対して、堂島も……酷い。

肩が凹んで焦げていた。

拳の形に右肩が凹んで、表面上がピンポイントに焦げている。

挟られている、と言ってもいい。ユニフォーム、皮膚、筋肉、骨を燃やして、めり込んだ。

先程も言った通り、俺の拳が挟ったんじゃない。俺の『炎』だけが挟ったんだ。

『相生』と『相克』ではない、同じ元素の衝突……その結果が暴発。

「うあああああ！」

俺は今更になって慟哭した。

熱い、あつい、アツイ！？

痛みよりも熱を感じた。必死に左手で土を掘り起こして、右腕に掛ける。

数秒して、ようやく冷めてきたと思ったら、今度は痛みが押し寄せてきた。

キーンと耳鳴りがして、強く揺さぶられた様にクラクラと目眩がする。

「くっそおー！」

左手で思い切り頬を叩いて、気合を入れる。

痛みは麻痺するまで耐えろ！！　今は……目の前の相手を見るお！！

震える足を押さえながら、右腕をダランと垂らして立ち上がる。

正面を見据えると、堂島も右肩を押さえて立ち上がっていた。

「かはっ……はぁ……はぁ」

「うぐぐう……くっ」

互いに牽制する様に距離を取って睨み合っているが、今の堂島に『熱球』は投げられない。

そう……意図せず、俺が望んだ膠着状態になった。

「オマエ……西条が『炎』だったのか」

堂島は狂いそうな痛みに耐えながら、憎々しく俺をことを見ている。

俺自身は痛みを無視して言った。

「そりゃこっちの台詞だよ。まさか、お前が『熱』だったとはな」

初日からずっと警戒していた。『属性』が覚醒するきっかけになった、あの車。

「八日前のこと……覚えてるか？」

「ああ？」

「お前、運転手に『属性』を使わなかったか？ 二十代前半の軽々しい男だ」

堂島は訝しげに俺を見て、思い出したように驚いた。

「オマエ、あの運転手に会ったのか！？」

くそつたれ、やっぱりお前の仕業か。

「ああ……もう少しで殺すところだった。テメエ、一般人を巻き込むなんて、どういっつもりだ！！」

「ハッ！ 信号無視して子供を轢きそうになるヤツなんざ、死んで当然だろうが！」

それは……知らなかった。運転手の名前と電話番号は控えてるし、後で通報しておこう。

だけど、だからといって、運転手を殺していい理由にはならない。下手をすれば、俺以外の人が巻き込まれていたかもしれないんだ。



堂島のこの考え方……危険だ。

今の内に改心しないと、取り返しのつかないことになる。

俺は落ち着く為に軽く深呼吸をして、改めて言った。

「……隠していたが、志木城も『属性』を使える。俺とは協力関係なんだ」

「なっ!？」

堂島、今日何度目かになる驚愕。

だが、誤解を解くには絶好のタイミングだった。

「これで分かっただろう。俺が志木城と仲良くなったのは、そういうことなんだよ」

「な、何で……」

「俺は母さんが、志木城は妹が、『真理の道』に巻き込まれた。だから……俺達はこれ以上の犠牲者を出さない為に、協力してるんだ」  
俺は懇切丁寧に『願い』を話した。

堂島は、初めは理解できずにいたが、言葉の真意を理解して、肩を震わせている。

これで、やっと分かり合えると……そう、思っていた。

「……めだ」

「……え？」

「駄目だ、だめだ、ダメだ! そんなんじゃ駄目だ!！」

「は!？」

「それは逃げだ! 現実から逃げてるだけじゃねえか! どうしてそうなるんだよ。なんの為に生きてんだ、意味ねえだろうが!」

堂島は着火されたように、再び俺を睨みつける。

「オマエが……志木城さんに、そんな軟弱思想を押し付けたヤツは……」

威圧　で、間違いないだろう。

俺はそんな堂島が理解できずに戸惑っていた。

「軟弱って……いや、おかしいだろ。俺達は高校生なんだぞ? ちよっと前まで、普通の生活してて」

「んなの関係ないんだよ！ オマエのソレは、ただ見たくねえもんから目を背けているだけだ！ 逃げといて偉そうに講釈たれてんなよ格好悪い。普通の生活だ？ ハッ、そんなもんクソ食らえってんだ。いいか、よく聞けよ。この物語はな……オレが主人公なんだ！ オマエでも志木城さんでもない、オレが主役なんだよ！！ 外野はすっこんでろや、出しゃばって調子に乗るんじゃねえ、口出しすんな。オレは『永遠の愛』を手に入れる。その為なら、いくら脇役が犠牲になろうが気にしてられっかあ！」

「……………そーかい」

盛大に吼えた堂島とは相容れず。そして決意した。

こいつは間違っている。世界が自分を中心に回っていると思ってんだ。

力を手に入れて、欲に溺れる。

ふざけんじゃねえ！ 何でもかんでも手に入れたなんて、勘違いなんだよ！

そんな話は……………ぶっ壊す！

「悪いが……俺は現実主義者なんだよ。独り善がりな妄想は、テメエ一人でしてやがれ！！」

俺と堂島の、最終決戦が始まった。

左手を照準にて、堂島の足を狙う。

イメージするのは、譲れない願いを込めた炎。

想像できる最大限の火力。

鉄をも溶かす紅蓮の業火。

それを収束させて、一直線にして包むイメージ。

「『熱』――！」

対して、堂島は左手に炎を持っていた。  
それは『熱球』ではない、もつと熱いモノ。  
石は、もう手にしていない。高密度に凝縮された、極熱な炎の塊だけを持っている。

燃え盛る球と化したソレを挑むように俺へと突き出し、映しだされた瞳の中にも火を灯す。

降り掛かるプレッシャーに痺れる感覚。

まるで九回裏、そしてツーアウト満塁でツーストライクスリーボールの場面。

ピッチャーである堂島に逃げ場はない　だがそれは、迎え撃つ俺にとっても同じことだ。

一球入魂。

見るも無残な右肩を垂らしたまま、堂島は美しい投球フォームに入る。

イレギュラーを物ともしない自然体。

先程は右手で投げていたので、どうやら生粋のサウスポーではなさそうだが……必ず命中することだろう。

堂島がエースピッチャーなら、ここ一番の勝負所を押さええているはずだ。

片足を上げて、振り抜くようなオーバースロー。

「いっけええええええッ――！」

「うっ　おおおおお――！　『炎』――！」

咆哮が重なり合い、紅蓮の『炎』と究極の『熱』が衝突する。

互いの火が暴発して、力を増して鬨ぎ合い、一帯に眩い光を放った。

チリチリ、チリチリ。

「ぐ、つお――！」

「あああつつ！」

衝突した所から離れていても、その衝撃は熱風として俺と堂島に降り注ぐ。

ぐっ、目を開けてられない。肌が焼けて、体中の水分が蒸発されそうだ。

圧倒的な熱量に、一帯の酸素が枯渇する。

グボアアアアアッ！！

断末魔の様な音が聞こえて、巨大な炎が渦となって上空に昇っていった。

炎は、自身で上昇気流を発生させる。その結果なのかもしれない。  
「かふっ……ぜえ、ぜえ、ぜえ」

止まっていた呼吸を再開させて、俺は正面を見た。

衝突した場所には雑草一本残っておらず、焼畑跡地のような姿になっている。

そして……俺と同じく立っている男が一人。

俺はソイツに向かって言った。

「信じ……なれないな。堂島の願いが、俺と同等だと？」

過度になったが、結果は相殺。

それは、互いの願いが拮抗していることを示していた。

「……な、めるな。人生の原動力は……恋なんだよ。一人の人生は、宇宙にだって匹敵するんだ。オマエの願いなんかには負けない」

「……………」

事実、俺は引き分けて、堂島の願いに勝てなかった。

悔しいが認めるしかない。一人を愛する力を……思いの強さを。

「……『熱』」

「っ！？」

見ると、堂島は再び投球フォームに入っていた。

満身創痍の中で、乾坤一擲の全力投球。

「今、のは……ファール……次で……アウトだ」

睨みを利かせ、カッコよく決め台詞なんざぼざいてやがる。だけどな、俺だって……負けられないんだよっ!!

一瞬! 一瞬でいいんだ! 何か、注意を逸らせるものがあればッ!

一秒を細かく分けて、必死に頭を働かさせる。

雲ひとつない空、風が吹いていない校舎裏。利用するのは、炎の特性。

そうか。一つだけ、一つだけ方法があるぞ!

「すー……はー……おい主人公。場外まで殴り飛ばしてやんぜ、この野郎ッ!」

突撃。ああ……俺は、堂島に突撃しに行った。

志木城なら無謀な行為だと笑うだろうか? いいや、そうじゃない。俺にはハッキリと、敗北ではなく勝機が見える。何故なら、今の俺には、当たらないからだっ!

「当ッたれええええええ!!」

風を裂く石つぶて。

堂島から放たれた最後の一撃は、見事に空を裂いていた。

それは光の屈折。温度変化の気象現象。それを使って、堂島の視界をばやけさせ狙いを外した。

そう……その正体は、『陽炎』だ。

「これでえ、仕舞いだッ!!」

立場が逆になり、今度は俺がオーバースローになる。

振り抜くような前衛姿勢で、堂島の顎に拳を叩きつけた。ガンッ!!

「がはっ! ……っ……………」

直撃した堂島は、数メートル先に吹っ飛ばされる。

ピクピクと動いていたが、もう立ち上がれないだろう。

堂島は、眠る様に目を閉じた。

……『属性』の使いすぎ。

思い出してみれば、堂島は『熱球』を投げ続けていた。さらに『熱』で『炎』を相殺させるなど、どう考えてもキャパシティを超えている。

佐久間と戦った時の……俺の様に。

ドスン、と俺も膝をついた。緊張しっぱなしの心を楽にする。

深呼吸をして、長くため息を吐く。

「はあ……終わっ……た」

「……うう……っ」

あれから数十分後。日が完全に落ちた頃、ようやく堂島が目覚めました。

俺はネクタイをズボンのポケットに突っ込んで、堂島の正面で座っている。

右腕はピクリとも動かないで、ジンジンと熱を帯びていた。ひよっとしたら、神経が焼き切れているのかもしれない。

だけど、手当てよりも先に、俺にはやることがあった。

堂島は薄っすらと目を開けて、確認する様に俺を見る。

「オレ、は……負けたのか？」

その擦れた声に、俺は冷徹な返事をした。

「ああ、そーだよ。お前の……堂島の負けだ」

「へへっ……そうか……ああ、負けちゃったか……」

全力を尽くした結果として、満足そうにはにかむ。

俺はゆっくりと立ち上がって、言っちゃった。

こっからは説教タイムだ。

「お前……本当に志木城が好きなんだな」

「……応よ。……一目惚れだった。今まで野球一筋だったオレがな……初めて人を好きになったんだ。他の、誰かに……譲りたくなかった」

息も絶え絶えに喋る姿が哀愁を誘う。

「出会った瞬間、電気みてーのが走ってよ。ああ、そうかって。オレの人生はこっからなんだって、そう……思ってたんだ」

真っ直ぐに自分の気持ちを出していく。

「だから、志木城さんにオレの人生を賭けようって、恋に生きるって決めたんだ。馬鹿だからさ……オレ。告白のやり方なんて知らなかったし。真っ直ぐに伝えることしか出来なかった。でも、失敗して、キツイことも言われたけどさ、志木城さんの性格なんて、正直言ってもよかった。オレが合わせれば問題ないだろ。そんなこと」

「そこだよ」

そこがムカつく。腹が立ってイライラしてくる！

「……あ？」

「お前、言ったよな。『オレの悪い所は全部なおす』って……そんなじゃ、ただの自己満足だろうが！人は支え合ってる生き物なんだ！！片方だけが我慢して、相手の悪い所を気にしないで、見なかったことにして……それがお前の言う、本気の『愛』なのかよ！！」

違うだろ！？お互いに庇い合って、支え合って生きるんだろーが！お前の考え方は、相手を受け止めてないだけだ！

「一方通行の『熱』はな……相手に伝わらないんだって、分かれ！！」

「ぐっ！？」

今度こそ、堂島は反論できずにガツクリと肩を落とした。

数分間沈黙して、俺は堂島に近寄って、左肩を貸してやる。

「……立てよ、堂島。連れてってやるから、あとはテメエの口で言いやがれ」

「ど、何処に……」

「決まってるだろ……志木城の所だよ」

校舎に戻って学校を見上げると、案の定、俺のクラスに明かりがついていた。

アイツは結果を聞くまで帰らない。志木城とは短い付き合いだったけど、それぐらいは察しがついた。

俺は堂島を引きずりながら、土足で校舎に入っていく。

「なあ……西条は、いつから志木城さんと協力してたんだ？」

堂島は、俺の耳元で小さく呟いた。

すでにお互い風前の灯だったが、俺の方が若干動ける。

「ん？ えっと、四日前……からだな」

こうやって思い出してみると、ここ一週間の出来事は一年分ぐらいに匹敵するほど濃密だった。

「志木城とは屋上で戦って、憎まれ口ばっか言い合って……森林公園で一緒に戦った。アイツってな、普段は口悪いんだけど、困ってるって時には心配してくれんだよ。なんつーか、いつも仏頂面で性格悪くて。はははっ！ 土下座とか強制してくんだぜ？ でもさ……強がってるだけで、ホントは脆い奴なんだ」

俺が思い出話を話していると、堂島は呆れ顔で言った。

「へっ、そーかいそーかい。……どーやら、オレの手には負えない女みてーだな。……なあ、西条」

「……ん？」

「こんなこと……言える義理じゃないんだが、一つだけ約束してくれ。志木城さんを……これからも守ってやって欲しい」

「へ？ いや、あの、その」

「変な誤魔化しは聞いてねーんだよ。頼む、一生のお願いだ」



堂島の顔は、志木城に告白した時の真剣な表情だった。

「……ああ、約束するよ。志木城は、必ず守ってやる」

「……へ……へへっ、安心……した。ついでに、コレも聞いてくれないか？」

「ん？ いいから早く言えっ。ほら、教室も見えてきた」

「……オレの、真名は……『カリエンテ』」

突如、堂島の重みが増した。

「きゃあああああ！？」

「西条くん！？」

教室に入ると、見知った顔の女子が二人。

志木城は一瞬驚いていたが、俺と堂島の傷を見て、すぐに状況を理解したようだ。どう考えても、この傷は喧嘩によるモノじゃない。こーゆー時の察しの良さは助かる。

誤算だったのは……吉田だ。まさかこんな時間まで教室に残っているとは思わなかった。

まあ、いいさ。それは後で誤魔化すとして、今は応急処置が先だ。俺は教室の床に堂島を寝かせて、志木城を見た。

「志木城。悪いが、この前の『氷』を頼む。救急車が来るまででいいから、傷口を凍らせてくれ」

そのお願いに対して、志木城は何故か冷静に言った。

「……その必要は無いわ」

「……は？ 必要ないって……オイ！ お前、まさか堂島を見殺す気なのかよ！？ 敵だったからって、そんなこと……」

ボカンッ！ と唐突に頭を殴られた。イッテ、なにすんじゃワレ！

「落ち着きなさい。必要ないと言ったのは、救急車のことよ」

そう言うと、志木城は震えている吉田を見た。

「吉田さん、コレが私達の戦いなよ。さっき言ったことが本当なら、あなたはあなたの戦いをしなさい」

「ちよっ！ 志木城、今は吉田にそんなこと言っても……」

「黙りなさい。これは……私と吉田さんの問題なの。口を挟まないで」

訳が分からない。一体、吉田に何の関係があるってんだ。

吉田は、震えながら口を開いた。

「わ、分かった。あたしが……治すから」

脅えながら俺の右腕に触れる。柔らかく、優しい手触りだったが、少し痛い。

吉田は長く深呼吸をして、決意した様に目を見開いた。

「……ふうー……すうー……お願い、治って……『癒』」

それは、熱が冷めていく感覚だった。

ムズムズと皮膚が蠢いて、時間が戻ったように再生していく。僅か数秒の出来事。あつという間に俺の右腕は元に戻っていた。指を動かしてグーパーを繰り返す。

「よ、吉田？ おま、お前……」

「次、この人ね」

放心している俺を他所に、吉田は堂島の右肩にも手を置く。

「うう……傷が深い。……『癒』！」

先程よりも一層強く『属性』を唱える。

しかし……

「駄目、力が足りない！」

堂島の右肩は、骨の再生までで、まだ筋肉が見えている状態。涙目になりながら吉田は叫ぶ。

「『癒』！ 『癒』！ ……っ！ どうしよう……」

「手を貸しなさい、吉田さん」

途方に暮れている吉田の手を取るのは……志木城だった。

「五行思想の通りなら……吉田さん、一緒に治すわよ。合わせて！」

「『氷』！」

「『癒』！」

暴発　は、しなかった。

氷が水に溶ける様に、志木城と吉田の力が合わさって、堂島を癒していく。

見る見るうちに右肩が塞がって、傷痕すら残していない。

どころか、破れたユニフォームまで元に戻っていた。

「……ふうー……これで、一件落着ね」

「いや！　いやいやいや、ちよつと待てって！　もう、どこからツコンでいいやら分からんっ！」

「吉田さんが『癒』の『属者』だった。で、私達に協力することになった。これでお仕舞い」

「はー？　よ、吉田が『癒』？　ち、ちよっ！」

「う、うん。これから宜しくね、西条くん」

吉田は、相変わらず俺の視線から逃げるように顔を俯いている。

「え？　ああ、宜しく。って違うだろ！？　ちよつと待てって！

なんで吉田が……」

ボカンッ！　と再び頭を殴られた。

「落ち着きなさいって言ってるでしょ。だから言っただじゃない『全てを疑いなさい』って。つまりは……そういうことなのかよ」

志木城がガラにも無く、文化祭の準備を手伝った理由。俺が保健室から出た時に、肋骨が痛まなかった訳。

……そういうことなのか。

「う、ううん」

と、そこで堂島が目を覚ました。

コイツ、突然俺の肩でスヤスヤと寝始めやがって……文句の一つも言ってやらないと気が済まんぞ。

「……あれ？ どこだ、ここ？」

「教室だよ堂島。俺の肩で寝てた気分はどうだった」  
起き上がって、まぶたを擦りながら、堂島は言った。

「ん？ んん？ つーか、オマエ……誰だよ？」

「……………は？」

堂島は寝起きだからか、キョロキョロと辺りを確認している。

「あれ？ ここって教室じゃん。うわっ！ つーか外が暗い！ 今何時だよ！」

教室の時計を見ると、時刻はすでに午後七時。普通の学生はとっくに下校している時間だ。

「ヤッベー、もうこんな時間じゃん！ 早く帰んなきゃ！」

俺は慌てて教室から出ようとする堂島を止めた。

「ちよっ！ 待てよ堂島っ！ いきなりどうしたんだ！？」

「あん？ つーか誰だよオマエは」

「西条だよ、西条司！ ほら、ついさっきまで戦ってただろーが！」

「はあ？ 戦うって何だよ。あーもう！ オラ！ 邪魔だから退け  
って」

グイッ、と力任せに退かされて、堂島は教室を出てしまった。

教室に居た志木城には目もくれずに……

「何が……どう、なってるんだ」

と、そこで一部始終を見ていた志木城が口を開く。

「西条くん……堂島くんから、何か聞いた？」

「何かって……」

脳裏に思い出されたのは、堂島の真名。

たしか……『カリエンテ』だったか。

「真名を、聞いたかもしれない」

「そっ……やっぱり、そういうことなのね」

志木城は一人で納得したように、何度も頷いている。

「西条くん、それに吉田さん。これから話すことは、絶対に誰にも言わないで頂戴」

途端に重くなる雰囲気。

ゴクリ、と俺は唾を飲み込んだ。

「西条くん、生殺与奪のルール、覚えているわよね」

「ああ……」一つ、相手を殺すこと。二つ、相手の真名を奪うこと『だろ?』

「ええ、これは……殺すか奪うかのルールだと思っていたのだけれど、実は両方とも殺すルールだったのよ」

「なっ!?!」

「えっ!?!」

俺と吉田は驚愕する。

なん、だつて……両方とも、殺すだど?

「正確には、『属者』としての存在を殺す。『属者』としてのもう一人の自分、その記憶が……消える」

存在の削除。記憶からの除外。それは……死ぬのと同義だ。

「分かっているとは思っけど、自分の真名は軽々しく言わないこと。相手に殺される直前、もしくは日常に戻りたい時だけ、言いなさい」  
「……………」

それは一種の敗北宣言。日常へ帰還する為の免罪符。でも……

「全てを忘れても……戻ってこないモノもある」

そうだ。俺の母さん、志木城の妹は戻ってこない。だから……

「最後まで戦い抜きましょう。私達だけが、最後まで残るように」  
記憶を消す瞬間を忘れる為に。一番最後まで。

そして、志木城は不適に笑った。

「ふふふつ、大丈夫。今の私達なら……無敵だわ」

「ああ!」

「うんっ!」

こうして、俺と志木城と吉田のパーティが結成された。

オチというか、裏話。

遅い時間まで教室に残っていた俺達は、見回りの先生に見つかってしまった。

「オイこらっ！ お前等！ こんな時間まで何やってんだ！」

俺達以外は誰も居ない教室。机の上に散らかっている書類。

俺は志木城を見て、志木城は吉田を見る、吉田は恥ずかしそうに俺を見た。

この場で、言い訳なんて一つしかない。  
満場一致で先生に言う。

「文化祭の準備です！」

## 第十四話 見知らぬ死闘（前書き）

十四話の登場人物  
くろおかあきこ

黒丘晶：属性は『雷』  
いがらしたけし

五十嵐武：属性は『堅』

## 第十四話 見知らぬ死闘

人々が寝静まった深夜。

何処とも知れぬ国道にて、その戦いは苛烈さを増していた。

「ケツ、ちょこまかと動きすぎだろマジで。オッサンよお、一発でも当たったら即オダブツだって分かんذار？ 真名を言っちゃまうなら今の内だぜえッ！」

半ば呆れた調子で、そんな言葉を口走った男は黒丘晶くろおかあきらという名前だった。

相手を小馬鹿にしきった態度。その前屈みに折れた姿勢は、間違はなく挑発の部類に該当される。若さ故なのか完備なる余裕と、絶対なる自信に満ちた嘲笑を浮かべ、大きく両腕を開ききっていた。

まるで針金細工のように背丈や手足が細長い。加えて、シルバーアクセサリーが随所に施された黒いライダーズジャケットを全身に亘って着用している為、あたかも暗闇に溶けるかのような様相だ。

その中でも飛び抜けて目立つのは、黒丘の髪型だろう。人目にく金色の髪の毛は、まるで重力から反発したかのようにツンツンと逆立ち尖がっていた。それもそのはず、黒丘の周囲には目に見えない静電気が帯電している。その静電気によって、長めの金髪が物の見事に反り返っていたのだった。

そう、黒丘晶の『属性』は『雷』。

バチバチと直に耳を刺激する音を奏でながら 有りと有らゆる雷を支配する、天災クラスの化け物。

頬を窪ませ、舌を曝け出した表情が、紫電の光に怪しく映っている。

「返事がねえなら……死んじまいなッ！」



「先程から……騒がしい……奴だ」

小さく聞こえたのは、低い声。

対峙して街灯の下に居る男は、一切の油断も微塵の驕りも無く、ただ注意深く黒丘のことだけを見据えていた。

自身の事を『オッサン』と称されてしまったが、黒丘ほどではないにしろ、若者であり二十代前半の年齢。しかして、その年齢以上の風格と、無精ヒゲが伸び切った風貌により年寄り扱いされているだけである。

纏っている雰囲気は重く、誰から見ても暗く、そして何より堅い。

一見して格闘経験があると分かる均衡のとれた肉体に、重心のバランスが良い独特の構え。

黒丘とは対照的な、飾り気の無い胴着を着ている。有段者の証である黒帯、白い胴着に身を包んでいても威圧するような筋肉が一般人との一線を画す。

男性の平均より、やや高めな長身。手入れを怠っていそうな黒髪は後ろで結んでいる。一目して武道家の格好ではあるが、両足に履いているスポーツシューズだけが、なんとも不釣り合いだった。

相手を見透かすような感情を排除した瞳。それに伴って変化に乏しい強面。

強烈な気配を放ちながら、漲る躍動を一念に待つ。

胴着の右胸に刺繍されている名は、五十嵐武と書かれていた。いがらしたけし

互いにどのような経緯で戦いに至ったかは、あえて省略させてもらう。

西条と佐久間のように町中で偶然出会い、間近で『属性』を行使したところに出くわしたのかもしれない。あるいは、西条と志木城のように日常の『綻び』を探り、一方が騙して鎌をかけたのかもしれない。

どちらにしても些細なことだ。重要なのは、そんな事柄では無い。

二人の信念、彼等の思慮、両者の力量、双方の『属性』。  
この先に繰り広げられる戦いこそが 本題なのだ。

国道の空に雷雲は無く、星が見えるほど澄み切っていた。  
だが、それにも関わらず。

「『雷撃』……!」

本来なら、その名の通り空から落ちるはずの落雷は、黒丘の人差し指から放たれていた。

一瞬にして眩い光を発し、コンクリートの道路へと直撃する。

世間一般的には高所や尖った物に落ちやすいとされる雷ではあるが、とある条件さえ揃ってしまえば難なく平地にも打ち付けられるのだ。

しかし今、そういった条件を是としているのは……自然界に則ったのルールではなく、『属性』に他ならない。

電気の通り道が形成されるまで、速度にして約170キロメートル毎秒。その作られた通り道に電撃が流れるまでは……もはや光速の世界。

その圧倒的なまでの威力は、コンクリート内部を絶縁破壊し、発生した衝撃波で地表に浅い穴を開ける。

電圧にして約7億ボルト。そして電流は約15万アンペア。もし人間に当たりでもしたら、体中が焼け焦げて瞬時に絶命することだろう。

通常技にして一撃必殺。掠っただけでも根こそぎ意識を刈り取り、脳髓まで破壊せしめる凶器の権化。

反射神経を売りにしているプロのスポーツ選手だとしても、避けるのは至難の業になるだろう。

だがしかし……その指先から放たれる雷は、何発撃ったところで五十嵐には当たらなかった。

「チツ、一体何がどうなってるやがる」

黒丘は不快そうに舌打ちをして、一定の距離を測る。

実験として使用した数多くの野生動物。実際に動く生物に『雷撃』を放ったが、躲せるものなど皆無だ。

それをこつとも簡単に避けてしまえる。黒丘には理解できないし、信じられない光景だった。

「……これしきでは……ぬるい」

五十嵐は、あくまでも寡黙に黒丘を見据える。瞬きすら見逃さない覚悟で、ひたすらに。

解説すると、別に五十嵐は不思議なことをやってる訳ではない。

黒丘の人差し指の方向を確認し、口を開いた瞬間に身を跳ばす。

指の方向が右なら左に、左なら右に、正面なら道幅が広い方に避けるだけ。

言ってしまうえば、それだけのこと。だが、それをこの暗闇の中で行え、初対面という状況と死が迫った緊張の中で行動に移せてしまえる。その発想を含め、五十嵐はすでに常人の域ではないのかもしれない。

否。常識かと問えば、かけ離れた狂気とさえ言える。

天才的な格闘センスと、イメージしたこと実現させる強靱な肉体。それこそが天災クラスの化け物と、『堅』の『属者』が拮抗できる理由だった。

『属性』の暴発は……初撃で経験していた。

黒丘の『雷撃』に対して、五十嵐は避けるのと同時に、地面に『堅強』を張っていた。

五十嵐にしてみれば、それは単なる力比べのつもりだったが、『雷撃』が地面に直撃した瞬間、予想以上の過剰反応を示した。

ボオオガアアアンツ！！

「なっ……」

「ぬう！？」

雷鳴 いや、爆音の方が正しいか。

通常の二倍以上高められた『雷撃』が、国道のコンクリートに直撃した。

元々離れていた黒丘に、直接的な被害は無かった。

だが、五十嵐は違う。地表に巨大な風穴を開けた『雷撃』は、間一髪のところ躲したが、弾け跳んだコンクリートの破片は避けられない。

瞬間的に状況を理解して、即座に構えをとる。

「撃砕初段」

それは三戦さんちんから繰り出される連続動作。

ある破片は受け流し、ある破片は轉身し、ある破片は突き受けた。結局、五十嵐は恐るべき反射神経で、全ての破片をいなした。

「コオオオオオ……」

息吹をして、何事も無かったの様に冷徹な表情に戻る。

そうして……現在の状況に至る。

ここで西条が五十嵐の立場に居たのなら、時間稼ぎをするのが上策と考えるだろう。

『堅』自体に遠距離攻撃は無い。

一貫して物質を強化をする能力しかないのだ。仮に遠距離攻撃が出来たとしても、精々その辺にある石を『堅』で強化して投擲するぐらいだろう。

だが、それは稲妻の前では無力に等しい。

故に『雷撃』を躲し続けるしかない。ただし、それは最も望ましい展開だった。

『属性』は使えば使うほど精神力を消耗していく。このまま黒丘が『雷撃』を放ち続ければ、次第に勝機が見えてくるのは必然だ。

しかし、五十嵐はそれを良しとしない。  
無表情のままに、蔑む様に黒丘を見る。

「……………こんなものか」

ここであえて挑発をする。

相手に全力を出させ、その上で勝つ。

最悪の状況から、最上の結果を出す。人間の可能性と限界を知る。  
それが彼の『願い』であり、今まで歩んできた人生だった。

「ん…………だと、テメエ…………」

ピタリ、と『雷撃』を放っていた黒丘の動きが止まった。

徐々にふるふると肩を震わせ、最強を自負した己のプライドに焚き付けられる。

無敵だと思っていた。誰も敵わないと信じていた。

所詮はRPGで言うところのザコ敵だと、そう思っていた。

「……………ろしてやるよお」

五十嵐に対して、今まで以上の明確な殺意が湧き出す。

目の前の男が許せない。

圧倒的な戦力差にも関わらず、この拮抗状態とあの余裕。

支えてきたプライドが折れそうになり、一刻も早くこの戦いを終息させたい気持ちが強くなる。

怒りが頂点に達した時、黒丘の心中で、誰かが静かに囁いた。

コノ男ヲ、生カシテハ駄目ダ。

「ンダラアアアアアッ！ 『万雷』！！」

掌を水平にして、全ての指を開ききる。

それも両手、合わせて十本の細長い指だ。

そこから放たれたのは、網の形をした継続的な細い稲妻だった。

黒丘は個々の雷が交錯するように、左手を右向きに、右手を左向きに傾ける。

お互いの雷は干渉し合い、どれか一本でも触れた瞬間、一つに集束して威力を上げる。

範囲攻撃であり、オーバーキル。しかも雷撃とは違い、持続して在り続ける。

しかし、完全決着とはいかなかった。

「……………面白い」

そんな絶望的な状況に、五十嵐は初めて口を歪ませていた。

恐怖ではない、むしろその逆である歓喜だ。

やっと面白くなった。これで少しは楽しめる。

黒丘が天災クラスの化け物なら、五十嵐は天才クラスの怪物だった。

避けるでも躲すでもなく、突き進む。

一見して無謀だと思われる選択は、実は唯一の正しい答え。

稲妻が黒丘の指から放たれているのなら、距離を開けば開くほど不利になる。それだけ範囲が広くなるのだ。

突撃、そして高い跳躍。

網の目のような形状ならば、稲妻と稲妻の間に僅かな隙間が存在する。その空間に足を突っ込んで、再び跳躍を行う。

『万雷』に触れていなくても、稲妻の熱で胴着の裾や靴が燃え始めた。だが……五十嵐は止まらない。

その異常とも思える繰り返しで、あっという間に黒丘に迫っていた。

「　っ！？　こんのヤアロオオオオッ！！」

五十嵐の行動に啞然としていた黒丘だったが、距離を詰められる危機感から、雄叫びを上げた。

振り切る様に両手を真横に伸ばす。それだけで稻妻の網目が消え、隙間に居た者を断ち切る。

「ふっ！」

そんな黒丘の動作を見逃すはずもなく、五十嵐は地面すれすれに身を屈めて躲していた。

気が付けば２メートル。立ち上がりと同時に助走して、技を繰り出す。

「破ッ！」

ボギリ……

「がぁぁぁぁー！」

鈍い音と同時に黒丘の右肩を直撃したのは、勢いをつけた足刀蹴り。

『堅』を使った訳でもないのに、黒丘の細い体が宙を浮く。

粉碎骨折。何の訓練も受けていない一般人が鍛え抜かれた足に蹴られたのであれば、それは当然の結果だった。

黒丘は受身も取れずに地面に這い蹲る。

追い討ちは……してこなかった。

黒丘が右肩を押さえて苦しんでいる間に、五十嵐は自ら距離を取る。

まだこんなモノじゃない。俺は本気になっていない。人間には限界が無い。

餓えて、渴いて、欲している。

数十メートルの距離を取って、五十嵐はボソリと呟いた。

「……………本気を出せ」

「ケツ、ケケツ……どおーしてこおーなっただよお……」  
黒丘には、すでに開戦した時の余裕と自信などあるはずも無く、  
砕かれた右肩を押さえて動揺していた。

軽く捻るつもりで戦ったんだ。

『雷撃』一発で即KO。こーやって『属性』を使うヤツを探して  
殺して、金を手に入れてハッピーエンド。

その為に似合わない努力もした。  
一日中走り回っていたバイクから降りて、必死になって語彙を調  
べた。

動いているモンに『雷撃』を当てる訓練もした。

『万雷』は必殺技として、最後まで残しておくつもりだった。使  
うつもりは無かったんだ。

だけど……目の前の男は、ザコ敵なんかじゃない。

強敵でもボスでもなければ、中ボスでもない。

アイツは……ラスボスだ。

もう、出し惜しみをしている場合じゃない。

一回だけ使って、大怪我をした技がある。

自分じゃ制御できないで、お蔵入りしていた技だ。

「……本気ならなあ……今から見せてやるよお……」

ポケットから通販で買ったサバイバルナイフを取り出す。

別にコレに『属性』を掛ける訳じゃない。コレは相手を刺して殺  
す物だ。

そつ……だからアイツを殺す。リスクを覚悟して、本気を出す。

「『雷』……！」

「づあッ！」

五十嵐の驚異的な動体視力と反射神経でも、その攻撃は避けられな



かった。

一直線に駆け抜ける稲妻、その速度は先程の『雷撃』の比ではない。

コンクリートに焼け跡だけを残して、その物体は五十嵐を通り過ぎた。

五十嵐のわき腹に、赤い傷痕を残して……

ブシューウ！ と勢い良く血が噴き出す。

致命傷ではない。だが、時間を置いてはいけない。

「ぐはっ！ …… ハア、ハア、ハア」

通り過ぎた正体は、黒丘だった。

自らを弾丸として、ナイフで相手を切り刻む。

駆け抜ける速度は『疾風迅雷』の200キロメートル毎秒。

当たり前だが、走っている時は呼吸が止まる。

内臓が押しつぶされ、走り終えた時は気持ちが悪くなる。

制御なんて出来るはずも無く、ただ真っ直ぐに走り去るだけ。

道路に見えない伝導体を敷き、自分の足に電気を帯びて、弾丸として撃ち出す。

コレが黒丘の創造。誰よりも速い男だ。

「……………面白い」

己の血を見たのは何年ぶりだろうか。

血は体から抜けていくが、矛盾する様に血湧き肉躍る。

コレを待っていた。コレを望んでいた。

猛るばかりの快と悦を与え、飢えも渴きも、ここに満ちる。

拳を力強く握り締め、左手を突いた状態に真っ直ぐ伸ばす。右手

はアバラの下まで退いて引き手とし。

あとは

「『堅』により……………撃ち砕くのみ」

刹那。決着はついた。

「『雷』ッー！」

左手でサバイバルナイフを胸の前に構え、黒丘は駆け抜けた。あまりの速さに目を閉じて、祈るように。だが……それでも。

「正『堅』突き」

その拳は……ナイフを折り、左手を捻じ曲げ、肋骨を砕き、肉を穿った。

最後まで立っていたのは五十嵐。

倒れたのは黒丘。

絶妙なるタイミングでのクロスカウンター……それが五十嵐の用意した答えだった。

相手の本気を、正面から受け止めて、その上で勝つ。

「……………真名を言え」

倒れている黒丘の上に乗る、マウントポジションを取った。

五十嵐に『弱者』をいたぶる趣味は無い。

殺す必要が無ければ殺さない。

あくまでも、人間の限界が知りたいだけ。

「かふつ、ああ、がはあ、あ、ああ」

倒れた黒丘の頭の中では、言い訳が駆け巡る。

絶対に勝てない。相手が強すぎる。オレとは次元が違う。

こんな痛い思いなんて、これ以上する必要ないって。もういいじゃん、金なんて諦めろよ。命あつての物種たるおーがあ。

諦めて、今までの生活に戻れば……

そこで黒丘は気が付いた。

今までの生活って何だ？

高卒で、職にも就かずバイクで走り回って。親からは勘当され、周囲には見下された。

そんな生活に……戻る？ 誰が？ オレが？

ふざけんつな！ オレは、金を手に入れて、奴等を見返してやるんだよぉ！

左手と右肩は砕かれた。マウントポジションを取られて、足も動かせない。

だけどなあ……右手の指は動かせるんだよぉ！！

ヤツからは死角になってるだろーがあ、これで仕舞いだあ！！

「……オレの、真名は……『ら！』」

ガッ！ と、五十嵐は瞬時に黒丘の喉を掴んだ。  
力を込めて、無理やり黒丘の発声を止める。

「か、か……」

「真名以外を喋るのなら、貴様を殺す」

徹頭徹尾、冷静沈着。

金属の様に、何処までも冷たく重い。

完全敗北。もはや疑いようも無かった。

五十嵐は手を放して、黒丘に再び機会を与える。

「ぐ、ぐ、『グロム』……」

言った瞬間に、黒丘は気絶した。

そうして、五十嵐は深夜の国道から静かに立ち去る。  
一言、つまらなそうに呟いて。

「……………弱すぎる」

## 第十五話 開いた口が塞がらない（前書き）

### 十五話の登場人物

さいじょうつかさ

西条司：主人公、属性は『炎』

しきじょうれいみ

志木城怜実：属性は『氷』

よしだくるみ

吉田久留巳：属性は『癒』

なじまつばさ

名島翼：友達

## 第十五話 開いた口が塞がらない

堂島との灼熱の決闘。あれから二日が過ぎた。

文化祭の準備と称した言い訳は、志木城と吉田だけに適用された。俺はというと、見回りに来た先生に土足であることを追及され、罰として校内廊下掃除の刑が処された。うーん、不幸だ。

結果として無罪放免になった志木城達は、その後も放課後に活動することになった。

もちろん文化祭の準備というのは表面上だけで、裏では志木城によるワンツーマンの課外授業だ。

吉田は五行思想について、何も知らなかった。

何も知らず、何も試さず、故に俺に『癒』を使うまで誰にも気付かれなかったんだ。

だけど、これから戦力として加わるなら、一蓮托生のパーティーに参入するのなら。

あの夢では説明されていない、暗黙のルールを知らなければいけない。

自分自身で覚悟を決めたのであれば、吉田は吉田の戦いをするしかない。

……正直言つて、俺は吉田が加わった理由を聞かされていない。

志木城からは『命が惜しければ、それ以上聞かないことね』と何故か不機嫌そうに釘を刺され、吉田とはそもそも会話にすらならなかった。

うん。俺がこの話題を吉田に振ると、途端に顔を伏せて逃げられる。ハッキリ言つて、前以上の嫌われっぷりかもしれない。俺の脆い心が砕けそうだよ、ホント。

で、吉田の『癒』で俺の体は治っていたが、心まで回復したわけじゃなかった。

『属性』を使った後の、精神的な疲労感。

それでも、日常の綻びを見せないように我慢して学校に登校したけど、授業中やら休み時間はボケーっと過ごした。

激闘に次ぐ死闘で、俺自身も見た目以上に疲弊していたんだろう。その顔は随分と間抜けずらだったのかもしれない……

そんなこんなで、俺達は比較的平和に暮らしていたんだが、何も楽しいことだけがあつた訳じゃない。

稀に廊下ですれ違う堂島。

『属者』としての記憶を失い、俺や志木城のことを忘れてしまったエースピッチャー。

あれほど恋焦がれていた志木城に、再び想い伝えることは叶わない。

『熱』は失われ、今は部活に勤しんでいる。

あの決闘は正しかったのだろうか。俺は今の堂島に対して、一体何が出来たのだろうか。そんなどうしようもない憤りだけが、堂島とすれ違うたびに俺の心を締め付けた。

最後に交わした、あの約束。

『志木城さんを……これからも守ってやって欲しい』

俺は、それに答えることしか出来ない。

そして、今日は木曜日。

俺は手早く朝食を済ませて、登校中にある公園に着いた。

出入り口のレンガに腰を掛けて、とある人を待っていた。別にちやんとした待ち合わせの約束なんてしていない。一方的に俺が待っているだけだ。

おっ……早速アイツが見えてきた。

アイツは俺の姿に気が付くと、ゲーム機を鞆に閉まって、小走りで近寄ってきた。驚いたような嬉しいような、そんな複雑な表情だ。  
「うーす」

「お早う、司くん。どうしたのー？」

そう……俺が待っていたのは翼だ。

今や『樹』の佐久間も、『熱』の堂島も警戒する必要が無い。

俺が『属者』だと知っているのは仲間だけなんだ。

これで一緒に歩いていても、翼を巻き込まなくてすむはずなんだ。翼との楽しい雑談。それは、俺の中で結構大事なモノだったらしい。

だから、もう少しだけ日常に戻ってもいいよな？

俺は立ち上がって、いつもの調子で話しかけた。

「やーめた。早朝ランニングなんて、そんなにもたねえって。つーことで、今日からまた一緒に登校してもいいよな？」

「もちろんっ！ それにしても、一週間ぐらいしか続かなかったね」

「あはははっ、我ながらホントに諦めんの早いよな」

「うん、でも大丈夫。司くんは小さなことには無頓着だけど、大事なことはトコトン諦めないからね」

翼はのんびりそんな性格だけど、実はなかなか鋭かったりする。

俺は頭をボリボリと掻いてから返事をした。

「自覚は無いんだけどなー、小さいことには無頓着、ね。俺の性格なんて、所詮はそんなもんか」

「そんなもんだよ。ポジティブに考えなきゃ」

「はは……へいへい」

いつものやり取りをして、俺達は学校へ歩き出した。

長年の付き合いだからか、翼と一緒に登校することを快く了承してくれた。拒否られるとは思わなかったけど、ちょっと安心したかな。

こうやって歩きながら晴れやかな空を見ていると、気持ちが落ち

着く。

久しく忘れてたな……こんな感覚。

「司くんって、最近やけにボーっとしてるよね」

「ん？ あー、うん。色々と疲れててな。えっと……ただの筋トレ  
疲れだよ」

「ふーん。あつと、そういえば、志木城さんとはどうなったの？」

「なんだあ？ そのニンマリ笑顔は。」

「ど、どうって何がだよ」

「忘れたのー？ 僕を蔑ろにしてまで楽しく話してたじゃん。クラスでも随分と話題になってるよ。」あの”志木城さんが普通に話してるって。司くん、も・し・か・し・て〜？」

あゝ、言われてみればそうか。志木城が仲間になる前なんて、話したことすら無かったからな。翼が不思議がるのも分かる気がする。さて、どうしたもんか……

「期待を裏切るようにで悪いけど、俺と志木城はそんな特別な関係じゃねーよ。まあ、少しは仲良くなったかな」

「ホントに〜？ 隠すことないんだよ？ ほら、僕達親友じゃない」

「ははあ〜ん。コイツ、俺のことおちよくってやがるな？」

「……よし、なら親友を信用して本当のことを言ってやる」

「へ？」

溜めて溜めて、さも重大発表のように告げてやった。

「俺と志木城はな……実は主従関係なのだ！！」

「……………嘘でしょ？」

「はあーはっはっはっ！ ところが違うんだなあこれが」  
翼は怪訝そうに俺を見て、ため息をついた。

「ふうー……じゃあ、司くんが従者？」

「んなワケあるかい！ 俺が主で志木城が従者なのだ！」

「っ！？」



ふっふっふ……驚いてる驚いてる。

俺はさらに追い討ちを掛けるように言った。

「翼は知らんだろうがな、志木城はああ見えて、実は見えない所では甘えん坊で従順なんだぜ？　もう犬の様にクウンクウンってな具合にだな……」

「……誰が、誰の犬ですって？　西条くん」

ガッ、といきなり後ろから首根っこを掴まれる。

はて？　誰だろう……なんだか聞いたことがある声だ。

何故か全身から凄じい勢いで汗が噴き出していた。

そりゃもう冷たい汗だ。ゾワゾワと鳥肌が立っている。

「僕は何にも見てない！　僕は何にも聞いてないからねー！」

タツタカター、と翼は完全に他人のフリを決め込んで、脱兎の如く逃げてしまった。

ぐおぐ、この薄情者めっ！　俺達の友情はその程度だったのかよ！  
ギリ……

つ、爪が首筋に食い込むんで痛い。

首根っこを掴まれているのもあるが、なにより怖くて振り向けない。

「あ、あのー、し、志木城サン？　血が、血が出そうなんだけど」

「何か……言うことはあるのかしら」

「ゴメンナサイ」

「それがこの志木城怜実を貶めた代償？　ふっふっ、そんなことで許すわけが無いでしょう。それに、日本人の謝罪は……土下座よ？」

いや、極端すぎるだろ！　他の謝り方ぐらい幾らでもあるよ！！  
周りを見ると、すでに学校近くの歩道に差し掛かっていた。人が居ない保健室ならいざ知らず、こんな普通の通学路で土下座なんて出来ない。

「ホントにゴメンナサイ。勝手に志木城サマの噂話をしてしまいま

した。ええい！ つーか痛いから放せつての！ マジで血が出る！」  
逆切れ風に謝る俺に対して、志木城は冷徹に言い放った。

「前々から考えてたのよね……西条くんは頭が足りなさ過ぎるわ。  
もう吉田さんも仲間になったことだし……いつその事、ここら辺で  
処分しちゃおうかしら」

プツッ、と皮が裂けてツイーと血が流れ出した。

「うおおーい！ 待て、早まるな、落착けー！！」

「……私は不思議なぐらい落착着いてるけど？」

「そーゆー意味で落착着くな！」

え？ 何この状況。俺、こんな所で死ぬの？

「ちよー！ ちよつと待った。分かった、分かったから。何でも言  
うこと聞くから！」

志木城の手がピクンと反応して、一瞬だけ力が緩む。

「……何でも？ それは私の願い事を、何でも一つだけ叶えてくれ  
るということかしら」

「いや、そんな大それたモンじゃなくて……って、だあああ！ だ  
から爪を立てんな！ 俺の出来ることは何でもするって意味だっ！」

「……ふん。なら、それで妥協してあげるわ」

ようやく志木城は首筋から手を放した。止まっていた血液が急に  
流れ出す感覚がする。

おゝ、痛て。手形とか残ってんじゃないだろうな。

俺が振り向くと、志木城は予想通りの仏頂面で俺のことを睨んで  
いた。

「……犬」

「はあ？」

「だから、犬よ。主従関係？ ふん、ならハツキリとさせてあげよ  
うじゃない。今日一日、私が合図をしたら『ワン』とお鳴きなさい」  
「……」

ドン引き。やっぱりお前はお嬢様じゃなくて女王様だろ。まあで  
も、今日一日それを我慢すれば許してくれるみたいだし……恥を掻

くのは向こうも一緒か。

「いいよ。それでいこう」

「違うでしょ駄犬。返事は『ワン』よ」

「……ワン」

志木城による羞恥プレイは、朝のホームルーム前から始まった。

「西条くん。今日の放課後、あなたも吉田さんと一緒に残りなさい」

「へ？」

思わず手に持っていた教科書が滑り落ちそうになった。

志木城は、小声で俺だけに聞こえるように言う。

「とりあえず、吉田さんには基本ルールを教えただ。だから、今日からは西条くんにも教えていないことと、これから先の作戦会議を行うのよ」

「……なるほどね。分かった、俺も校内の廊下掃除が終わったら教室に行くよ」

「え？ まだ廊下掃除やってたの？」

「そーだよ。ったく、お前らは無罪でいいよな。範囲は一階から三階までなんだけど、校内って結構広いんだよ。手伝ってくれば早く行けるけど……どう？」

「嫌よ。西条くんの自業自得でしょ？」

はあ……即答かよ。別に期待しちゃいけないけどさ。

「へいへい、その通りですよ。とにかく、廊下掃除が終わったら教室に行くから、そのまま待つてろ。ちょうどその時間は人が居ないだろうしな」

「そう……それと」

「ん？」

パチン、と志木城が指を弾いて小気味悪い音が出る。

「朝の約束……この音が合図だから。守らないと罅るわよ」

「なぶるって、俺はマゾじゃないんだけどな」

パチン。

「返事」

「……ワン」

朝のホームルームは、だいたい五分前後で行われる。

連絡事項に出欠確認と、それは何処の学校でも行われている当たり前のことなんだけど……今日だけは例外だった。

「あー、西条」

先生が俺の名前を呼ぶのと同時に、前方からパチンと音が鳴る。

音の正体は、どう考えても志木城の席からだ。そして恐るべき事に、志木城の手にはコンパスが握られていた。

守らなかつたら……罅られる。

「西条、西条司。居ないのかー」

先生は明らかに俺のことを見ながら返事を待っている。

くく、クソツタレ！ もういいじゃん。俺が居るってことは分か  
つてんだろ！？

つ……仕方ない。こうなったら、可能な限り『ワン』を『はい』  
に近づけるしかない！！

「……わいん」

「は？」

一斉にクラスメイト達の視線が集まる。

怪奇、奇異、とにかく不気味なモノを見るような、白い視線が突き刺さる。

……なんだろう。考え付く限りで、最も情けない返事をしたのか  
もしれない。まだ『ワン』の方が良かったんじゃない？

先生は必死に笑いを堪えながら、次の生徒を呼び始めた。

ああ……俺の今まで作ってきたキャラやら何やらが崩壊していく。  
今、俺の矜持は失われた。

「はあ……ようやく終わったぜ」

放課後。俺はやつとの思いで廊下掃除を終わらせ、自分のクラスへ向かっていた。

あれから行われた苦行も、そろそろ終焉を迎えようとしている。

……恐ろしかった。朝のホームルームに始まり、授業中に指された時は必ずパチンという音がセットで聞こえてきたし、俺が昼食を食べていると唐突に音が鳴った。その数は数十回にも及ぶ。今では反射的に反応してしまいそうだ。

周りの反応も次第に薄くなり、『ああ、西条のヤツついにおかしくなったんだな』といった感じに、半ば呆れた様相で生暖かく見守られていた。

面白がつて翼が、心配して吉田が事情を聞いてくれたので、俺は説明責任を果たして最低限の面子を立てた。

口は災いの元。その名言を今一度固く心に刻もう。

ガラガラガラ。

教室のドアを開けると、志木城が教壇の上に、吉田が教壇の真ん前の席に座っていた。

「遅い。罰金400万円」

「さらつとサラリーマンの平均年収を要求するな！ 一介の高校生にそんな大金なんて払えねえよ！」

「時間損失による懲罰は当然の権利でしょう？ ま、埒が明かないから今回は許してあげなくもないけど」

「あ、あははは……西条くん、あたしは全然気にしてないから」

この差である。さながら天国と地獄が混同している様な、そんな不思議な空間だ。

「ボケーと突っ立ってないで、早く座りなさい。ああ、席は吉田さんの隣ね」

「え、ええ！？　ちょ、ちょっと志木城さん！？」

「黙りなさい吉田さん。放課後とはいえ、まだ人が居るかもしれないわ。他の人に聞かれない為にも密着した方がいいのよ」

「あー……その、なんだ。吉田、悪いけど少しだけ我慢してくれ。

志木城の言うことは最もだし、教えるのにもその方が効率いいだろ？」

「う、うう……わ、分かった」

吉田はなんともいえない表情だったので、俺は万が一にも肩が触れないように、少し仰け反って座った。

「……それじゃあ、始めるわね」

カツカツカツと黒板に元素つきの五芒星が描かれる。ふーん、随分と手馴れてるな。昨日、一昨日と同じ感じで吉田に説明していたのかもしれない。

と、その五芒星の外側に円が書かれて、さらに矢印が追加される。

「まずは復習から。この外側の矢印、コレは何？　はい、西条くん」

『木　火　土　金　水　木』といった具合にグルグルとサイクルしている。

「えーと、『木生火』の流れだから『相生』だな」

「正解。まあ基礎の基礎ね、出来て当然。じゃあ次」

憎まれ口を叩きながら、今度は五芒星に矢印が追加された。

『木　土　水　火　金　木』といった感じに、先程と同様にサイクルしている。

「はい、じゃあコレは何？　吉田さん」

「あ、はい。えーと、『水克火』の流れだから『相克』で……あつてる？」

「正解。これも初步の初步ね。強すぎると『相乗』になり、反発すると『相侮』になる。さて、これからが本題」

志木城は元素の横に、それぞれの『属性』を書き出した。

一元素に三種類の、全部で十五種類。

「じゃあ西条くん。『相生』、『相克』、『相侮』、『相乗』と説明してきたけど、実はもう一つだけ五行思想には存在するの。あな  
たの……この前の戦いがソレね」

「暴発……のことが」

俺の『炎』と堂島の『熱』が衝突した際、イメージ以上の『力』  
が発生した。同じ元素のぶつかり合い、それが暴発。

志木城は軽く頷いて口を開いた。

「正確には『比和』というわ。『属性』の重なり合い、良い場合は  
さらに良い方に、悪い場合はさらに悪い方に働く力」

比和。『属性』を比べて和わせて働かせる。

「ん？ ちよつと待て、俺の暴発が悪い方ってのは分かったが、良  
い方ってのは何なんだ？」

「それは私と吉田さんが堂島くんに対して行った『比和』よ。吉田  
さんの『属性』は『癒』、それに私の『氷』を同調させて、力を良  
い方に働かせたのよ。まあ、簡潔に言うとイメージの問題ね。ぶつ  
けるイメージじゃなくて、相手を支えるイメージを持つの」

「……なるほどな」

憎み合い、争っているようじゃ悪い方に働くってか。逆に優しい  
イメージを持てば良い方に働くのか。

「あ？ じゃあこれって……」

「そう……『比和』は、基本的に仲間が居ないと意味が無いってこ  
とね。あとは特殊能力」

俺の『炎』は強さの象徴。志木城の『氷』は絶対零度の剣。吉田  
の『癒』は癒しの想い。

特殊能力だけで言うと、俺は魔法使いで志木城は剣士、吉田は僧  
侶ってところか。あーもう！ どのゲームだよこれ。

「この中じゃあ……今のところ需要があるのは吉田の『癒』だけか」

突然話をふられて、ビクンツと吉田が反応した。

「え、え？ あ、あたし？」

「そうね。吉田さん、あなたの『癒』はどこまで治せるの？」

「た、試したことは無いけど……多分、骨折ぐらいまでなら治せると思う。あ、でも、志木城さんの力を借りれば全部治せると思うよ」

「全部って………オイ、志木城！」

それって志木城の妹も治せるってことだろ？ そう言おうとしたが、志木城が突き出した手で制されてしまった。

「余計なことは喋らないで西条くん。それは、私の覚悟の証なのよ。もし治してしまったら……私の決意が鈍ってしまう」

「なっ……」

この少女は、以前の望みより今の戦いに赴くと言うのか。

そんなこと……とても俺には真似出来ない。高潔で揺ぎ無い精神。俺は志木城に最後の確認を取った。

「……いいのか？」

「ええ、構わないわ。私だけ望みを叶えて、全てを忘れて、そんなのは耐えられない。それに……今はもつと大事な願いがあるし、私達は一蓮托生でしょ？」

「……ああ！」

力強く返事をして、俺と志木城は互いを見合った。

「……あの、あたしは置いてけぼり？」

「ここからは今後の作戦会議よ」

吉田からの質問攻めをなんとか躲して、俺達は作戦会議に入っていた。

あえて俺の母さんや、志木城の妹のことは伏せておく。吉田には悪いが『元に戻す』ことで、無用な心配を掛けなくなかったからだ。吉田は、まだ納得していないのか、ぷっくりと頬を膨らませている。……ちよつと可愛い。

「……聞いているの西条くん」



「へ？」

やべつ、完全に聞いてなかった。志木城は呆れ顔で、眉を顰めて  
いる。

「……もういい。お情けでもう一度だけ言ってあげる。……いい？  
私達は今後の様子見を兼ねて、当面の間は練磨の時間に置くこと  
にするのよ。『属者』という正体を隠して、自分達の牙を研ぐ」

「ふーん。まあ相手が現れない以上、そうするしかないよな。で？  
具体的には？」

「基本的に戦闘は私と西条くんの二人で行うわ。で、西条くんに求  
めるのは二つ。一つ目は基礎体力作りよ」

「あ？ 体力作りって何でだ？」

「聞いたことは無い？ 『健全なる精神は健全なる身体に宿る』、  
これはユウエナリスという詩人が言った言葉なのだけれど、私達の  
『属性』にも同じことが言えるわ。要は、弾数の話よ」

「……つまり、『属性』の使用は精神力を消耗するから、肉体を鍛  
えて精神力も鍛えろ、と」

「そうよ。佐久間や堂島くんの時みたいに、毎回全力を尽くして倒  
れられても迷惑なのよ」

迷惑つて、もう少し良い言い方があるんじゃない？

「ならよ。志木城や吉田だって鍛えたほうがいいんじゃないか？」

「吉田さんは非戦闘要員よ。基本的に事後処理がメインになるから、  
精神力は必要ないわ。私は……言わなくても分かるわよね？」

成績優秀で容姿端麗のお金持ち。もちろん成績には『体育』も含  
まれるわけで……

「そういうこと。西条くんは早朝マラソンでも始めてみたら？」

結局はそこに行き着くワケか。世の中つてのは上手く回ってるも  
んだな。

「分かったよ。体力作りはやっておく。で？ もう一つは？」

「連携の問題。私達はパーティを組んでから日が浅いわ。この先の  
戦いは、互いの連携が取れていないと、ハッキリ言ってお話になら

ないのよ。だけど、急に近しくなると日常に綻びが見える。なら、それなりの理由が必要だわ」

うーん、まあその通りかな。少なくとも、俺と吉田は距離が離れすぎだ。

「私と吉田さんは、『文化祭の準備』という名目で仲良くなった。

私と西条くんも、すでにクラスで話題に上がる程度には仲が良かった」

残った三角形は俺と吉田か……どうするつもりだ？ 志木城。

俺と吉田が見つめる中、志木城は驚愕の一言を告げた。

「あなた達……付き合いなさい」

## 第十六話 会うは別れの始め（前書き）

十六話の登場人物

さいじょうつかさ

西条司：主人公、属性は『炎』

しきじょうれいみ

志木城怜実：属性は『氷』

よしだくるみ

吉田久留巳：属性は『癒』

男：道場の師範

## 第十六話 会うは別れの始め

あたしが彼と出会ったのは、二年前の春休みでした。

中学校を卒業したあたしは、親の転勤で引越しをして、誰も知り合いが居ない、遠くの高校に通うことになったのです。

うーん、不安が無いって言ったら嘘になるけど、楽しくやっていた自信がありました。

『流れに逆らわず、困っている人には手を差し伸べよう』

それが我が家の家訓で、あたしの大好きな言葉です。郷に入っては郷に従え、助け合いは大切に。

そのお蔭かどうかは知りませんが、小中学生時代は友達も出来て楽しく過ごせたと思います。

「荷物の整理は父さん達がしておくから、久留巳は散歩にでも行つてきなさい」

「え？ あたしも手伝うよー」

「いいからいいから、父さんと母さんに任せて」

お父さんにそう言われて、あたしはこの町に慣れる為にも散歩に出かけました。

「行つてきまーす」

マンションから外へ出ると、目に飛び込んできたのは広い曇り空。

「うわー、大丈夫かな」

まだ雨は降っていないかったけど、念の為にあたしは傘を持って出かけました。

歩き始めて十五分ぐらいで、ポツリポツリと静かに雨が落ちてくる。

通う高校、賑やかな商店街と巡り歩いていたあたしは、手に持っていた傘を差します。

「……もう帰ろうかな」

大体の目的は果たしたので、あたしは踵を返して家に帰ろうとしました。

「あれ？ ……あれね？」

ちよと、待って……どうしよう、道が分からない。

あたしの気持ちを表すように、タタタと次第に雨音が激しくなります。

携帯電話は持ってないし、お財布も家に置いてきた。辺りに交番はない。

この歳になつて迷子。そんな恥ずかしい気持ちよりも、後悔と焦りだけが強くなりました。

グルグルと早足で町を歩いて、なんとか目印を思い出そうとしたけど、瞳に映るのはあたしの知らない景色ばかり。

ザザザと傘で受け止める雨が重くなって、仕方なく小さな公園で雨宿りすることになりました。

あたしは傘を閉じて、ちっちゃいドームみたいな遊具に入ろうとすると、そこには先客が居たのです。

体育座りをして、今にも泣きそうな女の子。狭い遊具に入ろうとしたあたしを見て、少し脅えていたのかもしれない。

「どうしたの？」

あたしは傘を開きなおして、遊具に入らずに屈んだまま女の子の話を聞きました。

友達とかくれんぼをして、ここに隠れた。でも突然雨が降ってきて、友達を探しに來ないで一人きり。

途切れ途切れで話した女の子に、あたしは優しく聞きます。

「お家の場所は分かる？」

「う、うん、分かる」

「はい」

と言って、あたしは女の子に傘を渡しました。

「え、でも……」

「いいのいいの、遠慮しないで。お姉ちゃんの家は近いから、少しやんたら帰るよ」

あたしが笑顔でそう言うと、女の子の表情はパアと明るくなりました。

「ありがとう、お姉ちゃん！」

「うん、バイバイ。気をつけて帰ってね」

女の子が見えなくなるまで手を振って、入れ替わるように遊具に入る。

「やまないな……雨……」

今度はあたしが体育座りになって、その場で十分ぐらい待っていました。

人なんて通らなかったし、雨は激しさを増すばかり。もしかしたら今日は帰れないのかも、なんて考えてました。

そんな時です、彼が現れたのは。

「お？ 誰か居るな」

パチャパチャとこちに歩いてくる音がしたので、あたしは横についている覗き穴から彼を見ました。

背丈はあたしより少し大きいぐらいで、顔立ちは普通の髪はボサボサ。歳は……たぶん同じぐらいでしょうか。

彼はさっきのあたしみたいに、屈んで遊具の中を見ました。

「傘……持ってないのか？」

あたしが静かに頷くと、彼は呆れた様にため息をついて、こう言いました。

「はあ………つたく、天気予報ぐらい見ろよな。今日は大雨になるって言ってたぞ？」

しょうがないじゃない！ 引越したばかりで、ニュースなんて見る暇がなかったんだから。

そんなことを言っても仕方ないので、あたしは黙っている。

冷やかしなら無視しようと思ったんです。けれど……

「家、何処なんだよ」

彼は親切心からか、無愛想にあたしの家を聞いてきます。

迷子だとバレてしまうけど、そんな事を気にする心の余裕はありませんでした。

「……分らない。引越したばかりで、住所しか分らないの」

「そっか、じゃあ住所言ってみ。道順なら俺が教えてやるから」

彼は嘲笑うでも馬鹿にするでもなく、懇切丁寧に落ちていた木の棒で公園の地面に地図を書いてくれて。

「ほんじゃあこの傘はやるよ。俺の家は近いから、走れば濡れない」

「あつ、待って！ な、名前……」

彼はあたしの返事も聞かず、持っていた傘を地面に置きました。

突如として傘で視界が遮られたので、あたしは慌てて拾い上げると、彼は激しい雨の中をずぶ濡れになりながら走ってました。

名前も告げずに走り去る。

そんな漫画みたいなシチュエーションに出くわすなんて、考えてもいませんでした。

だったらアレがあたしの王子様？ ふふっ、そんな風には見えな  
いよ。これが学校だったら完璧だったのに、とあたしはクスリと笑  
って、家へと歩き出しました。

「……あ」

その時、拾った傘の異変に気が付いたのです。

「この傘……折れてる？」

そうです。その傘は、中の骨組みが数本折れていました。あつ、  
でも濡れない程度には開けます。

あたしは夢みたいなシチュエーションから覚めて、いきなり現  
実に引き戻されました。

「ふっ……ふふ、あはははは」

急に晴れやかな気分になって、壊れた傘で家に帰りました。

散歩して良かった。最後にそう思えたんです。

その出来事から時が流れ、再び彼を見かけたのは入学した高校で

した。

なんと同じ学年の同じクラス。

すぐに傘を返そうと思ったのですが、なにぶん壊れていたので、なかなか声が掛けられません。

じく、と遠くから眺めることしか出来ず、自然と彼を観察してしまします。

そして、あることに気が付いたんです。

彼はあたしみたいに他人に流されないで、ちゃんと『自分』という存在を維持したまま、友達と楽しく暮らしてました。

それはあたしの家訓と相反していて、でもそんな生き方が羨ましくて、ほんの少し憧れます。

嫌なことは我慢しなくてもいいんだ。自分の我がままを言ってもいいんだ。

あたしは彼のようになくて、次第にその姿を目で追うようになります。

……憧れが恋愛感情だと気が付くまでに、そう時間は掛かりませんでした。

さらに一年が過ぎ。彼の存在はあたしの中で大きくなり、ついにはまともに目も合わせられなくなりました。

こんなじゃ一生思いは伝えられない、そう思ってたんです。

それなのに……

「あなた達……付き合いなさい」

「はあ!？」

「え? えええええええええええええええッ!？」

俺以上の叫び声が校舎に響き渡る。



吉田はガタタツ！と凄い勢いで席を立ち、怒りの為か顔が赤面していた。

志木城は俺達の驚愕も計算の内なのか、両手で素早く耳を塞いで、相変わらず冷然な顔をしている。

「し、しき、志木城さん！？　ななな、何言ってるのよ！　ちよつと待って！　え？　あたしと西条くんが？　つ、付き合う？　えええええッ！？」

「あら？　吉田さんの、この展開は嫌なのかしら？」

「あ、当たり前だよ！！」

「いやー、いくら嫌いだからってそこまで過剰反応しなくても……俺の驚きが完全に消えちゃったよ。」

吉田はパニクってるし、志木城は滑稽そうに笑ってるし、俺は落ち込んでるし……もう何がなにやら。

「志木城、頼むから早く解説してくれ。このままじゃ永遠に話が進まない」

「解説も何も私が言った通りよ。二人が急に近くなるには無理がある。だから、西条くんが吉田さんに告白した体で、お互い付き合いだしました。チャンチャン」

「いやいやいや、他にも方法ぐらいあるだーが！」

「ふゝん。じゃあ他の案があるなら言ってみなさいよ」

「あー、ほら、俺と志木城みたいに『友人関係』とかさ」

「却下。まともに目も合わせられないで友人関係とか笑わせるわ。と言うか、いつから私と西条くんが友人になったのよ。変な勘違いはしないでくれない？」

「ぐっ……そんなら恋人だって同じだろうが」

「ここここ、恋人！？」

吉田……お願いだから黙っててくれ。

「分かってないわね、西条くん。あなた達が恋人だった場合、彼女は目が合わせられない程に照れてるのよ。付き合い始めた二人の距離、それは繊細で初々しいモノなの」

何だその乙女チックな設定は。つーか、キャラが崩壊してんぞ志木城！

「要は、付き合うフリして仲を深めろつーことかよ。けどな……」

俺は横目でチラッと吉田を見る。

吉田は今の状況が理解できずに慌てふためいている。

「何よ。西条くんは仮にでも吉田さんと付き合うのは嫌なの？」  
「っ！？」

志木城と吉田の視線が俺に集まる。

「いや、その、なんだ。……別に嫌じゃねえけど……」

優しくて可愛いくて、おまけに男女共に人気がある吉田を嫌いなヤツなんて居ないだろう。

ただ、付き合うフリって言うのが気に掛かるだけなんだ。そんな軽々しい問題じゃないだろ。

「あわ、あわわわわわ！？」

吉田はついにガタガタと震え始めた。ああ……嫌いだからって、そんなに脅えんなよ。

「はい、じゃあ決まりね。あなた達は今日から付き合いなさい。なるべく人目について、他の人にアピールすること。一緒に居ても不自然じゃないようにね」

大した反論をする間もなく、本人の合意無しで勝手に決まっちゃった。

あーもう！ こうなったら毒を食らわば皿まで、だ。

「……漠然と付き合う、つってもな。俺はそーゆーの経験したことないから、どうしたらいいか分からんぞ」

「はあー……情けない、これだから童貞は嫌なのよ」

「オイコラ！ んならテメエは彼女の経験とかあんのかよ！」

「……あなたには言いたくないわ」

何なんだよコイツは！？ 馬鹿にすんなら時と場所を選べ！

「そうね、なら手っ取り早くキス……は、無理でしょうね。まずは

告白とかしてみたら？」

うっ！ こ、告白か。そうだよな、フリでも付き合うつて体なら、そういう儀式は必要なのかもしれない。

パニくつてた吉田は、既に黙りこくつてグルグルと目を回している。

「……………ぬう」

「どうしたの？ 早く告白しなさいよ。どうせフリなんだから、別に構わないでしょ？」

「……………そんなこと言われてもな……………ぐっ」

分かつちやいるが、心臓がバクバクいって言葉が出ない。吉田は怒りだろつが、俺は別の感情で顔が熱くなるのを感じた。

無理だ、無理に決まってる……………俺は都合の良い言い訳を必死に探す。

「よ、吉田だつて嫌がつてるだろ！ やっぱり違う方法を探した方がいいんじゃないか？」

「吉田さん。西条くんに告白されるのは嫌なの？」

「……………」

何故そこで黙る！？ いや、そんな潤んだ瞳で見つめられてもっ！

膠着、沈黙、そして静寂。志木城と吉田は、俺のリアクションを求めて黙つて見つめている。いや、正確には吉田は俯きながら窺つてる感じなんだけど……………

……………改めて考えると何だこの状況は。どうして志木城に観察されながら吉田に告白しなくちゃいけないんだよ！ うっ……………ええい、ヤケクソだ！ 最後までやってやらあ！！

俺は胸の鼓動を無視して口を開いた。

「吉田、あのな、突然こんなことになって混乱してるのは俺も一緒なんだが、その……………」

「やっぱりイヤ……………ッ！！！！！！」

「うおっ！！」

真正面の零距离から悲痛な叫び声が聞こえると、吉田はズダダダ

ダダダッ！！と猛烈な勢いで走り去ってしまった。

離れていてもズダン！ズダン！と階段を下りる音が聞こえる。いったい何段飛ばしで下りてんだよ。

嵐が去った様に教室は再び静まり返って、志木城はジトーっと俺を見て言った。

「……告白もしてないのに振られるなんて、本当にモテないのね」「ほっとけ！つーが無理があんだよ色々！」

ああ、もう！俺のこの恥ずかしさはどーしてくれんだっ！っていうか吉田のヤツ、鞆を置き忘れたまんまだし……ま、明日も学校だから大丈夫か。

「まあいいわ。とりあえず一通り作戦は伝えたし、西条くんも理解したでしょ？」

比和に筋トレ、連携を高めろ、ね。

「ああ、それは大丈夫だけど、吉田の件はどーすんだよ。このままじゃ前以上に嫌われんぞ」

俺がそう言うと、志木城は何故か驚いた表情をして。

「嫌われるって……あなた……まさか、気が付いてないの？」

「は？何の話だよ」

「……………馬鹿」

「あ？なんだって？」

「なんでもない。とにかく、吉田さんの件は保留にしましょう。私が別のアプローチを考えておくわ。今日のところは西条くんも帰りなさい。ついでにランニングでもして帰ったら？」

「へいへい」

もともと筋トレを朝やるつもりは無かったしな。朝は翼と登校するって決めたんだ。となれば放課後と休日しか時間は無いし、いい機会だから下校しながらランニングコースでも調べてこよう。

俺はボリボリと頭を掻きながら教室を出ようとした。

「ちよつと」

と、後ろから志木城の声が掛かる。

「まだ何かあるのか？」

俺が振り返ると、志木城は戸惑っているような、見たことも無い顔で立っていた。

「……志木城？」

「いえ……何でも、何でもないわ。引き止めてごめんなさい」

「ん？ いや、別にいいけどよ。……じゃあ、また明日な」

「ええ、それじゃあね」

何だかよく分からないまま、俺は教室を後にした。

「はっ、はっ、はっ……と」

一定のリズムで動かしていた足を止め、呼吸を整える。

ここは学校から少し離れた河川敷。普段は遠回りになるので通っていないが、俺の家の近所から学校付近まで一本道が続いている。サイクリングロードにもなっていて、この時間でもマウンテンバイクに跨ってヘルメットを被っている人を見かけた。河川敷と言うかには丘を下りると川が流れていて、今は夕日に照らされて赤く染まっている。

うん。景色もいいし、やっぱり走るならココだよな。と言っても家から学校までだったら走って10分ぐらいで着いちゃうしな。下校はランニングで決まりにしても、他の手段も考えとかなくちゃいけない。

家で筋トレ？ いやいや、三日坊主で終わりそうな気がする。スポーツジムにでも通うか？ うーん、結局なあなあで終わるな。どーも俺は自発的に行動するのが苦手だったりする。いつそのこと道場みたいなのがあれば理想的なんだけど……

河川敷から下りてキョロキョロとヒントを探しながら帰っていると、俺は都合がいいことに道場を発見した。

「……空手、か？」

住宅街から少し離れた所にポツンと建っている道場。俺は近寄って上の方を見ると、看板には『剛柔流空手道場』と、そのまんまの名前が書かれていた。

いかにも小さい道場で、規模は学校の柔道場の半分ぐらいしかないさそうだ。……だが、それがいい。俺は頭の中で算段をつける。

小さい道場……ということは、人も少なくて教えてくれる時間も多そうだ。『属者』として格闘スキルを高めておくのも上策だろう。筋トレにもなるし、精神修行の一環にも向いてそうだ。ただ、問題は一つだけ。

「……金がねえ！」

そう、入会費と月謝を払う金が無い。今の俺は一人暮らし。母さんの財布からと父さんのヘソクリで、なんとかあと数ヶ月は持つが、ただでさえ食費で切迫した状況なのに、道場に通う金なんてあるはずが無い。

やっぱ無理か……と諦めかけた時、突然ドスの利いた低い声が後ろから掛かった。

「おい……何をしている」

「はうわっ!？」

仰天して振り返ると、そこには無精ヒゲを生やした三十代前半の真っ白い胴着を着た男が立っていた。

まるで気配を感じさせず、強面な顔と鍛え抜かれた筋肉、値踏みする様な鋭い目つきで俺のことを見ている。

全体的に見て、ヤンキーでも絡まないような威圧的なオーラを纏っていた。

「何をしている……と、聞いたんだが」

「いや、あの、その、入会したな……なんて」

「……」

数十秒間、男は俺の瞳を見詰め、一文字の様に固く閉ざした口を開いた。

「中に入れ」

「え！？ あの、ちょっと……」

男は戸惑っている俺を放って、一人で道場の中に消えてしまった。  
「金ないんだけどな……ま、見学ぐらいならいいか」

と、仕方なく俺も男の後に続く。

「失礼しまーす」

道場の中へ入ると、そこには小さい玄関と畳が敷かれたただっ広い練習場だけがあった。

男は一番奥の神棚の下に正座しており、他の人は誰も居ない。

とりあえず、俺は靴と靴下を脱いで、畳に入る前に一礼をした。

男に近寄って同じように正座をする。

「あの……他の人は？」

「今、この道場に居るのは己だけだ。他の者は居ない」

あっちゃー、人は少ないほうがいいとは思っていたけど、まさか誰も居ないとは。これはやりにくい。早々に帰ったほうがいいかも  
「えっと……今日は見学っていうか、実はお金とか全然持つてなくて」

「金など関係ない。己の目を逸らさなかったということは、何か強い意志や目的を持っているのだろう？ その思いの前に、金は意味を成さない」

何なんだ……カッコよすぎだろこのオッサン！ 一気に高感度上がっちゃったよ！ でも、やっぱり気が引けるよな。

「その……お金が無いと困るんじゃないですか？」

「この道場は個人経営だ。そして己は地主でもある。故に資金等は別段気にならん」

……どーりで他の人が居ない訳だ。たぶん宣伝活動等はしていないだろう。たまたま道場に入ったとしても、強面のオッサンが一人居るだけ 誰も好き好んで寄り付きはしないんだ。

よしっ！ と俺は覚悟を決めた。志木城にしか見せたことがない土下座のポーズをして、大声で言った。

「お金は無いんですけど……いつか絶対払います！　どうか弟子にしてください！」

「……顔を上げる」

あまりの身勝手さに殴られるかも、と恐る恐る顔を上げると、オッサンは正座したまま俺の目を見て質問した。

「理由を言ってみろ」

俺は目を逸らさないで即答した。

「負けられない……戦いがあるんだ！」

その答えは真正正銘の本音で、オッサンは何が可笑しいのか、口を歪めてこう告げる。

「……面白い。ならば好きな時に来い。己が稽古をつけてやる。己の名前は……五十嵐武だ」



## 第十七話 仮病してたらお見舞い（前書き）

十七話の登場人物

さいじょうつかさ

西条司：主人公、属性は『炎』

しきじょうれいみ

志木城怜実：属性は『氷』

よしだくるみ

吉田久留巳：属性は『癒』

## 第十七話 仮病してたらお見舞い

住宅街から少し離れた所、質素な外装でポツンと佇んでいる剛柔流空手道場。その道場の門人にして師範である五十嵐武 　もとい、俺の師匠。

師匠は一切お金を貰わず、単に心意気だけで俺のことを弟子にしてくれたんだと思う。気まぐれ、暇つぶし、まあ師匠の考えは何でもいいけど、俺は有り難くその道場に通うことにした。

そうだな、具体的には来週から。

先週と同様、今週も色々起こりすぎた。月曜日の決闘に続き、昨日の課外授業。そして吉田との微妙な関係……正直言って俺の心が持たない。

物語の主人公達は、そこら辺の描写がなさすぎるんだよ。こうやって現実的に非日常が繰り返されていれば、必然的に安息や休息が必要になる。決して慣れなんかじゃ誤魔化されない。俺は普通の人間なんだ。悩んで、立ち止まって、考える。こんな状況で自由奔放に飄々としているヤツが居るなら見てみたいもんだ。

そーゆー訳で、今日は金曜日。今日という日が終われば、お待ちかねの休日がやってくる。心待ち、と言ってもいい。なんとか今日中に吉田との関係を修復して、気兼ね無くゆつくりと過ごしたいな。って、こーやって期待していると裏切られるのが俺の人生だったりするんだけどね。

翼との登校を終え、一時間目の休み時間。

俺はダラリと落ち込んで机にうつ伏せていると、志木城が静かに近寄ってコンコンと机の上を叩いてきた。

そんな合図を無視するわけにもいかず、俺はムクリと顔だけ起こ

す。

「彼女……休んだわね」

「わーってるよ。どー考えても俺が原因だろ」

彼女、こと吉田は休みだった。担任の先生によると軽い風邪でお休みらしいけど、十中八九仮病だろう。

考えてもみてくれ。周りに違和感を与えない為に、仕方なくとはいえ嫌いな異性に告白されるという光景を。怖気が震って学校を休んでもおかしくないだろ？　そういう訳で、俺は絶賛落ち込み中なのだ。

「ま、ある意味正解よね。西条くんの煮え切らない態度が全ての元凶だわ」

「んだよ煮え切らない態度って」

「……私の口からは絶対に言わない。とにかく……これ、お願いね」  
カサリと机の上に置かれる紙。俺は釈然としないままその紙を見ると、そこには知らない住所と周辺の地図が書かれていた。

「何だこれ。誰かの家？」

「そんなの……吉田さんの家に決まってるでしょ。お見舞いに行つてきなさい」

「はあっ!？」

聞いてた？　志木城サンは今までの話をちゃんと聞いてた!？

「な、何で俺が行くんだよ！　つか仮病だろ？　お見舞いなんて必要あるかっ!」

「さっきも言っただけど、こうなつた根本的原因是あなた。それに……吉田さんの仮病が何ヶ月も続いているのかしら？」

「ぬ、ぐっ………だったら志木城も来てくれよ。俺一人だけなんて、結果が火を見るよりも明らかじゃねーか」

それこそ昨日と同じ結果になる。絶叫されて逃げられるのがオチだ。

だが、冷徹な志木城は突き放す様に告げた。

「嫌よ。無関係な人に尻拭いをさせるつもり？　私は私で文化祭の

準備があるの。もう文化祭の開催まで日にちが無いのよ。吉田さんが休んだ分も私がフォローするしかないわ」

「そんなのクラスの連中にやらせれば……無理か」

クラスメイトの大半は、良く言って効率的、悪く言って面倒くさがりなのだ。そんな奴等がまとまってこれたのは、一重に吉田の人氣と人柄の賜物なのだろう。

対して、志木城は孤高の令嬢。つい先日ホームルーム中にピンタをカマスほど恐怖の対象だったりする。

まあ、普通に考えて怖い人に手伝う物好きは居ないわな。

「ついでに、コレも渡しておいて」

志木城は住所が書かれた紙の上に封筒を乗せた。

中身が入っていないような、随分と薄い封筒だ。

「……今度は何だよ」

「これは『仮病に効く見舞い品』ってところね。この封筒、西条くんは絶対に開けないでよ。開けたら私のSPに頼んで、最大級の嫌がらせをするわ」

「ちよっ！ お前の家にはセキュリティポリスがいんのかよ！？」

お嬢様の域を超えてんじゃねえか！？ つーか頼むことがショボい！

「ふふふっ、吉田さんの住所もSPに調べさせたわ。もちろん、西条くんの家もね」

不敵に笑う志木城。

怖いっ！ 改めて怖いよ志木城サン！ ったく、どこまで冗談なんだか。

「……はあ……分かったよ。昨日置き忘れてった鞆も届けないといけないしな。今日の放課後にも行ってくる。これで満足か？」

「私の満足は西条くんが土下座してる背中に座ることよ」

「ふざけんなっ！ もう二度と土下座なんてしてたまるか！」

俺の背中はお前の椅子じゃねえよ！

「だったら私に弱みを見せないことね。常に強くありなさい。私に、

西条くんの情けない姿なんて見せないで頂戴」

「言われなくてもそーするわ！ いちいち土下座させられたら堪ったもんじゃないぞ」

「そう……なら、証明して見せなさい」

「この 上等だっ！」

半ば切れ気味に引き受けてしまったが、これが後に取り返しのつかない後悔を生むことになるとは、まったく考えていなかった。

放課後。誰も居ない教室で、私は携帯電話を取り出した。

電話帳を開いて、や行を映す。携帯電話の番号は知らないから、これは連絡網に載っている彼女の家の番号。

確信があつた。彼女の性格から推測して、仮病で親まで休ませることはしないだろう。両親が共働きであれば都合が良いのだけど……そこは運任せ。

私は淡々と通話ボタンを押す。数回着信音が続いて、通話を知らせる音が聞こえた。

『はい、吉田です』

『もしもし、吉田さん？ 私、志木城よ』

『あ、志木城さん……』

吉田さんは私の声が聞こえると、嬉しいような気まずいような、複雑な声色で返事をした。

戸惑っているのね。昨日のこともあるのだろうか……

『ど、どうしたの？』

「ひとまず謝らせて欲しいわ。昨日はごめんなさい」

『え、あっ！ いいよ全然っ！ あたしは気にしてないから』

嘘。気にしてないなら今日は休まないはずよ。たぶん思いすぎて、考えすぎて学校どころじゃなかったんでしょ。確かに私のやり方は

強引だったかもしれない。

でも、それでも私は言わなければいけない。

「謝罪はするけど、反省をするつもりは無いわ」

「……………」

「昨日話したのは事実だけ。このままだと私達は全滅するわ。あなたと西条くんの関係　ハッキリ言っただけで良くないと思う」

「……………」

「臆病なだけじゃ始まらない。互いに歩み寄らないと好転しないのよ。西条くんは……努力、してると思う」

「……………」

「あなたが学校を休んだ今日。今日だって『属者』が襲ってきてもおかしくなかった。今はサバイバルバトル中なのだから」

「……………だって！」

反論しようとした吉田さんを無理やり遮る。

「詳しい話はまた後で。電話で論議する内容じゃないわ。……今、一人？」

「え、うん。親は共働きだから居ないよ」

「そう……なら、これから吉田さんの家に行くわ。その時に話しましょう。あ、そうそう、文化祭の準備は無事に終わったから」

「あ、ありがとう。ごめんね迷惑掛けて」

「そうね、非常に迷惑だったわ。だから……早く回復しなさい。それじゃあね」

「うん、またね」

プツンと電話を切る。これで一段落。

彼の性格から考えて、仮病とはいえ何かしらの見舞い品を購入してから行くだろう。吉田さんにも心の準備をする時間は与えた。あとは封筒を開けるだけ、か。

一人きりの教室　携帯電話を閉まって、私は文化祭の準備を再開する。

「ホント……私ったら何をしてるんだか」

ボソリと呟いて嘆息。

今日は鏡を見たくない。悔やんでいるのか、喜んでいるのか、自分の表情を見たくはなかった。

あたしが足を引っ張ってるのは自覚してる。

志木城さんは作戦を立てられて頭がいいし、西条くんはボロボロになりながらも必死に戦ってた。

あたし、あたしだけ何もしてない。役に立ってないと思う。

今日だってパジャマ姿で部屋に居ただけ。昨日は眠れず、今日一日を悶々と過ごしてただけ。

西条くんとはずつと話したかった。でも声が掛けられなくて、いざ話せる状況になったら恥ずかしくて、昨日なんか混乱して飛び出しちゃったし……こんなじゃ駄目だよ。

『臆病なだけじゃ始まらない。互いに歩み寄らないと好転しないのよ』

あの一言は効いたなあ。

勢いに任せて反論しようとしたけど、あたしはあの時に何て言うつもりだったんだろう。

……言い返せる訳ないよね。だって、凶星なんだもん。

あたしだって今の関係が良くないって分かっている。志木城さんの言うことが正しいって理解できてる。あの願いが命懸けだっていうのも知ってる。

……治そう。徐々にでもいいから慣れていこう。せめて、西条くんの目を見て話せるぐらいには。

私自身も変わっていこう。歩み寄らないと好転しないよね？

うん。志木城さんには別の意味でも、きちんと謝らなくちゃ。

ピンポン。

と、インターホンのチャイムが鳴った。志木城さんだ。

あちゃー、予想してたよりも到着するのが早くて、パジャマから着替える時間が無かったよ。ま、いつか。相手は志木城さんだし……

あたしは少しだけ躊躇して、最終的にパジャマ姿のままトテトテと歩いて玄関に向かった。

ピポピポーン。

「はいはい。開けますよーっと」

ガチャリとドアを開けると、片方の手にはあたしの鞆、もう片方の手にはリンゴが入った紙袋を持っている……

西条くんが居た。

俺は言ってみれば原住民で、生まれてから十七年間引っ越しなんてしてないし、頻繁に散歩とかをしているので、ここの辺の地理には詳しい方だ。

吉田の家は、学校から徒歩で十分程度の場所にそびえ立つマンションだった。

志木城が見舞い品を用意している手前、俺も何か買っていかないと失礼かなと思い、行く間にリンゴを三つほど買っていった。

見舞い品としては随分とショボイけど、仕方ない。俺には金がないので、リンゴ三つが限界なのだ。本当は仮病じゃなくて風邪かもしれないし、この辺のチョイスが妥当だろう。

そんなこんなで、俺は目的のマンションに到着し、吉田家の前で硬直していた。

正確にはインターホンのボタンに手を掛けて、人差し指がプルプルと震えている。

「……押しずれえ」



クラスメイトとはいえ、異性の家だ。押し易いはずがない。

しかし、志木城に啖呵を切った以上、ここで戦略的撤退をする訳にはいかない。

ええい！ 俺には吉田の鞆と見舞い品を届けるという、崇高な使命があるのだ！ 決してやましい気持ちなんてない！！

目をつぶって、恐る恐るインターホンのボタンを押す。

ピンポーン。

「……………おろ？」

十秒経過、十五秒経過、だが反応がない。ん？ もしかして留守？

……………ふっ、ふはは、ふははははっ！ なんだ、どーってことないじゃないか！ 女子の家？ ふっ、そんなこと関係ねえよ！ インターホン？ 一度押してしまえば恐れるものは無い！

ピポピポーン。

と、調子に乗ってボタンを連打していると、中から人が動く音が聞こえた。

「ヤバッ！？」

サーツと血の気が引いていく。

「はいはい。開けますよーっと」  
ガチャリとドアが開く。

「……………」  
ボタンとドアが閉まった。

「……………」  
幻覚だろうか、ドアの向こうには可愛らしいピンク色のパジャマを着た吉田が居た気がする。

妄想だろうか、吉田の綺麗な髪には寝癖がついていた気がする。想像だろうか、俺と同様に吉田の表情は凍り付いていた気がする。俺は閉じられたドアから一歩だけ身を引き、ドアの覗き穴に向かってピースサイン。

「えええええええッ！？」

鉄製のドアを挟んでも、吉田の絶叫は響き渡る。

どーやら俺が目視した映像は現実らしい。

「な、なな、なんでっ！ 何で西条くんがウチの前に居るわけ！？」

「あゝ、その、志木城に頼まれて見舞いに来たんだが」

「どどどどうして西条くんなの！？ 志木城さんは！？」

「いや、志木城は文化祭の準備で来れないって……」

「そんな訳ないでしょー！？」

ガンガンッ！ と凄いい勢いでドアが叩かれる。

普段の吉田では考えられないほどヒステリックな状態だ。

「そ、そうだ！ そう、きつと夢！ やだなあ、あたしってばどうしたんだろう、ホントに熱出ちゃったのかな」

「待て待て吉田、俺はここに居るぞー」

「うきゅわ！？ 夢が喋った！？」

なかなか愉快的な脳内になってんじゃねーか、オイ。

「帰って！ いや、忘れて！ 記憶を消してー！！」

無茶言うなっ！ 俺の真名でも言えってのかよ！

「ちよっ、少し冷静になれよ」

「そんなの無理に決まってるでしょーッ！！」

半泣きっぽい涙声。

マズイ、このままじゃ関係修復っていうか近所迷惑だ。

「お、落ち着けて、昨日忘れてった鞆と、見舞い品だけ渡したら帰るから」

「だから落ち着けないって言って………ふえ？ ……鞆？」

俺が本題を話すと、吉田は鞆のことを思い出したのか、ようやく落ち着いた。

「……あっ………待って、帰るのなし！ 違うの！ って言うか、ごめんなさいっ！ ちよつと待ってて！ お願いだから帰らないで！ 怒涛の掌返し。吉田は捲くし立てるように言い終わると、今度はドタドタと部屋中を駆け回る音が聞こえた。

ま、そりゃそうだよな。いくらなんでもパジャマ姿はNGだろ。

女の子の準備は時間が掛かるって言うし、ちょっとぐらい待つか。  
俺はバクンバクンと興奮した心臓を押さえつつ、近くの壁にもたれ掛った。

しかし、何でインターホンの電話を使わなかったんだろう？

一時間、二時間と、部屋の中では何かと戦っている音が聞こえ、吉田家のドアが再び開いたのは、俺がインターホンのボタンを押してから二時間半が経過してからだった。

「お、おまたせ」

「……お疲れ様」

俺もお前もよく頑張った。頭をなでなでして褒めてやりたいね。  
吉田の格好はパジャマから私服姿、と思ったのだけれど、何故か学校の制服を着ていた。

もちろん寝癖は直っていて、黒髪セミロングが艶やかだ。相変わらず俯いて表情は見えないけど。

「あ、あの！ 着る服が無かったからじゃないんだけど、その、全部洗濯してて」

「そ、そうか」

要は『お前に見せる私服は無い』ってことね。はあー……やつぱ嫌われてんな。

「とりあえず、これ。吉田の鞆と、志木城からの見舞い品。俺の見舞い品はシヨボーイけど、このリングな」

「あ、わ、わ」

矢継ぎ早にドサドサと持っている物を渡すと、吉田の小さい両手はすぐに一杯になった。

「じゃ、俺はもう帰るから。また来週な」

軽く手を振って踵を返そうとしたが、それは吉田の衝撃的な一言で妨げられる。

「ま、待って！ 西条くん……あ、あの……家中、入らない？」

これは……そうだな、高校に入学する際の面接以来だろうか。そう、あの圧迫面接。それと同等か、それ以上の緊張感がある。

端的言う……ドキドキが止まらねえ！！

吉田の決意が込められた台詞を聞き、俺はホイホイと吉田家の敷居を跨いだ。通されたのはリビングでも客室でもなく、マンションタイプには珍しい個室。つまり、吉田久留巳の部屋だった。

入った途端、男子にしか分からないだろう仄かな甘い香りがした。真っ白い壁。整理整頓された勉強机。床には水色のカーペットが敷かれており、中央にはチョコンと小テーブルとクッションが置いてある。そして本棚には趣味であろう小説や漫画が並べられていた。

吉田は俺のことを部屋まで案内すると、押し付ける様に俺をカーペットに無理やり座らせ、『飲み物を持ってくるから、絶対に動かないで！』と言い放ち、慌ただしく部屋から去っていった。

動かないでって、動けないんだけど。

緊張していて、それどころではない。

初めて女の子の部屋に入った俺は、物色する余裕も無く、自分の心を落ち着かせるので精一杯だった。

状況整理。現在、共働きのなか吉田家に親は不在のようで、俺と吉田の二人きりだ。

もう一度言う、俺と吉田の二人つきりだ。

マズイ、マズイって！ 頭の中では『高校生×(男の子+女の子)』『チョメチョメ』という馬鹿な方程式が出来上がっていた。

吉田に嫌われる以前に、自分自身に嫌気が差してきそうだ。

憂さ晴らしにキョロキョロと視線を泳がせる。壁に掛けられていた時計を確認すると、時刻は午後六時半。いい加減に親が帰ってきてもおかしくない時間帯だ。

俺はさらに居心地の悪さを感じていると、唐突にノックの音が聞

こえた。

コンコン、コンコン。

「あー、いや、自分の部屋なんだから好きに入ってきたら？」

「そ、それもそうだね」

ガチャリと扉が開くと、吉田はお盆を持っていて、ジュースをこぼさない様にバランスを取りながら小テーブルに置いた。

お盆にはジュースが入ったコップが二つと、先程のリンゴがウサギの飾り切りになって置かれている。ご丁寧なことに、つまようじ付きだ。

「ど、どうぞ」

「……サンキュー」

何だか見舞いに来たのに余計気を使わせてる感じだ。と思いつつも、つまようじでリンゴを取ってかじる。

「うん、美味い」

「そ、そう、良かった」

そしてこっから先の会話が無い。吉田も気まずいのか、モジモジとしているだけで話題を振ろうとはしない。

こうやって沈黙しても状況は改善されないので、俺は気になっ  
ていることを質問した。

「えーっと、そういえばさ、志木城の見舞い品って何だったんだ？」

「あ、そうだね。まだ中身は見えてないんだ」

吉田はポケットから封筒を取り出すと、のり付けされていた封を  
綺麗に開く。

……何だろうな。俺には絶対に開けるなって言ってたし、余程見  
せたくないものだったりして。

『仮病に効く見舞い品』ってのも気になる。

「ん、なんだろ？ これ」

吉田は封筒の中身を取りずらそうにしていると、思い切って封筒  
を逆さにして、小テーブルの上に広げた。

封筒から出てきたのは三枚の紙。二枚は同じ様な長方形の紙で、

色々と文字が書かれている。もう一枚は正方形の紙で、半分に折りたたまれていた。

俺は長方形の紙を手に取り、吉田は正方形の紙を手にする。

「これ……遊園地のチケット？　しかも明後日までじゃん」

「ッ！？」

俺が二枚の紙の説明をするのと同時に、またしても吉田の表情が啞然とする。

吉田が手に持っていた紙はヒラヒラと空を舞い、パサリと目の前の机に落ちる。

開かれた紙には一言だけ。簡潔明瞭な一言だけ書いてあった。

『そのチケットでデートしなさい。by志木城』

「ちよっ！　マジっ！？」

何してんの志木城サン！　つーか何書いてんの志木城サン！？

俺の仲良し作戦が台無しじゃないか！

ふざけんなよ……俺達に強烈な一発を『お見舞い』してどーすんだよ。

吉田の方を見ると、さっき持ってきたジュースを一気に飲み干している。

ああ、そりゃもう凄い勢いで、俺の分まで。

顔は例の如く怒りで真っ赤に染まっており、肩はプルプルと震えている。

まるで何かを我慢しているように、何かを耐えているように。

「あゝ、吉田？　あんまり気にすんな。コレは志木城に言っただけ処分してもらっただけだから」

「……ください」

「へ？」

「あたしと一緒に、遊園地へ行ってくださいっ！」

## 第十七話 仮病してたからお見舞い（後書き）

なんだか盛り上がってますが、残念ながら次の話に主人公は出てきません。

それでは、次回は『属者』による脱獄物語です。

## 第十八話 人生からも脱獄（前書き）

十八話の登場人物  
たにわきまさおみ  
谷脇雅臣：死刑囚



## 第十八話 人生からも脱獄

……とある男の話をしよう。

この物語は喜劇ではなく、狂人となってしまった男の矮小な復讐劇だ。

彼には救いが無く、誰の助けも無く、膨大な時間と壮絶な罪悪感だけが有った。

そんな悲しい物語を見たい者だけ、この先の話に目を通して欲しい。

男の名は谷脇雅臣<sup>たにわきまさおみ</sup>という。

谷脇は至極平凡な家庭で小中高と何不自由なく育ち、心優しいとまでは言えないが、『人を傷つければ、自分の心も痛む』といった道徳心は持ち合わせていた。やりたいことを見つける そんな有り触れた理由で大学へと進学し、同年の彼女との恋愛を経て、まさに幸せの絶頂を迎えていた二十歳の誕生日、その事件は起きた。

互いの成人を祝した飲み会。そんな楽しいパーティーが終わり、彼女を家まで送り届けた谷脇は駅への近道である繁華街を通り、帰路につこうとしていた。

そう、あの悲鳴を聞くまでは……。

「イヤッ！ ちょっと、離して、ください……！！」

悲鳴を聞いた瞬間、アルコールで上気していた熱が収まる。

浮かれた気分が一瞬で消え去り、谷脇は声が聞こえた方に目を移した。

いかにもガラの悪そうな二人組みだ。一人は赤い髪にサングラスを掛け、ガッチリとした体格の上に黄色のアロハシャツを着ている。もう一人は華奢な体系で、灰色のパーカーを着用し、長めのフード

で顔を隠していた。

そして、赤髪に腕を掴まれている女性。

「だ、誰か！ 誰か助けてーっ！！」

掴まれている腕に力が入っているのか、苦痛に顔を歪めながら泣き叫ぶ女性。谷脇はゴクリと生唾を飲んで、その状況をただ傍観していた。

人氣が少ない深夜の繁華街とはいえ、谷脇以外にも通行人は居たが、誰一人として係わり合いにならないように目を背けている。

「離してー！ む、ぐう」

女性が騒いだことが不都合だったのか、男達は人目から遮られる様に女性を囲んで、ハンカチが何かで口を塞いだと思ったら、そのまま路地裏へと引っ張っていく。

「くそつたれ！」

谷脇は周りを見渡して、工事現場に落ちていた鉄パイプを拾った。普段の彼なら、あるいは他の通行人の様に目を背けていたのかもしれない。だが、幸せの絶頂にいた彼は、自分の目の前で誰かが泣いていることに我慢が出来なかったのだ。

相手は二人、不意打ちでなければ勝ち目は無い。

谷脇は足音を立てずに、男達の後ろに近づく。鉄パイプを上段に構え、赤髪の後頭部に狙いを定めて、勢いよく振り下ろした。

「このおッ！」

「ガアッ……」

ドスンと音を立てて、赤髪の巨体が倒れる。気絶したのか、ピクリとも起き上がる気配が無い。

「っ！？ …… やんのかデメエ」

相方が不意打ちを喰らったにも拘らず、パーカーを着た男は冷静にナイフを取り出した。

実物のナイフを見て谷脇の肝が冷えあがったが、この時ばかりはアルコールの力を借りて突撃する。

「こ、このっ、このお！」

ガッガッガッ。

鉄パイプのリーチを活かし、横殴りで頭部に叩きつける。

「ぐ、は……あう……」

パーカーの男はナイフを使う暇もなく、赤髪と同じく地面に倒れた。

「は……は……はあー……」

興奮した心、乱れた呼吸を整えつつ、谷脇は手に持っていた鉄パイプをガランと手放す。

地面に尻を着き、カタカタと震えている女性に近づいた。

「だ、大丈夫ですか？ とにかく……とにかく、早くここから離れた方がいいと思いますよ」

「あ……え、ええ……そ、そうですね。あの、有難うございました」  
足早に去っていく女性を見て、谷脇は改めて安堵の吐息を漏らす。  
良かった。助けられて良かった。あとは警察やら救急車やらを呼んで、俺も逃げるだけ。

谷脇は動かない不良達を見て、震える手で携帯電話を取り出す。  
不良相手に高すぎるリスクだったが、運は谷脇の方に味方した……

かのように見えた。

「君！ 何してんの！」

突如、後ろから肩を掴まれる。谷脇は驚いて振り向くと、そこには三人の警官が居た。

谷脇の肩を掴んだまま、訝しそうな目つきで睨んでくる警官。あとの二人は迅速に倒れている不良達に近寄っていく。

険しい顔つきから思わず萎縮してしまいそうな雰囲気だったが、谷脇は逆に安心していった。通報する手間が省けた、と。

「あ、その……その不良達に女性が襲われていたので、俺が助けたんです」

誰にでも出来ることじゃない。賞賛される、そう思っていた。

不良達を看ていた警官の一言を聞くまでは。

「せ、先輩！ し、死んでます！！」

瞬間、谷脇の頭が真っ白になる。

以降、その日のことは覚えていない。

手錠を掛けられていたのかもしれないし、事情聴取をされたのかもしれない。緊急逮捕され、拘留させられたのは確かだった。

その日を境に、谷脇の人生は急転直下の絶望に変わる。

泥酔による殺人容疑。

被害者の親族と、処刑宣告。

谷脇を取り巻く環境の変化。

その後の展開は、谷脇にとって全てが不運だったと表現するしかない。

パーカーを着た男、まさかその男が大企業の御曹子だったとは……被害者の親族は激怒し、当然であるがの如く死刑を要求した。

その事実だけでも谷脇に対して多大なショックを与えたが、不幸の連鎖は終息しない。

次は……マスコミである。

成人である谷脇に少年法など適応される訳がなく、大企業の御曹子を殺したとして、大々的な報道でマスメディアに取り上げられた。谷脇の親族は泣き、恨み、やがては無関係を装う。受け流した方が楽だったからだ。

谷脇の彼女は、面会にすらやってこなかった。殺人を犯した谷脇に失望したのか、はたまた世間体を気にしたのか、定かではない。もちろん、谷脇が助けた女性も姿を現さなかった。単に忘れてい

るのか、忘れようとしているのか、分らない。

谷脇はというと、拘置所に収容されてからは、この状況を理解するのに必死だった。

罪を犯したことに気付き、自分自身に恐怖し、ひたすら泣いた。被害者の親族に何通も謝罪の手紙を出し、後悔と懺悔の日々を繰り返す。

時が流れ、裁判ではあっさりと死刑を宣告された。

この日本は最大公約数の国。世論が悪い方に働けば、悪い結果がついて回る。死刑宣告は自明の理だったのだ。

谷脇の涙は枯れ果て、逃れられない未来に絶望し、今までの境遇を呪い……狂ってしまった。

「クツ……クク、ククク」

誰からも見捨てられて、自分さえも信じられない。生きることを、諦めた。

「ククククク……ハハハハッ！」

もう暫く、誰とも話していない。枯れ果てた喉が発声を拒むが、構わない。

比喩ではなく、谷脇は独房の中で狂ったように笑った。

「クハハハハッ！　クツハハハハハハハッ！」

どうせ死ぬのなら、笑ったまま死にたい。

いつそのこと、笑い死にしたったっていい。

谷脇は将来の分まで力の限り笑い続け、一心不乱に疲れるまで笑い続け、倒れるように眠った。

そうして　　あの夢を見る。

通常、受刑者は4～5人の独房に入れられるが、死刑が確定した者は精神的考慮から、一人部屋の死刑囚房に入れられる。

独房と言われれば鉄の牢屋を連想するが、実際は鍵の掛かる普通の部屋だ。人が通れない小さな窓、顔を洗う為の水道、清潔とはかけ離れた便器、カビ臭いベッド。そして囚人は薄い灰色の衣類と帽子に身を包む。

「クハッ、クハッ、クハッ、クハッ」

谷脇は張り付いた笑顔のまま『お手玉』をしていた。無論、刑務所側から支給された遊具などではなく、かといって谷脇の私物でもない。

「クハハッ、クハッ、クハハッ」

それは『岩』だ。直径5cmの丸くて小さい岩、それを三つほど使ってお手玉をしている。

夢から覚めた谷脇は、幻覚を見たんだと思っていた。狂ってはいたが、ついに幻覚が現実を浸食するまでに至ったか、と。

だが、この『岩』は確かな手触りと重量を感じさせる。

壁に向かって投げてみた 当たる。

自分の足に向けて落としてみた 痛い。

想像するままに『属性』を唱えてみた 叶う。

『岩』は現実で、あの夢も事実。そう認識した途端、谷脇の心に黒々とした感情が芽生える。

張り付いた笑顔は消えることがなく、口からは怨嗟の台詞が吐かれる。

「……ふざ……けるな」

自分を取り返しのつかない罪を犯したし、死刑になることで少しでも償うつもりでいた。

繰り返される死の恐怖。今日、明日、明後日と、迫り来る死へのカウントダウン。その苦しみを孤独に味わうことで、清算されるものだ。天国に行けるものだと思っていた。

しかし、実際はどうだ。この『力』を与えた者は、俺に『戦え』と言う。『競え』と諭す。

望みを叶えると 誓う。

「ク、クク、ククク……クツハ、クアーハハハハハハハハッ！  
」

こんな世界に何を望めと！？ 誰からも見捨てられ、運からも見放された俺に、何を夢見ると？

憎い、醜い、醜悪だ、悪逆だ、逆運そのものだ。

父も母も恋人も、助けた女性も警官も、誰も彼も周りの世界も、皆、みんな。

消えてしまえばいい。

世界が俺を否定するならば、俺は世界を否定してやる。

救う神は存在しないが、人を殺す死神は確実にいるのだから。俺みたいな存在を取り残して、世界は今日も笑う。

不条理な世界が憎い。許せない、許してはおいてはいけない。

俺以外は、笑うな。

恐怖に震えろお、汚く足掻けえ、絶望に脅えろお、涙を流せ。

怒り、猛り、荒れ、舞って、狂え。

そして皆、死んでしまえ。

俺はあ……世界を殺す。

岩とは何か。

そう……一般的には石の大きな物、岩石とも呼ばれる。誰しも一度は目にしていることだろう。コンクリートばかりの都会とは離れた、山・川・海などといった自然に在ると思われがちだが……岩にはもう一つだけ、欠かせない意味合いが備わっている。

一言で釈義するならば、地殻を形状している堅い物質こそが『岩』だ。

地球を卵に例えると、マントルとは黄身であり、海とは卵白であり、地殻とは卵の殻に他ならない。

つまり、岩は地球上にあるプレートの一部だとも言えるのだ。踏み鳴らした土が、制御下にある。

プレートを操る谷脇に、脱獄することなど雑作もなかった。

それは、ゆで卵の殻を剥がす感覚。

ペリペリと地面を剥がす。畳を捲るように、地表を捲る。

地表は放物線上に裂け、捲れ上がった地面は天井を貫き、塔のように高くそびえ立つ。

前代未聞の出来事に、刑務所内の警報が鳴り響く。

死刑囚である谷脇雅臣の異変。そのすぐ傍で転がっている死体。血肉の無残さ。それは自己の急迫不正危害が見舞われる時という、職務執行法に則った対処が求められるに十分な現場証拠と足り得るだろう。

空砲による威嚇射撃では顔色一つ変えはしない。駆けつけた警官達は良心の呵責に苛まれて多少の躊躇いがあったものの、上官の喝により呆気なくトリガーを引いた。

しかし……。

「クハッ！ 『岩壁』 い！」

厚さ4cm程の壁が、発射された銃弾を阻む。

豆鉄砲のような22口径の弾丸は、岩壁にめり込むだけで貫通するに及ばなかった。

絶望的な表情をしている警官達を他所に、谷脇は笑みを崩さない。むしろ楽しそうに、言葉を紡ぐ。

「『岩角』 お！」

今度は警官達の真上、高い天井から鋭利な『岩』が発射された。ズブ、ザン。のめり込む鈍い音。

即死だった。抵抗する間もなく、頭を鋭いコンクリートで貫かれている。



上官は辛うじて腕でガードしていたが、岩角は腕の骨を貫通して頭に突き刺さっていた。

谷脇はポケットに手をつ込んだまま、微動だにせず立っている。彼が立っているのはコンクリート、そして『岩角』になった天井の素材もコンクリート、それは元をただせばセメントと水と砂との混合物。

その砂はプレートから採取される。故に谷脇が操れる対象になれるのであった。

「クハ……脆いなあ、脆すぎるなあ人間はあ」

口元に引き裂いた笑みを作ったまま、谷脇は喋る。

「鉄パイプなんかで容易に死ぬ。硬い『岩』なんかで安易に貫かれる。そのくせ群れを作り、簡単に裏切って」

ああ、生まれた瞬間から全てが他人だ。束になって俺を殺そうとする。

家族だって血の繋がりはあるが、助けてはくれなかった。

もつ、人なんて信じられないのなら。

自身を殺そうとする者、世界に関わる者は残らず殺す。

谷脇は、刑務所内の全てを殺した。

一人殺しては芯が痛み、二人殺しては胸が裂け。

命乞いをする者を笑いながら殺めることで……ついには、壊れたいや、或いは死刑を宣告されていた時点で、とつくに崩壊していたのかもしれない。

故に、彼の心は二度と痛まない。精神は既に神格化していたのだった。

自身を死神と定義して、惨殺の限りを繰り返す。警官を、受刑者を、世界中の人間を殺す。

それは、彼にしてみれば世界を殺すのと同義に当たる。

それが彼の願いであり、『属者』を見つけるための選定だった。いちいち疑うことをしない、殺してしまえば同じとこだ、と。

下衆で短絡的な思惑だったが、谷脇の理には適っていた。

「すうー……はぁー……クハッ」

皆殺し。外に出て、目につく者を、さらに殺した。

刑務所の周辺は静寂に包まれ、谷脇以外は誰も居ない。

耳に届くのは風の音だけで、世界中を谷脇だけにしたような気分だった。

谷脇は広大な開放感に酔いしれ、思考を巡らせる。

「クハハ……次は……そうだな」

どうせ殺すのなら、人が集まる場所がいい。

「クハ？　なら……あそこがいいなあ」

そこは彼女と行く予定だった場所。

本来なら、楽しい思い出を作るはずだった。

谷脇が最も嫌いな……笑顔が溢れる場所だ。

「決めたあ、次は　　遊園地だ」

## 第十九話 約束された遊園地（前書き）

十九話の登場人物

さいじょうつかさ

西条司：主人公、属性は『炎』

しきじょうれいみ

志木城怜実：属性は『氷』

よしだくるみ

吉田久留巳：属性は『癒』

なじまつばさ

名島翼：友達

## 第十九話 約束された遊園地

状況整理。

俺は文化祭の準備をしている志木城の代わりに、吉田のお見舞いに来ていた。吉田家の門前で一悶着あり、あれよあれよという内に吉田の部屋へ招かれる。で、志木城の巧みな誘導によって、何の因果か吉田から遊園地に誘われたってワケだ。

……駄目だ、意味分かん。

ああ、後日談みたいにホワンホワンと回想になんないかなあ。

「あ、あの……西条くん？」

「ひゃいつ!？」

い、いかんいかん。完全に自分の世界に入ってた。

ハッとして正面を見ると、吉田は俺の回答待ちで顔を俯いたままだ。

男として、ここはバシッと決めなくては。

「吉田……」

俺はプルプルと震えている吉田の肩に、そつと手を置く。

相手の目は見れないが、心に訴えかけよう。

「お前……志木城が怖いのか？」

「え？」

肩の震えが止まったので、俺は立て続けに言う。

「いや、だっておかしいだろ？ この状況。何で吉田が俺に頼むんだ？ 普通に考えたら逆だろ？ そうなると、吉田が志木城に脅されている可能性が浮上してきてだな……ほら、何かないか？ 例えは弱みを握られた、とか。遊園地に誘わないとSPに嫌がらせされる、とか」

「あ、え、あう」

「つと、そうか、口封じをされてる可能性もあるな。よし、みなま  
で言うな。志木城には後でガツンと言っというてやるからさ」

「えっ、あの、その」

「とにかく、俺と吉田がこの遊園地に行けば、万事大丈夫なんだな  
？」

俺がそう言つと、吉田は無言で首をブンブンと激しく縦に振つた。  
ちよつとビックリして思わず肩に置いていた手を放す。

「お、おお、そうか。そんじゃあ、明日の十時に現地集合つてこと  
で」

ガチャン。

「ただいま、今帰つたぞー」

「お母さんも一緒だよーん。久留巳ちゃん元気にしてたかな？」

一人は洪くてダンディそうな声、もう一人は若干幼さの残つた綺  
麗な声が聞こえた。

は、ははは……お、落ち着く為に、もう一度、状況整理。

俺が居る場所〓吉田の部屋。

吉田の部屋〓女子の家。

女子の家〓健康男子禁制区域。

マジーだろ、これ！！

吉田も俺と同じことを考えているのか、先程まで真つ赤だった顔  
が一転して青ざめている。

「ちよつ！ よ、吉田、あれ両親か？」

「う、うん。お父さんとお母さん。どどど、どうしよう……あわわ  
わ」

「あら？ ちよつとお父さん、知らない靴があるわよ。お客さんか  
しら？」

「おーい、久留巳。居ないのかー？」

ヤバッ！ あ、足音がこっちに近づいてくる！？

「さ、西条くん！ とりあえず、ココに隠れて！」

「いい！？ そ、ソコって……」

部屋に入った時から意識しないようにしてたのに！

吉田が指差す場所は禁断の領域。しかし、窮地に立たされた俺には拒否権と選択する時間が無かった。

コンコン。

『開けるぞー久留巳ー』

「ち、ちよっと、待って」

ガチャリ。

「ただいま、風邪の調子はどうだ……って、なんで学校の制服を着てるんだ？」

「え？ あ、うん。えっと、風邪が治ったみたいだから、お昼から学校に行ったんだよ、お父さん」

「そうか……あまり無理するなよ」

「う、うん、気をつけるよ。あはは……」

吉田家の会話が行われてる中、俺の視界は暗闇に包まれていた。

体は暖かくなって、鼻孔をくすぐる甘い匂いがする。

そう、ココは吉田のベッドである。

俺は急いで仰向けに寝そべって、吉田が上から布団を被せたのだ。

「ところで、玄関に知らない靴が置いてあったんだけど、あれは久留巳のか？」

「ええ！？ い、いや、その……」

し、心臓が握りつぶされそうだ。

「お父さんお父さん。あれ、男モノよ？ 久留巳のじゃないわよ」

もう一人増えちゃった！ 声からして、吉田のお母さんか？

「じゃあ誰のだ？ ウチの男はお父さんしか居ないんだけどな。：

…もしかして泥棒かな」

「うんと、そうじゃなくて！ あーもう！」

「どうしたの久留巳ちゃん。さっきから様子が変よ？」

ベットの中で息を潜めながらも、心臓がバクバクと速くなって呼吸が乱れる。

口だと呼吸音が大きくなるので、鼻から空気を吸うと、布団からいい匂いがして、どうしようもなく俺の理性を奪う。  
くんくん、クンクン、すーはーすーはー。

「……あ……ふあ……ふえ……ふあつくしょん!」

「西条くんっ!」

「……え?」

「……あら? あらあらまああゝ」

終わった。

今のくしゃみが人生終了の鐘ですね、分かります。

「……どうやら、あの靴の正体は泥棒じゃなくて変態みたいだな。  
久留巳、早くこっちに来なさい。お母さんは逃がさないように、玄関の鍵を掛けて」

「はいはい」

「ちよつと、お父さん!? お母さんも鼻歌なんて歌わないで!」

ああ、もう無理だ。

これ以上の沈黙は、俺の寿命を縮めるだけだな。

俺はモソリとベッドから起き上がって、水色のカーペットに正座する。

驚愕する吉田と、吉田のお父さん。吉田のお母さんは何故か俺を見てニヤニヤと笑っていた。

……つたく、俺の頭はどこまで安売りされるんだか。

人生において三度目の土下座は、吉田家の面々に対して行われた。

「……言い訳を、させてください」

食卓に並べられた晩御飯。ホツカホカのご飯、香り漂うワカメの味噌汁、大根おろし付きのジューシーな焼き魚、シンプルイズベストの冷やっこ、厚めに切られたタクワン、新鮮なサラダ。質素でありながらも、非常にバランスの取れた晩御飯だ。

うん。どうしてこうなったのか分からないが、俺は吉田家の晩御飯にご相伴させてもらっている。

思い返すと、こんな感じだ。

『……言い訳？ あるなら言ってみなさい』

『ちよつと、お父さん！』

『吉田！ いいから、全部俺に説明させてくれ』

そして口裏を合わせてくれ。

下げていた頭を上げて、俺は改めて吉田の両親を見た。

吉田のお父さんは……なるほど、普段は温和そうな顔立ちをしているが、娘のピンチに少し強張っている感じた。

お母さんの方は綺麗な声に合うように見た目が若くて、いかにも美人妻って言われそうな雰囲気。表情はニヤニヤと笑ったまま、面白そうに俺のことを傍観している。

『俺は吉田のクラスメイトで、西条司といいます』

『それは制服を見れば分かるよ』

ぐっ……ですよねー。言い訳はこつからだ。

『実は吉田の風邪が学校でぶり返してしまつて、俺が家まで送り届けたんです』

『本当か？ 久留巳』

『えっ！ え、えつと、うん。が、学校でも熱っぽくなっちゃつて、西条くんを送ってもらったんだ。あ、今はもう大丈夫だよ』

よし、これで第一段階はクリアだ。

『そうか……で、何で西条くんだったんだ？ 他にも女子の友達だつて居ただらう？』



『うつ……』

黙ってしまう吉田。

予想通り、やっぱりそこを聞いてくるよな。

『それはですね……』

頼む吉田！ 嫌だろうけど、少しでいいから耐えてくれよ！

『俺が……吉田の彼氏だからです！！』

『へ？ ええええええッ！』

『なっ！？』

『あらあらまああゝ』

『だから、俺が責任を持って送り届けたんです！ それで、吉田の看病をしてたら御両親が帰宅されて、吉田がまだ紹介したくないって言ったから、やむを得ずベッドに隠れたんです！ すいませんでした！！』

ガバツと上げた頭を再び下げる。

『……………』

シーン。

我ながら無茶苦茶な理論だ。 といっても、この方法以外に納得してもらえない気がしない。

正直に言ったら『見舞いに来たら娘さんに部屋に誘われました』だ。これじゃあ確実に吉田の尊厳が損なわれる。

吉田とは『属者』同士だし、これからも共闘関係が持続するのなら、いつその事こらで暴露しといった方が後々になつてから安全だ。数秒間の沈黙の後、口を開いたのは吉田のお父さんだった。

『晩御飯……食べていくよな？』

『へ？』

『嫌とは言わせないよ』

と、こんな感じだ。

飯とはいえ、彼氏として認められたと判断していいんだろうか。味噌汁を啜る……あ、美味い。久しく忘れていた家庭の味だ。

「それで？ 久留巳とは、いつから付き合ってるんだい？」

尋問が詰問に変わり、今は質問攻めにあっていた。

かなり心苦しいが、俺の口から出るのは全て嘘。矛盾が無いように会話を組み立てていく。

「つ、付き合い始めたのは……一ヶ月ぐらい前です」

昨日からです、とは口が裂けても言えないよな。

吉田は箸が止まって、顔から火で出るくらい真っ赤になって黙っていた。……たぶん怒りを我慢しているのだろう。

「西条くん、よね……西条くんは、久留巳ちゃんのどこが好きなの？」

かはっ！ その質問は嘘がつけないじゃねえか！ なんつーことを聞いてくるんだ吉田ママは！

俺は赤面して俯いてしまう。こ、こんなの公開処刑じゃねえかよ！

「そ、その、優しいところ、とか……可愛いところ、です」

「~~~~~！！」

ガタンと吉田が席を立つ。

「ん？ どうしたの久留巳ちゃん。全然食べてないじゃない」

「ご、ごご、ごちそうさま！」

ダダダダ、バン！ と、吉田は自分の部屋に閉じこもってしまった。

ああ、完全に怒らせちゃったよ。

「見ていて初々しいわ。私とお父さんも、付き合い始めた時はあんな感じだったわね」

「お、おい！ そんな昔話をするんじゃない」

違うんです。初々しいんじゃないくて、嫌われているんです。

こんなじゃ明日の遊園地もきてくれるかどうか……

その後も趣味とか好きな小説とか映画の話だとか適当な雑談をし

て、俺は吉田家を去っていった。

結局、最後まで吉田と会うことはなく、弁解をする機会も無かったわけだが……

去り際に『久留巳ちゃんをこれからも宜しくね』と吉田ママに言われたのが地味に嬉しかったり。

時刻は午後八時。ちよつとお見舞いしただけなのに、随分と時間が掛かってしまった。

ま、この時間なら志木城のヤツも家に居るだろ。

俺は自分の家に帰りながら、携帯電話を取り出してコール。森林公園でゲットした電話番号に掛ける。

『もしもし、志木城よ』

『どーゆーことだよ、志木城』

『どーゆーこと、とはご挨拶ね。何の話かしら、西条くん』

『遊園地の話に決まってるんだろーがっ！ それ以外にあるか！』

『五月蠅いわね。耳元で怒鳴らないでくれない？ 損害賠償を請求するわよ』

『損害賠償って、何も損してねーだろーが！』

『私の気分が、害された』

ぐ、ちよつと上手いと思った自分が腹立たしい。

『で？ 吉田さんとは約束を取り付けたのかしら？』

『あん？ いや、それが微妙なんだよ』

『……微妙って？』

『ああ、約束しようと思ったんだが、吉田の両親が帰宅してきてな……ちよつとした修羅場だったぜ』

『……まさか、こんな時間まで吉田さんの家に居たの？』

『そーだよ。色々と大変だったんだぜ？ 吉田の両親に付き合っていることを説明したり、誤魔化したりだな』

『……』

『志木城？』

『黙りなさい。「属性」を使って殺すわよ？』

なんで殺されないといけないんだよ！ 意味がわかんねえ！ 声色が冗談に聞こえないんだけど！

『……はあー……もういいわ。とりあえず、吉田さんとは約束したのね？』

「たぶんな。まあ集合場所と時間は言ってるし、大丈夫だと思うけど」

『ならいいわ。もう用は無いんでしょ？ 私は忙しいんだけど』

「あつ、待て。お前、吉田のこと脅し」

ブチン！ と、一方的に切られる電話。

何なんだよアイツ……やけに不機嫌だったし。嫌なことでもあったのか？

まあ、あのチケットは志木城なりの気遣いなんだろうな。シヨック療法だが、まさしく『仮病に効く見舞い品』だったよ。そこら辺は感謝だ。あとはそのチャンスを俺が活かすだけ、か。

俺は電話帳に登録されている親友に電話を掛ける。

ある意味、恋愛の達人だ。

『もしもーし、こんな時間に掛けてくるなんて珍しいね司くん』

「ああ、翼に聞きたいことがあつてな。アドバイスっていうか、攻略方法というか」

『ん？ なんだか分からないけど、力になれるなら言ってみてよ』

翼こと名島翼は、俺の親友であり、重度のゲーマーだ。

俺はゲームに関して詳しいほうではないけれど、翼のやりこみ具合は狂気といっていい。

登校中、下校中、休み時間中、とゲームをする場所を選ばない。学校という名の楔がなかったら、一日中ゲームをしているんじゃないだろうか。

翼はパソコン部に所属しているが、目的は『自分のやりたいゲームを作ること』なのだそうだ。

将来の職業はゲーム雑誌編集者か、ゲームプログラマーか。

ジャンルは問わず、こなしたゲームは数百本と言われている。

まあ、だから、そのゲームの中には恋愛ゲームも含まれているわけ……

「あのさ……明日なんだけど、女の子と遊園地に行くことになってさ」

「ブッ!？」

おそらくは口に含んでいたであろう液体が発射される音が聞こえた。

「だ、大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題ない。じゃなくて! どーなってるの司くん!! 相手は志木城さん!？」

「な、なんで志木城が出てくるんだよ!」  
「ドキッとしちまったじゃねーか。」

「だって、司くんと仲のいい女子っていったら、志木城さんしか居ないじゃない。もしかして……違うの?」

「う……ぬう」

「嘘……ホントに? 誰、だれ、ダレなんだよ司くん! 僕の知ってる人?」

「どうしても、言わないと駄目か?」

「ホラホラ! 相手の名前と性格が分かんないと、アドバイスなんて出来ないよっ!」

たしかに、その通りではあるが……ん? 名前は関係くない? って、こーやって言い渋っても仕方ないか。

「……言っても怒らない?」

「僕が怒ったことなんて、数えるぐらいしかないでしょ? 何年の付き合いだと追ってるんだよ」

小学校からの付き合いだから、約九年だろうか。翼は温厚な性格なので、理不尽に怒ったところは見たことが無い。

信頼して、言ってみるか。

「えーっと、だな、その……吉田久留巳」

『ふえ？』

「だから！ 吉田久留巳と一緒に遊園地に行くってんだっ！ ゲー  
ムの知識でいいから、アドバイスをしてくれよー！」

『……………』

長い、ひたすら長い沈黙。

電話越しから伝わる、正体不明の威圧感。

「もしもし……………翼？」

『司くん……………一つだけ、いいかな』

「お、おう。な、なんだ？」

『リア充は爆発しろー！！』

ブチン！ ツーツーツー。

志木城と同様、一方的に電話を切られてしまった。

……………俺が、俺が何したってんだ！ 悪いことしたか！？ 理不尽  
なこと言ったか！？

つーか、なんだよ『リア充』って！ 知らない言葉を使って電話  
切るなよ！

あゝ、どーしたらいいんだ。恋愛経験ゼロの俺が、女子と二人っ  
きりで遊園地なんて無理だろーが。

くっそ、もういい！ こうなったら最後までやってやるよ！

ようやく俺の家に着いて、一呼吸。

とにかく……………服選び、からだよな？

## 第二十話 浮かれる心情（前書き）

二十話の登場人物  
さいじょうつかさ

西条司：主人公、属性は『炎』

よしだくるみ

吉田久留巳：属性は『癒』

## 第二十話 浮かれる心情

なんで遊園地って近所に無いんだろう。

自宅から徒歩で最寄の駅へ行き、最寄の駅から三回ほど乗り継いで一時間。計一時間三十分の時間と往復電車賃千円弱を消費して、俺は遊園地に辿り着いた。

まあ、要するに、何が言いたいのかというところ……

「腹減った」

志木城から渡されたのは遊園地のチケットまで。その他交通費はもちろん自費な訳で、現在一人暮らし中である俺には結構な痛手だったりする。

千円って……五百円の弁当だったら二つ、おにぎりやカップラーメンだったら七個は買えるんだぞ！？

昨日は吉田家の温かい配慮により晩御飯をご馳走になったが、緊張してろくに食べれなかったし……こりゃ今日の昼飯も抜きだな。

そんなことを心の中で愚痴りつつ、俺は目的地である遊園地入り口のゲートへ歩いていった。

快晴な空、肌寒い気温。

休日の遊園地とはいえ、営業時間は朝の十時からだ。人通りもまだ少ない。

俺の服装は、灰色のパーカーに紺のジーンズ。うーん、実に普通だ。そもそもファッションに興味なんて無いから、服自体持つてないんだよな。志木城と森林公園に行った時には突っ込まれてなかったから、服のセンスは大丈夫らしいけど。

腕時計で時間を確認すると、時計の針は九時十五分を指していた。集合時間は十時だから、ちょっと早かったかもな……

ははは……いや！ いやいやいや、なんだよ四十五分前に到着するって！ どー考えても早すぎるだろ！ どんだけ楽しみにしてたんだよっ！！俺は修学旅行に興奮してる中学生か！？



「……ふうー……浮かれすぎだ」

冷静になれ。いくら女子との初デートだからって、男の俺がリードしなくちゃ駄目だろ。

けどな、頭の中と身体は別物だ……もう頬の筋肉が緩みっぱなし。傍から見れば完璧に可笑しな人だと思われる。

幸いなことに時間はたっぷりあるし、吉田が来る前にこの二ヤケ面を消さないと。

嫌われてる上に変態だと思われたら堪ったもんじゃない。余計に距離が開いちゃうよ。せっかく志木城から貰ったチャンスなんだ。最大限に活かして吉田と仲良くならなきゃな。

しかし、俺は目に飛び込んできた光景によって、だらしない二ヤケ面を消すことになる。

遊園地の入り口、閉ざされたゲートを放心した表情で眺めている、黒髪セミロングな女の子が一人。

ご存知、吉田久留巳だ。

ヤバッ！……俺、もしかして集合時間を言い間違えてた！？

「おーい！ 吉田ー！」

俺はゲートに向かって急いで駆け寄る。

「あ……さ、西条くん。お、お早う」

「すまん！ 十時って言ったつもりだったんだが、待たせちゃったか？」

「う、ううん、そうじゃないの。あたしが勝手に早く着いただけで……ちゃんと集合時間は伝わってたから」

「そ、そうか」

「……ん？ じゃあ何でこんな時間に居るんだ？ ……ハッ！ ……も、もしかして……そんなに……」

そんなに志木城が怖いのか。

そう、吉田は志木城の巧みな罠に引っ掛かって、どうやら脅されているらしい。

少なからず嫌っているだろう俺と遊園地に居るのも、多分そのせいだ。

集合時間前に到着していたのも、志木城に対する圧倒的な恐怖心からか……不憫な子だ。

「……まだ、開いてないみたいだね」

「そうだな。つか、入園まで四十五分もあるし、どこかで座って待つての方がいいんじゃないか？ あつ、そこにベンチがあるし」

「うん……じゃ、座ろうか」

おそらくは行列用に用意されているのであろう、木製のベンチに腰を掛ける。

俺は万が一にも吉田に肩がぶつからないように、一人分のスペースを置いて座った。ベンチの端と端を座る感じで、互いに距離を取って。

「……………うう」

「……ゴホン」

おつかしいなあ……なんだろう、この重々しい空気は。

男女問わずクラスの人気者である吉田は、普段なら明るい性格のはずなんだが 相も変わらず俺限定で無口なのだ。

俺の記憶では、吉田に嫌われるようなことをした覚えなんて……あるな。

保健室での上半身全裸、放課後の教室で告白未遂、両親の前で彼氏宣言。思い返してみると、実に変態的行動の数々だ。

そりゃ嫌われても文句言えないよな……あれ？ ちょっと待て、保健室より前から嫌われてた気もするんだけど……よしっ、この際だから直接聞いてみるか。

「あの……………」  
「あ、あのね……………」

と、二人の声が重なってしまった。

「な、なんだ吉田？」

「さ、西条くんからでいいよ」

「いやいや、ここはレディーファーストってことで」

「そ、そうかな？」

こんな情けないレディーファーストもあつたもんじゃない。

「じ、じゃあ聞くけど、あ、あたしの格好……変じゃない？」

「へ？」

あまりにも思いがけない質問を受けて、俺は一瞬だけ硬直してしまふ。……な、に？ 吉田の格好だつて？

言われてみれば、吉田の私服姿を拝むのは初めてだ。

志木城とは違い、露出少なめな長めのスカートに、水色のチュニツクを着ている。ブレスレットやネックレス等のアクセサリーは一切つけておらず、一見して清楚でありながらも、動きやすそうな活発な印象を与えた。

しいて指摘するならば、その大きな白いバックだろうか。中に何が詰まっているか知らないが、小柄な吉田が持つのに重そうだ。

「うん、普通だし、変じゃない。に、似合ってる……と、思う」

うわっ！ 自分で喋つといて凄く恥ずかしい！ 何を言っただろ、俺。『可愛い』とか口走らなかつただけでもまだ良かったけど……

ホラ、また吉田が俯いちゃったよ！ あゝあ、やらかしてしまった。

俺は気まずい雰囲気を払拭するべく、別の話題を振る。

「ぎ、逆にさ！ 俺の格好は変じゃないか？ 俺ってあんまり服とか持ってなくて、女性の立場から見ても可笑しなところとか、無いかな？」

「えっ……うーんっ」と

吉田は顔を上げると、まじまじと俺の服を観察する。既に吉田の顔色は赤くて、例の如く怒りゲージが溜まっているんだろう。

「だ、大丈夫だと思うよ。か……カッコ、いいし」  
「ツッ!？」

予期せぬ言葉に、俺の心臓が鼓動を速める。  
急速な体温変化によって、頭がクラクラとしてきた。あ、熱い。  
しゃ、社交辞令なんだから、いちいち動揺すんなよ俺の体!!  
なんだかな……吉田は怒りで頬を染め、俺は俺でドギマギと赤面  
して……これじゃあ傍から見たら『不整脈カップル』だよ。語呂悪  
っ!

そんなこんなで、俺と吉田は四十五分もの間、少し話しては沈黙  
して、のサイクルを繰り返した。

まるで自己紹介を終えた直後のクラスメイトのように、距離感が  
つかめないまま話していたが、不思議と嫌な感じはしなかった。ま、  
志木城と違って会話の合間に悪口を挟まれるなんてことされないし  
な。平凡な日常会話の応酬だ。

そんでもって吉田と話していて気が付いたんだが、顔、特に目を  
見なければ人並みに会話できるみたいだ。

なんだか吉田に対して失礼な気もするけど、慣れるまでは仕方な  
い。

親しくなつて、時間を掛けて徐々に距離を縮めればいいんだから。  
そうこうしている内に人が増えてきて、遊園地のゲートがゆるや  
かに開いていく。

「それじゃあ……行くか!」

「うんっ!」

「おっほー! ひれえー!!」

グンと両手を高く空へ伸ばして、思いっきり叫ぶ。  
ゲートをくぐるとそこは異世界……って訳じゃないけど、開放的

な空間の広場に、見たこともないアトラクションがずらりと並んでいる。いつも見ている町並みとは違い、未知なる国に旅行しに来た感覚だ。否応なくテンションが上がるっ！

俺は周りの目も気にせず、年少時代に戻ってるかのようにワクワクしていた。

そんな上機嫌な俺の姿を見て、背後から吉田の笑い声が聞こえてくる。

「あははは、西条くんってあんまり遊園地に来たことないの？」

「ああ！ 最後に行ったのは小学校の低学年ぐらいかな？ さすがにそんな昔のことは覚えてねーよ。だから、遊園地には初めて来たようなモンかな。……吉田は結構行ってるのか？」

「あたしは友達とか家族とちよくちよく行ってるよ。あつ、そんなに頻繁には行かないけど、二年に一回ぐらいかな。……男の人と来たのは……初めてだけど」

「ん？ 悪い、最後になんて言ったんだ？ 声が小さくて聞き取れなかった」

「えっ！？ ううん、何でもないよ！」

バックで手が塞がっていない左手をブンブンと振る。

「……そのバック重そうだな。俺が持とうか？」

俺は軽い気持ちで言っただつもりだったんだが、吉田はサッとバックを隠すように後ろに回した。

「そそ、それより！ 色々とあるんだけど、何処に行く？」

「なんか誤魔化してんのか？ ……まあ、いいけど。」

「そーだな……俺はアトラクションとか分かんないし、行き先は吉田に頼んでもいいか？」

「うん、いいよ。じゃあね……まずはココかな」

本来は紅茶やコーヒーを入れる物であり、洋食器の一種で食器の外側と皿には西洋の綺麗な模様が施されている。巨大化したソレの

内側には円形状のハンドルが付いており、勢いよくグルグルと回すと、もれなく俺達の目まで回してくれる一品だ。

そう……一つ目のアトラクションは、ティーカップである。

広いフロアの中に巨大なティーカップが所狭しと置いてあって、中央にはこれまた巨大なポットがドデンと建っていた。

天井には景観を崩さない為かシャンデリアみたいな物まで備わっていて、夜でもないのに辺りを照らしている。

俺と吉田は対面するようにカップに座って、軽快なメロディが流れる中、カップ内のハンドルを適当に回していた。

「こ、これ、予想以上に、速いな」

「でしょー？ あたしのお気に入りなんだ！」

……正直言つて舐めてた。ティーカップは見た目の可愛らしさと裏腹に、グルングルンとカップごと回転することによって重力が発生して、俺の体を与える負担が大きい。

通常ならば互いの顔を見ながら乗るアトラクションなのだろうが、吉田は俺に顔を見られると緊張してしまうので、自然と俺の視線は他のティーカップの方に移る。

一カップル、二カップル、子連れの仲良し家族、三カップル、女友達同士、四カップル、五カップル……

乗っている面々は凄まじい頻度でカップルだらけだった。

「な、なあ吉田。この乗り物って……もしかして、カップル専用なんじゃないか？」

俺は吉田の顔を見ずに話しかけた、はずだったのに

「え、えええええええッ!？」

フロア内に轟く絶叫。

神速の手捌きによって回転されるハンドル。

「お、落ち着け吉田っ！ ぎぎぎぎ……回すな！ これ以上カップを回さないでくれー!!」

「……だ、大丈夫？ 西条くん。ご、ごめんね！ 本当にごめんなさいっ！！」

「うふっ……き、気持ち悪い……けど、大丈夫だ。気にするな」  
グルグルと目を回しながら、必死に言葉を紡ぐ。

俺の三半規管はもうズタボロになっていて、今は近くのオープンカフェみたいところで休憩中だ。

結局、暴走した吉田は俺達が乗ったティーカップをガムシヤラに回し続け、メロディが終わると同時に係員の人にこっぴどく叱られたのであった。

……何故か俺も一緒に。

せめてもの救いは、綺麗なティーカップに紅茶とコーヒー以外のモノをぶちまけなくてすんだことだ。

空腹万歳。俺の胃袋に感謝。

にしても吉田のヤツ……やけにピンピンしてやがるな……あれだけのGに適應できるなんて、将来はパイロットになったほうがいいんじゃないか？

そんなことをツラツラと思いつつ、俺は次のアトラクションを考えていた。

いつまでもこーやって休憩してたって面白くない。まだ始まったばかりだ。楽しまないと損だよな。

これで終わりにしたんじゃ、吉田との仲だって進展しない。

やっとのこと狂った視界が正常に戻ったので、俺は吉田の方を見てお願いした。

「次は……人が居なくて、静かな所がいいかな。いや、ホントに。切に願います、吉田サン」

切実すぎて思わず敬語になっちゃったよ。

「あ、あははは……え、えーっと、じゃあココかな」

吉田に案内された場所は、たしかに静かで人が居なかった。

それが逆に物々しい建物の雰囲気を最大限に引き出して、少なくとも夜には立ち寄りたくないと思わせる場所だ。

病院。外装はどこから見ても病院で、なんと言つか……夢が溢れる遊園地において、ただ一つ異彩を放っていた。

全体的に灰色のコンクリートで作られており、不気味な雰囲気を除けば、まるで本物の病院のようだ。

そう……二つ目のアトラクションは、ホラーハウスである。

「あ、あたしもココに来たのは初めてなんだけど……そ、想像してた以上に怖そうだね。えっと」

吉田はパラパラとパンフレットを捲って確認しているみたいだ。ホラーハウスの記事を見つけたようで、サーツと血の気が引いていく。

「……こ、ここに、この病院って本物なんだって……つ、使われなくなった病院を引き取って、本物の設備のまま残ってるって……」

「ふーん、納得」

どうりで本物っぽいと思った訳だ。ぱいも何も本物だったのなら、このリアルさが理解できる。廃墟と化した病院を遊園地側が引き取ったってことか。

俺が一人で頷いていると、吉田はプルプルと震えながら不思議そうに俺のことを見た。

「ささ、西条くんって、こーゆーの平気なの？」

「ん？ ははは……よーゆー。俺ってば幽霊とかUFOとかオカルトとか、非現実的なことは全然信じてないから。所詮はフィクション、作り物ってね。……っと、俺達の番みたいだぜ」

係員さんに促されて、俺と吉田は薄暗い病院の中へと入っていった。

どうやら二階建てのアトラクションのようで、一番奥にあるボールを拾ってくればクリアになるらしい。

なるほど……病院内の電気はついていなくて、空調が効いているのか外よりも若干寒い。全ては演出、怖がらせるための工夫だな。



本当ならここで吉田の手でも握ってやれば安心できるんだろうが、嫌われてる俺がそんなことしたら確実に殴られる。

ならばと思つて、俺は先頭に立って歩いた。こーゆー場所って大抵先に歩いている奴を襲ってくるんだよな。テレビとかで見たことがある。

「ままま待つて西条くんっ！」

突然、グツとパーカーの裾を引っ張られる。っと、ビックリした……よ、吉田か……

振り向くと、肩をきゅっと硬くして、半泣きになっている吉田が居た。

「ささ先に行かないでっ！ 置いてかないでよ……」

うつ！？ 上目遣いが異常に可愛いつ！ じゃなくて！

「わ、悪かった。じゃ、じゃあ裾な、ずっと掴んどけ。そうすれば離れなくてすむだろ？」

「う、うん、分かった。ごめんね」

ふう……俺は別の意味で心臓をバクバクとさせながら歩いていると

『キャーーーーーッ！！』

「っ！？ なんだ！？」

「いやーーーーー！！」

ガン、ドカドカ、ドン、バキ。

「痛っ！ おまつ、ちよっ！ それは俺の背中だから！ 殴るな吉田っ！ やめっ、バックは痛いって！」

突如として二階の方から悲鳴が聞こえてきた。

録音した声か？ 他のお客さんの声か？ なんにしても見事に引っかかったぜ……吉田がな！

「いゝやーッ！！ こっちこないでー！」

「ぐっ、イテテッ……ええい、こなくそ！」

俺は殴られるのを覚悟して、硬く握られた吉田の手を掴む。

「目を開けるバカタレツ！ 俺だ、西条司だ！」

「ふえ？ ……さい、じょう、くん？」

ようやく殺人的な連打が止まり、吉田の目が恐る恐る開く。

目の前に居る俺のことを認識したようで、吉田の顔は一瞬にして赤くなる。

「あわ、あわわわわ、あたし、あたし」

「待て待て、落ち着け。俺は全く気にしてないから、泣くのは止めてくれマジでっ！ さっきの悲鳴も作り物だって、幽霊とかじゃないから、ホントに！」

「あの、あの」

「い、いや、長年の肩こりが取れて助かったよ。うん、ありがとう、吉田。今の出来事は一切合切なかったことにして、次に進もうぜ、なっ！」

その後もひたすら謝る吉田をなんとかだめて、時には驚いて殴られて、俺達はいよいよ病院の二階に辿り着いた。

一番の奥って……アレだよな？

そこには血だらけの文字で『第二手術室』と書かれた部屋が待ち構えていた。

……い、嫌な予感しかしない。叩かれた全身がズキズキと痛む。

「こ、怖いなら帰るか？ 吉田。遠慮しなくてもいいんだぞ？ 俺ならもう満足してるから」

「だ、大丈夫！ 大丈夫だから……行かせて」

震える手で俺の裾を掴む。

吉田はどうしてもこのアトラクションを最後までやり遂げたいらしい。

何がそうさせるんだか。怖いもの見たさの好奇心か？

とにかく、俺は警戒しつつも、ゆっくりとした動作でドアを開く。ギギギギ……軋んだ音をあげながらドアが開ききると、見えてきたのは手術台の上に横たわっている男性。

死体……か？

その男性のお腹の中には黄色く光っているボールがあった。あのボールを拾ってくればアトラクションのクリアになるんだろう。

いわゆる正念場ってヤツだ。俺は後ろに居る吉田に話しかけた。

「……いいか、驚いても殴るの禁止。叫んでもいいけど、殴るのは禁止。はい、復唱っ！」

「お、驚いても殴るの禁止。さ、叫んでもいいけど、殴るのは禁止」  
「よし、オッケー。じゃあ……行くぞ」

スローモーションのように、ボール目掛けて手を伸ばす。

ゆっくり……ゆっくり……ゆっくり……取ったっ！！

ガ  
バ  
ツ  
！  
！

「ヴァアアアアアアア！」

案の定、死体だと思っていた男性が飛び跳ねてきて

「キャーーーーッ!!!」

「やっぱりこうなるのねーッ!」

「……とりあえず、ホラーが苦手なのはよく分かったよ。いや、俺も悪かった。やつぱりあの場面は、無理にでも引き返すべきだったんだ」

「ごめんなさい、西条くん！……あ、あたしのせいで」

「だ、大丈夫だって、気にすんなよ」

とは言ったものの……二半規管に加え、空腹、全身打撲  
まさ

俺達はホラーハウスの近くにあったベンチに座り、反省会を行っていた。

反省会……自分の過ちを認め、改めて考えること。

過ちとは選択したアトラクションのことであり、改めて考えると  
は今後の方針について、だ。

要は、吉田にアトラクションを選ばせては駄目だということを踏  
まえて、俺が選択する。

安全で、楽しくて、尚且つ俺の体に優しいアトラクションを考え  
よう。

そうになると、次は何処にしようかな。

ぐうぐう。

「あつ！」「えっ？」

またしても声が重なる。

は、ははは……や、ヤバイッ！？ これは西条司ランキングでも  
上位に食い込む恥ずかしさだ！

俺は吉田から隠れるようにして、自分の腹に拳を突き刺す。

ボス。

「ぐはっ！」

ぐうぐう。

くっそ！ 止まれ、鳴き止め、静まれ腹の虫っ！

ボス、ボス、ボス。

ぐうぐう……ぐう。

「あ、あの、西条くん？」

「こ、これは違うんだ、断じてお腹が減つてとかじゃなくて……  
ボス、ぼす、ガス。そうだよガスだ！ 胃とか腸とかのガスが筋肉  
の運動で動いている音なんだよ！ ほ、ほら、空気が壁にぶつかっ  
てる音で……」

「そ、それを『腹が鳴る』って言うんじゃないのかな？」

「ッ！？」

……その通りでした。自分で墓穴を掘っちゃったよ！

「あ、あのね！ さ、西条くんが良かったらんだけど……これ、

食べる？ あ、あたしが作っちゃったのでよければ……」

そう言つと、吉田は持っていたバックをゴソゴソとあさり、ベントの真ん中にドスンと重箱を置いた。

……もう一度言つ。バックから重箱を取り出したんだ。

バックが重そうだった原因はソレかよ！？ やけにデカイなあゝとは思つてたけど、重箱つてなんだよ！ しかも三段重ねじゃねえーか……！

ぐう~~~~ぐうぐう。

だーもう！ 腹の虫が気にならないくらい驚いたよ。それに……すごく嬉しい。

「い、いいのか？」

「うん。もうお昼だし、折角なら一緒に食べようかな……なんて」

ああ……俺は非現実的なことなんて信じてなかったけど 神様はちゃんと居たんだな。

飢餓状態の俺に、クラスメイト（女子）の手料理なんてお恵みを

……有難う御座います。

「さ、西条くん！？ なんで泣いてるの！？」

「……グス……い、いや、なんでもないんだ。さあ、早く食べよう。実はメチャクチャ腹空いてんだ」

「あ、あははは……知ってるよ」

吉田は苦笑して、手馴れた感じで一段一段開けていく。

一番下はおにぎりの詰め合わせ。オーソドックな白米と海苔のおにぎり、ゴマがまぶしてあるおにぎり、シソで仄かにピンク色のおにぎり等、多種多彩なおにぎりが隙間なく詰められていた。う、美味そう……

つてえことは、一段目と二段目はおかずか？

生唾を抑えながら期待して待っていると……吉田のギョツとした声が聞こえてきた。

「えっ！」

それにつられて、俺も重箱の中身を覗く。

うつ……これは酷い。

予想通り。重箱の一段目と二段目はおかず、で間違いなかったんだらう。

しかし、なんと言うか、混戦模様というか、双方入り乱れての乱戦状態というか。

端的に表現するなら……グチャグチャになっていたのだ。

思い出されるのは先程のティーカップとホラーハウス。きっとあの時の衝撃で崩れてしまったんだらう。

「ま、まあ食えないことはないし、空腹は最大の調味料なんて言うしなあ！ 大丈夫だって！ 俺が残さず食べるから！ あゝ、箸とか持ってない？」

「う、うん、持ってるよ。はい、割り箸だけど」

「サンキュー」

俺は吉田から割り箸を受け取り、半分にパチンと割って、シソのおにぎりを掴む。

「おしつ！ そんじゃあ、いただきま」

「うあゝ あゝああああん、おがぁーざぁーん……どこなのぉー！」

な、なんだあ？

俺はあんぐりと口を開けたまま、声の主を探す。

居た。七歳ぐらいの男の子が、一人で泣いている。

……迷子か。

「すまん、吉田。先に食べててくれ。あと、このおにぎりは貰っていくな」

「あ、西条くん」

俺は吉田の返事も聞かず、割り箸でおにぎりを掴んだまま子供に近寄った。

男の子は俺に気付いたようで、赤く泣き腫らした顔を俺に向ける。あゝあ、そんなに母親とはぐれたのが辛かったのか。

「よー、ちっこいの。母ちゃんとはぐれたのか？」

「うゝ、うう、お兄ちゃん、だれゝ」

「俺の名前は西条司ってんだ。ちっこいのの名前はなんて言うんだ？」

「あゝ あああゝ、わがんだいよー！」

そんな訳あるまいに。

再び口を大きく開けて泣き喚いている男の子に 俺は箸で搦んでいたおにぎりを、ねじ込んだ。

「ん！ むぐつ！ ぐうゝぐうー！」

「ああ、うつさい！ 腹が減ってるから泣くんだよ。味わって食べ、ちっこいの！」

男の子はおにぎりで口が塞がれているのでまともに泣くことが出来ず、諦めてモグモグと咀嚼し始めた。

そうすると、次第に歪んでいた顔が消えていく。

「……美味かったか？」

「ズ、ズズウ、うゝん、おいじがった」

「ほれ、鼻水拭けって……よし、そんなら名前を覚えてくれよ。俺がなんとかしてやるから」

「……山田……五郎」

なんつーネーミングだよ。俺の人生で間違いなく覚えやすい部類に入るぞ。

「おっし、五郎だな。じゃあ、まずは腹ごしらえだ。向こうにもおにぎりがあるから、一緒に行こうぜ」

「え……でも……」

「いいから！ 遠慮するなって」

俺は強引に五郎の手を取って、吉田の方へ戻っていった。

「あー、悪い吉田。もう一人増えちまったけど、いいか？」

「うん、あたしは大丈夫だけど……その子はどうしたの？」

「母親とはぐれたんだってよ。それで今から腹ごしらえだ。割り箸って余ってるか？」

「も、もうないけど、あたしので良ければ……」

「ああ、平気平気」

俺は持っていた割り箸をさらにバキツと真ん中でへし折って、五郎に差し出す。

「ほれ、ちっこいヤツにはちっこい箸で充分だろ。ただし、分けてやるのは箸までだ。俺は腹が減ってんだよ。二段分は食わないと気がすまないんだ」

「え？」

「つーわけで、吉田。お前と五郎は三段目のおにぎりだけで我慢してくれ。悪いけど、俺は一段目と二段目を全部貰うわ」

「え……でも……」

「反論は却下だ。そんじゃあ、改めて いただきます！」

おかずはグチャグチャだったけど、吉田の手料理は涙が出るほど美味かった。

昼食を綺麗に平らげた俺達は、近くに居た係員の案内で五郎を迷子センターに連れて行き、母親が迎えに来るまで五郎と一緒に居てやった。

……迷子って一人になると心細いからな。念のためだ。

「じゃあな、五郎。また迷子になるなよ」

「またね、五郎くん」

「うん、またね！ お兄ちゃん、お姉ちゃん！」

俺達は手を振って、母親の元に帰る五郎を見送った。

……ふうー……これで一件落着、か。

俺は軽く嘆息して吉田に謝る。

「すまん、吉田。せっかくの遊園地だったのに、わざわざ付き合



せちゃって」

「うっん。あたしが見つけてたら、西条くんと同じように助けてたと思う。だから気にしないで」

「っ」

その時、俺は初めて真正面から吉田の笑顔を見た。

……つとに、こいつは。

自分の顔がカーッと熱くなっていくのが分かる。

「どうしたの？ 西条くん」

覗き込むような吉田の瞳と目が合って、今度は俺の方が視線を逸らす。

「な、なんでもねーよ。そんなことより、次はアレに乗ろうぜ。一度は乗ってみたかったんだ」

はぐらかすように人差し指で空を指して、カラカラと回る乗り物に注目させた。

「あ、アレって……」

そう……安全で、楽しくて、尚且つ俺の体に優しいアトラクションって言ったら、これしかないだろう。

「観覧車だよ」

高さ60m、所要時間は約15分の巨大な観覧車。

夜はライトアップされるであろう色彩豊かな車輪状のフレームと、足元から天井まで全て透明なゴンドラが特徴的だ。

今日は天気がいいし、頂上付近からは広大な遊園地の全体が見渡せることだろう。

「で、観覧車の前まで来たんだが……」

吉田の顔が異常なまでに青ざめている。というか、下しか見てない。なるべく観覧車を視認しないようにしているみたいだ。

「あー、もしかして嫌だったか？ 乗り飽きてるとか。だったら俺だけで乗ってくるけど……」

「あ、あははは……だ、大丈夫。あたしは大丈夫、あたしは大丈夫、あたしは絶対大丈夫」

「オイ！　なんか自己暗示かてるじゃねえかよ！」

と、並んでいた列が動き出して、俺達の順番になってしまった。透明なゴンドラに乗り込むと、俺と吉田は互いに向かい合うように座る。

ゴウンゴウンと音を立てて、ゴンドラは空へ向かって上昇していく。

「うおー、本当に中はスケスケだな。あつ、ほら、真上の人まで見えるぞ！」

「……………」

重たい空気を一新しようと思ったんだが　失敗。  
なかなか絶景だったが、吉田は頑として目を閉じている。

「その、吉田……お前つて、もしかしなくても高所恐怖症？」

言った瞬間、吉田の体がビクンと反応した。非常に分かりやすいリアクションだな、おい。

「……はあ………ったく、下で待ってたら良かったのに」

「だ、だって……西条くんが乗りたがってたから」

いや、まあそりゃそうだけども、高所恐怖症だつて言ってくれば乗らなかったのに……うーん、よく分かん。

「ともかく事情は分かった。吉田はそのまま目を閉じてたほうがいいな。もう折り返し地点だし、あと数分で下りられるから」

「う、うん。ごめんなさい」

「謝りすぎだつて。遊園地なんだし、楽しいこつぜ」

「……うん、そだね」

なだらかに回転する観覧車の中で、俺はふと思う。

目は合わせられなかったけど、今日一日で吉田との距離は縮まったのだろうか。

優しくて、クラスの人気者で、明るい性格で、料理が得意で、パニくると少しヒステリックで、ホラーが苦手で……笑顔が素敵な女

の子。

俺からは色々と知ることができたけど、吉田はどう思ってるんだろう。

嫌われたままかな。そもそも興味が無かったりして。仕方なく付き合ってるだけで、見せてきた顔は全部嘘だった。

ははは、やめよう。

相手のことを疑ってても、信頼は生まれない。信じてないと頼れないんだ。

俺は吉田のことを本気で信じて、力を頼ろう。

そう、自分の中で結論を出した時。

俺は

忘れかけていた『非日常』を思い出すことになる。

## 第二十話 浮かれる心情（後書き）

つ、疲れました。今回の話で、一話あたりの長文記録を更新しました。

長々と書いた日常パートでしたが、一箇所でもクスリと笑って頂けたシーンあったのなら幸いです。

それでは、次回は久しぶりのバトルです。

## 第二十一話 墮ちる人々（前書き）

二十一話の登場人物

さいじょうつかさ

西条司：主人公、属性は『炎』

よしだくるみ

吉田久留巳：属性は『癒』

たにわきまさおみ

谷脇雅臣：属性は『岩』

しきじょうれいみ

志木城怜実：属性は『氷』

## 第二十一話 墮ちる人々

阿鼻叫喚が聞こえ、同時に衝撃が起こった。

『ぎゃああああああアアアアッ！？』

ガゴッ。

「うおっ！」「キャッ！」

突如として俺達が乗っていたゴンゴラが激しく揺れ、なだらかに地上へと向かっていた動きが止まる。

止まった反動が次第に収まり、俺は状況を確認するためにゴンドラの外を見た。

見て、しまった。

「な……んだ、これ」

「ど、どうしたの？ 西条くん」

高所恐怖症の為、目を閉じていたまま向かいに座っていた吉田が聞いてきた。

が、俺は即座に返事をする事ができない。

俺達のゴンドラが停滞している高さは、地上から判断して約30m。この観覧車の頂上が60mだから、折り返して丁度半分といった所だ。

ビルの高さにして、約10階。

俺達のゴンドラと水平に 『崖』が存在していた。

その崖は一般的な崖とは違い、自然に風化してできた緩やかな地形ではなく、酷く人工的で恐ろしく急斜面、例えるなら直角三角形のような形をしていた。

遊園地の地面だったのであろうコンクリートはそのままに、その

下に土や岩盤などが混ざった地層が見える。水道管も電線もお構いなしに。

高く。高く。

断層が確認できるほどに、地面がせり上がっていたんだ。

異常。

ゴンドラの外側、俺が視認する、何もかもが、奇怪な景色。

遊園地のアトラクション？ 何かのイベント？ そんな馬鹿な発想が瞬く間に消え、俺の目の前で起きている現象を肯定させる。

夢のような出来事。

日常から乖離した非日常。

常識では推し量れない事象。

「これ、は……『属者』、か？」

辛うじて口から出た言葉は何故か疑問形になってしまったが、俺の心の中では既に確信があった。

科学では立証できない状況。まず『属者』の仕業と見て間違いないだろう。

けれども、俺は、何かから、目と耳を背けている。

「さ、西条くん？」

ハッと正氣に戻り、俺は吉田の方を見ると、吉田はビクビクと怖がりながら、こう言った。

「こ、この悲鳴　なに？」

「うつ、づ」

途端に込み上げてくる、嫌悪感と吐き気。

俺は内臓が飛び出てきそうな胸を押さえながら、必死で吐き気に抵抗する。

気持ち悪い。見たくない。気持ち悪い。聞きたくない。気持ち悪い。

ぐ……駄目だっ！

目を背けるな、耳を塞ぐんじゃない！

状況を整理しろ。

現実を、正しく認識するんだ。

「ぐ、あ　はあっ！」

俺は荒々しく息を吐いて、もう一度ゴンドラの外側を見た。

先程とは違い、見たものを現実として、脳に映像を送り込む。

モノクロだった風景に、色が加わる。

赤い。

崖。断崖絶壁。急斜面の地面。

その真下には、赤い水溜りと……人間。

転落して、打ち付けられた亡骸の数々。

訳も分らず逃げ惑う人々。

喧騒な叫び声。悲鳴、怒号、断末魔。

そして　嘲笑。

我先に逃げる人々を追うように、灰色の服を着た男は悠々と歩いていた。

薄汚れた衣類に、所々返り血を浴びた赤色を滲ませて。

「クハ、クハハ……クツハハハハハハハハハハハハハハハハッ！」  
狂気を帯びた犯罪者は笑みを浮かび続け、罪なき人間はただ墮ちる。

……どこが、可笑しい。何が楽しいんだ！　どうして喜んでいられる！？

「『岩角』オッ！」

男が語彙を唱えた刹那　何の前触れもなく地面から飛び出してくる、鋭利なコンクリート。

串刺し。貫かれる人。噴出される真紅の血しぶき。

繰り返される殺戮。平然と行われる虐殺。

死体と屍と骸の山。

増えていく赤い液体と肉塊。

俺は……自分の心の中が、急速に冷えていくのを感じた。



寒い。

粉になった母さんの時とは違う。

どうしようもなくリアルで、生々しい感覚。

胸の奥が痺れて、何にも考えられない。

言うなれば 心の麻痺。

「西条くん！ 西条くん！！」

声が聞こえる……悲痛で、ひどく怯えている……よし、だ？

凍り付いていた意識が、その声によって氷解された。

「うつ、ぐ……よ、吉田……外、は……見るんじゃない！！」

「え？」

俺の鬼気迫る言い方に反応して、閉ざされていた吉田の目が……開いてしまった。

目を見開いて、瞠目して、知覚して、地獄のような光景を理解してしまった。

「う、嘘……い、いや……いやああああッ！！」

俺は自ら招いた迂闊さに呼吸を忘れる。

「あ つ、い」

くっそ、馬鹿か俺はっ！

吉田の心情を察して、キリキリと胃が締め付けられた。  
完全な悪循環だ。

「っ……このぉ！」

ガンツとゴンドラに自分の額を叩きつけて、散漫した思考の一切を停止させる。

ツッ……よ……し、多少なりとも冷静になった。

まずは、アイツ あの男だ。

以前、志木城から教わった言葉を思い出す。

『属者』としての私生活の過ごし方。一つ、日常に『綻び』を見せないこと。二つ、故意に目立って他の『属者』をおびき寄せること。その考えが正しければ、あの男は後者だろう。

ただし、佐久間が行ったことよりも、遙かに凶悪で、まるで意味

がない。

押さえようと思っても、沸々と俺の怒りが増大していく。

「な、んで……殺すんだよ」

おびき寄せる方法なんて、他に幾らでもあるだろう！ 何で無意味な惨殺を繰り返すんだよ！

……何故、そんなに笑っていられるんだっ！！  
プツンッ。

スイッチが切り替わったように、俺の心が熱くなった。

「『炎包』ッ！！」

気付いた時には、俺は後先も考えずゴンドラのドアに向かって『炎包』を放っていた。

鉄をも溶かす俺の『炎包』は、透明なドアを跡形もなく燃やし尽くす。

涼しい隙間風が入り込み、熱い体を否応なく冷ました。

俺はゴンドラから身を乗り出して下を見る。

地上までの距離は30m。

目眩がするほど高い。高所恐怖症でなくとも、足が竦んでガクガクと震える。

だが、迷ってる場合じゃない！！

「っ……吉田あ！」

俺は身を翻して、真正面から吉田の肩を強く掴む。

心底怯えているのだろう。吉田は目を開いた状態で反応がない。

瞳には何も映っていないくて、さながら虚空を眺めているようだ。

そんな虚ろな吉田に、俺は呼びかける。

心に届くように、顔を見て。

「吉田……俺を、助けてくれ」

一度も話せなかった 見詰め合ったままでの会話。

「守れる命があるのなら、助けられる命があるのなら、俺は……救いたいんだ！ 『属者』だからなんて関係ない！ 俺は、この惨状

が見過ごせないんだよ!!」

俺と吉田は、互いの目を逸らさない。

「……けれど、俺一人の力じゃ足りない。俺だけじゃ誰も救えないんだ。……頼むよ、最後まで足掻かせてくれ。俺を信じて……力を貸してくれ!!」

少なくとも、俺達がこうして傍観しているより、事態は改善するはずなんだ。

「……さ、西条……くん」

暫くして、吉田の瞳に光彩が戻る。

「お前の力が必要なんだ。救う為に……一緒に戦ってくれ!!」

吉田は決意したように そつと頷いてくれた。

ホント、お前は強いよ。俺なんかとは比べ物にならない。一人の人間として、尊敬する。

「よし……なら、とりあえずココからの脱出だ」

俺は肩から手を放して、そのまま吉田の背中と膝の裏に手を回す。足腰に力を入れて、勢いよく立ち上がった。

言わずもがな……吉田のことを、お姫様だつこだ。

「っ！ 西条くん!？」

「いいから、しっかり掴まっとけ!」

ああ、最低だ。俺は最低なことをやろうとしている。

確実に嫌われる。だけど……今は構わない。

俺は吉田の顔が紅潮しているのにも構わず、溶けたゴンドラのドアへと移動する。

「え、え? ……ヒッ!？」

吉田が怖がるのも無理はない。

ビル10階分の高さ。

頭から落ちれば即死。足から落ちても骨折は免れない。ここから

『一人』で飛び降りるなんて、自殺行為に等しいだろう。

「けどなあ……『二人』なら違っただろーがあッ!!」

一步、二歩、勇気がない俺は、飛び降りる瞬間から目をつぶった。

「すうー……はあー……いっけええええ！」

あとは、重力に引っ張られて、ひたすら落ちるだけ。

耳に届くのは吹き荒ぶ風の音だけ。

さないように捕まえる。

俺の足元から鈍い音が聞こえ、ようやく地上に着いたのだと把握できた。

落下した際の衝撃を一身に受けて、耐え切れず俯けに倒れる。

俺は五日ぶりに、腹の底から嗚咽を吐き出した。

激突した際の重さが、踵、膝、腰、さらには関節の繊維をスタボロにする。

クッションとして軽く膝を畳んでいた為、足の骨が突き出して皮膚を切り裂く。

いたい……痛い！  
いたい！  
イタいッ！！

「い、が……よ、しだ……は？」

た。

と、思いかけた時。

澄んだ声が聞こえ、折れている膝に暖かい掌が触れた。

なんだろう、懐かしい感じだ。くすぐつたい？ 優しい？ 違うな……包まれてる？

俺の内側から、よく分からない感情が溢れてくる。

徐々にだが、千切れた繊維が修復して、折れた骨がくつついて、破れた皮膚が治っていく。

そう、俺一人だったら単なる自殺行為だが、吉田が一緒なら話は別だ。

傷ついた体を治せる力、『癒』の属性があるんだから。

「っ！ はあ……はあ……はあ……」

立ち上がると、後ろから吉田の乱れた呼吸が聞こえてきた。全力で属性を使って疲労しているんだろう。

「ありがとう」

俺は吉田に背を向けたまま感謝した。とてもじゃないけど、顔向けない。

……ごめん。無茶やって、ごめんな。後でいくらでも嫌いになつてくれていいから。

今だけは、我慢してくれ。

「俺がアイツ……『属者』を引きつけるから、吉田は『生きてる人』の手当をしてやってくれ」

そう、出来るだけ感情を込めずに言った。

クソッ、心が痛くて胸が張り裂けそう。

吉田に頼んだことは、死者と生者を選別すること。それは、俺以上に死んだ人を見ることになる。『属者』なんかと戦うことよりもずっと辛くて苦しい。代われるもんなら、代わってやりたいさ。

だけど、俺には戦うことしか出来ないから。少しでも犠牲を出さない為に、アイツを倒すことしか出来ないから。

「……行ってくる」

俺は最後まで後ろを振り向かず、悲鳴が聞こえる方へと走った。

不自然な崖が作られた広場は、想像していたよりも混沌としてい



球状の丸みを帯びた形は、紛れもなく岩石。  
巨大な塊が、宙に浮き、高く上り、そして落ちる。

ぐしゃり、と……潰した。

あっさりと。

躊躇なく。

跡形もなく。

非道に。

殺した。

アイツは、違う。

佐久間が望んだ『自分の居場所』とも、堂島が望んだ『永遠の愛』  
とも、俺達が望んでいる……『現実への帰還』とも。

何もかもが違う。

老若男女関係なく、無作為に殺して、溺れるように笑う。

叶えたい望みもなく、大切な願いもなく、守りたい人も居ない。  
そんな事が、許されるのか？

……いいや、許さない。問うまでもねえ。

俺の中の『ルール』が、許すものか！

「……あ、ああ、ああああああああッ！！！」  
捨てた。

自分の中で、何かが捨てられた。

塵にしてやる。

「『炎』ッ！！」

右手を照準にして、相手の『胴体』を狙った。

足でもなく、二の腕でもなく、胴体。

殺すつもりで。二度目の殺意を込めて。

「おおおおおおおおお！！」

体現した炎は、鉄をも溶かす紅蓮の業火　ではなかった。ましてや、台風のように赤い渦を巻いていない。

『青い』炎の直線。

蒼炎。

「クハハハッ！　『岩壁』！！」

笑みを保ったまま、男の前にそそり立つ分厚い壁。

ふざけるな……そんなモンで……コレが防げると思ってたのか？

ああ、確かに『火生土』で俺が不利だろーよ。燃やした灰が土に還るように、普通なら土に負けるのが自然の法則ってヤツなんだろう。

それが『相生』の原理だ。

だけどなあ……そんなこと、関係ねえんだよッ！！

「貫徹ええええええええええええええええええ！！」

「クハ？」

その時、『相生』の原理が崩れ、男の『岩壁』を『相殺』する。

瞬く間に土の水分が消え、灰となった壁を貫き蒼炎が直撃した。

直撃、したんだ。

ただし、燃やせたのは男が着ていた服と、薄皮だけ。

トドメは刺せなかった。

なぜならば

「がはっ！　……ぜえ、ぜえ、ぜえ……」

精神力が吸い尽くされ、足に力が入らなくなつて、片膝が落ちる。加えて、過呼吸状態。

辺り一帯の酸素が蒼炎によって奪われ、失せた。

「くっそ……ヒュウ……っ、ぜえ」

呼吸困難、目眩、耳鳴り、激しい眠気が襲ってくる。

た、おれんなっ！　まだ、アイツが生きてんだ！　許さないんだろーが！！

霞む目で男を見ると、俺とは対極的にピンピンとしていた。



これが……『相生』相手の戦い、か。

思い知らされる、圧倒的なアドバンテージ。

「ク、クハハハア……みiiiiiiiiつけたああ」  
ゾクリ。

男の声を聞いた途端、肌が栗立ち背筋が凍った。

俺とは住んでいる世界が違う、殺人者の笑み。

ド、ド、ド、と脈が速くなる。

「クッククツ……刑務所からずっと探してたんだ。やっと見つけたあ。ひいいとおりいめえ」

っ……ヤバイ、ヤバイ、ヤバイッ！！

「『陽炎』ッ！！」

「『岩角』お！」

刹那、景色が揺らいで 俺の左肩にコンクリートが突き刺さった。

あたしは、ゴンドラの中で西条くんを目を合わせられた時、志木城さんに言われた言葉を思い出した。

『あなたはあなたの戦いをしなさい』

あたしの戦い。

西条くんみたいに『属者』と戦うことじゃなくて、志木城さんみたいに頭を使うことでもなくて。

あたしだけの、戦い。

『癒』という力。

初めは、誰も傷つけないから選んだ『属性』だった。

殺すとか、殺されるとか、人から真名を奪うとか、そんな物騒な

ことをしたくなくて。

でも、それは表側で。表面上だけで。

裏側では、あたし自身も傷つきたくなかったんだと思う。

関わりたくなかったんだと思う。

世界のどこかで傷ついている人から目を背けて、流れに身を任せて、持っている力を隠して、自分を殺して。

だけど、それは違う。

あたしの『目指している人』とは、違う生き方。

都合のいいことしか見てなくて、都合の悪いことから逃げて、嫌われない程度に優しくして。

そんなんじゃ、駄目だよ。

西条くん……追いつけないよね。

あたしだけの戦い。

誰からも目を背けずに、傷ついている人を癒して、治すこと。

精神が尽きるまで戦うこと。

救える人を救って、助けられる人を助けて、事実を事実として受け止める。

そうだよ……西条くん。

「はぁ、はぁ、はぁ……ぐっ……く」

左肩の痛みが丁度いい眠気覚ましになった。

俺は呼吸を整えつつ、静かに腰を下ろす。

計三回の『陽炎』を使って、俺はあの男をホラーハウスに引き付けた。

途中で何度か逃げ惑う人と出くわしたが、どうやらアイツは『属者』を狙っているようだったので、幸いなことに俺だけに攻撃を集中してきている。

なんとか『陽炎』で躲そうとしたんだが……結果、左肩と左腕が

使い物にならなくなった。まあ、致命傷を受けなくて済んだだけでも上出来だろう。

それだけの格差。力の関係。火と土。

多分、ヤツの『岩角』は目標を視認していないと使えない技だ。相手の死角からコンクリートで串刺しにする。

そういう意味で、本物の病院であるホラーハウスの入り組んだ地形が有利だろう。

不幸中の幸いか、現在ホラーハウスに人は居ない。

俺は二階の奥にある『第二手術室』の扉を閉めて、少しでも精神力を回復させる。

おそらく、次の接触が決着になる。それまでに、相手の能力を分析しておかないと。

相手が使ってきた技は、『岩角』、『岩石』、『岩壁』、そして……あの『崖』だ。

規模から見ても、あの『崖』がアイツの切り札で間違いないだろう。一瞬で地面がせり上がり、30mという高層から転落させられたら……今度こそ死ぬ。

とにかく、切り札を喰らっちゃ駄目だ。それだけは念頭に置いておこう。

となると佐久間の時と同様、不意打ちしかない、か。

『相生』を覆せるだろう蒼炎を放てるのも、良くてあと一発。

チャンスは一度、体はボロボロ、相性最悪な相手……八方塞がりってヤツだ。

震える手で、ポケットに入っている携帯電話を取り出す。

……はあ……情けねえ。保険を掛けるなんてガラじゃないんだが、今回ばかりは流石に死ぬかもしれない。

発信ボタンを押して、数回の着信音。

『何の用件かしら、西条くん。この前も言っただけで、私は忙しいの。あなた達のノロケ話を聞いてあげられるほど、私は暇な人間じゃないのよ』

相変わらずの憎まれ口。普段なら楽しい会話の応酬が出来たかもしれないが、俺にそんな余裕は無い。

「志木城……『属者』が出た」

「っ！？」

電話越しの空気がガラツと変わる。

「今、何処なの？ 相手の元素と属性は？ 吉田さんは平気？ というか、あなたは大丈夫なんでしょうね？ ああ、もうっ！ とにかく、私もそっちに向かうわ。遊園地よね？」

一転して怒涛の質問攻め。ははは……ったく、コイツは頼りになるやつだよ、ホントに。

俺は質問された内容を一通り話した。相手の技も、性格も、身なりの特徴も、全部。

俺が死んでも……引き継げるように。

志木城は終始冷静に受け答えて、思考するように少し沈黙した。

「……そう……西条くん、こんな時に言う台詞じゃないけれど、ごめんなさい。今回の件、全て私が招いた軽率だったわ」

「違う、志木城のせいじゃないだろ。お前は俺と吉田のことを考えてくれたんだろーが。感謝こそすれ、謝られる筋合いなんてしてねーよ」

「それでも、よ。……だけどね、西条くん。勘違いして、絶望はしないで頂戴。私達はまだ取り返せる。失ったものも、死んでしまった人も、まだ取り返せるの」

「……………」

ああ、そうだろーよ。俺達の『願い』はそういうモノだ。

「だから……今は逃げなさい」

「なっ！？」

逃、げろ？ 予想外の言葉だ。……いや、そうじゃない。予想は出来た。志木城の口から聞きたくはなかったただけだ。

志木城は淡々と告げる。

「あなた達じゃ、その男には勝てないわ。西条くんは『火』、吉田

さんは「水」、その男は「土」。それがどれだけ不利なのか、分っているんでしょう？ 「火生土」に「土剋水」なのよ。逃げるのが上策、少し考えれば分ることでしょう」

「だからって」

『大切なのは！ 私達が最後まで生き残ることでしょう！ 生き抜いて、願いを叶えることが重要なんじゃない！ 一時の感情で突っ走って、勝手に死ぬのなんて許さないわっ！』

「っ……！」

ピシヤリと、俺の考えていたことが見抜かれていた。

志木城は珍しく怒鳴り続ける。

『西条くんだって言ったわよね。「逃げるって言うのは、大局的見れば得策」だって、なら、今がその大局的に判断するところでしょう！』

……分ってる。志木城の言い分が正しいんだろう。

だけどな。

この感情は。

「……理屈じゃねーんだよ」

ブチッと通話を切る。

長めにボタンを押して、電源すら切る。

理屈じゃ、ない。

守るべき人を殺されて、殺した相手を殺すっていうのは……理屈じゃないんだよ。

こんな環境に身を置いて、救われずに殺された人が居て、助けられずに殺された人が居て、不条理を感じて、気が付いちまった。

この思いは……俺のエゴだ。

捨ててしまった感情が、消えた。

心に残るのは、どうしようもない殺意と、僅かな憂い。

「ごめんな、志木城。俺は……戦うよ」

ヒタヒタと歩く音が聞こえる。

人気がないホラーハウス。だから、余計にその足音が響く。  
第二手術室に向けて、音が強くなる。

バンッ！！

投擲された岩によって、ドアが粉々に吹っ飛んだ。

上策。ドアを開けた瞬間に奇襲に遭うかもしれない。その点で、  
ドアを壊すというのは正解だ。

ヒタヒタ、ヒタヒタ。

足音がドアの前で止まる。

「どおおおこだああああ。でえておいでええええ」

ホラーハウスに相応しく、聞こえてくる不気味な声。

人間、どこまで劣悪な環境で育てば、ここまで歪むことができる  
のだろう。

満面の笑みで、部屋の外から覗き込む。

気色悪い。

人を人として見ていない。人を物としか見ていない。

人を……邪魔物としか思っていない。

そうやって　今までに何人殺してきたんだっ！！

「……………」

あくまでも声には出さない。

感情を押さえつけろ、吐き出すまで溜め込め。

まだまだ、攻撃するのは……今じゃない。

ガンッ！　ガンッ！　ガンッ！

隠れられそうな場所。手術台、椅子、医療器具が詰まっている口  
ツカー、台車が破壊されていく。

上策。奇襲を行うなら身を隠すのは鉄則だ。ならば、隠れられそ  
うな場所は壊すに限る。

ガンツ！ ガンツ！ ガンツ！

その後も、男は部屋中にある資材を壊した。

「クハハ？ …… いなあああいなあああ」

部屋の外から観察しても駄目だったろう？ さあ、中に入れ。

ヒタヒタ、ヒタヒタ。

中に…… 入った。

下策。それは、油断してもんだろーが！！

「今だッ！！」

俺が隠れていた場所。そこは、別に大した場所じゃない。

ドアの真横。

手術室のドアは、すべからく大きい為、それ故に出入り口付近のスペースも広い。

部屋の中に入るか、顔を乗り出して見ない限り、視野に納めることはできない。

子供が『かくれんぼ』で使って、鬼をやり過ごす為の常套手段だ。こんな単純な戦法に引つ掛かるくらいに…… テメエは舐めすぎなんだよ！！

コイツには…… イメージさせる時間さえも与えない。

「『炎』ッ！！」

右手はずっと構えていた。

頭が出たら、頭を焼くつもりだった。胴体が出たら、胴体を燃やすつもりだった。体全体が出たら、頭を焦がしてやるつもりだった。許せないから。殺してやりたいから。

……なのに、志木城と吉田の顔をチラついて。

右手から放たれた『赤い』炎が、男の『腕』を燃やし尽くした。  
「がああああああああああああああッ！！」

「っ、く、か……う」

最後の一発を撃って、意識が落ちそうになる。

肩の痛みを通り越して、眠気が押し寄せてくる。

まだ…… まだだ、もう、少し。

正座をするように両膝が地べたに付いたけど、力が入らなくて頭も垂れたけど、右腕だけは必死に動かす。

「うがあああああああああああー!!」

五月蠅く聞こえる、悲鳴の方向に。

「ひ……」

叫び声が、恐怖に変わった。

「ひ、ひい」

軋む右腕を、伸ばす。

「iiiiiiiiiiiiiiiiiiiiっ!!」

掌で、ね、らいを、さだ、めて。

「が、がが、『岩窟』う!!」

思い、を、こめて。

「『え」

……………意識が、堕ちた。



## 第二十一話 堕ちる人々（後書き）

グロテスクな表現が満載で、すいませんでしたっ！  
それでは、次回だけ主人公が変わります。

## 第二十二話 空を飛ぶ翼（前書き）

二十二話の登場人物

なじまつばさ

名島翼：主人公

さいじょうつかさ

西条司：友達

しきじょうれいみ

志木城怜実：クラスメイト

よしだくるみ

吉田久留巳：クラスメイト

とりやまひろし

烏山博：新聞記者

## 第二十二話 空を飛ぶ翼

僕はゲームが大好きだ。

まずはアドベンチャーゲーム。代表的な物は、やっぱりノベルとかギャルゲーかな。ストーリーに集中して喜怒哀楽できるし、擬似恋愛っていうのかな、主人公に感情移入してドキドキする感じが味わえる。

アクションゲームだと、対戦型格闘ゲームかな。勝負中は熱くなるし、負けた時の悔しさとか、勝った時の爽快感がすごい好きだ。リアルで汗をかけるよ。

シュミレーションゲームっていったら、戦略ゲームでしょ。効率重視で進めてもいいし、最短時間で攻略するのも面白いし、圧倒的な戦力でドカンとクリアするのも痛快だよ。

音楽ゲーム……いわゆるリズムゲーとかも好きだよ。リズムに合わせようとして何度も失敗したり、繰り返し練習して上手にクリアできた時は達成感で一杯になる。

スポーツゲーム、レースゲーム、シューティングゲーム、ホラーゲーム、カジノ系、アクションパズルとか落ち物パズルとかも大好きだ。

そして、僕が一番好きなゲームジャンルは……RPG。

ロールプレイングゲームだね。さっき話した全ての要素が盛り込まれている、究極のゲームジャンルだよ。ゲームの王様と言ってもいい。ストーリーでは主人公に自己投影できて、バトルでは手に汗にぎり、キャラの育て方だったり装備とかで戦略性もある。ダンジョンの仕掛けやミニゲームではリズムゲームにもパズルゲームにも様変わりだ。

そう……そんなゲームたちが大好きで、自慢じゃないけどもう数百本はクリアしたかな。

家庭用、携帯用、PC用に限らずね。

友達には『ゲーム脳』とか言われるけど、あながち間違っていないと思う。

どうしても物事をゲーム的に考えちゃうんだ。……もしかして病気かな。

……えーっと、とにかく！ 僕の考えだと、この現実世界はセーブデータがないゲームになるんだ。昨日に『セーブ』することなんて出来ないし、十年前に『ロード』することも出来ない。だから、僕は後悔しないように今を精一杯楽しんでいる。

ゲーム感覚で生活していると、これが以外に楽しいんだ。嫌いな人は『敵キャラ』になるし、仲のいい友達はそのまんま『仲間』って感じがして面白い。僕が『主人公』で、フラグ乱立、イベントだらけの毎日だ。

そんな僕の一日が、今日も始まる。

ピピピピ……ピピピピ……ピピピピ……。

僕の耳元で電子音が鳴り響いて、一日の始まりを告げる。

「ふぁ……んう……もっ……朝？」

うーん、まだ眠いなあ。あつ、ほら、窓の外だって暗いままじゃないか。久しぶりに目覚まし時計なんて使ったから、設定する時間、間違えちゃったかな。

思いまぶたを擦りながら時計を見ると 時刻は朝の五時半だった。

ピピピピ……ピピピピ……ピピピピ……

カチャン、と消音ボタンを押す。

うわぁー、時間、合ってたよ。そろそろ……起きなきゃ。

ちよっとダルイ体をムクリを起こす。僕にしては珍しく寝不足だ

けど、我慢我慢。

寝巻きから学校の制服に着替えて、今日の天気を確認つと。

…… ああ、そっか、外が暗かったのは単純に雨だったからだ。  
よく耳を澄ますと、サアサアと雨の音が聞こえてきた。よし、今日は部屋干しで決まりだね。

僕は洗面台に行つて、ジャバジャバと顔を洗った。

「うん、スツキリ爽やか」

歯ブラシを口にくわえて、洗面台の横に置いてある洗濯機の中から、洗つておいた洗濯物を取り出す。いくら二人分だからって、週明けは洗濯しないと追いつかないんだよね。っと、水を吸った服が少し重い。

「ふう…… やれやれだぜ」

とかテンプレートな台詞を言いながら、僕は誰も居ない和室に洗濯物を干していく。はあ…… こんな時に炎の呪文でもあれば、一瞬で乾かせるのになあ……。

現実世界もゲームも、自分の思う通りにはならないモノだよね。

まあ、そこが飽きない理由なんだと思うけど。

シャカシャカと歯ブラシを動かしながら、今度は朝食作り。今日は…… うん、スタンダードでいこう。

僕は電子レンジのトーストでパンを焼きながら、ソーセージを炒めて一緒に目玉焼きも作る。レタスを数枚千切つて、皿に盛つてつと。これが名島家のスタンダードな朝食。手を抜くとコーンフレークだけになっちゃうけどね。

「おっしまい」

歯磨き粉だらけの口をすすぎ終わってテーブルで待っていると、のそのそと重い足取りで父さんがやってきた。僕と同じく眠そうな顔で椅子に座つて、ニュース番組に目を移す。ああ、寝癖がついちやつてるよ。昨日も仕事、遅かったのかな。

…… もう気付いているかもしれないけど、僕の朝は早い。加えて

家事全般を任されているんだ。家事だけなら本当はこんな時間に起きなくてもいいんだけど、そういう訳にもいかない。なぜなら、この朝の数十分だけが父さんと会話できる唯一の時間だからね。

え？ 別に、今の生活は嫌じゃないよ。父さんは僕の為に朝から夜中まで一生懸命仕事してくれてるし、僕だって父さんの為に頑張ってる。家事をこなしている。むしろそこら辺の家族より絆があると思うな。それに、ゲームの方にだって不憫なキャラはたくさん居るしね。こんなことで泣き言なんて言ってられないよ。

「翼……学校はどうだ？」

「うん、いつも通りで楽しいよ。あつ、そうそう、今週末には文化祭があるんだ。父さんは来れる？」

「……多分、仕事が入ってる。最近になって、また顧客が増えたんだ。……すまん」

「たははは、いいいいいよ。不景気な時代なのに結構なことじゃない」

予想通り、かな。父さんはここ最近、休日を返上してまで働いてるし、前々から忙しい話は聞いてたから、欠席フラグは立ってた。ほんの少し残念だけど、仕方ないよね。

気持ちを切り替えて朝食を食べていると、テレビから仰々しいBGMが聞こえてきた。

「……またこのニュースか」

「うん……どのチャンネルも、ずっと報道してるよね」

テレビから流れてきたのは、ゲームのように現実感が伴わないニュース。バラエティ番組とかアニメとかが全部中止になって、一昨日からこのニュースが流れ続けている。メディア騒然、視聴者は啞然、ネットの掲示板でも絶賛『祭り』中の大犯罪だ。

『連日に渡ってお伝えしております「遊園地無差別殺人事件」に關しまして、昨日の午後六時頃、警視庁長官が緊急記者会見を行いました。そちらの様様です』

テレビ画面では、警視庁長官を含めた警察関係者達が遺族に対し

てひたすら謝罪を繰り返している。政府、自衛隊、消防各所、と回りまわって全責任は警察が取ることになったんだ。

一昨日、つまり土曜日に起きたっていう『遊園地無差別殺人事件』。

そのネーミングセンスはともかく、死者五十一名、怪我人多数の大量殺人事件。まるで災害クラスの犠牲者だけど、現場に居合わせた目撃者の話では、どうやら一人の殺人犯が居るらしい。しかも掲示板の噂では、まだ犯人は捕まってないって書いてあった。遊園地周辺の地域には機動隊の人達がパトロールしているらしいし、僕等の街にもパトカーが走ってる台数が増えた気がする。……信じたくはないけど、嘘みたいなホントの話だ。

現場の遊園地では、原因不明の地盤崩れとかで自然災害も発生しているって言うてた。この前の森林公園の時もそうだけど、地球滅亡のフラグなんじゃない？ これ。

「こんな騒ぎだ……学校は休校にならないのか？」  
心配そうに父さんが聞いてきた。だよー、僕もそう思うんだけど。

「特に連絡網とかはきてないよ。僕の学校って進学校だからね、簡単には休まないんじゃない？ 事件現場だって電車で一時間も掛かる隣の県みたいだし。まあパトカーの台数は増えたけど。学校自体は注意程度で済ますんじゃないかな」

と、建前はそう言ったけど、本音は学校なんて休みたかった。フアーストファンタジー14（略称FF14）とモンスターハントポーターブル3rd（略称MHP3）が僕を待っているのに……。

それに、行く所もある。

「そうか……それじゃあ学校が終わったら早めに帰って来るんだぞ」  
「父さんも、ね」

たはは、と苦笑い。お互いに立派な死亡フラグを張ったところで、今日の朝はお仕舞い、だ。父さんは会社に向かって、僕は戸締りをしてから学校に行った。

週明けの月曜日、僕はいつもの公園で彼を待つ。

親友の話を……してもいいかな。

親しき友と書いて、親友。友達よりも希少価値で、それだけ僕に近い人。それぞれ好きな所も、嫌いな所も知ってる存在。

フルネームは西条司……僕は『司くん』って呼んでる。司くんは、小学校の頃から仲がいい親友だ。

性格を一言で表すなら……『一步引いてる頑固者』だね。

頑固者っていうのはそのまんまの意味で、一度決めたことは曲げない人なんだよ。とは言っても、小さなことはすぐ妥協しちゃうけどね。そうじゃなくて、大事なこと、大切なことはやり遂げるし、諦めない人だってこと。

『一步引いてる』っていうのが難しいんだけど、達観してる訳じゃないんだよ？ うーんと、そうだなあ……例えば、僕と司くんの目の前で殺人事件が起こったとする。僕は怖くて反射的に悲鳴を上げちゃうけど、司くんの場合は『自分の中』で考えてから行動すると思う。状況を整理してるのかな？ 『何か』と照らし合わせているのかな？ そこら辺は分らないんだけど……その結果で、僕みたいに悲鳴を上げるかもしれないし、犯人に殴りかかるかもしれないって人だ。

自称『現実主義者』を名乗っていて、オカルトとか宗教の類を信じてない。将来の夢や現実的じゃない希望も無いらしい。そのくせ虚構の小説が大好きだっていう変わり者なんだよね。で、僕のことを『ゲーム脳』なんて表現するけど、僕から言わせれば司くんは『小説脳』だ。人のこと言えないんじゃないかって思うよ。

こんなこと言ったら司くに怒られそうだけど……なんか『ゲームのキャラ』っぽいよね。



ジョブは……いい意味で『魔法使い』かな。『戦士』みたいに体力勝負っ！とかじゃなくて、精神力だけで戦ってそんなイメージだ。狡猾って感じじゃないんだけどね。

っと、色々と話しちゃったけど、僕にとって司くんは大切な存在だ。思い返しても楽しいし、喋ってても面白い。そして、少なくとも、夜寝ることが出来ないくらいには心配する人だ……

僕は公園の出入り口の赤いレンガで作られている塀に座っていた。暗黙の集合場所。僕と司くんの待ち合わせ場所。通学路に在る、小さな公園。

僕にとって『待ち時間』ゲームが出来る時間』になるんだけど、携帯ゲームは やっていない。

司くんが歩いてくる方向だけ、見つめている。

……もしも来なかったらどうしよう。土曜日から電話も通じないし、日曜日に家を訪ねても留守だった。『リア充は爆発しろ!!』みたいな喧嘩別れをして、遊園地では大量殺人事件が起きて……心配だ、心配だよ、心配だとも。学校なんてサボって、司くんの家に行ってみようかな。

「……よしっ！」

僕は意を決してレンガから立ち上がった。考えても不安になるだけだ。いっそのこと司くんの家に行ってみて、留守だったら学校に行こう。今日は遅刻してもいいや。

と、その時、僕の視界に遠くの方から歩いてくる司くんの姿が見えた。

「っ、司くんっ！」

「……………っ」

僕は思わず駆け寄った。『お早う』の挨拶や、『ごめん』の言葉よりも先に、口から感情が飛び出す。

「だ、大丈夫だった!? け、怪我は無い!？」

「……ああ、心配かけたな、翼。悪かった」

ほっ、と胸を撫で下ろす。良かった……本当に良かった。あ、はは、安心したら、ちよつと涙出てきた。

司くんは平常通りの制服姿で、少し緩めたネクタイ、右手で傘を開いていて、左手で学校の鞆を肩に掛けている。

血や包帯の跡なんて見当たらなし、怪我は……無いみたいだね。  
「……………」

でも、司くんの表情は何だか浮かなくて、どこか落ち込んでいるみたいに俯いている。

いつもならゲームの話題や小説の話題なんかで楽しく話すんだけど、僕は黙ったまま学校へ歩き出した。

……やっぱり聞かなきゃ駄目だよ。この調子じゃ心にシコリが残ったままだ。

あの遊園地に……行っただけだろうか。

「ねえ、司くんって……ゆうえ」

「遊園地には行かなかった。吉田もな。土日は家族と旅行に行ってたんだよ。丁度県外の場所で、だから連絡も出来なかった」

僕が聞き終わる前に、司くんは言い終わる。あらかじめ考えてあった台詞を読むように。

……分ってるよ。何年の付き合いだと思ってるんだい？

司くんの考えていることなんて……手に取るように、分かる。

「そうなんだ、良かったねっ！ 大事件みたいだったから、心配したよ」

「そっか、すまねえな」

「うつん、巻き込まれてなくて安心した。あつ、そうそう……」

僕は普段通りの会話を作る。ゲームの話、ネットの噂、学校の出来事、少しでも司くんが元気になるように、僕は明るい調子で一方的に話し続けた。

大切な『仲間』が傷ついている時は、他の人がしっかりサポートしなくっちゃね。これ基本。

僕のクラスに限って言えば、担任の先生は『王様』のポジションなんだと思う。

高校って義務教育じゃないから、先生の言うことには遵守しなくちゃいけない。進学校だから単位も握られてるしね。僕達生徒は『王様』に従順な『旅人』ってところだ。入試という名の『魔王』を撃ち滅ぼして、テストに合格すれば晴れてゲームクリアになる。次のステージ……大学生が待ち構えているってワケだね。

……まあ、まだ高校二年生の二学期だし、今はゲームクリアするまでのレベル上げ中って感じだけど。

そんな訳で、『旅人』達の出席点呼も終わり、僕達は『王様』の有り難いお言葉を拝聴している。

「全員出席つと、おーし、ウチのクラスは健康男児ばかりだなー」

「せんせー、女子も居ますよー。PTAに訴えますよー」

「だあああつ！ 待った、すまんかった！ 先生の失言でした、ごめんなさい！」

なんとも下手な『王様』だ。弱腰なところは評価できるけど、変にくだけているのはやな感じがする。

「ったく最近の子供はすぐPTAだ何だつて、お前らね、一度でいいから社会人になってみ？ クビつてのがどれだけ怖いかわかるからさ」

「せんせー、いいからさつさと進めてくださーい」

「……卒業したら覚えてろよ！ 一から十まで大人の恐ろしさを叩き込んでやるつ！ ……ごほん……えゝ、じゃあ連絡事項なんだが……」

ようやく本題に入つたみたいだ。僕はチラッと後ろの席に座っている司くんを見た。……うゝん、相変わらず俯いている。なんとかして励ましてあげたいんだけどなあ。

「あゝ、お前らも知つての通り、土曜日の『遊園地無差別殺人事件』のことだ」

ガタツと、司くんの机が動いた。

「幸いなことに、ウチの学校には犠牲者が出なかったが、一応警戒はしとけよー。それで、部活動は一時停止だそうだ。それに伴って、文化祭の準備も放課後行う場合は先生の付き添いが必要って話だ。つつてもウチのクラスは既に終わってるけどな。あゝ、楽チン楽チン」

僕は知っている。先生は何もしていないことを。

文化祭の準備は、毎日遅い時間まで残って吉田さんと志木城さんがしてくれたんだ。それを自慢げに話して……ホント、この教師はPTAに訴えてやろうか。

僕は取り繕った笑顔のままで沸々と怒りゲージを溜めていると、

『はい、注目』と先生が両手をパンツと叩いた。

「ウチの学校に被害は無かったけど、一分間だけ黙祷な。これ、学校の決まりだから。やらないヤツは単位落とすぞー」

単位なんて人質に取らなくても、やるってば。いちいち癪に障る

『王様』だなあ。

先生は再びパンツと手を叩いて、クラスの皆は静かに黙祷を捧げていた。

死者五十一名。僕には漠然としたイメージすらつかないけど、その数字が途方も無い数だっていうのは理解できる。僕達のクラス、四十五人が 全員消えるんだ。全員、死ぬんだ。各メディアはその膨大な数字を一緒に扱おうとするけど…… 実際は五十一人分の悲しいストーリーがそこにはあって、その親族を含めると、もっと悲惨な事件なんだと思う。

きつと、居合わせていた人は…… 地獄を見たんだ。目の前で、人が死ぬところを、まざまざと見たんだ。

カタカタ、カタカタ。

目を閉じてから三十秒後。不意に、僕の椅子が揺れる。

カタカタ、カタカタ。

最初は地震かな、と思ったんだけど……違った。  
ガタンッ！

真後ろから、席を立つ音。

「お？ どーした西条。まだ一分経ってないぞー」

先生の声につられて、僕は後ろを振り向いた。

顔面蒼白、息を途切れ途切れに短く吐いて、今にも倒れそうな司くんが、そこに居た。

誰が見ても、危ない状態だ。

「……………体調が、悪いので……………帰り、ます」

「つ、司くん？」

「お、おい、大丈夫か西条。保健室で休んだ方がいいんじゃないか？」

「……………平気、です。……………一人で、帰れます、から」

先生は暫く考えて、司くんの早退を許可した。

変に理解があるのか、はたまた学校で倒れられては困るのか、判然としないけど、司くんは……………一人で早退した。

ヒソヒソとざわめくクラスメイト。そりゃそうだよ、タイミン  
グがよすぎるもん。

「お前らー騒ぐなー。黙祷を続けるぞー」

三度手を叩く先生。亡くなった犠牲者には悪いけど、僕の頭の中  
は早退した司くん一杯になった。

九年間。長い付き合いの中で、あんな顔……………見たことがなかった  
んだ。

「……………何よ」

僕の席から数えて、二つ前に座っている志木城さん。僕の中では、

冷徹な『女戦士』っていうジョブがシツクリくる人だ。

いつも窓の外を眺めていて、クラスでは浮いてる感じ。『深窓の令嬢』とかって呼ばれてて、噂ではかなりのお金持ちらしい。成績優秀、才色兼備。記憶に新しい『ホームルームビンタ事件』では、不良達にビンタを喰らわして凛々しい姿を見せた。

「何の用かって聞いているのだけれど、名島くん」

「こっやって不機嫌そうな表情をしているけど、僕は知っている。

志木城さんと司くんは仲がいいんだ。それだけで信頼できる。っていうか、もうツンデレキャラにしか思えない。

「司くんのこと、なんだけど」

「……ああ、あの低俗低学歴で『わからず屋』のこと？ 私とは一切関係ない彼が、どうかしたのかしら？」

「……………」

あ、あれ？ 司くんと志木城さんって、仲がいいんだよね。僕、伝える相手を間違えちゃったのかな。

「う、うん。そう、その司くんの」

「低俗低学歴で『わからず屋』」

「……低俗低学歴で『わからず屋』の司くんのことなんだけど、何か様子がおかしいんだ。志木城さんは原因とかって知らない？」

「……………」

志木城さんは僕のことを睨むように観察して、プイツと窓の外を見た。

「私だつて……なんとか……したいわよ」

「え？」

「……なんでもないわ。西条くんがおかしい原因、だったわね。だったら、私に聞くよりも吉田さんに聞いたら？ 彼女の方が、少なくとも私よりも『事情』に詳しいわ」

「よ、吉田さんに？」

「そうよ。その『原因』を、近くで目の当たりにしたんだから」

志木城さんは下唇を噛んで、悔しそうな表情をしている。僕には

何のことだかサッパリだったけれど、司くんを思う気持ちは、確かに届いた。ならば、僕も伝えよう。

「じゃあさ、司くんが戻ってきたら、いつもみたいに罵ってあげて。そうすれば、きっと元気になるんだから」

「……そうね、そうするわ」

最後に志木城さんは小さく笑って、僕は自分の席に戻った。

あわ、あわわわ。

僕は、いつになく緊張していた。

クラスの人気者、吉田さん。僕の中では、優しい『僧侶』っていうジョブがピッタリの人だ。

男女共に人気があって、クラスの学級委員と保険委員を兼任している。明るい性格で、可愛い顔。密かに僕のタイプだったりして……

そして、土曜日に司くんと一緒に居たって事実。その事実には軽く凹むけど、吉田さんに話しかける緊張の方が上回った。

恥ずかしいけど、全ては司くんの為だ……周りの目があるから、抜き足差し足で近寄ってつと。

「よ、よよ、吉田さん」

「ひゃあ！　び、ビックリしたー」

うわわあ、驚かせちゃった。そんなつもりじゃなかったのに……

「な、名島くんかあ、もービックリさせないでよー」

「ご、ごめんね！　そんなつもりじゃなかったんだ！　お、怒らないで……」

「え？　あははは、冗談だよ。怒ってないってー」

よ、良かったあ、心臓が縮んで寿命も縮んだよ。

「で、どーしたの名島くん。あたしに用があっただんでしょ？」

「あ、うん」

吉田さんの優しい笑顔が、司くんの状態とは随分と違うから……

伝えるかどうか、戸惑った。

「つ、司くんのこと、なんだけど」

「……うん」

あつ、吉田さんの笑顔が消えて 表情が変わった。

全てを飲み込んで、何かに耐えるように、吉田さんの目が閉じる。

「大丈夫、心配しないで。あたしが……あたしが西条くんを、治すから」

「……………」

やっぱり僕には何のことか分からなかったけれど、司くんを想う気持ちには、確かに感じた。ならば、僕も伝えよう。

「司くんってさ、挫けた時はいつだって笑い飛ばしてバネにしていたんだ。何度倒れても立ち上がって、ゲームや漫画のキャラみたいだね。大切なことは、やり遂げるまで絶対に諦めない。だから、今回だって大丈夫」

そうさ、心配なんて してやらない。

僕以外にも、志木城さんだって吉田さんだって居るんだから。

「吉田さんが笑いかければ、司くんだってきつと元気になるよ」

「……うんっ！」

最後に吉田さんは弾けるように笑って、僕は自分の席に戻った。

気が付けば放課後。

全ての部活、僕が所属しているパソコン部までもが停止になり、渋々と帰宅しようと正門を出たところだ。

「あー、すいません。その学生さん」

「えっ、僕？」

突然、声を掛けられた。



見れば、茶色いハンチング帽を被り、腕まくりされたヨレヨレの白いワイシャツに、スーツ用のズボンを履いているお兄さんが居た。一昔前の漫画家とか、探偵の格好だね。どっちにしたって、凄く怪しい。もしかして……ふ、不審者？

「おお、やっと立ち止まってくださった」

温和そうな表情に、優しい声。なんとなくだけど……悪い人じゃなさそう、かな。

「ああ、そんなに警戒しないで下さい。私、こういう者なんですけど」

お兄さんから手渡された名刺を見ると、『オカルト総合新聞 編集部 烏山博』って書いてあった。お、オカルト総合新聞……胡散臭さMAXだよ。

「あの……宗教とかの勧誘ですか？」

「いえいえ、違いますっ！ 違いますとも。そうじゃありません。む……何ですかね。私が声を掛けると、皆さん『宗教』とか『浄水器』とか言っんですよ。そんなじゃないんですけどね」

「はあ……」

だって、そんなに優しく声を掛けられたら、普通は勘違いしちゃうよ。格好も胡散臭いし。

「えっと、それで」

「ああ、そうでした。すいません段取りが悪くて。つかぬ事をお聞きしたいのですが、宜しいでしょうか？」

「え、はい。いいですけど……」

部活も休みだし、時間も余ってる。僕は素直に頷いた。

「本当ですか！ いや、助かります。先程から他の学生さんに声を掛けているのですが、一向に振り返ってくれなくて困っていたんです。無視って言っんですかね。最近の学生さんは冷たいです」

「あ、あのっ！」

「っと、そうでした。失敬」

記者さんは自分の鞆からボロボロのメモ帳を取り出して、ペラペ

ラと捲り始めた。

「じゃあ、知っていたらで良いので宜しくお願いします。……志木城怜実さんってご存知ですか？」

「え？ あ、はい」

「もしかして、クラスメイトだったりします？」

「遠まわしな物言い。何かのフラグっぽい気がする。ここはブレイクしておこうかな。」

「……違いますよ。同じ学年ですけど、知ってるのは名前だけです」「そうですか。では、志木城怜実さんの妹さんのことも、知らないですよ」

「は、はい」

志木城さんの妹？ 何の話だろう……

「むー、そうですか。残念ですけど、やはり本人に確認するのが一番手っ取り早いですね。あー、いやはや、お手数をお掛け致しました。ご協力、感謝いたします」

僕から情報は得られなかったようで、記者さんは深くお辞儀をして、トントんと話を終わろうとしている。

「あつ、待ってください、すみません。どうして志木城さんの話を？」

気になった僕は記者さんを引き止めて、逆に質問を投げかけた。邪魔しちゃって怒るかな？ と思っただけで、記者さんは優しく笑って『構いませんよ』と言った。

「単なる推測なんですけど、志木城怜実さん……彼女は、土曜日の『遊園地無差別殺人事件』に関わっているかもしれない、と勝手な推理をしているんですよ。ハハハ、確率は10%ですけどね」

軽く笑って、今度こそ記者さんは踵を返した。

志木城さんの妹と、土曜日の『遊園地無差別殺人事件』。司くんの様子と、吉田さんの表情。

なんだか僕の知らないところで、大変なことになってそうだけど……僕に出来ることっていったら、一つだけだ。

「司くん……電話しよう」

「ただいまー」

僕は家に帰って、その足でお風呂を沸かす。朝食の後片付けをして、洗濯物をたたんで、あっという間に午後六時。

一人だけの晩御飯を作って、食べて、食器を洗って、自分の部屋に引きこもった。

ゲーム機を起動しつつ、携帯電話を手に持つ。

「……よし」

発信してから三コール目で電話が取られた。

「つ、司くん？」

「……翼か」

朝と同じで、声に生気が無い。

「こんな時間に電話だなんて……珍しいな」

「うん。司くん、聞きたいことがあつてね」

「……」

司くんは、黙った。

僕が司くんをいっぱい知っているように、司くんも僕のことをいっぱい知っている。

だから、僕が何を言うのかも、予想できるんだろう。

「……言いたくない？」

「……ああ。今回ばかりは、放っておいてくれると助かる」

だよね、僕もそんな気がする。この先の展開は、きっと凄く重い。ゲームによくある、『真実を黙って一人で抱え込む』タイプだ。真実ってというのは、『誰かが死んだ』とか『実は裏切り者だった』って意味。

そんな時、僕が『主人公』だったら

言える台詞は一つだ

け。

重しのような、鎖のような、呪いのような言葉だけど、一番効果があるって思うから。

「司くん……信じてるよ」

『……………』

「司くんは、こんなことで負けたりしない。司くんの世界は、こんなことで壊れやしない。僕は……信じてるから」

『……………ありがとう』

プツン、ツーツーツー。

音声から電子音に替わって、電話が切れた。

最後の台詞だけで、僕は充分安心できた。

大丈夫、戻ってくる。僕の知ってる司くんが、帰ってくる。

そうして、僕はゲームをやらずに床に就く。

僕が『主人公』で、フラグ乱立、イベントだらけの毎日。一日の終わり。

「おやすみなさい」

その日を境に、『一般人』だった名島翼の人生が  
を告げる。

終わり

「君は実に運が悪い」

聞こえた声で、僕の目が、覚めた？

……暗い。真っ暗闇だ。だけれど、妙に意識はハッキリしている。

手足は……駄目だ、動かない。

そもそも、僕は寝ているの？　これは、夢？　目を閉じたままの、金縛り状態ってやつなのかなあ。

あー、あゝ！　……うん、声も出ない。

「ああ、喋らなくて結構」

だ、誰！？　そ、そこに、居るの！？

「私は無であり有、個にして群、虚であり全」

い、意味が分からない。

こ、怖い！　怖いよっ！　何なんだよこの夢は！　は、早く、早く醒めてっ！

「不運なことに、君は『真理の道』に選ばれた最後の人間だ。ああ、もちろん拒否権は無い。君は選ばれただけで、自ら選んだ訳ではないのだからな」

ま、待って！　真理の……道？　ちょっと待って、どこかで……どこかで聞いたことがある気がするんだ。考えさせてっ！

「構わない。この時間は、有限にして無限」

男の人が女の声色をしたような、女の人が男の声色をしたような、とにかく中性的な声が止まって、僕は考えた。『真理の道』、どこかで聞いたようなフレーズ。随分前で……登校中に……司くんと……あっ！　そういえば！

「そう……それで正しい」

思い出した。司くんが言っていた『夢』の話に、そっくりなんだ。た、たしか、五行思想の……十五人の、サバイバルバトル……だったっけ。

「その通り、私としても理解が早いと助かる」

うう……

あ、あの夢が本当だったら、この先の展開も、本当の出来事？  
五つの元素に　三つの属性。

「君に残された属性は、『空』だ」

余りモノ。最後まで残された、属性。

瞬間　僕の中に、限らないビジョンが広がった。

遙か彼方の、晴れ渡る空。

丸い地球を包み込む、どこまでも青い空。

「君は不運にも最後の一人。最悪な状態で選択の権利が無い。願いたまえ、属性を。君の世界、君の創造、君の願望で決まる、属性を」

僕の世界、僕の創造、僕の……願望。

連想される、数えきれないゲームの内容。

ダンジョンの仕掛け、必殺技、呪文、異能。

絡まった糸が解けるように、僕の思考が繋がった。

……たははは……余り物には、福があるのかもね。

そう、僕は『ゲーム脳』なんだよ？　いいね、最強じゃない

かッ！『空』なんて、負ける気がしない。

僕は十五種類の属性があったとしても、間違いなくコレを選んだと思う。

誰かに選ばされたんじゃない、自分の意思で選んだんだ。

「君の『望み』を一つ叶える。富、名誉、死者の蘇生、望みに制限は無い」

……叶えたい、望み。

そんなこと 決まってる。

戻れるなら、十年前の『あの日』に。もしも『ロード』できるのなら、十年前の『あの場所』に。

もう……一人きりの晩御飯は嫌だ。『おかえりなさい』がない家は嫌だ。机に置かれてるお金は見たくない。

ゲームなんかじゃ……僕の寂しさは、埋められないから！

だから、母さんが居ない生活は

嫌だっ！！

「では、君の名を聞こう」

僕の名前は……名島翼。

『空』を羽ばたく、翼になれるのなら。

僕は、どんなことでも……してみせる。

「……了承した。では、真名を贈ろう。君の『真理』に幸あれ」

胸の奥で、繰り返し響いてくる言葉。

忘れられない、大切な名前。

僕の……真名は。

『ヴォート』

## 第二十二話 空を飛ぶ翼（後書き）

やっと翼くんが覚醒しました。二話目からの長い道のりでした。この話、ゲームをやらない方には苦痛だったかもしれませんが。すいませんでした。

次回からは西条くん視点に戻りますので、ご安心ください。

その前に、こちら辺で今まで登場した人物の紹介などを整理しようと思っております。作者が書いた、キャラのラフ絵も挿入する予定です。期待せずにお待ちください。



## 間話 登場人物紹介と辿った軌跡 その巻（前書き）

サブタイトルの通り、登場人物の紹介と今までの出来事が記載してあります。

作者自身による整理と、読者様の理解を深めて頂く為、記述致します。

新事実等は御座いませので、読み飛ばして頂いても大丈夫です。

## 間話 登場人物紹介と辿った軌跡 その巻

### 登場人物紹介

二十二話までに登場したキャラクターを紹介します。  
名前、キャラの台詞、人物紹介の順に記述致します。

・西条 司 さいじょう つかさ

「悪いが……俺は現実主義者なんだよ。」

物語の主人公。選んだ属性は『炎』。特殊能力は『炎の強さ』。

自称『現実主義者』で、小説を読むことが趣味。好きな食べ物はカレーライス。高校二年生の帰宅部。

とある夢を見たことにより、『真理の道』に巻き込まれていく……

望みは「  
、  
」（全てを救う答え。作中では、まだ不明）

・佐久間 大我 さくま たいが

「喧嘩を売りに来たんだよ、低脳！」

西条と同じ学校に通う、高校一年生。選んだ属性は『樹』。特殊能力は『他者を吸収することによる不老』。

『真理の道』がきっかけで、虐められっ子から残忍な性格になってしまう。

西条の母親を殺し、志木城の妹を植物状態にした。その後は、森林公園で西条達と戦って負ける。命は助かったのだが、後から来た『地』の属者に倒されてしまう。

望みは「自分の居場所」

・志木城 しきじょう 怜実 れいみ

「一緒に……戦いましょう。」

西条とはクラスメイトで、共闘関係。選んだ属性は『氷』。特殊能力は『絶対零度の氷剣』。

冷静沈着、成績優秀、容姿端麗のお金持ちで毒舌家。その為、常に孤高でクラスでは浮いていた。

佐久間を殺す為に西条と共闘するが、他者を殺すことへの恐怖心と西条の説得により断念する。

五行思想や計略に長け、あらゆる面で西条や吉田のことをサポートしている。

望みは「植物状態である妹の回復」だったが、西条の望みを聞き、志を同じにした。

・男

「はっはー！ だいぶ派手にやってんじゃん。」

謎の男。選んだ属性は『地』。特殊能力は不明。

軽い口調で、線が細い体系。疲弊していた佐久間を地割れの中に落とした。

・堂島 どうじま 元近 もとぢか

「オレに触ると……火傷するぜ？」

西条と同じ学校に通う、高校二年生。選んだ属性は『熱』。特殊能力は『熱情転嫁』。

どこまでも真っ直ぐな性格で、短絡思考。野球部のエースピッチャーで、球種はストレート系統のみ。

志木城に一目惚れをして熱烈に告白するが、失敗。その原因を西条の所為だと考えて、校舎裏での決闘を行う。

自分の想像していた『愛』が間違いであったことを指摘され、恋を諦めて西条に真名を託す。その後、属者だった記憶が喪失してしまう。

望みは「永遠の愛」

・吉田 よしだ 久留巳 くろみ

「……………お願い、治つて……………」

西条とはクラスメイトで、共闘関係。選んだ属性は『癒』。特殊能力は『癒しの想い』。

優しい性格で、男女問わずクラスの人気者。興奮すると若干ヒステリックになる。

西条の『他者に流されない性格』に憧れており、次第に惹かれていく。志木城の作戦により、西条とは擬似的な恋人関係になるが……………

望みは「特になし」だったが、西条の望みを聞き、志を同じにした。

・五十嵐 いがらし 武 たけし

「……………本気を出せ。」

西条とは師弟関係だが、互いに属者であることを知らない。選んだ属性は『堅』。特殊能力は不明。（肉体強化？）

天性の格闘センスと、強靱な肉体が備わっている。性格は堅人。寡黙で感情表現が薄い。

剛柔流空手道場を一人で営んでいたが、西条が弟子入りした。

望みは「人間の限界を知る」

・黒丘 くろおか 晶 あきり

「ケエーケツケツケツ。オッサンよお、真名を言うなら今の内だぜえッ！」

自信過剰な不良。選んだ属性は『雷』。特殊能力は『自身を弾丸にする疾風迅雷』。

属者として覚醒し、度重なる訓練をしてきたが、五十嵐に負けて真名を託してしまう。

望みは「周りの人を見返す金」

・谷脇 雅臣  
たにわき まさおみ

「ク、クク、ククク……クツハハハハハハハハハッ！  
！」

元死刑囚、現脱獄者。選んだ属性は『岩』。特殊能力は不明。（断崖絶壁を創造する？）

とある事件が災いして、平凡な人生から転落する。人を殺した罪を償うために、死刑が執行される日を待っていたが、属者としての力に目覚めてしまう。

自身を否定した世界に復讐を誓い、躊躇無く人を殺し、死神として行動するようになる。

遊園地では西条と戦い、腕を焼かれたが……  
望みは「世界の崩壊」

・名島 翼  
なじま ひばし

「お早う、司くん。」

西条とはクラスメイトで、小学校時代からの親友。選んだ属性は『空』。特殊能力は不明。

穏やかな性格で、重度のゲーマー。日常生活をゲーム的な思考で暮らしており、そのため洞察力と想像力に秀でている。

最後の属者として覚醒してしまうが……  
望みは「十年前に戻り、母親を救うこと」

・烏山 博  
とりやま ひろし

「あー、すいません。そこのお二人さん。」

オカルト総合新聞の記者。神父の様な丁寧な口調と、安心感を与える優しい笑顔をしている。

佐久間によって樹海となった森林公園を取材し、西条と志木城に出会った。

『遊園地無差別殺人事件』と志木城の関連性を疑っているようだが・

.....

## 辿った軌跡

二十二話までの出来事を時系列順に記述致します。  
要点だけを抜き出しているので、詳細は本編を御覧下さい。

始まりは九月上旬。

初日（月曜日：帰宅途中、西条は『熱情転嫁』された運転手に轢かれそうになる。西条が属者として覚醒&自覚）

二日目（火曜日：自宅で属性の練習を行う。佐久間に母親を殺され、強襲されるが撃退する）

三日目（水曜日：『樹』によって壊された家の保全）

四日目（木曜日、屋上で志木城に襲われる 共闘関係を結ぶ。西条達は森林公園で佐久間を撃退するが、殺さない。西条達が帰った後、『地』の属者によって、佐久間は倒されてしまう）

五日目（金曜日：保健室にて正体不明の『癒』を受ける）

六日目（土曜日：堂島と遭遇。森林公園で鳥山と出会う）

七日目（日曜日：特になし）

八日目（月曜日：堂島が志木城に熱烈な告白 失敗。西条と決闘をして、堂島が負けて真名を託す。志木城の説得により、吉田と共闘関係を結ぶ。）

九〜十日目（五十嵐と黒丘の死闘。黒丘が負けて、五十嵐に真名を託す）

十一日目（木曜日：志木城による放課後の課外授業で、擬似的に吉田と付き合う。西条は帰宅中に道場を見つけ、五十嵐に弟子入りする）

十二日目（金曜日：西条が吉田家にお見舞いに行く）

十三日目（土曜日：遊園地でデートをするが、谷脇が奇襲してくる）  
十四日目（日曜日：特になし）  
十五日目（月曜日：名島が属者として覚醒）

## キャラのラフ画

作者こと進士夜紳士が、ムシャクシャしてシャーペンでラフ画を書いてみました。

対象は、現時点で具体的なビジュアルが判明している属者のみです。

初めに言っておきますと、人生初のキャラ絵です。なにぶんヘタクソなので再現率は限りなく低いのですが、『ああ、コイツって大体こんな感じなのか』などと思って頂けると幸いです。

キャラ崩壊注意、です。

なんでこんな、とてつもなく恥ずかしい事をしてしまったのか………いえ、何でもありません。

> i 2 7 9 4 6	—	1 9 9 1 <
> i 2 7 9 4 7	—	1 9 9 1 <
> i 2 7 9 4 4	—	1 9 9 1 <

## 間話 登場人物紹介と辿った軌跡 その巻（後書き）

ラフ画に関する感想、お待ちしております。

人によって、文字から連想されるビジュアルは千差万別です。

ですが、頭の中で描いていたイメージが限定（又は崩壊）することによって、作品に対する気持ちが変わってしまうのも事実だと思います。もちろん、その逆もまた然りですが……。

なので、私の絵で不快になられた方が居られましたら、申し付けください。出来る限りの改善、又は削除を致します。

それでは、次回は西条くん視点でスタートです。



## 第二十三話 支えられた自分（前書き）

二十三話の登場人物

西条司：主人公、属性は『炎』

志木城怜実：属性は『氷』

吉田久留巳：属性は『癒』

名島翼：友達

五十嵐武：師匠

## 第二十三話 支えられた自分

空っぽだ。

全身の力が抜け切った状態の、鉛のように重い体が引き摺られている。

無様に垂れた靴が地面と擦れ、両肩を誰かに預けて、何処までもずるずると。

暗い、重い、苦しい　心が軋む。

体中の気力を瞼に集め、辛うじて目を開けると……そこは既に俺の知っている景色ではなく、遊園地の外だった。三人で並んで歩くには狭い、一般道。日が傾きかけている空。

何もかもが、終わっていた。

戦いの終わり、虐殺が終焉し、地獄から終結している。

俺は眼球だけを動かして、両肩を支えている人を見た。

左側には、目元を赤く泣き腫らした吉田の姿。俺を起こさないように、押し殺した小声で短い嗚咽を漏らしている。何があつたのかなんて、分かりきっていた。俺が走り去った後の出来事、気絶している俺を見つけた時の光景を想像すると……今以上に、胸の奥が堕ちていく。

そして右側。そんな吉田とは対照的な志木城の姿。相変わらず冷え切った顔つきだったが、心中は穏やかでないだろう。俺が一方的に電話を切って、一体どんな思いでココまで駆けつけたのか……推察は容易じゃない。俺が、志木城の忠告を無視したから。一時の感情に身を任せて、後先考えずに行動したから。

その結果が……これだ。

俺は誰も守れず、誰も救えず、誰も助けられずに、二人に迷惑を掛けて、吉田を泣かせて、志木城を困らせて　動かない体を、支えられて。

「……………ぐっ……………うう……………」

情けなくて、みつともなくて、耐えられなかった。渴いていたはずの瞳から、透明な水が溢れる。

「っ、くぁ……あ……あぁ……」

ただただ、呻く。

本当は、人目も気にせずに大声で泣き叫びたかった。

なんで、どうして俺はこんなに弱いんだッ！ 体も！！ 心も！！

こうしている今でさえ、下種なプライドが邪魔をして気持ちが素直になれないでいる。

何なんだよ、俺は。何がしたかったんだ。

人を守る強さも無くて、殺したい相手を殺す決意も無くて。

許さないつもりだったのに、手に掛けようとした瞬間、消したはずの『善意』が残っていたなんて。

一般人がたくさん殺されたはずなのに、俺はアイツを殺せなかった。

貧弱な体に、脆弱な心の所為で。

嫌いだった！！

こんなことになっても、それでも慣れようとしている自分が、どうしようもなく 嫌いになる。

「……西条くん、一先ずは警察の目を避けるわ。もし警官に声を掛けられても、『分かりません』か『病院へ向かう最中です』といった感じに合わせて頂戴」

志木城が、周りへと聞こえないように呟く。両の目は正面だけを見据えたままで。

ああ……こいつは、俺とは違う。

挫けそうになっても、絶望しそうになっても、悲観せずに前だけを見詰めている。

妹が植物状態になっても、佐久間を殺すことだけに固執して。大事な妹が属性の力で治ると分かっている、覚悟の証として自制する。

必ず立ち向かい、現実からは逃げない。

俺には無い強さを持っていて、俺には無い決意を持っていて、流した涙が凍るほどに冷静で。

「警察を撒いたら西条くんの傷を治すから、それまではなんとか耐えるのよ。吉田さんも、疲れているでしょうけど、頑張りなさい」  
そっか……そういえば俺、左肩が貫かれてんだっけ。気持ちに余裕が無くて、全然気が付かなかった。ああ……確かに、言われてみると熱くて痛いかもな。けれど、胸の方が断然痛くて、それどころじゃない。

でっかい穴が、空いちまった。  
もういい……好きにしてくれ。

その後、幸か不幸か警察に聴取されることもなく、俺は人気の無いベンチで傷の手当を受けた。志木城と吉田の『属性』を使い、ボロボロになった肩の傷は癒えたが……それだけだ。

傷は治っても、心までは治らない。

「月曜日、学校にはちゃんと来るのよ。日常の『綻び』を見せないで」

別れ際にそう言われて、よく覚えていないが俺は家に帰ってきたんだろう。

ふらついた足取りで自分の部屋に行き、そのまま倒れるようにベッドへ沈む。

深く、深く、何も考えなくて済むように、何も見聞きしないで済むように、眠りについた。

『俺の名前は西条司ってんだ。ちっこいのの名前はなんて言うんだ？』

何故、俺は声を掛けたんだ？



残っていないだけで、心は 背負わなくてもいい罪悪感で支配されている。人殺しをしたように、重く、暗く、深く、沈んでいく。母さんが佐久間に殺された時とは違う。手を伸ばせば届くはずだった。

今回は、俺が動けなくて、殺したようなものだ。

『お母さんと一緒だったのに……見殺しにしたんでしょ？』

……その通りだ。俺には、誰も救えなかった。言い逃れなんて、できる訳が無い。

俺は、五郎と母親を、見殺しにしたんだ。

呪いたければ呪え、恨みたければ恨めばいい。それだけ俺も、堕ちるから。

『お兄ちゃん、痛いよ、苦しいよ……助けてよ』

……ごめんな、俺には助けられないよ。

だってさ……お前、死んだんだろ？

なら、どう考えたって無理じゃないか。

『勘違いして、絶望はしないで頂戴。私達はまだ取り返せる。失ったものも、死んでしまった人も、まだ取り返せるの』

ああ、志木城の言うことは正しいよ。

母さんも、五郎と母親も、遊園地で亡くなった人達も、まだ取り返せる……かもな。

『大切なのは！ 私達が最後まで生き残ることでしょう！ 生き抜いて、願いを叶えることが重要なんじゃない！ 一時の感情で突っ走って、勝手に死ぬのなんて許さないわっ！』

本当に、お前の仲間になれたことを誇りに思っし、一緒に『願い』を叶えたいよ。

だけどさ、俺は、お前みたいに強くはないから。弱くて、脆くて、すぐに挫けちまうから。

『うん、でも大丈夫。司くんは小さなことには無頓着だけど、大事なことはトコトン諦めないからね』

翼、それは幻想だつて。俺は、そんな人間じゃないんだよ。嫌なことがあつたら普通に凹むし、無理だと分かつたら簡単に諦めるさ。

所詮はただの高校生だ。なんでもないことに悩んで、失敗したら落ち込んだりだつてする。

小説の主人公みたいに、正当な理由で再起できやしないんだよ。

『また……僕を見殺すの？』

五郎の問いに、俺は 答えることが出来ない。

「ぐっ……はあ！……はあ！……はあ、はあ……」

酷い、悪夢を見た。

だけれど……間違いなく真に迫る内容だつたと思う。

夢は、記憶の整理だ。

俺の経験で、俺の感情で、俺が想像した事実だけを見ることになる。

身体の内側に仕舞い込んである、深層心理。

俺は……自分自身に、絶望しているのか。

『また……僕を見殺すの？』

「ッ！？」

耳の裏側に張り付いて、剥がれない言葉。

俺は幻聴を振り払うように頭を動かして、ふと時計を見た。時刻は、夕方の五時過ぎだ。

昨日の夕方から、丸一日寝ていたことになる。無理に『属性』を使った代償、か。

俺はポケットに入れた携帯電話を取り出すと、電源がオフのままになっていたことに気付いた。

そうか、あの時にオフにしたんだっけ。……ふん、寝るには丁度いい。

と、虚ろな目で周囲の状況を確認すると、玄関からドンドンとドアを叩く音が聞こえた。

誰だろう。志木城か？ 翼か？

いや……誰でもいい、か。

心底どうでもいい。疲れているんだ。ずっと休みたいんだ。『真理の道』に巻き込まれてから、ろくに休んでないんだよ。

俺は、玄関から聞こえてくる音を無視して、再び布団の中に包まる。

……今の自分の姿を客観視すると、途端に世界が矮小に思えた。

学校の制服に着替えて外へ出ると、新鮮な空気が空っぽの胃の中に入る。

「……湿ってるな」

月曜日、天気は雨。俺の気分を表すような、ジメジメとした雨が



降っている。

いつそのこと雨に濡れたい　なんて思ったが、自重しておこう。  
右手で傘を開いて、治った左手で鞆を肩に掛けた。

重い気分のまま、学校へと歩き続ける。

今日も世界のどこかで、アイツは笑ったまま人を殺し続けている  
んだろう。そう思うと、ズキリと胸が痛んだ。……やめろ、考える  
な。後悔するぐらいなら、無関心を装え。関わろうとするんじゃない。  
い。

「つ、司くんっ！」

「……………っ」

気が付けば、俺は集合場所の公園に居た。

翼はゲームもやらずに、慌てた素振りで駆け寄ってくる。

「だ、大丈夫だった！？　け、怪我は無い！？」

「……ああ、心配かけたな、翼。悪かった」

どの口がそんな事を言うのか。体に怪我が無いのは事実だが、も  
っと厄介なモンが傷ついてるっていうのに。

「……………」

互いに黙って、学校へと歩を進める。俺は茫然自失なまま黙り、

翼は俺のことを心配してくれているんだろう。

頭の中では都合の良い言い訳が駆け巡り、いかなる質問にも答え  
られるように、最適な台詞を組み立てていく。

「ねえ、司くんって……ゆうえ」

「遊園地には行かなかった。吉田もな。土日は家族と旅行に行つて  
たんだよ。丁度県外の場所で、だから連絡も出来なかった」

吐き捨てるように、言葉が飛び出た。

コレは、通過儀礼なんだ。分かっていたことで、必ずやってくる  
質問だった。だから、早く終わらせたかった。辛いのを抱えるのは

……嫌だから。

「そつなんだ、良かったねっ！　大事件みたいだったから、心配し  
たよ」

俺の台詞を信じているのか？ …… いや、違うな。気を使っているんだ。

「そっか、すまねえな」

俺は、色々な思いを込めて、翼に謝った。心から 嘘をついて、心配を掛けて、すまねえな。

「うっん、巻き込まれてなくて安心した。あつ、そうそう……」

と、翼はいつもの笑顔に戻って、絶え間なく明るく調子で話し続ける。

そんな気遣いを他所に、俺は翼の世間話を聞き流していた。

これ以上の感情を詰め込むと、心がパンクしてしまいそうだったから。

教室では、担任の先生が無駄な雑談を交えながら話し続ける。

「あゝ、お前らも知つての通り、土曜日の『遊園地無差別殺人事件』のことだ」

「」

ビクンと体が反応して、心が揺れた。

「幸いなことに、ウチの学校には犠牲者が出なかったが、一応警戒はしとけよー」

心の隅っこで、安堵している自分が嫌いだ。近しい人が死ななかつたから、それでいいのか？ …… そんな訳ないだろうが。

「ウチの学校に被害は無かつたけど、一分間だけ黙祷な。これ、学校の決まりだから。やらないヤツは単位落とすぞー」

黙祷…… 死者に対して、哀悼の意を捧げること。

今の俺に、ソレが出来るのか？

心の準備が整わないうちに、先生がパンつと手を叩く。

静まり返った教室で、俺もクラスの皆と一緒に目を閉じた。

耳元で、そつと聞こえてくる 声。

『また……僕を見殺すの?』

「はっ……はっ……はっ……」

身体の震えが、止まらない。

カタカタ、カタカタ。

『母さん、粉になっちゃったわ。司は、助けてくれるのかしら?』

「はあっ……はあっ……はあっ……」

心臓の鼓動が、速くなる。

カタカタ、カタカタ。

『お兄ちゃん、僕達を殺しておいて……なんで生きてるの?』

ガタンッ!

「お? どーした西条。まだ一分経ってないぞー」

ふ、ふざけるな。こんなこと、耐えられる訳が無い。

「……体調が、悪いので……帰り、ます」

「っ、司くん?」

教室中の目が、勢いよく立ち上がった俺に集まる。

が、一向に構わない。

「お、おい、大丈夫か西条。保健室で休んだ方がいいんじゃないか?」

駄目だ。そんなことになったら、また吉田と顔を合わせる。

「……平気、です。……一人で、帰れます、から」

先生は顎に手を添えて、『うーん、分かった。そんじゃあ気をつけて帰れよ』と言ってくれた。

助かった。俺は足早に教室を出て、扉を閉める。翼や、志木城や、吉田の顔は一切見ない。合わせる顔が無い。

なんだか……今日は、『声が多い』んだ。早く、眠りたい。

俺は寄り道もせず家に帰宅して、制服のまま布団の中に潜り込んだ。

耳に張り付いた声を掻き消したくて、再び眠りについた。

目を覚ましたのは、日が落ちそうな午後六時。

やっぱり朝では……ないよな。そりや当然か、明らかに寝すぎだ。睡眠欲と疲労度は等価交換で、疲れてなければ寝れる訳が無い。

俺は制服を脱ぎ、寝巻きに着替えた。

と、ズボンのポケットに入れっぱなしだった携帯電話に目が行く。

「……電源、入れとくか」

なんでそうしたのは分からない。単に寂しかったのか、誰かに思いの丈をぶち撒けたかったのか、判別することが出来ない。

ピピピピ……ピピピピ……

電源を入れたタイミングで、着信音が鳴る。溜まっていたメールかと思ったが、目視すると電話着信のようだ。表示画面には、親友の名前が映し出されていた。

俺は、通話ボタンを押す。

『っ、司くん？』

「……翼か」

朝と同じで、心配そうな声。

「こんな時間に電話だなんて……珍しいな」

初めてのこともかもしれない。俺から電話することがあっても、翼は夕方過ぎに電話してこない。

『うん。司くんに、聞きたいことがあってね』

「……」

そういうことか。翼は、俺の『隠していること』が心配で、不安なんだろう。長い付き合いだ、そのくらいは分かる。

『……言いたくない？』

「っ……ああ。今回ばかりは、放っておいてくれると助かる」

嘘偽り無く、翼は察しがいい。少しのヒントでも、答えに辿りつく可能性がある。

『属者』に関することは、口が裂けても言えない。  
流れる沈黙。翼は聞き出すことに断念したのか、静かに告げた。

『司くん……信じてるよ』

「……………」

『司くんは、こんなことで負けたりしない。司くんの世界は、こんなことで壊れやしない。僕は……信じてるから』

片や親友に嘘ついて、片や親友を信じ抜く、歪な関係。  
任せておけ、とか言って笑い飛ばしてやりたい。

俺を誰だと思っただ、とか言って元気付けてやりたい。  
けれど、今の俺には、返せる台詞は一つだけしかない。

「……………ありがとう」

プツン、ツーツー。

終話ボタンを押して、黒い画面を見詰める。

翼の言葉は、重い。まるで呪いのようだ。

信じるってことは、同時に裏切られるかもしれないってことで。  
俺は、翼を……裏切りたくない。

もっと、もっと……強く、なりたい。

翌日、翼は学校を休んだ。

理由は分からない。担任の先生は、連絡なしの無断欠席だと言っていた。

もちろん、こんなことは初めてだ。

翼は軟弱な体質だから、病気で学校を休むことは稀にある。だが

らといって、無断で欠席するなんてのは考えられなかった。

翼に……何かあったのだろうか。

一つ前の席が空いていると、妙に虚しい。

「……西条くん」

俺を呼んだのは綺麗な声だったが、奇妙な威圧感が込められていた。

コンコンと机の端をノックして、志木城が俺のことを見下ろしている。

違う、正確には……見下していた。

「よくもまあ学校に来れたものね。あなたの精神力には感服するわ」  
お前が来いっつつたくせに。皮肉もいいとこだ。

……昨日の翼からの電話で、俺は停止することを止めた。  
悩んでもいい、凹んでもいい、落ち込んでもいい、嫌なことから目や耳を背けてもいい。だけど、止まるのだけは駄目だ。

少しでも前に進まないと、翼を裏切ることになる。

アイツに嫌われるのだけは……イヤだ。

「んだよ。悪口を言うのは、勘弁してくれ」

俺がそう言くと、志木城はつまらなそうに鼻を鳴らして。

「ふんっ、懦弱な魂ね。傍から見ている……不快になるわ」

じゃあ見んじゃねえよ。仲間だからって、言っている事と悪い事があるだろーがっ！

俺は、お前みたいな完璧超人じゃねーんだよ。

辛い時に貶されて平気なほど、大人でもない。

「……お前、何が言いたいんだよ」

イラついている俺を蔑むような瞳で見て、志木城は短く言葉を紡いだ。

「放課後、屋上で待っているから」

言うだけ言って、踵を返し自分の席に戻っていく。

ああ、分かったよ、行ってやるさ。

俺にだって、たまには怒りたいことがあるんだ。

昨日の天気とは打って変わって、青い陽気が見せる。

学校の規則で、立ち入り禁止区域になっている屋上。

懐かしむほど昔って訳でも無い、志木城と相対し共闘関係を結んだ場所だ。

俺は、いつかの時のように後ろ手でガチャンと扉を閉めた。待ち構える志木城、苛立ちを隠せない俺。このシチュエーションも、前と同じだ。

胸中は朝よりも高ぶっていて、今にもち切れそうだった。

志木城は屋上の奥で悠然と立っていて、俺より少し小さい身体をフエンスへと預けていた。劣等種を見るような目つきが俺を貫いて、余計に腹立たせやがる。

俺は志木城に近づいて、目を逸らさず睨み返してやった。自然と目には見えない火花がぶつかり合う。

「まずは、話を聞きましょうか。西条くん、どうして私の忠告を無視したのかしら？」

投げつけられる冷めた声。俺がどう言い繕ったとしても、言い訳にしかないだろう。

だから俺は、あの時感じたことを、素直に口にする。

「……俺の……エゴだ」

「俗語で飾らないで。単なる我がまま、自己中心的、自分勝手だったと言いなさい」

容赦の無い言葉が浴びせられる。一つ、一つ、心の鎖が千切れていく。

「そんな低俗な表現で私の忠告を無視した上、どうして西条くんは落ち込んだりしているのかしら？」

「……守れない人が、居た。助けられなかった人が、居たんだ。手を伸ばせば届いたのに、力を出せば救えたかもしれないのに。俺は動けなかったッ！」

「……そう」

ほんの少しだけ、志木城の顔に影が差し、また冷たい表情に戻った。

「それで、あなたはどうしたいの？ 落ち込んで、悪循環な自己嫌悪と自己憐憫に浸って、この先の戦いに生き残れるの？」

人間は、そんな単純にできてない。戦いの最中であつても、簡単に気持ち切り替わるのなら…… どれほど楽だったか。この罪悪感を耐えられるなら…… どれほど良かったか。

「俺は、お前みたいに…… 強くない」

保っていた最後のプライドが、折れた。

心を縛っていた鎖が、全て千切れた。

こんな姿、情けないだろう？ 笑いたければ笑え、馬鹿にしたいなら馬鹿にすればいいさ。

俺はもう…… 我慢の限界だ。

「お前みたいに！ 『願い』で取りも返せるからって、割り切れないんだよ！ お前みたいに、頭もよくない。お前みたいに、体だつて鍛えてない。お前みたいに 心が強くない！！」

バシッ、と。

不意に…… 頬を、叩かれた。

叩かれた箇所が、ジンジンする。

一瞬の出来事に、脳の処理が追いつかない。

目の前を、見る。

志木城は、怒っていた。

今までに見たことが無い表情で、怒っていたんだ。

「私の頭が聡明なのは当たり前。運動が出来るのも必然よ。でもね

…… あなたに、『私の心』を見せたつもりは無いわ！」

「ッ」

「憶測で者を語って、推測で人を値踏みして…… 何様のつもり？ 神様にでもなつたつもりなのかしら。あなたが考えた下らない『誇



大妄想』で、私の心を決め付けしないで頂戴！」

正論過ぎて、言い返すことが出来ない。

「なによ、黙って聴いていれば『強くない』って。ふざけるのも大概にしなさい。私に弱さを見せ付けて、何の得があると言うの？ 優しく労わって欲しいのなら、お門違いなのよ。勝手に『悲劇のヒロイン』なんかを気取って。あなた、男でしょ？ たとえ悲劇に遭ったとしても、挫けて良い理由にはならないわ！」

分かってる……みつともないかもしれないけれど、俺は、男だ。  
「それに私の心が強いだなんて、私以外の誰が決めたのよ！ 妹が植物状態になった時も、佐久間に打ちのめされて逃げていた時も、あなたと一緒に森林公園で戦った時だって……少しも、辛くなかったと言っても言うつもりなの？」

冷静なだけで、冷淡な表情というだけで、抱いていた感情は決められない。

「辛くて、苦しくて、痛くて、怖くて、逃げ出したくて……私だって、人間なのよ。感情が欠落している、人形じゃない！」

「……もう……もう、分かった。俺が、悪かったから」

「八つ当たりだってする。ムシャクシャして、西条くんが悪口だって言ってしまう。感情が溢れて、抑制できない時だってある」

「志木城……」

「だからって！ それで諦められるはずが、無いでしょう!？」

お互いに、抱えていた思いを、全て吐き出す。

これが、志木城怜実。高校二年生で、クラスメイトの女の子。分かっていて、分かっていてのことだ。

屋上で、俺を殺すことに躊躇っていたのは誰か。森林公園で、佐久間を殺すことに躊躇っていたのは誰だったか。

全部分かっていて、俺は

「私は……変わったわ。私のことを『強い』と思うのなら、その『強さ』をくれたのは、誰でもない……西条くんなのよ」

妹を救うよりも、母さんを救うよりも、万人を救う。誰が死ぬこ

とも認めない。犠牲者や被害者、加害者すらも救う答え。

俺達の 願い。

以前、志木城は、こう言った。

『だったら私に弱みを見せないことね。常に強くありなさい。私に、西条くんの情けない姿なんて見せないで頂戴』

あの言葉の真意。

そうだ、『強さ』を与えてくれたヤツが挫折するなんて……許せる訳がねえよな。

「私は、西条くんが諦めることだけは、許さない。答えを出したクセに、無責任に放り出すなんて、絶対に認めない。逃げるつもりなら……怨んで、呪って、私が殺してやるわ」

キツと睨みつけてくる。

志木城の瞳は透き通るほど綺麗で、身の毛がよだつほどに、怖い。悲劇に遭っても、ヒロインにはなれない。だったらさ、男なら、やることは決まってるよな。

結局、俺が幾ら悩んでも、凹んでも、落ち込んでも、目と耳を逸らしても、心が弱くても、時は流れ続ける。何処かで誰かが傷ついて、そして誰かが支えて、何処かの誰かが死んで、そして誰かが悲しんで。

世界は無限に広大なのに、俺は驚くほど矮小で。

ホント、なんだろうな。

「……何、笑ってるのよ」

「いや、志木城に罵られて、可笑しいんだよ」

「DM宣言？ やめてよね、汚らわしい」

断じてそうじゃないが、コイツの憎まれ口も、そんなに悪くない。そう、思った。

情けなくもがいて、哀れに足掻いて、それでもさ。

同じ思いつてのは大事で、仲間ってのは大切に、一緒に道を歩き

続けるってことは いいもんだって思うから。

俺は、ゆっくりと右手を差し出す。

「ありがとう。忘れてたよ、俺達は……一蓮托生だってな」  
差し出した手を、志木城が握る。

「今度忘れたら……許さないんだから」

いつかの、共闘の握手。

同じだ。あの時と同じで、触れた肌は……暖かった。

まだ……まだ強く、なりたい。

行かなきゃいけない所がある そう志木城に告げた俺は、上履  
きから靴へと履き替えて校舎を後にした。

すでに帰宅部は家に着き、その他の生徒は部活に打ち込んでいる  
のか、正門付近には人の通りが無い。

ただ一人。傾いた太陽に背を向けて、彼女は正門の前で立っ  
ていた。

「……吉田」

「あ……待ってたよ、西条くん」

どうやら、待たせてしまったらしい。

俺は吉田に近寄って、けれども顔を合わすことが出来ない。

そうだ、嫌われるだけのことを、してしまったのだから。

「……どうしたんだ？ 俺に、何か用なのか？」

どこか、吉田との関係は、観念していた。

志木城のようにビンタを喰らうかもしれないし、拳で殴られるか  
もしれない。ましてや、その程度で許してもらえないはずが無い。

高所恐怖症にも関わらず、俺に身を任せて観覧車から飛び降りて。  
死者と生者を選別し、精神力を削りながら癒して。気絶している俺  
を見つけ、体を支えてくれた。

いずれも俺の責任で、甘んじて受ける罰があるはずだ。

俺にとっての吉田は命の恩人だが、吉田にとっての俺はトラウマ以外の何者でもないだろう。

怖い。

嫌われると分かっているけど、怖かった。

遊園地では一緒に笑って、昼御飯を食べて、いっぱい吉田を知ることが出来たのに。

楽しかった関係が　簡単に、壊れる。

「顔、見てくれないんだね」

俺の視線は、足元。

吉田の影を、じっと見ていた。

「西条くんは、自分自身で考えるより、ずっと強いよ」  
先程の志木城とは、真逆なことを言う。

なるほど……確かに、自分の心を他人に決められたくないよな。  
「違う、それは『妄想』だ。今だって、こうやって吉田の顔を見ることも出来ない」

志木城の言葉に、少しでもアレンジを加える。

しかし

「うっん、そんなことない」

吉田の口から出たのは、否定の声。

「あたしは知ってる。西条くんはいつだって勇敢で、困っている人を放っておけない人なんだって。迷子は助けるし、傷ついている人も投げ出さない。犠牲になった人達の為に戦って、自分が傷ついて、痛くても戦い続けて……そういう人なんだよ?」

だから、違うんだ。そんな理想的なヤツじゃない。

「西条くん、あたしを信じて……か、顔を、見てよ」

「っ」

震えた声。

信じる。相手を、信頼する。

観覧車の中で、俺が吉田に言った言葉だ。

立場が逆になって、それで、俺は屈したまんまなのか？

これじゃあ……駄目だよな。

俺は、恐る恐る視線を上げる。

影、足、膝、腰、腹、胸、首、そして……顔。

吉田は 笑っていた。

太陽の逆光を受けて、不器用に、笑っていたんだ。

恥ずかしそうに頬を赤く染めて、涙を落とさないように。

その表情は、どんな侮蔑よりも痛くて、万の罵詈雑言よりも、俺の胸に突き刺さった。

「あ、あたしは、辛くないよ？ 痛く、ないんだよ？ ちつとも苦しくなんて、ないんだから。西条くんは……わ、悪くないんだよ」

「……よし、だ」

優しいのは、お前だ。

「さ、西条くんは、つ、強いんだよ」

強いのは、お前なんだ。

「うう……さ、西条くんは、悪くない、間違つて、ないんだからだからさ、もう、いいんだ。」

「そんな笑顔……見たことねえよ」

言った瞬間、張り詰めていた吉田の顔が、グシャグシャになった。トント、吉田の顔が俺の胸元に当たる。

「さ、西条くん……元氣、出してよ。あ、あたし、もう、どうしたらいいのか、わかんない……」

溢れた思いと一緒に流れ出た涙が、白地のワイシャツに染みている。

胸が締め付けられた。

これが、吉田久留巳。高校二年生で、同じクラスの女の子。知っていた、知っていたはずのことだ。

誰にだって優しく、周りに余計な気いばつか使って、他人だか

からこそ傷つけたくなくて。

全部知っていたのに、俺は

「……ごめん。ごめんな、吉田。ちゃんと俺、強くなるから顔をうずめたまま、吉田は頷く。」

「も、もう……こんな、思いは……したく、ない、かな」

ポロポロと泣きながら、呟かれた。

そう、だよな。理想的に思われて、実際の中身は違うから……それで、終わっていい訳じゃない。

こんな俺でも、過大評価してくれんなら、少しでも期待してくれるってんなら……それに、近づいてやろうじゃねえか。

諦めて……たまるかよ。

俺は、泣いている吉田の肩を抱けないまま、遠い紅色に輝く太陽を見ていた。

駄目押しで、もう少しだけ……強く、なりたい。

「ここに来るのも……久しぶりだな」

つつても、五日ぶりか。

見上げると、依然としてボロイ看板には『剛柔流空手道場』と書かれていた。

好きな時に来い、とは言われていたけど、まだ二度目だしな。少し臆病風に吹かれた気持ちだ。

「おい……何をしている」

「ぬわあっ!？」

突如、俺の真後ろから声が掛かる。振り向くと、案の定、五十嵐武こと師匠の姿があった。

変わらない、野放しにした無精ひげと、白い胴着、無表情に近い顔。

「お、驚かさないでくださいよ、師匠！」

「驚いたのは己だ。貴様は毎回感情表現が過剰すぎる」

「いやいやいや、気配消して近寄ってきたのは師匠でしょ！？ あと、驚いたわりに顔面がピクリともしてませんから！」

「で……今日は何をしに来た」

強面の顔と、ドスの利いた声で聞いてくる。

「そりゃあ、稽古をお願いしに来ました」

道場に来たんだ、稽古以外にすることなんて無い。

師匠は数秒間だけ俺の目を見て、『中に入れ』と言った。

「し、失礼しまーす」

ガラガラと戸を開け、鼻に香る畳の匂い。

師匠は定位置であろう神棚の下に正座しており、俺も続けて真正面に座る。

「……………」

前回来た時から薄々感づいていたが、師匠は寡黙だ。俺が話しかけないと、永遠に喋らない雰囲気醸し出している。

「あ、あの……稽古、は？」

「西条……貴様、負けたな？」

「ッ！？」

俺の問いを完全に無視して、師匠は１ミリだけ口の端を吊り上げる。

「フツ、教えを請う前に負けるとは……器用な奴だ」

「な、なんで」

「貴様の眼を見れば分かる。虚ろな……死んだ、魚の目だ。だが、微かに、燃えている」

う、嘘だろ？ 眼を見ただけで、何で俺の心境が分かるってんだ？  
「諺に……『目は心の鏡』という言葉が在る。それを突き詰め、格闘の世界に昇華したモノを『心眼』という。鍛えれば、貴様の意中を読むなど造作も無い」

お、オイオイ。ここは、いつからデタラメが常識になる格闘漫画

になったんだよ。

只者じゃないとは思っていたけど、師匠って実はエスパーか？

「……まあ、貴様の場合は、眼を見るまでもなく、顔に出ているがな」

そう付け加えて、師匠は静かに両目を閉じる。

「己が観たのは、叩かれ、冷やされ、熱された眼だ。鋼を鍛えるように、以前会った時の西条よりも、強い」

「……………」

もう、エスパーでも何でもいいや。

この人は、先程までのやりとりを、見抜いている。

「西条……手を出してみろ」

「？ はい」

俺は正座の状態で、膝の上に乘せていた右手の握り拳を突き出す。それと呼応するように、師匠は掌を突き出した。

「ジャンケンだと……これで、お前の負けだ」

「へ？」

グー対パー！。

結果だけ見れば、確かにグーを出した俺の負けだ。

「いや、だけど、そんなの後出しじゃないですか。ズルいですよ、師匠」

「……そうだ。己は卑怯な手法で西条に勝った。だが……負けは負けだ」

ふざけてんのか？ 稽古もつけずに、こんなことで遊んで。

「納得できません！ 正々堂々じゃないですよ！」

「……ならば、これが真剣勝負だったら……どうだ？」

「なおさら駄目じゃないですか、大体」

「……いや？ ……ちよつと待て。そもそも、真剣勝負に『ズル』なんて存在するのか？」

ズル、卑怯、姑息、汚い手段、何でもアリなんじゃないのか？

正々堂々な勝負と、真剣勝負は 違う。



真剣勝負は、より必死なんだ。勝つ為には、手段は選ばない。だとしたら、先程のジャンケンとは、どうだろう。

俺はグーで、師匠は後出しのパイ。卑怯だけれど、結果的には俺の負け、なのか？

……嫌だ。

「やっぱり、納得できません」

「……何故だ？」

それは……っ！？　そうかつ！

ハッと『答え』に気が付くと、師匠は静かに頷いた。

「……勝負とは、勝者と敗者に分かれる。しかし、勝敗は誰かが決めるモノではない。自分自身が『負けた』と納得するまで、敗者ではないのだ。故に問う……先程のジャンケン、西条は『負け』を認めるのか？」

遠回しな言い方だが、コレを教えるために……師匠はっ！

「真剣勝負とはいえ、卑怯な結果では納得できません」

例えば、奇襲。例えば、不意打ち。卑怯な結果に、満足しない人は星の数ほど居るだろう。

だけど、それでいいんだ。俺が納得しなければ、『勝負は成立しない』んだ。相手が一方的に浮かれているだけで、まだ決着はついていない。

「……そうだ。勝負の本質とは、『いかにして相手に勝つか』ではなく、『相手に負けを認めさせること』こそが、重要なのだ」

勝者とは、相手に勝ったことではなく、相手が負けること。

敗者とは、相手に心で負けること。

「……なら、決着は、どうしたらつくんですか？」

暫く沈黙して、師匠の口が開いた。

「相手が納得するまで戦うか……相手が認めるほどの一方的な『力』で蹂躪するか……相手を……殺すか、だ」

「っ！」

ゾクリ。

背筋が凍る。一瞬だけ、師匠の瞳から、殺気を感じた気がした。  
俺は石像の様に固まってしまふ。

「……フツ、まあ説得させる方が無難だな。西条の場合は、その方面に長けていそうだ」

「そう、ですね」

師匠はゆっくりと立ち上がって、俺に背を向ける。

「お前は……まだ、『負けたまま』か？」

「いえ、『まだ』負けてません。次は、俺が勝ちます!!」

最早、強さは、いらない……諦めないし、負けないから。

何故、俺は声を掛けたんだ？

見捨てられなかったからだよ。

何故、関わろうと思ったんだ？

胸の奥がざわめいて、いてもたってもいられなかったんだ。

何故、助けようと思ったんだ？

五郎の笑顔が見たかった。それ以外にはねーよ。

何故、俺はあの時に動けなかったんだ？

……地獄に、体が慣れてなかったんだ。

何故、『属性』を使って、あの親子を助けようと思わなかったんだ？

思ったさ。だけど、遅かったし、相手の元素が『土』である以上、結果は変わらない。

『僕を殺したのは、お兄ちゃんでしょう？』

……そうだよ。だから、お前を助けるのも、俺だ。

『お母さんと一緒だったのに……見殺しにしたんでしょう？』

……その通りだ。だからって、もう目や耳を背けたりしない。

『お兄ちゃん、痛いよ、苦しいよ……助けてよ』

助けてやるよ、待ってる。俺が、救ってやる。

『また……僕を見殺すの？』

殺さない。

この先、そういう場面に直面したとしても……諦めない。

最後まで、負けない。

俺が『願い』を叶えて、全員まとめて救ってやる。

……いや、違う、そうじゃないな。救った過去すら残しちゃいけないんだ。

五郎達は 死なせない。

そうさ、男が悲劇に遭ったなら……ヒーローになるしかねーんだから。

## 第二十三話 支えられた自分（後書き）

という訳で、西条くんが復活です！

ぶっちぎりで長文記録も更新です。

長文、失礼致しました。二十二話と被る台詞も多々あり、読みづらかったかもしれません。しかし、構成上変えられませんでした。申し訳ないです。

それでは、シリアスな展開が続いたので、次回はギャグ多めで書きたいと思います。

## 第二十四話 教えなくなかった内幕（前書き）

二十四話の登場人物

西条司<sup>さいじょうつかさ</sup>：主人公、属性は『炎』

志木城怜実<sup>しきじょうれいみ</sup>：属性は『氷』

吉田久留巳<sup>よしだくるみ</sup>：属性は『癒』

名島翼<sup>なじまつばさ</sup>：友達

## 第二十四話 教えたくなかった内幕

心機一転。いつもの公園で珍しくアイツを待っている間、今週末に控えている文化祭のことでも考えておこう。

そう、今週の金曜と土曜日に行われる文化祭。

俺の高校は進学校で、だからといって文化祭の当日まで勉強ばかりをやっている訳ではない。むしろその逆、人によっては普段から溜め込んでいるフラストラーションを発散するかの如く、クラス毎の出し物（営業活動）に精を出している。

その活動内容は凄まじく、ある意味、発狂しているといっても過言ではない。目を真つ赤に充血させながら学校中を駆け巡ってビラを配り、ビラを手に取った瞬間に半強制的な話術で物を買わされる老若男女、お構いなしだ。うん、相手が大人であつてもドン引きな状況だろう。しかも、平々凡々な学生とは思えないほど統率が取れていて、あの手この手の経営戦略が学校中を往来し、まさに『祭』に相応しい賑わいを見ている。いや、俺も一年生の時はおつたまげたモンだ。

それもこれも、全ては我が校の風習が原因だろう。生徒手帳にも小さく書かれている、この一文。

『文化祭の各学年において、最も売り上げが高かったクラスには特科修学旅行の権利を贈与する』

特科修学旅行。聞きなれない単語だが、要するに一般的な修学旅行ではなく、特殊な科目を学べる旅行ということだ。一部の例を挙げるとすれば、高級ホテルに宿泊、高級料理を満喫、軍事ヘリコプターへ搭乗、巨大軍艦への乗船、太平洋の観望、等々である。後半の『あつち系』な話は一先ず置いて、普通の学生では経験出来ないぐらい豪勢らしい。噂では校長先生のコネによって、その修学

旅行は実現しているらしいが、真相は定かでは無い。何にしても、それこそ発狂するレベルで魅力的な条件であることには違いないのだ。

その為、我が校内では『文化祭で一番の売り上げを目指すクラス』と『労せずし束の間の休息を楽しむクラス』で二分化されている。俺のクラスは、もちろん少数派の後者だ。言っちゃあなんだが、手抜き漫画喫茶で売り上げベスト一位を狙えるほど、甘い世の中ではないってことだ。先生の付き添いで、連日徹夜しているクラスの連中と比べるのも間違ってる気がするが……

俺に言わせれば、目先のニンジンに釣られて走らされている馬にしか見えないんだがな。美味しそうな餌に群がる魚にも見える。どっちにしたって、あの校長の思惑に踊らされているだけだろう。まあ、その腹黒い企みで毎年ウチの文化祭は大盛況なワケなんだが、やれやれ……校長も人が悪い。青少年達の向上心を利用した、実に歪んだ教育である。

と、そんな不毛なことを考えていたら、ようやくアイツの姿が見えてきた。

「お早う、司くん」

「……うーっす」

少し小柄な体躯、伸びきった髪で目が隠れている。俺の親友こと、名島翼。そうだ……コイツを待っていたんだよ。

再び観た悪夢に、俺は自分なりの決着をつけて、目を覚ましたのは朝の六時半だった。

当然、目覚まし時計の力を借りて起きたのではない。時計に設定している時間は七時だ、まだ早い。

着信音。正確には翼からのメールが届いた音で、俺は目を覚ました。

本文は一行だけで、『公園で待ってて』と書かれたメールだ。昨日、翼が無断欠席したのも気になっていたので、言われなくて

も待っているつもりだったが……まさか翼の方から連絡してくるとは思わなかった。

そして、俺が公園で待たされるのも 久しぶりだ。

「お前、昨日は何で休んだんだよ」

単刀直入。遠回しな言い方はなしに、俺は聞いた。

翼は『たはは』と苦笑いして。

「うん。フラグ整理とか、色々やってたんだよ」

「……フラグって……ゲームかよっ!？」

「もう久々にスングク面白いのつけてね、学校サボっちゃった……  
…テヘ」

ポカン、と頭に一発。

「あてて……何をするんだよ司くん」

「『テヘ』じゃねえっ! 男が言っても気色ワリーんだよ! ……  
つたく、あゝあ、心配して損した。で、一体どんなゲームやってた

んだよ。翼が学校サボるのって、初めてなんじゃねえか?」

「うん、そうだねゝ初めてかも。ゲームは……とにかく楽しいんだ。  
フラグが分かりにくくなって、複線とか先が読めないし、しかも  
主人公は最初からレベルMAXなんだよ」

「なんだそりゃ。ゲームとして破綻してないか?」

「そんなことないよ、何故なら敵もレベルMAXだからね。しかも  
エンカウント方式。歩いているだけでドッキドキなんだよ」

「ふーん。なんつーか、斬新なシステムなんだな」

「うん! 司くんとも……やってみたいな」

「悪い、俺はゲームやんねーんだよ。つーか、幾らそのゲームが面白  
いからって、学校はサボんなよ」

「そうだねゝ、少し反省。でも大丈夫、主人公の呪文は全部覚え  
たし、今までのフラグもちゃんと整理したからね。もう学校は休ま  
ないよ」

向けられる無邪気な笑顔。翼は、俺が落ち込んでいても、こうや  
って元気になっても……訳を聞かないで変わらずに接してくれた。



こんな俺を、ずっと信じ続けてくれたんだ。だからさ、今の俺はお前を裏切つてないよな？

「……翼、サンキューな」

「ん、何か言つた？」

「別に、なんでもねーよ」

「？ 変な司くん」

その後、久方ぶりに、俺と翼は談笑をしながら登校した。自然に笑うことが出来て、嬉しかった。

学校に着いて早々、俺は志木城の席へと行つた。

「志木城……話がある」

「私もよ。昼休み、吉田さんを連れて屋上に来なさい」

てな感じで、志木城がそっぽを向いて会話終了。その間、約五秒。なんつーか……この教室、局地的にドライだ。もつとこうさ、楽しく会話しようぜ？ 色々と話題だつてあるだろ？ 例えば、お前の目元に出来てるクマとかさ。つと、ここで俺が『寝不足なのか？』とか聞いたところで、志木城は何事もなかったように無視するか『だから何？ 分かつてるなら消えなさい』とか言つんだろーがな。

……はあー……自分で想像してたら凹んできた。えーつと……次は、吉田だったか。

「おーい、吉田ー」

「つー？ さ、西条くん」

ごく自然に俺が声を掛けて近づくと、バツと勢いよく顔を伏せる吉田。若干、頬が紅潮している気がする。

……やっちまった。西条司、痛恨のミステイクだ。

昨日、あんなことがあった直後だっていうのに……何で俺は気軽に声掛けられんだよ。神経が図太すぎるんだろ。

吉田につられて、俺も少し赤くなる。ええい、照れくさいな。

「いや、あのな、大事な話があるんだが……昼休み、屋上に来てくれないか？」

「お、屋上！？」

「バ、おまつ！ 声、声がデカすぎる！！」

ザワ……ザワザワ……『西条と吉田さんって』……ザワザワ……

「さ、西条くんが、ああ、あたしに話って……お、屋上って……だ、大事な話ってえ！？」

徐々にヒートアップする吉田。待て待て待てっ！ ここは教室、クラスルームですよ吉田サン！？

「お、落ち着け、ストップだ吉田！ 大事な話ってそーゆー意味じゃないくてだな。俺達の、秘密の話で、ほら、分かるだろ？」

「ひ、秘密の話！？」

ザワ……『二人だけの秘密』……ザワ……『屋上で密会』……ザワザワ……

い、いかん、非常にマズイ。俺は教室で『属者』に関する話をする訳にもいかず、だからといって志木城からの言伝をオブラートに包もうとしたが、ことごとく空回りする。さつきから聞こえるクラスメイトのざわつきが怖すぎんだよ。全部誤解だったの！

「だ、だから、志木城と三人の話で……な！」

「し、志木城さん……と？」

やっと語弊が解けたようで、吉田は恥ずかしそうに顔を伏せたまま静かに頷いた。

良かった……正しく伝えられた……

安心するのも束の間、俺の背中には男女問わずの負のオーラがビンビンと感じとれていた。

ザワ……『志木城さんと三角関係』……『屋上での惨状』……『修羅場』……『両手に花』……ザワザワ……

昼休みまでに、俺が袋叩きされてなければいいが……それは神の

みぞ知る話である。いや、本当に、全身全霊全力で他人事にしたいっ！！

「……結局ボコされましたが、何か？」

「たははは、僕に言われても……」

案の定、予測通り、どう表現しても構わないが、俺はクラスの男子から暴行に遭った。家庭内暴力ならぬ、クラス内暴力である。オイ教育委員会、出て来い！ 事後処理だけじゃなくて、今こそ仕事をすべきだろうが！ 俺は虐められっ子の如く心の中で叫ぶが、心配そうにしてくれるのは目の前の翼だけだった……何故か舌打ち交じりで。ああ、孤立無援で四面楚歌。これも何かの因果応報なのだろうか。

「司くん。頭……大丈夫？」

「……駄目だ、今日だけで脳細胞の半分が死滅したと思う」

別に、翼は『アンタ馬鹿なの？』という意味で頭を心配した訳じゃない。あいつ等……クラスメイトの連中は、あろう事が俺の頭を殴ってきやがった。しかもオデコと髪の毛の境目をピンポイントで寸分違わずに、だ。俺と翼を除いた男子20人が総出で、だ。驚愕の無駄な連携力、クソツタレ……文化祭で発揮しやがってたんだ！ 頭皮にダメージが蓄積して禿げたら訴えるぞコノヤロー！！ とは……逆襲が怖いので口が裂けても言わないチキンな俺である。

ボコボコにされた午前中を乗り越えて、昼休み。俺は男子諸君の恨みがましい視線と、女子皆さんの冷ややかな視線を躲しつつ、なんとか屋上の前まで辿り着いた。

「あ、西条くん」

「……吉田、どうしたんだ？ そんな所に突っ立って」

見ると、吉田は屋上のドアの前で困惑しながら立ち尽くしていた。

手には小さい袋包み。

「もしかして……ソレって弁当？」

「え、うん、そうだけど……あれ？ 西条くんの分は？」

天然　その二文字がフワフワと宙を舞って、スポンと俺の頭に入る。

「吉田……何か勘違いしているかもしれないんだが、俺達は昼食を食べに屋上に来た訳じゃないんだ」

「え、えっ！　ち、違うの！？　あ、あたし、てつきり『仲間同士』で話ながら食えることかと思って……その……」

なんとという平和的解釈だろうか。この吉田は、現代社会における絶滅品種かもしれない。

「残念ながら、誠に残念ながら間違いだ。少なくとも、俺が話す話題では美味しい飯は食えそうに無い」

むしろ吐き気を誘うような、地獄の話だ。あの時の矛盾を……正す為のな。

「そう……なんだ」

無念そうな吉田の表情。そうだな……いつかは、楽しく話しながら昼飯を食ってみたい。そう、思った。

「で、どうして屋上に入らないんだ？」

「う、うん……志木城さんが、怖くて……」

「あん？」

俺はドアに張られているガラス窓を覗く。

「」

志木城が、一人で奥の方に立っていた。腕を組んでの仁王立ち。

凄まじい剣幕で、ドア越しの俺達に向かって睨みつけている。……何やってんだアイツは。

「行くぞ、吉田」

迷ってても仕方ない。俺はガチャリとドアを開けて、吉田を屋上の中に入れた。っと、ドアの鍵を閉めるのも忘れない。

俺達は、不機嫌そうに睨んでいる志木城に近寄った。風は……な

いな。うん、いい天気だ。

「来たわね、西条くんは吉田さん」

「ああ……つか、なんで睨んでんだよ志木城」

「一つは野次馬払い、もう一つは単純にイラついているだけよ。あなた達の愚直な行動について、ね」

「……俺、なんかした？」

「はあー……西条くんは鳥頭？ 教室でのやり取り、もう少し上手い方法がなかったのかしら。お陰で変な噂は立つし、屋上での話し合いもやり難くなるし……」

「ぐっ……ぬう……」

それを言われると、身も蓋も無い。

「あ、あの、志木城さん、ごめんなさい。私が大声出しちゃったから……」

「そうね、吉田さんの所為でもあるわ。西条くんの言い方も不適切だけれど、吉田さんの察しの悪さも今後は直して欲しいわね。だから二人に怒っているの。何度も言うけど、今はサバイバルバトル中、少しの油断や軽率な行動が……命の問題に、繋がるから」

自分に厳しく、他人に厳しく。志木城の台詞は、まるで自分自身に対してにも言い聞かせているようなニュアンスだった。

俺は正論に何一つ言い返せず沈黙して、吉田は落胆したように持っていた弁当を後ろ手で隠してしまう。

雰囲気は最悪、俺が招いた自業自得か。

「……時間も無いし、反省会は放課後にしましょうか。まずは、私から話してもいいかしら」

「おう、俺の話は長くなりそうだから後回しでいいぞ。志木城の事件から話して」

と言い掛けた時、俺と吉田の後ろ　つまりは屋上に入るドアの方角から、『ドスン』と鈍い音が聞こえた。

「……西条くん、鍵、ちゃんと掛けたんでしょうね？」

「掛けた……はずだ」

「う、うん。あたしも確認したよ」

吉田のフォローを聞いても、怪訝そうに眺めている志木城。今の音……確かに気になる。これから先は『一般人お断り』の話だ。聞かれるわけには、いかない。

「野次馬か？」

「だとしたら随分と不躰で無粋ね。そんな低俗な存在に、私達の会話を阻害する権利は無いわ。……いい、私が確認してくる」

言うが早い、志木城は臆せずスタスタとドアに近づいていく。ガチャガチャと鍵を確認して、身を一步引き、突如として……鉄製のドアに一撃！？ 決まったー！ 見事な上段回し蹴りだーっ！！ゴイインという音を残して、何食わぬ顔で俺達の所に戻ってきた。む、無表情が怖いよ、志木城サン！

「ふざけた野次馬達だったわ。鍵も掛かっていたし、問題はなさそうね」

「あ、あの……志木城さん、足は大丈夫？」

吉田、突っ込むとはソコかよ！？ な、なんだこれ、俺、スルーしてもいいの？

「ふっ、大丈夫よ。閑話休題ね。そろそろ本題に移りましょう」

「お、オイ、野次馬はいいのかよ」

「平気よ。どうせ、この距離からじゃ耳を澄ましてもドア越しには聞こえないわ。そんなことより……これから話す事実を、しっかりと脳内に焼き付けなさい」

志木城が真顔に変わって、俺と吉田は頷いた。

「遊園地で戦った『岩』の『属者』は……谷脇雅臣、という名前よ」

「なっ！？」「えっ！？」

グラリと、視界が、揺らぐ。

「これはマスコミには流出していない情報なのだけれど……警察内部では、既に高危険度で指名手配されているらしいわ。谷脇は、元

死刑囚で収容所に拘留されていて」

「な……に？　谷脇、雅臣、死刑囚、だと？」

「酷い惨事だったそうよ。収容所に居た警察官、拘留中だった犯罪者、誰も彼も区別なく、例外なく……皆殺しに遭ったって記載されていたわ」

気が付くと、俺の横で吉田が震えている。ああ、俺も同じ気持ちだ。

『あの場面』を想像するだけで、ぞつとする。

「現在は行方不明で、警察は遊園地からの足取りを追っているわ。吉田さんも知つての通り、ホラーハウスに作られた『洞穴』を中心にね」

「……どういう、ことだ」

辛うじて、声が出た。志木城は表情を変えず、淡々と答える。

「あなたが倒れた後、吉田さんがホラーハウスから運び出したのは……憶えている？」

俺は首を横に振る。その時は完全に気絶していた。次に目を覚ましたのは、遊園地の外だった。

「そう、西条くんが倒れている真横に、底が見えないほどの洞穴が出来ていたそうよ。どう考えても逃走用ね」

最後、俺の『炎』で腕を燃やして……谷脇は、逃げたのか。うる覚えだが、『岩窟』とか言っていた気がする。岩の洞穴で　『岩窟』か。

「ざけんな！　散々殺しておいて、一方的に惨殺しておいて、いざ自分が危険になると逃げるなんて　フザケテヤガル、忌々しい。」

「……西条くん、憤る気持ちも分からなければ、二度も同じ過ちは犯さないで頂戴」

憤怒した俺を、キツと睨みつける志木城。

「そう、だよな」

もう同じ轍は踏まない。谷脇雅臣は、俺『達』の力で、倒してやる。

「ええーっと……どうして志木城さんは、ニュースで報道されていないことを知ってるの？ あ、あたしも毎日テレビとか見てるけど、犯人の名前なんて初めて聞いたし……」

「っと、そうだった。弱々しく手を上げて、吉田が意外にも鋭い質問をした。」

「それは……っ……」

途端にバツの悪そうな表情になる志木城。

「んだあ？ 急に隠し事かよ。らしくないな志木城」

俺の知ってるお前は、もっと堂々とした奴だったがな。

「……企業秘密よ。それは私のパーソナルなデータだから、簡単には教えられないわ。……そうね、西条くんが土下座をして惨めたらしく請うのなら、考えてあげなくも無いけど」

コイツ、開き直りやがった。ったく、あゝあそうかい、俺だってそこまでして知りたくないっつーの。

「へいへい、それで、奴の名前は分かった。次に俺達はどう動けばいいんだよ」

「……ふんっ、基本的なスタンスは警察内部の捜査報告待ちよ。あとは日々のニュースを見て、不自然な出来事があつたら確認することね」

要はいつも通りってことか。もどかしいが、俺達に警察ほどの捜査能力は無いしな。出来ることとしたら、『属者』の視点でニュースを見ることだけ、か。

「分かった。吉田も、それでいいな？」

「うん」

「なら早速、互いのアドレスでも交換しましょうか」

「いいっ！？」「えええ！？」

な、なんだって？ 志木城、お前は突拍子も無いことを言うのが恒例になってないか！？

「何を驚いているのよ二人とも。連絡手段を確保するのは当然でしょう？ 先週の遊園地で、私と吉田さんの連携が出来ていれば、ど



れほどリスク回避できたと思っているの？ 『誰かさん』は勝手に電源を切るし」

「ぬう……ま、まあ、それはそうなんだが……」

純然で清廉な中学生時代を過ごした俺には、女子の携帯アドレスというのは雲の上の神品に近い存在な訳で……ホントにいいの？

「よ、宜しくお願いしまひゅ！」

慌てて携帯電話を取り出す吉田。舌嚙んでるぞオイ！

「まずは私と吉田さんからね……はい、交換完了」

赤外線通信、実に便利な世の中である。吉田は志木城と交換できたのが嬉しいのか、先程の暗い話は何のそのな笑顔になっていた。

「私と西条くんは交換済みだから、次は吉田さんと西条くんが交換しなさい」

「おう」「え……」

志木城とは森林公園の時に無理やり交換したんだっけ。懐かしい思い出だ。つと、チラリと横を見ると、何故か吉田の表情が180変わっていた……うつ、流石に嫌いな相手とは交換したくないのか？

膠着したままの二人。

「……はあ……あなた達、仮にも恋人同士なんでしょう？ 何を戸惑っているの。西条くん、携帯電話を貸しなさい」

志木城はバババツと俺の携帯電話を奪い取って、吉田の許可を貰う前に登録してしまった。

仮にも恋人同士、ね。親睦を深める為の初デートが『アレ』で、すっかり忘却の彼方だったよ。

妙なテンションのまま予鈴が鳴り、残りの話題は放課後に持ち越すことになった。

午後の授業中、吉田の表情は晴れないままで、俺の胸中也靄が掛かっていたと思う。

登校中の翼から聞いた話だが、どうやら先週の一件で文化祭の準備や部活動に規制が掛かっているらしい。部活動は一時活動停止、文化祭の準備は先生の同伴が必要みたいで、ウチの学校にもそれなりの危機意識はあるようだった。あの腹黒校長にしては、まともな判断だろう。

そんな訳で放課後、俺達はいつもの教室 ではなくて、再び屋上に集結していた。立ち入り禁止区域も、こうやって何度も入っていれば、次第に罪悪感が薄れていくな……いかにかん。

作戦会議&反省会と題して、昼休みと同じ配置 志木城が頂点の二等辺三角形になって座っていた。

「……以上だ」

俺は、遊園地で起こった出来事を詳細に伝えた。事後報告、今でも積極的に思い出したくない話ではあるが、反省して 次に活かさなければいけない。そうしなければ……亡くなった人達が、報われない。

吉田は顔を伏せた状態で震え、志木城は顎に手を当てながら長考していた。

「そう……だとすると、谷脇の腕は、確かに焼いたのね？」

「多分な、谷脇の叫び声は聞いたと思う。俺も満身創痍だったから、記憶が定かじゃないんだ。……それで、志木城に質問なんだが」

「何よ」

「『相生』の原理をひっくり返した蒼炎、あれは 何だ？」

「……………」

岩壁を瞬時に灰に変え、貫いた蒼い炎。相生でも相克でも、相侮でも相乗でも、ましてや比和でもない。俺が知らない、現象だった。志木城は険しい表情のまま、目を閉じる。

「推測だけれど……聞きたい？」

「頼む」

「元々、相生にも相克にも、ごく僅かに『逆転の思想』があるの。木が燃え続ければ火が消えるように、燃えカスの灰が増え続ければ土の処理が追いつかないように、ね。西条くん、佐久間と戦った時のことは覚えているわよね。関係性で言えば、あの時も『相生』だった」

俺が『火』で佐久間が『木』、たしかに『木生火』だ。

「けれども西条くんの『炎』は相殺されただけで、全てを燃やし尽くすことは出来なかった。つまり、あの時点では双方の『力』が拮抗していたことになる」

……言われてみれば、その通りだ。

「以前言っていた、イメージの力か？」

「それもあるわね。でも、それだけじゃない」

志木城がゆつくりと目を開く。

「外部からの力……それが有力な回答だと思うわ」

「外部？」

「佐久間の場合は『他者からの吸収』、そして……西条くんの場合は、堂島くんの『真名』」

「ッ!？」

堂島の……真名だって？

「たははは、面白いこと話してるね」

不意に、俺の後方から、声が聞こえた。反射的に、振り向く。  
「なっ!？ な、んで……お前、が」

ドアの、真上。コンクリートの縁に、足を掛けて。

「ひどいよ司くん。仲間はずれは……良くないんじゃない？」  
屋上の鍵は、掛けたのに。

「名島……くん」

「こんにちは、吉田さん……それに、志木城さん」

少し小柄な体躯、伸びきった髪で目が隠れている。口元には、笑み。

心臓が、破裂しそうだった。

「……ずっと……そこに居たの？」

志木城の問いに、翼は首を軽く振って。

「うっん、『今』来たところ」

どうして、どうやって、何でココに。そんな疑問が、頭を巡回して。

「ち、違う、違うんだ翼。今の話は、げ、ゲームの話で」

「……ふう……隠さなくてもいいんだよ、司くん。もう、フラグ整理は終わったんだから」

翼の口から、何かが聞こえた。

「……『空』」

瞬きは、していない。それなのに、捉えていた翼の姿が 消えた。

「こっちだよ」

体がビクンと反応する。

翼は、いつの間にか俺の真後ろに居て。

「その話、僕も混ぜてくれない？」

何年間も見続けてきた顔で、笑った。

## 第二十四話 教えたくなかった内幕（後書き）

祝、一万PVです!!

読者の皆様、誠に有難う御座います。

今後も精進して参りますので、どうぞ末永くお付き合下さい。

## 第二十五話 知りたくない事情（前書き）

二十五話の登場人物

さいじょうつかさ

西条司：主人公、属性は『炎』

しきじょうれいみ

志木城怜実：属性は『氷』

よしだくるみ

吉田久留巳：属性は『癒』

なじまつばさ

名島翼：属性は『空』

いがらしたけし

五十嵐武：師匠

## 第二十五話 知りたくない事情

「空間……転移……？」

「うはあゝ。さっすが志木城さん、一発で見破られちゃったよ」

目の前に居る翼は、まるで世間話でもするかのように 自然体だった。志木城が纏う雰囲気とは異なり、あまりにもギャップを感じる。非日常と日常を同時に目にしているかのような錯覚。この場合、どちら方が正しいんだろうか？

「……見え透いた陳腐な世辞は要らないわ。名島くん……西条くんから、離れなさい」

「やだなあゝ、志木城さん。普通に話してるだけじゃないか。何か誤解しているみたいだけど、僕に戦う意思なんて無いんだよ？」

「たたか、う？ 何を……何を言っているんだ、翼。」

「御生憎様、私はそんな戯言を鵜呑みにするほど樂觀的にはなれないの。……吉田さん、私の後ろに引いて」

「あ……は、はい」

脅えながら、たどたどしい足取りで志木城の後ろに隠れる吉田。一体、何に脅えているんだ？ ここには、俺と、志木城と 翼しか居ないのに。

「たははは……まいったなあゝ、僕は司くん達の仲間になりたいだけなんだけど」

「その言葉を額面通りに信じると？ ふつ、馬鹿馬鹿しい」

さつきから、志木城は何の話をしているんだ？ 翼は俺の友達で、親友で、とつくに 仲間じゃないか。

「……志木城さんは僕が『属性』を使えるってことに、驚かないんだね」

「日常に、ノイズが走る。」

「隙を突くつもりだった？ それは残念ね。私は出会った人間全てを疑っているから、特に動揺することはないの」

「いや、誤解だつてば。ホント、まいったなあ」

翼は困ったようにポリポリと頭を掻く。あの仕草、昔から変わってない。

「しき……翼、おま、お前等は……」

話している二人を交互に見る。口を開くが、伝えたい言葉が出てこない。

頭の中が、グチャグチャだ。次から次に真相が明らかになっていて、上手く整理できない。

……あ？……真相？　なんだっけ、それ。

「名島くん、あなたは　どこまで知っているの？」

困惑している俺を置き去りにして、志木城と翼の問答は続いている。

「うーんとね、とりあえずココに居るメンバーが『属性』を使えるってことは知ってるよ。だって分かり易すぎるでしょ、最近の動向とかさ」

また、ノイズが走った。

「同じクラスだと……やっぱり筒抜けよね」

「たははは、そりゃあもう。伏線にすらならなかったよ」

「……でしょうね。今日のやり取りを含めて、不思議に思わない方が異常だわ」

「うん、噂みたいな痴情のもつれならともかく、同じ『属性』を使える人』にとつては特にね。司くん達には悪いけど……昼休みも盗み聞きしちやっただ。本当はその時に打ち明けようと思ってたんだけどさ、なんだか話が白熱してるみたいだったから……ごめんね」

「別に謝る必要なんて無いわ。私も半ば諦めていたしね。遅かれ早かれ、気付かれることは前々から分かっていたことだし、私以外の『属性』使用者が同じクラスに現れた時点で、“不幸な出来事”が起こることも想定していたから。逆に、あなたがこうして釣れただけでも大収穫よ」

「……あの……志木城さん、そんなに睨まれると怖いんですけど。」



僕、もしかして死亡フラグ立ってる？」

「ビンビンにね……それで、名島くんは、これからどうするつもり？」

「ん、どうって？」

「約一名、役立たずな間抜けが居るけれど……状況は三対一。あなたの劣勢は必至よ。まさか、勝算もなしに出てきたんじゃないでしょうね」

「……えーっと、さっきまで僕が言ってた台詞は、馬の耳に吹く東風ってことでオッケー？」

「ふん、本来なら文言不要の問答無用で斬りつけるところだわ。たまたま　偶然その木偶の坊の知り合いみたいだから交渉しているだけよ、感謝しなさい。もし、あなたが『真名』を名乗らないのであれば……」

両の手を高く掲げる志木城。なにかを握っているような手つき。

あの構えは　上段切り、か？

志木城は、誰に、何をしようとしているんだ。

「わわわっ、一方的過ぎるよ！　これじゃあ交渉って言うか、恐喝じゃないか！　もっと建設的に、落ち着いて話そうよ」

「話す？　ふっ、既にそんな段階ではないわ。殺すか、奪うか。あなたが口にしていいのは、自分の『真名』だけよ。……『氷』」

空気中がパキパキと音を立て、志木城の両手にスッポリと氷の剣が収まる。

剣から放たれる青白い輝き　その鋭い刃は斬る為の物ではなく、触れた瞬間に凍てつかせて砕くモノ。絶対零度の氷剣。

「それが志木城さんの『属性』……うん、格好良いね……でも、困ったな。僕、志木城さんはもう少し冷静なんだと思ってたけど……これじゃあ話し合う為に、ちょっと『抵抗』するしかないじゃないか」

苦笑を消して、身構える翼。  
やめろ。

どうして、こうなった。

志木城は俺のクラスメイトで、翼は俺の親友じゃないか。俺の知っている二人が、なんで争わなくちゃいけないんだ。

「……………やめろよ」

呟き程度に小さい声だったが、両名の耳には届いたはずだ。

「申し訳ないけれど、手加減は出来そうにないわ。その代わり、一瞬で逝かせてあげる」

「……………それでも、僕は逃げるだけだよ。追うのに諦めたら、ちゃんと話を聞かせてね」

俺の話を聞けって。やめろって言っただろうが。

「逃げる、ね……………好都合だね。あなたの空間転移についても、時間稼ぎの間にカラクリが見えてきたところだし、躲せないほど追い詰めれば　その甘い考え方も変わるのかしら」

「どうだろうね。さてさて、ゲームじゃないアクションは苦手なんだけど……………」

クソツタレ、限界だ。心のスイッチが、カチンと切り替わる。

「ヤメ口つつてんだろツ!!」

「……………」司、くん」

もう止まらねえ。こうなったら、息が続くまで吼えてやる。

「志木城、さつきから何おっぱじめようとしてんだよ。おかしいだろ、お前っ！　俺は、俺達は！　“こんなこと”をする為に共闘してんじゃねえだろうがっ！　お前、ちつとは頭冷やせよ。それと……………」

今度は翼の方を向く。

「なんかよく分かんねーけど、いまだに理解できてねーけど……………翼！　テメエは話の邪魔なんだよ！　俺達に用があんなら、時と場所を選びやがれ！！　俺の頭は叩かれまくってて、ややこしい話を聞かされて、もうパンク寸前なんだっての！　これ以上の揉め事を詰

め込んでくるんじゃないよ！」

「あ、う」

翼が属者？ 知ったことか！ それがどうしたってんだ。なんで俺達が争わなくちゃいけない。理由は何だ、言ってみろ！ 全部反論して、真っ向から叩き返してやる。

「……空気が読めない男」

「なんとも言いやがれ。今日はもう駄目、手一杯のギブアップ！ お前等の超展開に付き合っていると、俺の思考が追いつかねえんだっつーの」

降参のお手上げポーズ。翼と殺し合いだあ？ 論外だ、出直して来い！

「……ふうん、それで？ この場の收拾は、どうするつもりなのよ」  
もちろん、ちゃんと考えてあるさ。

「翼」

「っ！？」

いきなり声が掛かって、翼は鳩が豆鉄砲を喰らったような顔をする。へっ、ざまあ見やがれ。何が伏線だ、何がフラグ整理だ 笑わせるぜ。

「バレちまった以上、もう隠し事は無しだ。詳しい話は明日、必ず話すからさ。今日のところは、大人しく帰ってくれ」

「う、ん」

「わざわざ逃がすの？ それだけで不意打ちされる可能性も」

「黙ってるっ！ 翼はそんな奴じゃない！ 俺は……ずつと見てきたんだ。小学校の時から、今の高校二年になるまで、ずつとだ。翼は、そんな奴じゃないんだよ」

志木城よりも、吉田よりも、長い長い時を共有してきた。笑って、怒って、喧嘩して、仲直りして、そうやって九年間も繰り返ししてきたんだ。俺は 翼を信じる。常套句だって？ 大いに結構っ！ 親友の俺が信じてやらないで、誰が信じてやるってんだ。

「……頼む。志木城なら分かるだろ？ 翼が不意打ちなんてする訳

ないって」

俺達の前に姿を現したことが、何を意味するのかを。それに、翼がそんな性格じゃないってことも。

「……………」

志木城からの返事は無かった。仏頂面で顔を逸らして、そつぽを向くだけ。ああ、今はそれでもいい。それだけで充分だ。

「翼、今の内に帰れよ」

「う、うん」

そう言っつて、翼は屋上のドアの方　ではなく、落下防止用のフ  
ェンスに近づく。

「…………ごめんね、司くん。また明日…………『空』」

翼の身体は、屋上という空間から忽然と消失した。今頃は既に真  
下の校庭か、それとも自分の家か。俺に『現実を直視しろ』と言わ  
んばかりに、また『属性』を見せ付ける。それがアイツなりの決意  
と、日常から決別する覚悟の表れなんだろう。

「…………ふん、さながら未来から来た猫型ロボットのようね。便利な  
ドア要らずだわ」

悪態をつく志木城は、子供向けアニメも嗜んでいるようだった。  
はたしてコイツは苦手な項目が有るのだろうか？　ということ置い  
といて。

「…たく……………休…憩」

俺は、深く深く溜息を吐いた。

翼が帰ってから、数十分が経過した。俺の爆発寸前だった頭も次  
第に平静さを取り戻し、冴えるまではいかににしても平常運転で  
きるようにはなっていた。

さてっと、こっからはシンキングタイムだ。

先程の話をまとめると、遊園地で俺の手から放たれた蒼炎は、どうやら『外部からの力』によるモノらしい。外部からの力 堂島の真名。発動条件やその他諸々は一切不明だが、『相生』の原理を覆す品物には違いないだろう。

「しかし……よく分からんな。そんな事がまかり通るなら、最初っからこんなパワーバランスなんて成立しないんじゃないか？ 相手の元素なんてお構いなしに好き勝手にきただろ。そもそも、『相生』だか『相克』やらが意味を成さないじゃねーか」

「だから、今回はあくまでも例外。『燃えカスの灰が増え続ければ土の処理が追いつかない』、つまりは火の元素が一方的に強くなければ起こり得ない 単体の『属性』なら到底発生しない現象なよ」

「それで『外部からの力』、か」

「そう、属者一人一人に与えられる真名。とても無関係とは思えないわ。まだ推測の域だけれど、その線が最も濃厚だと考えられる」

「あ、あの……『逆転の思想』っていうのは何かな？」

「それは太極図を連想すれば早いでしょうね」

「たいきよく、ず？ 何だっけ、それ。」

「く、黒と白の……勾玉みたいなヤツだよ」

「おお、ナイスだ吉田。それなら見たことがあるぞ。陰陽師とかで出てくるヤツだ。」

「そう、その太極図で黒の勾玉にも白点があるように、白の勾玉にも黒点があるでしょ？ 黒が陰で、白が陽を表し その二つが混ざり合って、循環している図」

「陰の中にも陽があって、陽の中にも陰があんのか。逆転つーと、その中にある反対の因子が侵食するってことなのだろうか。」

「そんで、俺達の五行思想にもその関係性は当てはまるってのか？」

「要約すれば、その通りね」

「言い切りやがった。」

「ならば、そう考えると、確かにあの蒼炎は不自然な現象だ。黒い

勾玉が谷脇の『岩』だとして、中にある白点が俺の『炎』だろう。当然、色の面積では比較にならない。『外部からの力』で白点の面積を増やさない限りは、相殺できないってもんだ。

反対の因子が侵食する 『逆転の思想』、か。

「薄々、感づいてはいたのよ。こんな言い方をしたら西条くんは怒るかもしれないけれど……私達の戦いは、相手を殺したほうが圧倒的に楽だったってこと」

「……………」

俺は、師匠から言われた言葉を思い出す。真剣勝負の勝利条件。

『相手が納得するまで戦うか……相手が認めるほどの一方的な『力』で蹂躪するか……相手を……殺すか、だ』

真名を奪うことの、難しさ。

「生殺与奪の戦いにおける、言うなればハイリスクのリターン。殺さずに奪うことで得られる『力』それが属者の真名なんだと思うわ」

殺すことがローリスク、真名を奪う方がハイリスク。

相手を説得することより、殺す方が楽だと？ ……ふざけるな。

「……良かったんじゃ、ないかな」

「吉田？」

「だって……あたしも西条くんも志木城さんも、今までもこれから先も、誰かを死なせない為に戦うんでしょ？ だったら、そんな話なんて無意味だよ。あたし達は、誰も殺したりなんかしないんだから。……そうだよな？」

「……………」

肯定とは、言えなかった。

無論、出来る限り一般人は巻き込まないつもりだ。他の『属者』だって殺したくない。だが、谷脇雅臣 アイツを眼前にして、また知らない誰かを殺されて、俺は殺意を抱かない自信が無い。

平然と落ち着いていられるとは、思えない。

「さ、西条、くん？」

すぐに返事がないことを案じて、吉田が覗き込むように俺を見る。向けられる期待、理想、羨望。それらを目指すことは出来ても、今すぐ答えることは できない。

「……なら、こうしましょうか」

煮え切らない俺を他所に、志木城は重々しく告げた。

「私達の目的が『万人を救う』なら、確かに吉田さんの意見が正しいわ。でないと矛盾する。だから、これは盟約」

三人の真ん中に片手を差し出す。手の甲を上にして……それは、円陣？

「今後、私達の誰かが人を殺めた場合 その人には『願い』を叶える資格が無いわ。即座に自分の真名を言い渡しなさい。それが盟約。誓えないなら……共闘破棄よ」

……なるほど。いや、これは当たり前のことなんだ。  
人を殺した奴に、人を救う資格なんて無い。人の命は足し算じゃないし、ましてや引き算でもないのだから。罪は罪、罰は罰、清算されることは永遠にない。

「……誓います」

吉田の手が、そつと重なる。あとは 俺だけ。

手に乗せるのは簡単だ。

だがしかし、不安が胸をかすめる。

俺は真剣勝負の戦いで、志木城と吉田を守れるのか？

遊園地では誰も守れなかった俺が、『相手を殺さない』というハンデキャップを背負って。谷脇を相手にできるのか？

おい、どうなんだ、答えるよ 俺。守れるのか、否か。守れなかった時に、責任を取れるのか。

……二人とは別れて、翼と一緒に戦った方が『楽』なんじゃないか？ 願いを志木城達に託して、裏で行動した方が『早い』ん

じゃないか？

志木城と吉田。二人の視線が、俺の瞳を射抜く。

九月も中旬、日が沈みかけた屋上の気温は      やけに肌寒い。

身も心も、冷えるように。

「……………」

正直、迷っていた。

俺に二人を守る力が備わっていれば、迷わず手を重ねていたはずだ。

だが、今の俺には力なんて無いし、感情を制御する自信も無い。

「なあ…………この輪の中に、翼も入れてくれないか？」

「えっ!？」……………」

円陣が、ゆるやかに解けた。

吉田は目を見開いて驚き、志木城は怪訝そうな表情を見せる。

俺は脳裏に内包していた危機感を、口から漏らした。

「情けないけど、今のままじゃ不安なんだ。十五人中の、たった三人なんだぜ？ な、戦力として磐石じゃないだろ？ 翼のことは気になるし、放っておけない。丁度いいじゃねえか。俺達の『願い』を確実に叶える為に、必要な奴だろ？」

間違ったことは言っていないつもりだ。けれど

「却下よ」

冷たく、拒否される。

「西条くんと名島くんがどれだけ仲良くても、それはそれ、全く別の話。吉田さんがどう考えているのかは知らないけれど、少なくとも私は賛同できない」

「っ、なんで!？」

「言ったでしょ。私は、名島くんの言葉を信用できない。簡潔に言えば、胡散臭いのよ、彼は」

「オイ、お前…………っ!」

志木城を睨む。クソッ、澄ました顔しやがって。



「何が気に食わないんだ。俺と翼では、何が違うつ！」

「私が西条くんと吉田さんを信頼しているのは、あなた達が超が付くほどの『お人好し』だからよ。そういう意味で、彼は……底が見えない」

「そんな……それは、お前が翼と関わっていないだけで」

「そうね、私は名島くんのことを知らない。交わした会話も数えるほどよ。だから、試そうとした」

「な、に？」

「私個人の名誉の為に言っておくけれど、私が彼に対して『属性』を使ったのは、ただ単に気に食わないからではないの。試したかったのよ、彼を。自分が死にかけても 他人を気遣えるのかどうか。その結果次第では、利用価値を見出していた……かもしれないわ」  
淡々と語る志木城。ひねた言い方をしているが、これでも最大限の譲歩をしているのだろう。

……以前、俺は志木城に殺されかけた。その上で、俺は『炎』を放つ前にわざわざ忠告して 最終的に共闘したんだっけ。

超が付くほどの『お人好し』……言い返せねえよな。

「じゃあ、お前を納得させれば、翼を仲間に加えられるんだな？」

「……できるの？ あなたに」

翼との関係は有耶無耶にしたいくはない。たとえ翼と戦うことになっても、俺が必ず導いてやる。

俺達の仲間に、引き入れる。

「やってやるさ。明日の放課後、俺は 翼と戦う」

空手道場を訪ねるに当たって、俺はとある一つの目標を決めていた。

「今日は……普通に入る！」

過去二回、師匠には背後からの奇襲でことごとく驚かされっぱなしだ。ドスの利いた低い声で『中に入れ』と促されるだけ。だがしかし、今日は違うぞ！ 三度目の正直ってヤツだ。

ノックして、失礼しまーす、道場に入るだけ。簡単なプロセスだろう。よーし、やるぞー。

左右確認、後方確認、前方確認、敵影なしでありますオーバー。

あとは扉にノックをし

ガラガラ、ガラガラ。

「何をしている……中に入れ」

「……はい」

三度目の正直、もとい二度ある事は三度ある。鉢合わせは想定外だったの。

うう……足がジンジンする。

正座を開始してから、かれこれ数十分。俺はお坊さんの座禅よりしく、年季の入った畳に座り続けていた。目の前の師匠が恐ろしくて、モゾモゾと足を組みかえることすらできない。

師匠は、まるで無口であることが職業のように喋らず、道場内はひたすら重々しい空気が充満していた。

この『にらめっこ』に、一体全体何の効果があるのだろうか。こんなことで本当に強くなれるのか？ じれったい。ランニングしている方が、まだ実感できるってもんだ。

入門する道場……間違えたかな？

「……今日は、迷いと焦りか。貴様は会う度に心を乱しているな」沈黙を破って発せられる声。そして相変わらずの『心眼』だ。師匠は格闘家じゃなくて、占い師の方が向いているんじゃないですかね。

「ええ、そーですよ。迷ってます、焦ってます。一刻も早く『力』が欲しいんです」

戦いに勝つ力。誰かを守れる力。力、力、力、俺は力が欲しい。

「……ならば問おう。西条、『力』とは何だ？」

「そりゃあ……腕力とか、体力じゃないですか？」

「……まあ、ソレをこの道場に期待しているのであれば、見当違いの的外れだな」

「ええ！？　ちよつ、どういふことですか！」

この人、今とんでもないことをカミングアウトしなかったか？

「……格闘における『力』とは　即ち知識であり、気であり、鍛錬であり、経験だ」

「た、鍛錬が入っているじゃないですか！　鍛錬って筋トレとかの稽古つてことですよな？」

「その通りだが……貴様の場合は違う。遅すぎるのだ。一般的に、反射神経と動体視力は幼少時代に鍛え、骨格と筋力は成長期に作る」  
「うつ……いや、だからって俺はプロを目指している訳じゃないですし、付け焼刃でも練習したいんですけど」

「……己は短所を伸ばすより、長所を伸ばした方が早いと考えているが……遠回りしたいのか？」

「え、いや、あの……ち、長所？」

「そうだ。肉体を幾ら鍛えても、急所を穿てば一撃で倒れる。故に、『力』とは鍛錬のみではないのだ。戦術や技などの知識で学び、気で痛を耐え、経験で感じ取る」

「……………」

想像したのは、マッチョな奴に対しての股間蹴り。体だけ鍛えていれば、喰らった衝撃でそのまま倒れる。マッチョが技を身につけていれば、喰らわずにガードできるだろう。気を鍛えていれば、受けても痛みに耐えられる。経験があれば、避けることだってできるんだ。

『力』とは　腕力だけじゃない。

「貴様は……まずは経験からだ。……立て」

師匠は正座を止め、のっそりと立ち上がった。

「あ、はい……あいつ」

「……どうした、立て」

あ、足が痺れて立てないんですけど。そんな俺を見るや否や、師匠は無表情のまま溜息をつく。

「……ならば座っている。なに、これから行うのは容易な審査だ。座ったままでも構わん」

と言って、師匠は俺の正面で型を構え始める。足を肩幅に開いて少し腰を落とす、脇を締めて拳を突き出して準備完了だ。誰でも知っている 正拳突きの構え。

「あ、あのあの、ししし師匠は何をやっちゃおうとしているのですか？」

「……可笑しな事を言う。この体制は、『寸止め』に決まっているだろう」

「ななな、何言ってたんだアンタはっ!？」

ヤバッ、ヤバイ、足! 痺れてないで早く動けっただ!

「初撃」

ビュ。

「う、うわああ!」

鼻先を掠めるように、師匠の拳がぴたりと止まる。

「西条、目を閉じるな。審査ができん」

む、無茶言ってんじゃないやねえよ!

「痛撃」

ビュン。

「あああああ!」

耳元で風を裂く音が聞こえる。引き手と突き手を交互に入れ替え、淀みない動作で繰り出される正拳突き。

「追撃」

ヒュン。

「……（パクパクパク）」

徐々に速度を上げていき、もう師匠の拳は動体視力では捉えきれ

ない。悲鳴を上げる余裕も失せて、されるがままだ。

「コオオオオオ……破ッ！」

刹那、捉えられなかった拳が 見えた。

いや、スローモーションのように、時間経過が……遅い？

裏道で車に轢かれそうになった時や、志木城の氷剣を振り下ろされた時みたいだ。

あれ……俺、死ぬ？

ビスッ。

頬を流れる、赤い液体。痛みは無い、痛くは無い。薄皮一枚だ。縮みあがっていた心臓が、活動を再開してドクンドクンと脈を打つ。

生きて、いた。

「あ、あ……ああ」

思わず腰が抜けて、後ろに倒れる。

な、なんだ、今は……俺、ひょっとして死にかけた？

「……うむ、やはり西条は『殺気』を経験しているようだな」

鉄仮面のように表情を変えない師匠は、“自らに外した肩の関節”をあっさりと嵌めた。

「……あ、アンタ、アンタは……お、れ、のことを……」

「うむ、殺す気で撃った。そうでなければ審査にはならない」

……分かった。前々から薄々、いや確実に分かっていたことだったけど。

この人は常識人じゃない。俺とは違う世界に住んでる人だ。底の知れない強さも、イカレタ精神も、まるで別次元の力なんだ。

「殺気 つまり殺す気当たりは、人間の誤作動を引き起こす。貴様を感じたソレは、本能的に感じ取った脳の誤作動だ」

ちよっ、待ってくれ。訳が分からない。

「医学的には……タキサイキア現象と言う。生命に関わる危機意識を脳が処理し、一種の幻覚作用を促す。低速化や走馬灯の類は、その一例で」

低速化？ スローモーションのことだろうか？ って待て待て。違う、そうじゃない。優先度的に俺がすべきことは、別だ。

「ししし、失礼しましたー！！」

脱兎の如く四つん這いで逃げる。

冗談じゃない。こんな所で死んでたまるか！

駆け足で家に帰り、カレー味のカップラーメンを啜りながら長い一日に終わりを告げる。

明日は木曜日。一日の出来事を考えて、泥のように眠った。

## 第二十五話 知りたくない事情（後書き）

今回は若干台詞多めでお送りしました。説明台詞は難しいですね。時間があれば読み易い文章に訂正したいです。それでは、次回は翼くんと対決です。

## 第二十六話 演じる茶番（前書き）

二十六話の登場人物

西条司さいじょうつかさ：主人公、属性は『炎』

志木城怜実しきじょうれいみ：属性は『氷』

吉田久留巳よしだくるみ：属性は『癒』

名島翼なじまつばさ：属性は『空』



## 第二十六話 演じる茶番

ぼんやりとしたまま、過去の情景が通り過ぎる。

頭が……シャッキリとしない。右目に入った映像が、左耳から抜け出る感じ。感覚がフワフワと浮いていて、地に足が着かない。

心に留め置くことが出来ない無意識。儚く捉えようがない水泡のような記憶。

これは 夢だ。

「よー……なーにしてんだ？」

幼い口から、俺の言葉が零れ落ちる。

懐かしい声。見慣れた教室。真新しい、けれども傷だらけのランドセル。目の前で机に突っ伏せている 少年。

「……………」

翼からの返事はない。

ああ、そうだった。この頃の俺は無知蒙昧で好奇心旺盛なだけのワンパク坊主で、ただ毎日が楽しくて、目に映る新鮮が面白かった。世の中に溢れていた未知が許せなかったし、どうしようもない頑固者で手に負えない。どちらかと問われれば虐める側の立場に居て、平気で他人の領域に踏み込んでしまうような……そんな、無神経極まりない子供だった。

だからそう。一日中誰とも話さないで、『生きながら死んでいる』かのような翼に興味を持ったんだ。こいつは他の連中とは違う、俺の知らない“何か”を知っている。話し掛けたきっかけは、興味本位によるものだった。

それからというものの、俺は翼がうつ伏せてる机を揺らし、ひたす

ら声を掛け続けた。時には強引に、時には静かに……相手にされるまで、繰り返し繰り返し。

それでも、一向に翼が喋ることは無い。一貫して無気力な無干渉。半ば諦めかけていた夕方、家に帰ろうとしていた翼の腕を……掴んでしまった。

「いいかげんにしろ、むしすんじゃないよ」

「……………」

当時、まだ前髪で隠れていなかった翼の目は……生気が感じられないほど、酷く虚ろだった。

まるで地球上の絶望を背負い込んだような瞳。人生の汚点を経験し尽くしたような表情。

俺は……怯んだ。けれども後には引けない。これが最後のチャンスだと思い、本能の命じるままストレートな言葉を投げつけた。

「お、おまえ、学校に来てて楽しいのかよ。毎日つまんなそーにしてさ、ベンキョーもしてねーし友達とも話してねーじゃん……何しに来てんだ」

「……………なに……し、に？」

初めて発せられた声は、あたかも黒板に爪を立てたように不快な音で、ガラガラに掠れて干からびていた。

真っ白い雲を追うような焦点が定まらない目で、翼は俺を初見する。

「ぼく……なに、しに……来てるの？」

「し、知るかよ。おれが聞いてんだろ」

「……………あ……そっか……ご、めん……なさい」

「あ、おいっ！」

ペコリと謝って、翼は 頬に涙を流した。

掴んだ腕に、力は込められていない。痛みで泣いているのではない。けれど、俺が泣かしたことに違いなかった。なんだか……分からない。知らないことだ。

「な、なに泣いてんだよ……気持ちわりーな」

「……う……っ……ごめ、なさい、ごめん、なさい、ごめんなさい

……」

「

」

翼は、何度も何度も許しを乞う。謝れるような事はしていない。むしろ俺が謝るべきだったのに。なのに、泣きながら『ごめんなさい』を繰り返す。

今にして思う。なにもかも、気付くのが遅すぎたんだと。自分の知りたかったことが、『負の感情』だとは分からなかった。俺は、触れてはいけないワードに触れてしまったんだ。分別を弁えず、土足で侵入した。無感情で整頓されていた心を グチャグチャにかき乱した。やってはいけない、最低な行為。

子供以上に子供だった俺は、翼の意味不明な挙動を目の当たりにして、胸の奥がズキリと痛んだのを感じた。

小学校低学年で味わった、苦い追想。

これが、俺と翼の第一接点。

関わらないことも選択できたんだろう。だが、その頃の俺はそれを拒んだ。悔い、そして自分自身を嫌いたくなかったからだ。

幾年の月日を経て、身長と前髪が伸びゆくにつれ、翼は少しずつだけれど感情を取り戻していった。

初めて笑ったのは、流行のゲームで遊んだ時。初めて怒ったのは、仲間外れにした時。そうやって積み重ねて、包み上げて、上塗りを

して、輪で繋げて、時には幻滅したりして　長く、過ごした。

たぶん波長が合ったんだと思う。生意気だった俺と、穏やかな翼。次第に、俺の心境も興味や贖罪の対象から、友情へと変わっていた。喧嘩した時の価値観や主張の違いが心地好かったし、尊重することで互いの良識や常識を学び合ったんだと思う。

そして、その関係はこれから先も続くはずだ。

俺と翼、二人が変わらなければ。

「……うわぁ……やっぱぁ……」

起きてからの第一声がコレ。と言うのも、時計代わりに見た携帯電話　そのメール本文を読んだ時のリアクションである。寝起き直後の高血圧を低血圧にするような、ぶっ飛んだ事実。質素な待ち受け画面には、メール二件と着信通知が一件。まずは吉田からのメールを見直す。

『夜遅くに、ごめんなさい。吉田久留巳です。』

迷ったけど、やっぱり今日中に伝えようと思ってメールしました。あたしは、名島くんのお誘いに賛成です。

名島くんとはクラスメイトだし、その、西条くんの友達だから……信じられます。

理由はそれだけです。

志木城さんは反対してあんな事を言ってたけど、責めないであげてください。

あたし達のことを心配して、わざと憎まれ役になってくれたんだと思います。

本心では、きっとあたしや西条くんと同じ気持ちのはずです。

だから、名島くんのごことは、西条くんがなんとかしてくれるよね？あたしに協力できることがあったら、遠慮しないで言っして下さい。

あたし、皆の役に立ちたいんです。頑張りますから！  
初めてのメールがこんな内容で、ごめんなさい。  
また明日、学校で』

メールにしては長文だけれど、丁寧に改行されていて気遣いが感じられる文面だった。何故か敬語だったところを見ると、吉田は意外にもメール弁慶なのかもしれない。

責めないであげて、か。確かに、俺は志木城の態度がムカついていた。親友を貶されて試されたんだ、怒って当然だろう。でも、それは俺や吉田には出来ないことで、誰かがやらなくちゃいけないことなんだよな……最終的には妥協してくれたし、咎めることなんてしちやいけない。俺は託された期待に応えることで、志木城を説得するしかないんだ。翼と戦って、結果を出してやる。

……よし、ここまでは心温まるお話だ。本題はこれから。俺を氷点下まで凍らせたのは、一通の着信履歴と、もう一件のメール。言わずもがな、両方とも志木城からの御達しである。

『このメールを見たら、即座に折り返しの電話を入れること』

着信とメールを受信した時間は 昨日の深夜。

怖あーッ！ やば、やばいって！ お、俺、寝てたし、折り返すのなんて不可能だってそんなのっ！

理屈では分かっているけど、道理が通じない存在が志木城残念だった。

ゴクリと喉を鳴らして、手遅れ感満載な通話ボタンを押す。携帯を耳元に近づけたときには、既に通話が繋がっていた後のことで。

『……西条くん、私はね……人生に免罪符というシロモノは無いだろうと思うのよ』

初っ端からやな予感しかない。

『犯した罪と向かい合わず、後悔も反省も詭弁も謝罪すらしないで、鈍感の二文字で免れようとするなんて、傲慢な人間だと思わない？』

特に現実主義者を自称している人間なら尚更よね』

「悪かった、俺が悪う御座いました。でもさ、お前だって大多数の庶民が寝てる時間に電話してきて、ちつとは罪悪感とかねーのかよ」  
『私たち属者が、はたして一般庶民の中にカテゴライズされるのかしら』

「う……」

『以後、気をつけなさい。別に緊急連絡ではないけれど、連携と疎通は必須よ。情報戦は戦術の基本。覚えておきなさい』

「……はいはい、分かったよ」

『「はい」は百回』

「はいはいはいはい　　ってやるかポケツ！」

『ふう……ノリツツコミは二回目からのギャグが面白いのに。お笑い用語には天井というのがあって　　』

「どうでもいいっつーの！　　ったく、用事があって電話したんじゃねーのかよ」

『そのことね』

とか言つて、志木城は一呼吸。

『伝えたいのは、名島くんの特特殊能力と、あなた達の対決場所』

「……特殊、能力」

『そう、彼の場合は空間転移。テレポーション、といった方が分かりやすいかしら。逃げるには便宜な能力、けれども弱点は有る』  
「それを……突けと？」

『そうよ。でなければ私は納得しない。到底、納得できない。容赦なしの殺し合いになって、死の直前まで追い詰められて、初めて人の真意を見極められるのだから』

「……っ」

理性を超えた先に在る真意。それが人の本質。その考えた方は……歪んでいた。排他的にも程がある。しかし、吉田のメールを見た

後では、危機感の裏返しにも取れた。俺達を守る為。誰かの役目、憎まれ役。

「いいぜ、言ってみろよ。その弱点とやらを」

『……今日はやけに素直なのね。まあ、駄々を捏ねられるよりかはマシだけれど。そうね、簡潔に説明するなら、彼の空間転移は「ワームホール方式」よ』

「あ？ ワームホール方式？」

『始点と終点の空間を短縮して繋げる、で分かるかしら』  
「全然」

非現実的な類は全く駄目だつて。即答とした物言いに呆れ果てたのか、志木城は酸素を深く吸って長めに吐いた。ため息混じりの深呼吸。

『……はあー……少しは間をおいて欲しいわね。思考力の欠如は停滞の証よ。要するに、彼の能力はサイヤ人のアレと同じということ』  
漫画は許容範囲内だ。俺は思い出して、電話越しに頷いた。

「ああ、ヤードラット星人から伝授されたアレか。つてことは……ほぼ無敵じゃね？」

『案外、そうでもないのよ。むしろ欠点だらけとも言えるわ。私が彼だったら……到底、怖くて使えないでしょうね』

「どういうことだ？」

『終点　つまり転送後の空間に固形物が存在した場合、彼はどんなと思う？』

固形物。建物とか、動かない物つてことだよな。それと重なる訳だから……。

「……まさかっ！？」

『良くて貫通。悪ければ人体と融合して死ぬでしょうね。諸刃の剣なのよ、彼の能力は』

「そ、それって……！」

『勿論、名島くんは承知の上で行使しているのでしょうね。だからこそ、“視野の範囲内だけ”で跳躍している。リスクの回避として

は妥当な使い方ね。空間を把握して、着地点を計算して、イメージを固めて　飛ぶ。もし終点が見えないのであれば、おおよその距離を算出して余分に広く転移する。そう考えれば、昨日の昼休みに聞いた物音も辻褄が合うわ」

ドアの外側から真上までの着地点の計算を間違えて……いや、安全面を考慮して、故意で高めに飛んだっていうのか？　俺達が属者だという確証を得る為に……危険な目に遭ってまで。

「あんの……バカが」

盗み聞きなんかじゃなく、直接相談しろってんだ。そんなに俺が信じられなかったんだろうか。それとも“敵”と認識しての警戒心か……胸クソが悪いぜ、畜生。

なんにしても、そのヒントだけで推測し翼の特殊能力を割り出した。

「……なるほど、たぶんソレで正解だと思う。感服するぜ、志木城」

「ふん、あなたから褒められても……嬉しくないわよ」

照れくさそうに鼻を鳴らして、コホンと咳払い。

「一秒未満の空間転移。厄介な能力よね……けれど、それ相応のリスクは必ず付き纏う。結論から言えば、「視野の限定」と「着地点の動的不安定さ」が合わされば、彼の能力は容易に封じられるはずよ」

屋上のような見渡せるほど広大なスペース、ではない　複雑な地形。

数秒後と変わらない景色、ではない　変化する地勢。

飛ぶことを遮る　ある種の籠。

『樹海になった森林公園で……戦いなさい』

一日の快晴を約束する青空から、燦然と輝く太陽が主張して教室



中を隅々まで照らす。俺は志木城と話した後、『先に行ってる』とだけ翼にメールを送って、いつもより数十分も早く自分の席で座っていた。正面には空席の椅子が佇んでいる。

どうせ茶番劇を演じるのであれば、早いに越したことは無いだろう。ゲーム脳的に言えば、フラグを立てるってヤツだ。突き放して、隔意をもって、殺す気で 戦う。その為の役作り。幸か不幸か、俺達には吉田という『癒』の属者が居る。余程の大怪我を負っても、今後の戦いには影響しない。だから、手加減は一切無用。

「お早う、司くん」

軽いテンポで、翼はいつものように挨拶を交わす。昨日と同じ  
いや、昔から何一つ変わらない自然体。

「……うつす」

対して、俺は素っ気無い返事で応じた。

ああ……気が滅入りやがる。こうしている自分も、真意を求めてきた志木城も、笑っている翼も、ムシヤクシヤする。頭ん中がモヤモヤして、胃がムカムカする。

そんな関係に終止符を打つんだ。綺麗サツパリ、整理整頓してやる。

今日は文化祭の前日。と言うことで、学校の授業も三時間目までしか行わない。放課後までの残り時間はクラス総出で準備を行うのだ。気合の入ったクラスでは、なんと先生同伴の徹夜してまで作業をするところがあるらしい。全ては売り上げ一位の報酬、『特科修学旅行』の為だとかなんとか。『特科修学旅行』の贅沢な食事、豪華なホテル、貴重な体験。その引率をしなければならぬ先生も、もはや他人事ではないのだろう。

まあ、俺達のクラスには縁も所縁もない話だけだな。なんたつて基本的に面倒臭がりな奴の集まりだ。当日の自由時間を楽しむことしか考えてないだろうよ。

そんな文化祭の準備は滞りなく進行していて、吉田が設計した見取り図通りの配置や、手配したカーテンやらテーブルクロスやらの設置を淡々とこなしていった。皆が自分に割り当てられた作業に集中していて、こっそりと抜け出すには絶好のチャンスだ。

俺と志木城と翼の三人は、ダンボールで送られてきた物資（飲み物）搬入時に乗じて、バレないように教室を出て行った。仰々しくも神々しい、ダイナミックかつエレガントな建設中のゲートを潜つて、今は森林公園へと向かっている最中だ。

「うゝん……いいのかなあ、僕達だけサボっちゃって」

「いーんだよ。出し物つつても漫画喫茶だからな。俺達抜きでも午前中には終わるだろ」

「そうね……けれど吉田さんを連れて来れなかったことは誤算だったわ」

クラスメイト達から『ビンタの令嬢』と恐れられている志木城とは違って、壊滅的友好関係とは縁遠い吉田は、クラス内の誰からも好かれている。それに加えて文化祭の実行委員でもある訳で、前日の準備には必要不可欠な存在であった。一応、志木城からのメールで合流する場所とかは伝えてあるらしいのだが、それでも俺と翼が“始める頃”には間に合わないだろう。

「指示待ち人間とは、こういうことを言うのかしらね。私に言わせれば、吉田さんに頼っているのはただの依存にしか見えないわ。いくら好かれていて便利な人でも、当の本人は重荷に感じるだけ。迷惑であることには変わらない。彼等は、それが分かっているんだわ」

「……経験者っぽい言い方だけども、それは人によるんじゃないか？ お前はそうかもしれないけど、吉田にとっては重荷だとか迷惑だとか、きつとそういうのは感じてないんだよ」

「吉田さんは司くんみたいになお人好し」だからね」

「茶化すんじゃないっての。つーか俺はお人好しなんかじゃねーし。ああ……だからさ、つまりだ。いかに大変でも、どうしようもなく

負担であつても、困つてる人を助けた時の達成感の方が勝るって感じなんじゃねーかな」

「ふん、それこそあなたの体験談でしょ。無償の利益とか……感情論もいいとこだわ」

むう……どうやら自分の思い通りにならなかったことで、志木城は大層ご立腹らしい。だからって俺に八つ当たりしないで欲しいんだが。

「と、ところでさ、僕達ってなんで森林公園に行くの？」

場を和ませるように翼が訊いてきた。

お前と戦つて真意を知る為　なんてことは言つてない。

「調査よ。名島くんは知らないでしょうけれど、あの樹海は属性によるものなの。中央広場に新しく出来た地割れも、おそらくはね」  
それも理由の一つ。

嘘は言っていない。本当のことを隠しているだけだ。

「……やっぱり、そうなんだね。うん、予想はしてたんだけど、改めて聞くと驚くよ」

「やったのは『樹』の属者　佐久間大我って名前だ。俺達に通つてる学校の後輩らしい。悪いことしてたんだよ、そいつが」

容姿は小学生っぽかったが、俺の母さんを殺して、志木城の妹を植物状態にした張本人。だから俺と志木城の二人で共闘して、倒した……その後はどうなったのか、分からない。何処かで静養しているのか、或いは俺達以外の属者に倒されたのか。少なくとも、あれから学校には来ていないようだが……生死の有無は、確かめていない。

「やっと目障りなマスコミや野次馬も引いて、人氣が無くなったらしいじゃない。平日のこんな時間だし、調べるには好都合でしょう？」

「ふーん、なるほどね」

さもありなん、といった感じで翼は頷いた。

あの森林公園にしろ、この前の遊園地にしろ、属性がもたらした

爪痕は深い。一步でも間違えれば、世界の摂理すら崩壊しかねない力なんだ。

常識外の能力。

感情で変動する威力。

正と負の混ざり合い。

名島翼のソレを、その源泉を、見極める必要があった。

立ち入り禁止を報せる黄色いテープを無視し、その奥地。草木で囲われた獣道を掻き分け、俺達は唯一木々が生えていない中央広場に到着した。そこかしこに以前燃やした時の焦げカスが散乱している。

「デカイな……それに、深い」

「底が見えないわね……西条くん、降りてみる気はない？」

「じよ、冗談だろ？」

「結構マジメ。なんなら、私が突き落としてあげましょうか？」

「……ドン引き」

「ふう……困ったものね。笑話のジョークに決まっているでしょう」

「お前のジョークは笑えないし怖いって」

「うわわぁ、すごい事になってるね、この地割れ。魔界にでも通じてそうな気がするよ」

「……あの世には通じてそうだけどな」

俺達を出迎えたのは、直径10メートルはあろうかという巨大な地割れ。三人ぐらいの人間なら丸呑みにできそうな、ひび割れた深い穴だった。

こんな局地的な地割れなんて……俺は知らない。十中八九、俺達以外の属者が作ったモノだろう。

そして、その中心点は、俺が佐久間を倒した場所だったような……気がする。

「……もしかして……この底なしの穴に、佐久間が落とされたのだとしたらと、吸い込まれるように見ていた俺に、志木城が話し掛けた。」

「深く考えるのは止しなさい。彼の対処は、あれが適切だった。その後、彼がどうなったとしても、あなたが負うべき責任なんて無いの。杞憂を感じている暇があるのなら、先のことに目を向けなさい」

「……分かってる」

「そうだ、今は佐久間のことに感けてもらえない。」

「……だけど、たとえ茶番だと分かっているとしても、物珍しそうにはしゃいでいる翼を見ると、複雑な気分になってくる。」

「……西条くん、気持ちが悪えたのであれば引き返しても良いのよ。私が……代わりにやるだけだから」

「大丈夫、余計なお世話だ。俺は 戦える」

「この役目は、誰にも渡さない。譲れるものか。」

「そう。なら……そろそろ、始めましょうか」

「……ああ……やるか」

「ん？ さっきからどうしたの？ 二人とも」

一通り地割れの見物が終わったのか、翼は俺と志木城を不思議そうに見た。

「サア、と風が鳴る。」

「辺りは、人目無しの人気無し。」

「舞台は整った。役者も揃った。」

「あとは 演じるだけ。」

「ゆるやかに、翼を見据える。」

「お前をココに呼んだのには、ちょっとした訳がある」

「……え？ ちょっと、どうしたんだよ司くん」

「まず、だ。翼、お前の『願い』は何だ？ 最後まで生き残ったとして、何を願う」

「……………」

数秒間の沈黙が流れ、翼は笑って答えた。この“試されている状況”を飲み込んで、それでも晴れやかに。

「司くんと同じだよ。遊園地で亡くなった人達を助けるんでしょ？ 昨日の昼休みに話してた犯人も、たぶん属性を使える人なんだよね。だったら、僕も同じ気持ちだよ。犯人を止めたいし、亡くなった人達を生き返らせたい。だから仲間になりたいんだ」

「そう、か」

遊園地のことも、既に勘付かれていたか。俺と同じ願い、ね。具体的には『助ける』じゃなくて『元に戻すだけ』なんだが、やっぱり翼は聡い。俺の考えていることを、読んでくる。

「自分が叶えたい望みとかは、無いのか？」

「……無いよ」

よし、それなら大丈夫だ。仲間に入れる。なんとなく肩の荷がおりたというか、懸念していた不安が消えた感じがした。

「はあ……ちょっと安心したぜ。でだ、そこに居る志木城が、入団テストっつーか、仲間になる為の条件っつーか……ともかく、翼の力を試したいんだとよ。そんでもって、対戦相手は俺」

うつ、睨むなよ志木城。多少アドリブを加えただけで、ほとんど台本通りだろうが。

「えーっと、もしかして属性を使って戦えってこと？」

「そうだ、手加減は無しで頼むぜ」

「ふーん。ちよつと予想外、かな。でも……いいの？」

「あん？」

翼は困ったように頭を掻いて、こう言った。

「司くん、怪我しちゃうよ」

「……怪我、だと？」

「カッチーン。オーイオーイ、あんまし舐めんなよ翼。口喧嘩以外で、俺がお前に負けたことなんてあったか？」

「中学校一年で僕のことをハブった時、同じく中学校二年で好きな

子が被った時、とか」

「さささ最後のは引き分けただろーがっ！ 勝手に改変すんじゃないー！ ったく、律儀に憶えてやがって。ねちっこいヤツだな」

「高校に入学した時だつてさ、帰宅部になるぐらいならパソコン部に入ればよかったのに……この頑固者」

「うつせ、根暗で嫌なんだよ、あの部活は」

「小説好きで凹み体質のクセに良く言うよ」

「だーっ！ お前、小学校の頃に駄菓子奢ってやった恩を忘れたのかよ！」

「僕なんか十回以上は奢らされたよ！ 困ったら引き合いに出すのやめてよね！ いちいちシヨボイなあ」

「てめっ、委員長フェチだつてことバラすぞ！」

「うわあゝ！ っていうか、志木城さんに聞かれてんじゃない！ だ、だつたら、司くんの黒髪フェチもバラすよ！？」

「お、オマエーッ！！」

「……あなた達、小学生じゃないんだから」

志木城に呆れられた。これは後で絶対怒られるな。主に俺が。

「クツッ、翼のクセに、ちょこざいに反抗しやがって。もう許さん。ボッコボコにして泣かす！」

「軽く見ないでよ。僕だつてストレス皆無な人間って訳じゃない。

散々隠し事されて、正直言つて怒ってるんだ。負けるつもりは無いよ。勝つて仲間になった方がカッコ良いしね。普段から馬鹿にしてるゲーマーのテクニク……魅せてあげる」

「ああ、そうかい。悪いが……俺は現実主義者なんだよ。ゲーム知識なんぞに負けるかつーの！」

「たはは、意見が分かれたね。それじゃあ」

「おお、こういう時は」

「「喧嘩で決めるっ！」」

こうして、司くんとの喧嘩が始まった。

僕と司くんの距離は大体5メートル。僕の背には地割れが在るのに、司くんは正面で身構えている。後ろの地割れに落すつもりはないけど、逃がす気も無いって感じだね。なんにしても、この場所じやあやリ難いなあ。

司くんの属性は『炎』 それは知っているんだけど、攻撃方法までは分らない。僕は出方を見ることにした。

ジリジリと足を動かす。

温い風が吹き、緑色に染まった葉っぱが宙を横切ったのが合図だった。

「『陽炎』ッ！」

「わッ!？」

僕の目が、あたかも度の合わない眼鏡を掛けられたようにぼやけた。色は判別できるけど、形が定まらないで揺れる。

うつ、何かが、左に動いた。

「『炎包お』ッ!！」

左前方から、赤い渦巻きが僕に迫る。ゴォーと、ガスコンロに火をつけたような音が聞こえた。照準は足元、直線的な赤色は　も　しかして炎!？

僕は大きく、両手を正面へと向ける。

考えていた攻略法。司くんが炎なら、僕は空気の壁を張るだけだ　　っ！

「っ、『酸欠空気』！」

「なっ……!？」

直撃の寸前で、燃え盛る炎が消え失せる。オッケー、なんとか間に合った。

あっ　目が、戻った。陽炎、だっけ。時間制限有りの技なのかな。



「ならっ！……『炎拳』で、どうだ！」

今度は、炎を拳に纏わせての直接的な攻めに移った。うん、司くんは切り替えが早いね。

走り来る司くん、僕の後ろには逃げ場が無い。横に避けても追いつかれるだけ。駆け足は司くんの方が速いからね。しかも、この風に舞う木の葉で空間転移も使えない。これは、志木城さんのアイデアかな……顔に似合わずエグイことを考えてくるなあ、まったくでも、それなら、転ばせるよ！

相手の足首を掴み上げるイメージ。座標を設定して、空気を捕まえて。

「空気……投げー！」

僕はパントマイムをするように、屈んでちやぶ台返しをした。

突如として、俺の身体が 反転した。

「かはっ！」

まともな受身が取れず、背面から仰向けに落ちる。硬い土に打ち付けられ、肺の空気が吐き出された。視界は真上の、青い空。

……なにを、された？ 翼には触れられていない。俺が、つまりいて転んだ？ いや、違う。戦闘中にずっとこけるほど間抜けじゃない。

思い出せ。翼に近づこうとしたら急に足元がずれて、何かに掴まったみたいにな、そのまま投げられたような……。

「隙ありだよ！ 『空気砲』！」

ほんの数瞬の隙をついて、翼は両手を合わせて筒状の形にした。狙いは俺の脇腹。しかし何かが発射された気配は無い。

それ故に、見えないソレを避けられはしなかった。

「……ゴフッ……！」

追い討ちの一撃は、俺の身体を軽々と真横に吹っ飛ばす。骨振動で伝わる鈍い音。ぐっ、もろに当たっちゃった。肋骨にヒビが入っ

たのかもしれない。

二・三回ゴロゴロと転がり、俺は寝そべっている訳にもいかず、ゆっくりと膝を着きながら立ち上がった。慣れ ではないけれど、ある程度の痛みに対しては我慢が利くようになってきている気がする。自慢みたいな自虐だな、クソッ。

目では捉えられない弾丸。さっきの空気投げといい、不可視の空気砲といい、段々と正体が分かってきた。翼が操っている事象は空気だろう。

「この天津飯め……気功砲みたいな技、使いやがって」

「たはは、パクリじゃないよ。リスペクトしたんだ。それにどっちかっていうと、発想はドラ えもんに近いかな」

「隠せてねえぞ、この野郎！ ふざけやがって、全部アニメの知識じゃねーか。ゲーム脳はどうしたんだよ」

「それはこれからのお楽しみだよ。ああ、それとも……もうダウンした？」

言いやがったな、コイツ。

「は、はははっ……俺はな、安い挑発には乗ることにしてんだよ」

「うん、知ってる。損な性格だよな」

「……そのニヤケ面、今すぐ消してやる」

足りないモノは、緊張感と怒りだ。

おちやらは除外しろ。甘えを捨てる。戦闘は遊びじゃない。無情より非情になれ。

「うつわ、怖い顔だね……ようやく、本気になったのかな」

黙っつけ。お喋りは無しだ。

遠距離攻撃は防がれる。だが、近距離攻撃まで近づけない。

「んなら、範囲攻撃だっ！ 『炎壁』！！」

ファイヤーウォールっていうと、普通はパソコンのアンチウィルスソフトをイメージすると思うんだけど、僕の真ん前に限っては

普通から外れた、とても常識離れた、文字通りの『炎の壁』が揺らめいていた。

全長は僕の身長ぐらい。幅としては約１メートル。キャンプファイヤーでも滅多に見られないほど大きい火の障壁。

その壁を、司くんは押していた。

グイグイと、一歩ずつ、にじり寄るように。

地面に生えている根っこや葉っぱを、燃やしては進んで、進んでは燃やして。

空気そのものを、燃焼させるように。

「 空気、投げ! 」

駄目だった。それでも、司くんは止まらない。座標は分かっている、掴むことができないんだ。司くんが放射している炎に、かき消されてしまう。これじゃあ空気砲を撃っても同じか。というか、これじゃあ僕の技がほとんど封じられてしまったも同然だ。空間転移を使って回り込めればいいんだけど、この環境じゃ無理そうだし、赤く揺らめいた先には、僕の見たこともない表情。苦しそうで、だからこそ焦っているような司くんの顔。

持続した炎の壁……そっか……酸素不足なんだね。

僕を追い詰めようとしていた炎の壁は呆気なく消え、司くんはガクンと片膝を着いた。

眉間にしわを寄せて目を閉じ頭を振っている。もしかしなくても目眩、かな。

その隙に僕は踵を返して、森の中へと逃げ込んだ。いや、逃げたんじゃない。戦略的撤退だ。こんな場所じゃ、いくら何でも分が悪すぎるよ。

ちよつと警戒してチラツと振り向くと……思った通り、司くんは追いかけてこれないようだった。なんか『ぜえ、はあ』してるし。

……酸素欠で自爆って、どんだけ間抜けなんだよ。

「ぜえ、はあ、ぜえ、はあ……クソッ……タレ」

炎壁を消し、薄まった酸素を補給する。

鉛を付けているのように身体が重い。炎を持続させた分の精神力と、単純にチアノーゼの所為だろう。

発想は良かった気がするけど、使いどころを誤った。距離が開きすぎ。もっと短距離で使わないと意味無いな、これ。つっても近づけないワケだが。

視線を泳がすと、翼は立っていた場所から森の方へと逃げ 志木城は見下げて果てていた。

「西条くん、当初の目的を忘れていない？ 私は名島くんの参入条件を言ったつもりなのだけれど、どうしてあなたの方が追い詰められてるのよ。しかも『相生』を相手にして。今のところ、あなたが勝っているのは威勢の良さだけ。ホント……クビにするわよ」

「……面目ない」

弁解する余地は残されていなかった。無様で惨めだ。

「スロースターターも、行き過ぎれば自殺志願者みたいなものだわ。全力で それこそ殺す気で行きなさい」

「……………」

志木城、俺は最初っから全力なんだよ。好き好んで長引かせたりなんかしてない。こんな茶番、一秒でも早く終わらせたいんだ。

それでも終わらないのは、翼の実力が有るからなのだろう。

俺の経験則を補うほどの 発想力。

いく通りもの思考パターン いや、シュミレーション的なゲーム脳。

「でも……やるしかない、か」

「そう、西条くんが新しい仲間を望むならね」

うう……それを言われたら、頑張るしかないじゃないか。

と、うな垂れていると志木城はばつが悪そうに言った。

「……コホン…… 特別サービス。今にも死にそうな西条くんに、魔法の言葉でも掛けてあげましょう」

「は？ 魔法の言葉？」

「……危なくなったら、止めてあげる。だから……倒れない程度に無理しなさい」

端整な顔立ちが柔らかく笑って 見蕩れてしまった。

「……なによ？」

「い、いやいや！？ な、何でもないツス！ 行ってきます！」

俺も翼に続いて、森へ駆け出す。一瞬の見間違いだっただのだろうか、遠めで見た志木城の表情は、いつもの仏頂面に戻っていた。

第二ラウンド開始。中央広場から変わって、フィールドは森。

僕は三分ほど走った先で、司くんを待ち構えていた。まだ酸欠してるのかなあ……やけに遅い。

とりあえず自分の周りを見渡して、木々の配置と間隔を頭に入れる。空間把握ってヤツだね。木の葉っていうリスクはあるけれど、緊急回避用の手段は確保しておかなくちゃいけない。

それにしても、司くんの目 本気だったな。必死というか、負けられないって感じが伝わってきた。経験者、だからかな。

僕が考えられるだけでも、司くんは二回ほど実戦を経験しているはずだ。森林公園と遊園地。とくに後者なんて、想像すらつかない死者五十一名。その光景を、その地獄を、直接見たんだ。僕なら発狂してしまうかもしれない。

うん。司くんは、僕とは違って……強いね。

「はあ、はあ、はあ……翼、みーつけた」

「たはは、遅かったね司くん」

息を切らしている。HP不足……じゃあないね。疲労しているのはMPのほうだ。

「僕の力、もう十分伝わったんじゃないかな。このテスト、そろそろ合格にしてくれない？」

「ダメだ。作戦参謀の志木城サンは、まだ満足してないってよ。俺も、このままじゃ終われない」

「足元がフラついてるけど？」

「気のせいだ」

「息が荒いけど？」

「幻聴だ」

「顔色が悪いけど？」

「よく見えないなら、鬱陶しい前髪切れよ」

「……あのさあ、僕、それでも気を使ってるんだけど」

「へっ、笑わせるな。俺にはお前が震えて見えるぜ」

「いや、それは司くんの足がガクブルしてるだけじゃない？」

「とにかく、だ。志木城に発破かけられたし、最後の勝負を  
始めようぜ」

「……………」

なんて余計なことを。司くんは、そーゆーのが一番効くタイプだ  
つていうのに。

司くんは右手の掌を照準スコープにして、僕に狙いを定める。今  
度は胴体 迷いがなかった。

仕方ない。僕も司くんに倣って応じてみせる。

「いくぜ……『炎包』！」

「それは攻略済みだよ、『酸欠空気』！」

空気中の酸素を消失させる壁。そこから炎は生まれない。

迫った炎は、工場から排出されるような黒煙だけを残して消えた。

「『炎鞭』！」

間髪いれずに放たれたのは、渦巻状の炎とは違って レーザー  
みたいな一直線上の炎。単調な攻めなら、防げるよ。

「『酸欠空気』……っ！」

守ったのはいいけど、真っ直ぐだった炎は壁にぶつからずに軌道  
を変える。

つていうか司くん、手！ 熱くないの！？

発射した炎は、司くんの左手で遮られ、その角度を変えた。けれども、その方向は僕の右後ろという見間違い。

「つ当たれええええええ！」

「えっ？」

ミシミシと倒れてきたのは……木！？

初めの『炎包』は四。『炎鞭』で木の根元を焼き、僕の方へと倒す二段構え。

けど

「空間……固定！！」

両手を使って、倒れてきた木を止める。貧弱な僕に、そんな力技はない。だから、空間を固定する。今にも倒れてきそうな木は、まるで重力に逆らっているようにピタリと停止した。

オツケー、今の内に退避を。

「これで、終わりだあ ああああッ！！」

「あつ……」

気が付けば、助走をつけた司くんが肉迫していた。

咆哮しながら振りかぶる右手。怒濤の三段構え。空間転移を計算している余裕は……無かった。

「ガハアツ！！」

顔面に命中。横にぶつ飛ぶと同時に、翼が支えていた大木が倒れてきた。

ドズウン、と重々しい音が響き、決着の鐘が鳴る。

俺はフラつく脚に渴を入れ、俯けに倒れている翼にマウントポジション。

「はあ、はあ……空間転移は、させねえぞ」

左手で目を塞ぎ、右手で後頭部にロックオン。

「決着……ついたようね」

いつの間にか、俺の後ろには志木城が駆けつけていた。

「御覧の通りだ。俺の勝ち」

「当たり前でしょう。『相生』相手なんだから、いちいち勝ち誇らないで欲しいわね。見苦しい」

「……ソーデスカ」

「で、名島くん。気分はどうかしら？」

志木城が返事を促すと、翼は諦めたように嘆息を漏らした。

「……完敗だよ。決め手は空間転移を封じられたところかな。やっぱり、手の内は見せないほうがいいよね」

「そうね、でも　その反省点を活かす機会は、永遠に訪れないけれど」

「え……？」

「西条くん、トドメを刺しなさい」

冷たく、凍えるような温度で、志木城は告げた。

「しき、じょう？」

「聞いていたの？　トドメを刺す　名島くんを、殺すのよ。その右手から撃つ炎で」

「は……は？」

「とは言っても、親友である西条くんには無理な話よね……『氷』華麗な動作で、絶対零度の氷剣を抜刀する。

「残念ね、名島くん。私、あなたとは気が合わないみたい。色々試してもらった西条くんには申し訳ないけれど、早々に『さようなら』させてもらっわ」

淡々と、流れ作業のように。

「う、あ……ああ……」

「お、おい……志木城！？　な、何を言って」

上段に振りかぶって、パキパキと音を奏でている剣を

「さよう……ならっ！」



「ああ、あああああああ!!」

振　　らなかった。

ズボンに当たる前に、ぎりぎりの寸止め。

「……なんちゃって」

「……は？……は？」

無表情のまま、志木城はブンと斜めに薙いで氷剣を消す。

「まあ、及第点で合格よ。名島くん、これから宜しく」

「……え？」

氷剣が当たっていないのにも拘らず、俺と翼は完全にフリーズ。

「え、なに？　うん、どういう……こと？」

「ジョーク、今はジョークよ。強いて言えば、最後の試験かしらね。名島くんは見事に通過したってこと」

「……は？　じ、ジョーク？」

「言ったでしょう。『自分が死にかけても他人を気遣えるのかどうか』って。私の殺意に対して、名島くんからの反撃は無かった。だから、及第点で合格。白か黒かと問われれば、まだ黒寄りの灰色だけれど」

「……………」

パタン、とマウントポジションが崩れる。もーやだ、疲れた。

緊張の糸が解けたのか、翼は遅れながらもブルブルと震えだした。ああ、同情する。俺も志木城にはやられたからな、今度愚痴でも言い合おうぜ。

そんな訳で、俺の心の隅に募っていた不安も、この青空のように雲一つなく晴れ渡っていた。

明日の文化祭も、楽しめそうだ。

それはさておき、なんにしても。

「お前のジョークは、マジで怖い」

## 第二十六話 演じる茶番（後書き）

翼くんも加わりましたので、今回は掛け合い重視にしてみました。  
それでは、次回はいよいよ文化祭。登場人物も最多になる予定です。

## 第二十七話 幕開ける文化祭（前書き）

二十七話の登場人物

西条司さいじょうつかさ：主人公、属性は『炎』

志木城怜実しきじょうれいみ：属性は『氷』

吉田久留巳よしだくるみ：属性は『癒』

名島翼なじまつばさ：属性は『空』

磯崎いそさき：教師

## 第二十七話 幕開ける文化祭

「漫画喫茶でーす！ よろしくお願いしまーす！」

好青年を気取って手渡そうと伸ばしたビラが、見るも無残にスル―される。俺はため息を吐きつつ、チラリと足元を見ると そこには逃れられないリアルが映っていた。

スーパーで買い物に使うようなカゴには、クラスメイト達の怨念が『これでもか！』と詰め込まれたビラが体现していた。吉田が書いたのであるう可愛らしい丸文字で、『二年A組の漫画喫茶 ご休憩にどうぞ！』と派手な蛍光ペンで記載されている。この束になった百枚近くが、なんと一日分のノルマだそうだ。

そう……いわゆる宣伝活動、広告担当の仕事である。

連日にわたる青天と、文化祭で賑わい学校全体を包む異様な熱気に クラクラしてきた。

「アツチ………ったく、どーして……俺がこんな目に」

「愚痴はなしだよ、司くん」

「………っ！か、翼。お前はなんで俺の半分以下の分量しかなんだよっ！」

「多分ね、僕の場合は男子生徒の反感を買ってないんだと思うよ。はなから『モテない』って認定されてるのが……トホホ」

翼は俺以上に深いため息をこぼして、手に持っていたビラをカゴの中へと戻した。

「一箇所に固まってたら効率悪いよね。僕、向こう側に行ってくるよ」

「おう、お互い頑張ろうぜ」

「うん、早く終わらせて遊びたいしね」

軽く手を上げて、翼に別れを告げる。

「……あゝぢい………そんじゃ、続きでもやりますか」

お楽しみの祭り　文化祭をのんびりとエンジョイするはずだった予定が狂いに狂ったのは、どう考えても昨日の午後からだ。

「……ふーん、なるほどね」

風が途絶え始めた森林公園で、翼はふむふむと頷いた。志木城に殺されかけたという震えを止めるように、大人しく体育座りをしている。

茶番を演じ終えた俺達は、森の中から地割れがあつた中央広場へと戻り、名島翼という新人の教育実習真っ最中だ。というのも、吉田と合流するまでの時間潰しなのだが……それにしても飛び交う話題がヘビーすぎる。

志木城は話す事柄を慎重に選びながら、俺達の目的や五行思想について、特殊能力や今までの経緯を簡潔に伝えた。こうやって客観視して聞くと、まだ始まってから一ヶ月も経ってないんだよな。実体験では一年分ぐらいの密度だった気がするのに。それだけ……色々な気持ち動かされてきたのだろう。

「で、名島くんの見解はどうかしら」

「ん、意見って……どれについて？　殺人犯の谷脇って人のこと？　それとも、司くん達的能力について？」

「もちろん、この状況における全て。生憎、そこで痛そうに脇腹を押さえている無脳な西条くんからは、役立つ見解を求められそうにないのよ」

「オイコラ志木城！　さりげなく毒を吐くな。俺だって頑張って生きてんだ。勝手に無機物扱いすんじゃないよ！　……まあ、役立つ見解の一つのことはないんだけどさ」

「あなたこそ、いちいち茶々を入れないでくれない？　それだけで地球の酸素が減るでしょう。いっそのこと、植物になって光合成でもすればいいのに」

「た、たはは……司くんって立場弱いんだね。聞ってる感じピラミッドの最下層だよ、色んな意味で」

「うっせ、ほっとけ。他人事みたいに言うけどな、お前だっていずれはそうなるんだよ。コイツの毒舌はアイデンティティを瓦解させるほど有毒なんだぞ」

「あら、侵害ね。名誉毀損で訴えたわ」

「す、既に告訴済み!？」

「賠償金額は、しめて五万円よ」

「アルバイト可能な高校生にとって、その数字は現実的すぎる!」

「……ふう。まったく、『言葉の暴力』というは非道よね、言葉の警察も言葉の弁護士も居ないのだから。あー怖い怖い」

「いや、そんな事を冷めた表情で言われてもリアクションに困るのだが。っていうか、その言葉の暴力を誰よりも駆使しているのはアంతですからっ!」

「それはそうと、名島くん。同じクラスの、名島翼くん。そろそろ教えてくれるかしら。あなたの見解を」

「ん、そうだね」翼は体育座りを止め、ゆっくりと立ち上がった。

殺されかけた震えは、もう鎮まったらしい。

「まずは谷脇雅臣の件なんだけど……僕は志木城さんの作戦に賛成するよ。僕達があてもなく捜すより、警察が捜した方がよっぽど早いだろうからね。これからも、公共機関は積極的に利用するべきだと思う。でもさ……司くんは、“本当の意味”で分かっているのかな」  
「……………」

翼に対する志木城の視線が、鋭くなった。

「あ? 本当の、意味?」

「司くん、警察やら自衛隊やらが捜査してさ、仮に殺人犯の谷脇を見つけちゃったとして……その先は、どうなると思う?」

「……っ!？」

警察という網に、巨大な鮫が引っ掛かる。その人食い鮫は、鋭い歯でやがて網を食い千切り。都市という船を沈没させるだろう。

「そう、高確率で死んじやうよね。『巡回している警官の拳銃なんかじゃ勝てない』なんてのは、刑務所を脱獄してれば予想できるし良くて、応援を呼んで、騒ぎになって、潜伏場所を報せるくらいだと思っよ」

「待て！ 待てよ……それじゃあ……」

「うん。この作戦だと、犠牲者が増えちやうよね。もしくは既に、増えた後かも」

淀みなく、シュミレーションした結果を淡々と述べるように翼は言った。

「これってさ、間接的にでも人を殺してるってことになるのかな。見てみぬフリって訳じゃないけど、僕達は最善を尽くしているんだけどさ なんとなく、後味最悪だよ。テレビのニュースで外国に居る知人が殺されたみたいに。安全地帯から高みの見物してるみたいだ。だからって、僕達が警察に事情を話しても、馬鹿にされるか拘束されるかのオチになるし……うん、悔しいよね」

「っ……志木城！」

気が付けば、俺は志木城に詰め寄り、胸倉を掴んでいた。

「お前……何で、言わなかった！」

志木城は乱暴に掴まれた服も気にせず、冷たい瞳で俺を見据える。「……言えば、どうにかなった？ 他に、何か手立てがあったかしら。ない、私達には何も出来ない。谷脇が潜伏している所を割り出すことも、リスクを覚悟で派手におびき寄せることも。結局、私達がどう動いたところで、警察の関与は止められない。これは……遊園地で谷脇を逃がしてしまった、私達の責任なのよ」

「……そうじゃ、ないだろ……俺が言っているのは、責任の話じゃない。どうして……どうして、一人で抱えてたんだ」

犠牲者が増えてしまうと気付いておいて、どうして黙っていた。なんで打ち明けなかった。最善を尽くして、それでも失敗して

だからって、お前一人が抱え込む必要は無いだろうに。

「ちっ……言わなければ気付かないことをペラペラと……やっぱり、私は名島くんのが苦手だわ」

「ありやりや……嫌われちゃったか、僕としてはジヨークのお返しなんだけどな。それにさ、僕達はもう『パーティ』なんだから。ピラミッドの話じゃないけど、僕達の関係に頂点なんか要らないよね。子供じゃないんだし、優しい気遣いはノーセンキューだよ」

……気遣い？

「志木城さんなりに、司くん達のことを考えたんだろうね。まあ、やり方が不器用というかなんというか……ってか司くん、興奮すぎ。手、放したら？」

「え？ あ……悪い」

掴んでいた服を放すと、志木城はシワになった部分を軽く払った。「別に、気にしてないわ。隠し事をしていたことは、本当だから。」

それで名島くん、その隠し事 吉田さんにも喋るつもり？」

「まさか、そんなことする訳ないよ。吉田さんの性格的に、たぶん耐えられないんじゃないかな。志木城さんも、そう考えたから敢えて言わなかったんでしょ？」

「……そうね。この際だから言っておくと、私は吉田さんにこれ以上戦う姿を見せたくない。彼女は、あの遊園地の事件で誰よりも疲弊しているはずなのだから」

俺も味わい尽くした、あの罪悪感。直接手に掛けていないというだけで、無関係を装うことは出来ない。助けられた人を見殺しにしたような 気持ちの悪さ。間近で見た地獄。

「吉田さんは……言ってしまったえば、私達の生命線。この戦いにおける最終防衛ラインなのよ。心を壊して、失う訳にはいかない」

他人の心は他人には決められない それは志木城が言った台詞だ。吉田の心が弱いだなんて、翼や志木城が一概には決められないだろう。だけれど、それでも 背負わなくていいモノはある。相手のことを思うからこそ、隠したい事実はある。俺の母さんが死ん



だことや、志木城の妹のことも、その一つなのだから。

「……分かった。吉田には、このことは隠しておこうぜ。誰にだって、隠したいことの一つや二つはある。一人きりで抱え込まなきゃいいだけの話だ」

「……うん」「そうね」

翼と志木城は頷いて、この話はお仕舞い。頭を切り替える。

「でだ。翼……他の事は？　なんか思い付いた事とかあるんじゃないか？」

「ん、僕達的能力について、だね」

「……五行思想のことかしら？」

「ううん、そうじゃなくて、もっと根本的な話」

「根本的？」

「力の使い方っていうのかな……法則性？　みたいな感じなんだけど」

「……興味があるわね。言ってみなさい」

「うん。えっとさ、属性を唱えた時の……『特殊能力が一番精神力を消耗する』っていうのはいいよね。能力が強力であればある程、MPがたくさん減る。で、例えば志木城さんの『氷』　氷の剣とかなんだけどさ……属性を出している間は、持続させてるよね」

「……そうね。出している間は、イメージを描き続けているわ」

マジかよ。あんな剣を振り回しながら、頭を働かせていたのか。

……恐るべし優等生。

「だよね、僕の空間転移みたいに、発動は一瞬だけじゃない。それじゃあさ、その理屈から推測するなら、志木城さんの『氷』は、属性を　精神力を、常に放出し続けていることにならない？」

「っ！」

珍しい。あの志木城が驚いている。

「ゲームでは無視されがちな設定なんだけどね。『肉体強化』や『

魔法剣』の魔法は、一回使って持続は数ターン……みたいな。でも実際は違うよね。リスクとリターン、メリットとデメリット。能力を使っている間は、この世界に干渉し続けている訳だから MP はどんどん減っていくんだよ」

属性を用いた、世界への干渉。持続することによる、精神力の減少。

「その発想は……無かったわ」

「俺もだ……流石はゲーム脳、ダテじゃねーな」

「たはは、褒めてるの？ それ」

快活に笑う翼。

「ま、いいや。でね、そーゆーのって、戦闘パターン次第だと思うんだ。僕と戦った時の司くんみたく、『陽炎』……だったけど、『陽炎』を一連の戦闘パターンに組み込んで、『炎包』……だよな？」

『炎包』に繋げるって感じにさ。無意識だったんでしょ？ あれ」

翼は前髪で見えない視線を、俺に向ける。

「えっと……なにが？」

「だから、『陽炎』を持続させつつ『炎包』を撃った時のことだよ」

「い、いきなりそんなこと言われても……お……覚えてない」

「……この鳥頭。烏らしく卵でも産めれば少しは生産的なのに」

「うつせ志木城っ！ 戦闘中のことなんざ憶えられるかってんだ！」

「私は憶えていられるわよ。あなたの頭が足りてないだけ。まるで

スカスカのコツペパンね。私の爪の垢でも煎じて飲む？」

「そんなモン飲んで利口になれるか！」

「商品名は志木城怜実汁 顔写真付きで30万円からスタート」

「オークションかよ！ っていうか開始価格が高い！」

そんな物を買う奴なんざ変態なオッサンしかいねーだろーが。いや、本音では居て欲しくすらない。

「西条くん限定で、土下座すればタダになるけれど？」

「こ、こんのおーッ！」

「あーもー、夫婦漫才は他所でやってよ！ そーゆーのはギャルゲ

「だけでお腹一杯だつて。話が進まないじゃないか」

「誰が夫婦だ!」「誰が夫婦よ!」

「そのリアクション自体が夫婦だつて……。とにかく! 戦闘パターンに組み込めば、無意識でも能力を持続させられるってこと!」  
何故か半ギレで、翼はそう結論付けた。

「……コホン……つまり、能力が持続する技は、単体で使うと燃費が悪いのね。どこかの馬鹿みたいに、『炎壁』を持続させて突き進むなんていう蛮行は自殺行為だと」

「そうそうっ! 僕が言いたかったのはそういうことだよ。アレはないよね」

「おい! 俺がないがしろにされてますよー!!」

「付け加えるなら、名島くんの『空気砲』、西条くんの『炎包』等の単発遠距離攻撃は、燃費が良いことになるのかしら」

「だね、近距離攻撃に比べると威力はないけど、足止めとか様子見には適してると思う。相手の疲労具合とか能力とかで判断して、さっきの戦闘パターンに切り替えれば 勝率は上がるんじゃないかな」

「……ふうん。名島くんのことは苦手だけど、敵にしないで正解だったわね。流石は私」

なにげに自分自身を褒めるな。志木城はナルシストなのか? あと、翼を仲間にしようって言い出したのは俺だからな。お前の手柄にするんじゃない。

「『真理の道』については、まだまだ謎だらけだけど、今のところは……こんな感じ、かな」

たははは、と人懐っこい笑顔を浮かべ、俺の親友こと名島翼はゲームで培った理論を遺憾なく発揮したのであった。

「お、お待たせしましたっ!」

時刻は午後の二時。俺達は話すことも無くなり、中央広場で寄り

集まっていると　大きな風呂敷とブルーシートを抱えた吉田が現れた。

「遅すぎるわ、吉田さん。罰金として私にだけ三百円奢りなさい」  
どうやら、志木城の容赦ない毒舌は男女平等に働くらしい。金額的に手加減されてるっぽいけど。

「ご、ごめんなさい、志木城さん。急いで来たんだけど、遅かったよね」

息を切らしているところを見ると、吉田は走ってきたらしい。肩を上げ下げして、ほんのりと汗が浮かんでいる。抱えた手荷物が重そうだ。

「ま、まあまあいいじゃない志木城さん。僕達だって時間を無駄にした訳じゃないんだしさ。よ、吉田さん、文化祭の準備……どうだった？　遅れちゃったのって、僕達が居なかったからかな？」

志木城をなだめつつも会話を繋げるとは……いいブレーキ役が加わったモンだぜ。

「ううん、そうじゃないの。えっと、準備自体は午前中に終わったよ。店番のローションとかも決めたし、明日の文化祭は……たぶん大丈夫だと思う」

その割には、やけに暗いな。吉田は何かを言い辛そうに、モジモジとしている。

「そんじゃあ何で遅れたんだ？　あ、いや、別に責めてる訳じゃないんだけどさ。気になったっていうか……」

いい加減、ヒビが入った肋骨が痛い。ズキズキして熱を持っていた。

「あ、うん、これ……作ってきたんだけど……皆で一緒に、どうかなって」

吉田は重そうな風呂敷をドスンと下ろし、持ち易い形の結び目を解く。あ……この展開、どっかで見た気がする。あの時は　そう、白いバックに入ってたけどさ。

「じゅ、重箱!？」

「重箱ね」

「……やっぱり重箱か」

「お弁当……なんだけど」

前回よりもグレードアップされたソレは、なんと五段重ねだった。おせちじゃないんだから……とは言わないけれど、ちよつとばっかし作りすぎてないか？

「あ、あははは……名島くんも仲間になるし、皆お腹空かせてるだろうって思っ、四人分」

「

その台詞に、吉田以外の三人は言葉を失う。

作ってきた弁当のことじゃない。吉田は “翼が仲間になる”

ということを、誰よりも信じていたのだ。信じて、そして疑わなかった。初めから、翼を含めた四人で食べることを思い描いて。

うるたえた俺達を見て、吉田が申し訳なさそうに呟く。

「あ、あの……要らなかった、かな」

「……いえ、そんなことは……ないけれど」

「う、うん！ 丁度お腹空いてたしね。お昼御飯にしようよ」

「良かったっ！ じゃ、開けるね」

吉田は嬉しそうに微笑んで、脇に挟んでいたブルーシートを敷き、重箱の段を外していく。うゝん、吉田って奥手なんだか大胆なんだかよく分からないヤツだよな。重箱の下二段は前回と同じく味付けされたおにぎりが詰まっており、上三段は野菜と肉がバランス良く整ったおかずの構成になっている。……やべっ、ヨダレが出てきた。……しかし、五段重ねとは思わなかったぜ。ってか、この短時間でこんなに作ったのか？」

スッゲー凝ってて美味そうなんだが。

「そ、そうじゃなくて、下準備とかは昨日からやってたから……時間掛かつちやったのは、料理を温めてて」

「そ、そうか……昨日、からか……ありがとう」

「う、ううん、いいの。あたしが皆と食べたかっただけだから……」

褒められることに慣れていないのか、吉田は口元を綻ばせて俯いてしまった。

皆で昼食、ね。吉田らしいといえば吉田らしいのだが、この平和的思考には驚かされてばかりだな。常時殺伐としているのもどうかとは思っただけけど……能天気というか、生死を懸けたサバイバルバトル中だっというのに　遠足でもしているような気分になさてくれる。

ああ……そういえば、昨日の昼休みもそんなこと言ってたっけ。あん時は話し合いで終わっちまったけど。

癒し、か。

「あー、飯の前に悪いんだけどさ……先に俺の肋骨を治し」

ぐうぐう……。

づつ！？　お、おい！　またか、また腹の虫が騒ぐのか！　せつかくシリアスに決めていたのに、全部台無しにするつもりなのか！？

ぐう……ぐう。

いや待て、この音……俺からじゃないぞ！？

吉田を見る　俺と目が合うと、全力で首を横に振った。『あたしじゃない』とアピールしているらしい。

翼を見る　なにが可笑しいやら、ニヤニヤと状況を楽しんでいる。コイツでもないな。

つてえことは……。

「……なによ。人間という生物は三大欲に抗えない存在だというのに、その自然の摂理に対して文句でもあるのかしら」

地球規模の言い訳をしながら、志木城は無愛想な顔を赤く染めていた。醜態を晒してしまって、恥ずかしがっているみたいだ。

コレなんだよな……稀にこーゆーのがあるから、こいつの毒舌がチャラになっちまうんだよ。ったく、美人に得な世の中だぜ。

「先に、飯にするか」

「ご馳走様でした」

「お粗末様でした。あ、あの……その、美味しかった？」

「まあそこそこね。私には若干味付けが足りない気がしたわ」

ブルジョワ気取りか、オノレは。綺麗にたいらげといて、よく言うぜ。

「ご、ごめんなさい志木城さん。次からは気をつけるね」

次があるのかよ吉田。

「お、美味しかったよっ！ 僕も手料理って結構作るんだけど、吉田さんの方が上手だね！ よ、良かったらでいいんだけど……後でレシピ、教えてくれないかな？」

「あははは、名島くんも料理とかするんだね。レシピね、いいよ」

そっか、翼って男のクセに料理が得意なんだな。言っちゃ悪いが特技はゲームだけなんだと思ってた。ふむ、この二人は料理繋がりで仲良くなれそうだ。仲睦まじき事は美しきかな。

「それで、その……さ、西条くんは、どうだった？」

「ん？ 俺？」

吉田は上目遣いで覗き込むように、俺を見た。とんでもなく可愛いわ。じゃなくて！ 料理の感想だよな。せつかく手間隙掛けて作ってくれたんだから、感想ぐらい当然の義務だろう。作った本人が気にしているのなら尚更だ。つーか最近の乱れた食生活（98円のカップヌードル一つ）と家庭の味を比べていいのだろうか？ うーむ……ま、ここは素直な感想を言うておくのが無難かな。

「ウチの母さんより美味かった、マジで。吉田はさ、将来いいお嫁さんになりそうだよな」

「お およよよヨヨヨッ!？」

一瞬にして吉田の顔が赤くなった！ えっ、あれ？ 俺、なんか怒らせるようなこと言ったか？

「おい、吉田……大丈夫か？」

「ち、ちち、近寄らないで！ あたしを見ないでっ！」

「ゴフォッ！？」

挟り込むようなボディブローが炸裂。あ……折れたな、これは。「ふう……司くんは、一級フラグ建築士の才能があるよね。もうさ……爆発すればいいのに」

「本当に、鈍感を通り越して下劣だね。品性を疑いたくなるわね」「ぐっ……な、に……を」

俺が何かしたのかよ！ 蔑むような視線を送らないでくれ二人とも！ それに、元を正せば翼の空気砲の所為で って、くそっ……もう、駄目だ。

ついに痛みには耐えかね、俺は下腹部に近いワイシャツのボタンを外した。ここから手をつ突つ込めば、ワイシャツを脱がなくても治癒できるはずだ。

「吉、田……頼むから、肋骨を、治してくれ、このままだと、骨が内臓に、刺さりそうで」

「キヤー……ッ！？ め、脱ぎながらこっちに来ないでっ！」

「ち、違」

プルプルと悶絶寸前で差し伸べた手が払いのけられ、すかさず左手によるビンタが顎を掠める。脳を揺さぶられ目を回していたところに、食べ終わって空になった重箱が飛んできた。ピンポイント射撃でオデコに命中。くらった衝撃で仰け反ると、トドメとばかりに胸部を突き飛ばされた。ガード不能の三連コンボ。不幸なことに、倒された場所には木の根っこが出ており 後頭部に当たった。意識が暗転、ブラックアウト。

俺が目を覚めたのは……それから、三十分が経過してからだった。



「さ、西条くん、本当にごめんなさいっ！ あ、あたし、血が上っちゃって、なにがなんだか分からなくなっちゃって」

「ははは……まあ怪我也治してもらったし、大丈夫大丈夫」

心の方にはダメージが残ってるけどな。吉田のヒステリック癖は分かっていたけれど、同じ年の女子に拒否られるのって、結構キツイものがあるよな。

「うう……ごめんなさい」

「大丈夫だって、ホラこの通り　な？」

涙ぐんで青ざめた顔色をしている吉田が可哀想だったので、俺はその場で飛び跳ねて元気であることを強調した。うつ、昼飯がシェイクされちまったぜ。

なんにしても、これで正真正銘完全完治の全員集合である。

「ところで吉田さん。文化祭のことだけれど、私達のローテーションはどうなったのかしら」

「あ、うん……それがね……」

吉田は言い難そうに、俺と翼を交互に見た。

「志木城さんは前から文化祭の準備を手伝ってくれてたから、店番係は免除になって……」

面倒くさがりが集結しているクラスの連中にしては、なかなか妥当なところだな。ま、単に志木城の睨みが怖いだけなのかもしれないが。

「それで、西条くんと名島くんなんだけど……ごめんなさいっ！

今日の準備をサボったのがバレてたみたいなの！ クラスの皆、気付いてて見逃してたんだって」

「……！」

泳がされていた、だと？

「た、たはは……マズイね。もしかして、僕と司くんだけ一日中店番だったりする？」

「う、ううん、店番は他の人達になったんだけどね……その代わり

に……」

「その代わりに 『炎天下のビラ配り』 へとシフトチェンジした  
って訳だ」

九月も下旬に差し掛かり、猛暑による脱水症状にはなり難くなっ  
たけれど、一・二ヶ月先の秋の涼しさとは雲泥の差があるだろう。

文化祭一日目 金曜日。

今日は平日ということもあって、他校の生徒や外から来る大人達  
よりも、ウチの学生が参加者となり消費者になる。進学校では数少  
ない『自由時間』と銘打っており、普段から勉強などで抑圧されて  
いる学生諸君は、それぞれ思い思いに羽目を外していることだろう。  
悠々自適に昼寝でもして 或いは、売り上げ一位の報酬である『  
特科修学旅行』を目指して奮闘するのも一興だ。この機会に、彼氏  
彼女の関係に発展させる人も居るのかもしれない。

まあ……全部、俺には関係ないんだけどな。

「よう、西条お！ ちゃあんとビラ配ってるかあ？」

声からして酒気を帯びてそうな男は、誠に残念ながら俺の担任だ  
った。灰色のスーツに身を包み、紅色のネクタイを第二ボタンまで  
緩めている。くたびれた顔は真っ赤に染まっており、目は半開き。  
手にはビール瓶を持っていた。

「配ってますよ磯崎先生<sup>いそざき</sup>。というか、なんで酒なんか飲んでるん  
ですか。まだ昼間ですよ？」

「いいんらよ、こーれくらい。からいことお言うんじゃれーよ西条  
お」

「へべレケじゃないですか……校長に見つかっても知りませんよ」

「あーんしんしろお、コーチョーの許可はとってあるぞお、『節  
度を守れば良し』らってよ。ダッハハハハハ、ブレーコーサイコー  
！」

「……………」

クビにされてしまえ。安心どころか不安心になるっつーの。普段からダメな大人は、酒を飲んでもダメでなのであった。

しかし、校長は何を考えているんだ？　こんなタチの悪い大人を放置しちや駄目だろ。

「よお、西条お、聞くれよお。お前らはホンツツに大人を舐めてるよらあ、昔はらあ、悪い事をしら生徒にゲンコツ食らわせられたんらよお。それが今じゃ、すぐピーティーエーがどうらあ、保護者がどうらって、もお、大変だあ！　成績悪いのなんて、全部教師の所為にしやがつれえ。知るかってんだよおチクショー！」

「あの……超メンドクサイです先生」

「そつらよお教育はメンロクサイんらよお。助けてくれよお」

……水でもぶっ掛ければ良いのだろうか。

「ハイハイ。ちよつと失礼しやすよ」

俺と磯崎先生の間割り込んできたのは、にこやかスマイルの男子生徒だった。短めの髪に、小柄な体格。名前までは分からないが、ワイシャツに付いている校章の色で同じ学年だということは判断できた。

「これはこれは磯崎先生、探しておりやした。今、お暇ですか？」

「ああん？　暇らつたら文句でもあうんかあ。ブハーツ」

酒臭つ。

「いえいえ、とんでもありません。良い塩梅に泥酔されて、願ったり叶ったりでやすよ」

男子生徒は嬉々として、俺にヒソヒソ話を仕掛けてきた。

「おたく、“磯崎先生待ち”の方でやすか？」

「……いや、違うけど」

っていうか、“磯崎先生待ち”って何だ。あと、お前の下っ端みたいな語尾は何だ。

「はっはーん、合点がいきやした。おたく、磯崎先生に絡まれているだけでやすか。それじゃあ……アッシが頂いても宜しいでやすね

？」

「もちろん、是非ともお願いしたい」

二つ返事で了承。こんな担任で良ければいくらでも持って帰ってくれ。ついでに土に埋めてくれ。

「まいどありっ！ 交渉成立でやすね。これ、よければ来て下さい。アッシのクラスの出し物でやす」

「はあ……」

流れるように渡されたビラには、『二年E組 コスプレ喫茶』と書かれており、いわゆるクラスの綺麗どころがコスプレした写真が貼られていた。しかも両面カラープリント。このクラス……ガチすぎるッ！

「おらあゝ、おれえを無視しれ話すんじゃれえゝ！」

「あゝハイハイ磯崎先生、アッシ等のお話は終わりやしたので、どうぞこちらに行きやしょう。美人なチャンネーが待ってやすよ？」

「おまえ！！ ……今の話、ほんろか？」

「本当でやす。どうぞどうぞ、こちらへ……」

千鳥足になっている磯崎先生を引き摺りながら、スマイルを保っていた男子生徒は人ごみの中へと消えていった。磯崎先生……多分、今日一日で財布の中身がスカラカンになるほど搾り取られるんだろ。自業自得とはいえ、いちクラスの生徒としては手を合わせずにはいられない。ナームー。

俺は再び一人になり、スマイル男子から貰ったビラを見る。学生とは思えない凄まじいクオリティ、そこら辺のオッサンならホイホイと引っ掛かること間違いないビラである。ん？ ……ビラ？ ……

…ビラ！

「俺……アイツにビラ渡すの、忘れてた」

“磯崎先生待ち”という用語が誕生するほど、水面下では経済抗争が行われている。そんな最中、自分の仕事さえこなせない俺が居た。

「……はあゝ……サボろうかな」

こうして、俺の文化祭は幕を開けたのであった。

## 第二十七話 幕開ける文化祭（後書き）

個人的な印象なのですが、より『リアル』なバトル物ですと、重くて暗くなり易いですよね……戦争物の映画のような感じで、残酷な描写が多かったりですか。

逆に、俗に言う『熱い』バトル物ですと、主人公が空想的な性格だったり、コミカルな能力を持っていたりと、現実感からかけ離れた世界、なんて気がします。

私が書きたいのは、その『リアル』と『熱さ』の中間点みたいな作品です。

どちらかに偏り過ぎないように、頑張りたいと思います。

## 第二十八話 自伝：ピラ配り（前書き）

二十八話の登場人物

さいじょうつかさ

西条司：主人公、属性は『炎』

しきじょうれいみ

志木城怜実：属性は『氷』

つるやまこうげつ

鶴山光月：校長

あまくさちはや

天草千早：学校のOB

## 第二十八話 自伝：ビラ配り

そもそも、だ。どうして俺達広告担当が、ビラ配りなどという非効率的で紙資源乱用な行為に及んでいるかというと、それは文化祭におけるパンフレットの類を廃止されているからである。俺の予想だと、ビラの作成・客の勧誘、それら商業ノウハウを自己啓発として学ばせるのが目的なのではないかと考えている。

売り上げ一位を目指した、学生達による競い合い。そんな他の学校なら到底まかり通らない事が容易に成立してしまうのは、ひとえにあの腹黒校長による根回しの成果なのだろう。

『我が校は、生徒達の個性を何よりも尊重しています。没個性・無個性が蔓延る昨今、現社会に必要なモノは柔軟な思想と豊かで面白い個性でしょう。社会に出た方々ならば分かると思います。会社で求められるのはスズメの涙ほどの実力差ではなく、特徴的な個性です。上司に気に入られるキャラクター、営業先に一目置かれる人間性こそが、問われているのです。これから始まる学校生活で、自分というモノを持ってください。貴方にしか出来ないことを見つけてください。社会の荒波に放り出された時に、流されない個性を身に付けてください。我々教育者が手伝えるのであれば、苦勞は惜しみません。その為の我が校です』

そんな長つたるい台詞を言い放ったのが、なんと保護者同伴の入学式だつてんだから驚きだ。校風といえは聞こえはいいが、成績重視の進学校にあるまじき暴論である。この入学の挨拶だか演説だか分からない出来事は直ぐに波紋を呼び、PTAや教育委員会のお偉いさんがこぞつて学校を訪れ……たのは良かったが、ことごとく校長の話術に翻弄され、逆に説得されてしまったのであった。

校長の名前 鶴山光月つるやまひつげつ。さながら日本昔話にでも登場しそうな



名前である。根拠の無い推測なのだが、さぞかし格式高い名家に違いないのだろう。漂うオーラというか自信満々な表情とかが、そんな気にさせるのだ。

校長の見た目　コンガリとした肌黒に、黒いサングラスでド派手な赤いスーツ。ネクタイはしておらず、白いワイシャツを第二ボタンまで外している。オールバックなシルバーヘヤーは御高齢の証。渋い風貌は実年齢と比例した経験を思わせる。ヒゲは生やしていないので、年齢よりも若そうな印象だ。

校長の性格　独創的かつ破天荒で、抗弁が長けている。全校集会での話を聞いている限り、寛容で理解力がありそうな感じ。少なくとも同じような文章を、ただ読み上げているだけだった小中学校の校長達とは異質だと思う。

教師や保護者の評判は良く、生徒達の人気は悪かった。変人的な個性を発揮する校長、個性を教養する学校　しかし、誰しもが自分の個性を求めている訳ではない。平穏な日常を望んでいる生徒は居るのだ。それも大多数。そんな生徒達に対しても、学校行事で行われる『教育』は適用される。

だが、不思議と不満は表に出ないのである。そこが実に腹黒いところで、努力には報酬を　鞭にはアメが与えられているのだ。この文化祭のように、『売り上げ一位』という鞭には『特科修学旅行』というアメが与えられる。

そのアメは味わったことがないほどに甘く、鞭の痛みなど忘れるほどらしい。やがて、アメの甘さは伝説となり、民話となって学校全体に浸透する。結果、来年に向けて闘志を燃やす者が続出する　　といった具合だ。

生徒の自己啓発効果で学校自体の宣伝にもなり、卒業後の思い出話として『面白い個性』も得られるという訳だ。腹黒い、ああ腹黒い、腹黒い。『手伝い』どころか半強制的だっつーの。上手く工作しやがって。

事実、校長の掌で踊らされていることに気付いている生徒は

ほんの一握りなのであった。

「で、そんな腹黒い校長先生が、俺に何の用でしょうか？」

「ふあゝあ。又シの前説は長いしくどいの。眠くなってしまったぞい」

わざとらしく欠伸をして、校長はサングラスをずらしてシワだらけの目を擦った。

「いやの、世論調査というヤツじゃよ。ほれ、政治家によくあるじやろう？ 支持率低迷時に行うアレじゃ。ワシとしては定期的に生徒の意見も聞いとかなないとあゝ、と考えておる訳じゃ」

「はあ……それで、俺に文化祭の感想を言えとおっしゃる訳ですね」  
「文化祭というよりはワシの人氣に関してじゃがな。ワシ企画の文化祭で退屈そうにしておるところを見ると、又シはワシのことを嫌っておるのじゃろ？ じゃったら話は早い。意見を聞くなれば、ま

ずは否定から 世の常じゃ」

食えない……いや、食いたくない爺さんだな。

「でしたら忌憚なく言わせて頂くと 個性を尊重するのであれば、もう少し学力テストを優しくしてくださいと助かりますね。こんなイベントで一生懸命になればなるほど、勉強が疎かになるじゃないですか。強制的に参加させといて、あんまりですよ」

「ホッホッホッ、個性が認められるのはある程度実力がそなわっておるからじゃよ。ただのオバカキャラでは邪険にされるだけじゃからのおゝ。文武両道であることに越したことはないわい。地面が緩いままでは、空へ羽ばたけん」

「……そーですか」

つまり、勉強も文化祭も全力で臨めと。文化祭を体の良い言い訳にして、勉強を疎かにするなど。そういう訳ですか。まったく流石は教師、生徒一人ひとりのスペックも考えないで、言うことが綺麗事すぎるぜ。

「あの……俺、そろそろピラ配りに戻ってもいいですか？ まだノルマが沢山あるので」

「ホッ？ なんじゃツマランのう、もう終わりか。その割に、目がギラつたままじゃが……まあエエわい。どれ、一枚貰ってやるかの……どうぞ」

俺がビラを渡すと、校長は一通り目を通してから顔をしかめた。  
「漫画喫茶か……芸がないのう。それに値段も載っておらん。休憩所なんぞ、その辺のベンチでよかるうに。プリチーなギャルが接客でもしておるのか？」

アンタ、本当にこの学校の校長なのか？ 自分の生徒達に何を期待しているんだっつーの。

「……今の時間帯ですと、店員はヤロー二人ですよ」

「かあゝっ！ なつとらん。少しは他のクラスを見習わんかい。又シのクラスは売り上げ最低でも目指しておるのか？」

「まあ……ある意味、間違つてないですね」

漫画喫茶は、いかにして『文化祭を楽しむか』で決まった出し物である。準備の時間や店番係の削減など、マイナス方面に努力した出し物だ。最初から売り上げなんて期待していない。

「ホッ、それじゃと理屈に合わんのう。売り上げ最低を目指しておるといふのに、どうして又シはビラ配りなんぞを？」

「それは……罰ゲームみたいなもので……」

準備をサボったツケだ。このビラの束を配り終えるまで、俺の平穩たる文化祭はやってこない。

校長は訝しそうに俺を眺め、老人にしては張りの良い顎を撫でた。  
「何も生真面目に配ることはなかるうに。その辺のゴミ箱にでも、ポイツと捨ててしまえば良い」

天使と悪魔がこの世に居るのなら、この校長は悪魔に違いない。  
楽なのは大歓迎だが、ズルは気が引けるといふか……そんな囁きに乗るものか。

「……できませんよ、そんなこと」

「どうしてじゃ？ 所詮は罰ゲームなんじゃろ？ 良いではないか、不真面目なクラスで真面目にビラ配りなぞをやっても仕方あるまい。

文化祭を楽しみたいんじゃない？ のんびりと過ごしたいんじゃない？  
ならばカゴに入っているビラを今すぐ捨て、他の者のように楽しめばよいではないか。ん？ どうじゃ、サボってしまえばエエじゃろう？」

校長はシニカルに笑って、文化祭用に設置されたゴミ箱を指した。  
……何が言いたいんだ。俺にイエスとでも言わせたいのか？ この爺さんは。

そんな言い方をされたら、どうでもよかったモンが どうでもよくなるじゃねーか。

「イヤですね。これは、俺の仕事です。俺の罰なんです。ポイツと気軽に捨てられませんよ」

こうなったら、意地でも配り終えてやる。

「ホッホッホッ！ 反骨心か、まあそれもよかるうて。……じゃあの、後悔せんように楽しむんじゃぞ。ワシも他の生徒をからかいに行つてこようかの。バイキューン」

最後にそう言つて、校長はスキップをしながら俺の前から去つていった。

結局、俺がサボろうがビラを配ろうが校長にとってはどうでもよかったのかもしれない。いや、年に一度の文化祭で退屈そうにしていた俺に、喝を入れただけなのかも。どちらにしても、どちらに転んだとしても 掌の上。踊らされていることには違いないだろう。……いいぜ、そんなら踊つてやるよ。眠そうな目を覚ますぐらいに、激しいリンボーダンスを踊つてやる。

「今に見てろ……クソッ」

俺は悪態をついて、ビラ配りに戻った。

「ぐわーっ！ 減らねえ」

ビラを配り始めてから約二時間。消化率は四分の一というところ

だろうか。カゴの中には、まだまだクラスメイト達の怨念<sup>レミ</sup>が残っていた。

「にしても……今日はやけに暑いな」

肌黒校長までいかにしても、一日中外に出ていたらチリチリと肌が焼けそう。秋を迎える前の、太陽の悪足掻きなのかもしれない。って詩人か、俺は。

「ちょっと休憩して……水でも飲むかな」

人間、生きていくのには水分が必要不可欠である。本当なら文化祭らしく出店で売っているジュースでも買えばいいんだろうが、今の俺にはお金なんてない。あるのは集中力を削ぐ食欲と、校長に煽られたストレスだけだ。長期出張中である父さんのヘソクリで食いつないでいる俺は、常に節制な生活を余儀なくされているのであった。アルバイト……やらねーとダメかも。

などと考えている間に、俺は喧噪な校舎からだだっ広いグラウンドまで移動してきた。

「なんか殺風景だな……」

出し物のスペースとして利用することが禁止されている校庭は、まるで深夜の商店街のような静けさを思わせる。グラウンドの中央には、二日目のラストを飾る花火の筒が設置されていた。如何にも派手好きの校長がやりそうなことだ。っと、お目当ての水道は体育館と柔道場の間にあったよな。

グラウンドの外周トラックを歩き、横の体育館から流れてくる洋楽だかJ・POPだか分からない曲を聴きながら柔道場へと抜ける。水道に到着。炎天下にも関わらず、誰もいねえ。俺一人の貸しきり状態だ。レジャー施設で水道水が飲まれない理由を、なんとなく悟ってしまった。

俺は手に持っていたカゴを地面に置き、少し錆びれた蛇口のハンドルをひねった。流れてくる水を二・三秒放置して、吐水パイプをすすぐ。これ大事。昔すぎ忘れて風邪をもらった事があるからな。学校は休まなかったけれど、あん時は辛かった記憶があるぜ。

薬飲んだら一日で治ったけどさ。

ところで、今現在飲んでいる水道水なのだけど、実は発がん性物質が混入されているらしい。なんでも浄水場内で使われている塩素が原因なんだとか。日本の水道水は世界一安全だ　とか言われているけれど、やっぱり金で買ったミネラルウォーターには勝てないのだろうか。ま、今更発がん性物質が入ってるとか言われても、飲むのはやめないけど。

と、餓えた胃袋を水道水で満たしていると　俺の後ろを誰かが通った。水を飲むために前屈みになった俺の視線に、しなやかな指先が映る。次いで紫外線を弾き返すような純白の肌、女性にしては凛々しい顔立ちが見えた。

俺は水を飲むのをやめ、頭を浮かせて女性の全体像を確認した。左右に分けた黒い髪、肩まで伸びる後ろ髪は青い紅葉型の髪留めでポニーテールにされている。上半身には真っ白い胴着に、下半身は紺色の袴に白い足袋と、なんだか時代錯誤な格好だ。身長は、俺と同じくらいだろうか　女性にしては高い気がする。

隣に居る女性はバシャバシャと顔を洗い終え、濡れたままの瞳で俺のことを見据えた。

「少年。初対面の人間をジロジロと観察するのは、感心しないな」  
俺よりも年上であろうその女性は、ハスキーでいてよく通る声でそう言った。

「ついでに、汗だくになった乙女の洗顔を覗き見るのも宜しくない。拳句に水だ　少年の蛇口から出たままだが？」

「あ、その……すいません！」

俺は頭を下げつつ、蛇口を閉めて水道水を止めた。

「資源は無限にあるようで有限だからね。地球からの借り物は重宝しなければいけないよ。時に少年　ハンカチは持っているかい？」

「へ？　あ、はい。……どうぞ」

俺はズボンのポケットをまさぐって、地味なハンカチを差し出す。  
「借りるよ少年。タダ見た報いだと思うんだな」

ひょいっとハンカチを摘み取られて、容赦なく濡れた顔を拭かれた。

……いや、別にいいんだけどさ、初対面の男のハンカチを使うのもどうかと思うよ。

「ふう…… スッキリした。さて、乙女の水滴つきという利子を付けて返そうか」

「そんな利子はいりませんよ…… っと」

投げ返されたハンカチをキャッチ。近いんだから投げなくてもいいのに。利子を吸い込んだハンカチは重みを増していたので、俺は軽く絞って再びポケットの中へしまう。

「おいおい少年、そんなことをしたらズボンが濡れてしまうぞ？」

「いいんです、冷却材代わりに使いますから。体の一部が冷えれば汗も止まるでしょう？」

「フツ、面白い事を言うね。汚いとは思わないのかい？」

「アナタが乙女なら問題ないですよ」

「あっはっは、中々どうして…… 肝が据わっている。気に入ったよ少年」

気さくそうな調子で豪快に笑う女性。っていうか、俺の年齢で『少年』と形容されるのは正しいのだろうか？ 青年とかだったらシツクリくる気がするんだが。つーか、このお姉さんとだって歳はそう変わらないと思うんだけどな。

「あの…… 俺の名前は、西条司っていいいます」

「ほう、自分から名乗るとはな、最近の若者にしては礼儀正しい。

ご両親の教えが良いと見受けられる。ワタシの方が年上だというのに、礼を失ってしまったな。ワタシは天草千早 あまくさちはや いわゆる、この学校のOBというヤツだ。今日は文化祭ということもあって、不出来な弟子の様子見と後輩相手に百人組み手の稽古をつけていたのだよ、少年」

ふむ、じゃあ天草さんは大先輩になるのか。稽古ってことは柔道か？ …… あれ？ 柔道って袴なんて着たっけ いや、俺の記憶

が正しければ柔道の着衣は男女区別無く胴着のはずだ。となると……もしかなくてもOBを語る『不審者さん』か？ いやいや、でも柔道場から出てきたっばいし。

ともかく、そうじゃなくて。

「その『少年』っていうの、やめてくれませんか？ 俺、西条って名前がありますし」

「ああ、そうか。それは失敬したな、西条少年」

「……………」

わざとなのか、ボケているのだろうか、ツツコミ待ちなんだろうか、もしかして天然なのか？ なんにしても年上の人に突っ込むのって、勇気が要るよな。とりあえず、一つだけ分かったこと この人は嘘を言えないタイプだ。

天草さんは悩んでいる俺を見て、唐突に手を差し出してきた。

「ワタシは好き嫌いがハッキリしていてね、好きな人との縁は大切にしたいのさ。そういう時は決まって握手をする。触れ合いから始まる関係、ということだな」

脈絡がなさすぎる。しかも好きな人って……うーん、どこから突っ込んでいいのやら。触れ合いって言っても、ただの握手だろ？

天草さんは形から入るタイプってことなのかな。

「色々と葛藤してそうだがね、別に取って食べたりはしないよ。それに、君が清ければ問題ないだろう」

飄々としているがらも、心を見透かされているような気分。とりあえず、俺は天草さんが差し出してきた手を握った。

握って 捻られた。

手首から肩にかけて、激痛が走る。

「いたたたたたたタア！？」

「あっはっは、色香に弱いな西条少年。ついでに察しが悪い。拳句にお人好しだ。合気道を達者とするワタシに、身体の一部を預ける



「というのは感心しないな」

「イテテテッ！　し、知るかそんなこと！　はな、放してくださいよ！」

トラップ付属の握手だなんて、誰が分かるかってんだ！　ぐあ……  
関節が極まつてる。ジタバタしても解けやしねえ。この人、俺より細い腕なのに、どんな馬鹿力してんだよ！？

痛がる俺を眺めた天草さんは、したり顔をしてようやく手を放した。俺が振り向きざまに睨みつけると、挑戦的な声色でこう言った。  
「怒るかい？　怒るだろうねえ。怒ってみせてくれ。ワタシは君のことが知りたくて知りたくて、ウズウズしているんだ」

何なんだよ、この人は。

天草さんの物言いは言葉以上に深い意味はなさそうで、単なる好奇心　興味本位の面持ちだ。

俺から感情を引き出させようとしている……校長とは違った種類の、煽り方。そんな挑発に、乗ってたまるか。

「……怒りま、せんよ。でも、気分は良くないです。俺はマゾじゃありませんから」

「ほう、強がりや打算ではなく、争いは好まないタチなのか。しかし、それでも睨みつけるあたり、特にフェミニストという訳でもなさそうだね。その場の状況によっては、老若男女関係なく張り倒しそうな気概を感じる。フツ、なおさら気に入ったよ、西条少年」

「……気に入ってもらって悪いですけど、俺はもう行きます」

「あつはつは、今はそれでいいさ。君とはいずれ　会っ気がするからな。その時にでも、君のことを教えてくれよ」

いや、俺としては御免こうむるけど。というか、俺のことを教える前に名前と呼んで欲しいんだよ。まあ、もう会うこともないだろうし　そのままでもいいか。

地面に置いたままだったカゴを拾って、俺は事務的な動作で天草さんにビラを渡した。反省を踏まえて、手には触れずに。

受け取って「これは？」と、首を傾げる天草さん。

「俺のクラスでやってる出し物ですよ。気が向いたら来て下さい。気が向かなかつたら来なくていいです」

もめ事はお断りだからな。つか、なるべくなら来ないでくれ。

「そうか……気が向いたら、か。『きのみきのまま気の向くまま』が信条のワタシとしては、ありがたい誘い方だな」

「……………」

この人、いま乙女としてあるまじき事を言わなかったか？ “着の身着のまま” って……漢字と意味を理解しているのだろうか。語感だけで信条を決めているのであれば、今後の為に是非とも正してあげたいのだけれど。

「では、ワタシも稽古に戻るかな。休憩にしては些か長すぎた。また会おう、西条少年」

「……ええ、また会えれば、ですけどね」

別れの挨拶まで少年扱いされて、俺は肩を落しながら校舎へと戻った。

天草千早さん あの物事を達観している雰囲気、どこことなく誰かに似ている気がする。うーん……誰だっけ？

「よろしくお願いしまーす。二年A組の漫画喫茶でーす」

宣伝活動を繰り返すこと、早数十回。時刻は昼飯時に差し掛かっていたが、俺は依然としてビラ配りの労働に勤しんでいた。ズボンに入れた冷却材はあつという間に乾き、額に浮かんだ汗を拭う。隣の芝生は青く見える、か ったく、自由な時間が羨ましいぜ。厄日とは、たぶん今日のことだろうよ。

俺が居る場所は校舎にある中庭だ。この辺りは憩いの場として有名で、人通りも多い。俺は仲良さそうに歩いてきたカップルにビラを渡した。

「キャハハッ、漫画喫茶だつてえー。ケイクン、行ってみるー？」

「H A H A H A H A ! 冗談だろうミカちゃん。そんな所、行つてもしょうがないじゃないカ！」

イライラ。

「えゝ、だつてえゝミカもう疲れちゃったしいゝ。座りたいっていうかあゝ、ケイクンと一緒に居たいっていうかあゝ、二人だけの世界に行きたいっていうかあゝ……だめえ？」

ビキビキ。

「ミカちゃん……A l l R i g h t ! ! オツケー、ケイにま・か・せ・なつ！　 hey、ボーイ！　お客様の来店だヨ、漫画喫茶まで案内しナ！　プライベートルームも作ってくれたまエ！」

プツン。

「お断りだバカップル！！　エセ外人みたいな喋り方しやがって、テメエは本国にでも帰りやがれ！」

「W o w ! ?　ひどい態度じやいカ、お客様は神様だろうガ！」

「こつちにだつて客（神様）を選ぶ権利はあるんだよ、外人かぶれ！　このクソ暑い中ビラ配りなんぞをして、ただでさえ体力が減つていうのに……案内まで出来るかっ！」

「あゝん、こわゝい。ケイクン助けてえ」

彼女は甘えた声を出しながら、彼氏に腕を絡ませる。

「h、ミカちゃん……大丈夫だヨ、ケイがついてるから安心しナ。 hey hey、イエロージャップ！　男のS h i t（嫉妬）はみつともないぜ」

彼氏は肩をすくめてから、哀れみの表情で俺を見た。

「この……誰が……っ！」

暑い時に熱々なモノを見せられ　冬でもないのに頭から湯気が出そうだ。

俺は拳を握り締め、脳内にアドレナリンを分泌していると

「不快な雑音が聞こえたと思ったら……あなただったのね、西条くん」

背後から感じる鋭い視線。北極熊すら凍えさせるような罵倒を浴びせながら、志木城怜実は現れた。ってか俺の声は雑音なのかよ！「呆れた。まさか客引きが客を突き放す光景を目にするとはね……どうりで『入り』が悪いはずだわ。宣伝に罵声を織り交ぜればなるほど、確かに誰も寄り付きはしないもの。謎は解けた。あなたが主犯で、全ての原因だったのよ。私や吉田さんが苦勞して準備してきたというのに、西条くんは内心でほくそ笑みながら傍觀していたのね。下劣だとは思っていたけれど、外道とは思わなかったわ」「ご、誤解だ！」

決定的現場証拠に申し開きを通じるはずもない。カップルは志木城が放つ威圧感にたじろぎながら逃げていった。正直、俺も逃げたかった。

「誤解？ 私が誤った解釈をしたとでも言うの？ 西条くんは私に責任転嫁までするつもりなのかしら」

「ち、違うつて！ 責任転嫁とかじゃなくて」

「その減らず口を閉じなさい。ピーチクパーチクと喧しいのよ。……」

「あら？ ピーチクパーチクは鳥頭の西条くんに、相応しい？」

「喧嘩売ってんだな！ そうなんだな！」

「暴言の次は暴力に訴えるのかしら？ やってみなさい、襲われる前に泣き叫ぶわよ。外道変態鳥頭と罵られながら学校生活を終わらせるつもりなら、好きにしたらいいわ」

「……っ！？」

負の連鎖とはこのことか。切り返し方が鋭すぎるぞ。あと、鉄仮面のお前が泣き叫ぶワケねーだろーが。

「っーか志木城、分かっててやってんだろ。悪ふざけも大概にしろつて」

「なんのこと？ ふざけているのは西条くんの方でしょう。さっきのアレは何？ 客に対して、まるで誠意が感じられなかったどころか、羨望に似た敵意さえ感じたわ。はぁ……ピラを一生懸命

作った吉田さんが知ったら、さぞかし傷つくのでしょうかね」

「……ぐっ」

行き詰まったので、ぐうの音を出してみたが……虚しいだけだった。

「私としても、吉田さんに報告するのだけは躊躇うわね。けれど、吉田さんが文化祭の実行委員だというのも事実だし……ホント、どうしてしまおうかしら」

「すいませんでしたー！ 勘弁してくださいっ！ー」

人通りの激しい中庭で、大声を出しながら女子高生に謝る男が居た。客観的に見ても……俺だった。

「あら？ 西条くん、どうして私に謝るのかしら。私は“まだ”何もしていないというのに、可笑しな話ね。ちなみに、頭を下げるのなら角度45°が望ましいわよ」

「っ！ ハイッ、すいません！」

頭の角度を調節すると、俺の後頭部に志木城の手が置かれた。スベスベした感触が伝わって、妙に気持ちいい。

「ふふふっ、まるで忠実な犬ね。前は犬の鳴きマネをさせたのだけれど、今回はどうしようかしら」

「うっ」

ズブリと立てた爪が、後頭部から下がり首筋をなぞる。汗が冷や汗に替わる瞬間を、俺は体感した。

「なにが……目的だ」

「西条くん、それは誘拐犯に言う台詞だわ。犯罪者と私を一緒にたにしないでくれる？」

そうでした、お前の方が何倍も凶悪でした。

「とりあえず、面を上げなさい」

首まで下ろした指で、顎をツイーと持ち上げられる。お前は笑うと可愛いのに、嫌な笑い方かしねえよな。

「カゴの中に入っているビラ、あとどれくらいで消化できるのかしら？」

「そうだなあ……頑張っちゃあいるんだが、やっぱり今日一日は掛かると思っぞ」

「亀のように鈍足なスピードね。少しは名島くんを見習いなさい」

「……翼？ アイツ、もう配り終わったのか？」

「ええ、開催して一時間程度でカゴを返しにきたわ。『司くんが余所見してる間に、ビラ押し付け余裕でした』とか言っていたわね」  
「……………」

翼、次会ったらぶん殴る。ぐお、配る場所を別々にしたのは、そういうことかっ！ 一日のノルマにしては多すぎると思っただけ、これ二人分かよー！！

「西条くん、悶えているところに悪いのだけれど、調教の時間がまだよ」

「オイ、調教ってハッキリ言っただな、コラ！」

人間相手に使っていい言葉じゃねーぞ！

「黙りなさい。全ての執行権は私にあるということを忘れないことね。あなたの一生 生きるも死ぬも、私次第なのよ」

「そんなの独裁政治だ！ 今すぐレジスタンスを作れ！」

「なら独裁から洗脳に変えましょう。調教されていることすら気付かせないわ」

「お前には良心がないのか！？」

「え？ 両親は居るけれど？」

「そうじゃねー！！」

なんて言い合っている間に、騒ぎを聞きつけた野次馬達が増えてきた。

……『誰だ？ あの美人』……『えーっと、二年A組の志木城だよ』……『ああ、あの学年トップの。でもアイツって、あんなに喋る奴だっけ？』……『分からん、ってかもう一人の男は？』……『知らん。知りたくない。うざい』……『ですよー』……

くそっ、野次馬が好き勝手言いやがって。言われる身にもなってみろってんだ。

「……少し、はしゃぎ過ぎたわね。目立つつもりはなかったのだけれど、丁度いいわ。この野次馬を利用して、ピラ配りを早く終わらせることね。それと」

「それと？」

「明日の文化祭、私と回りなさい」

## 第二十九話 自意識過剰だから空回り（前書き）

二十九話の登場人物

さいじょうつかさ

西条司：主人公、属性は『炎』

しきじょうれいみ

志木城怜実：属性は『氷』

よしだくるみ

吉田久留巳：属性は『癒』

おがたくにきち

尾形那吉：二年E組の同級生

あおい

葵：保健室の先生

いそさき

磯崎：教師、二年A組の担任



## 第二十九話 自意識過剰だから空回り

「明日の文化祭、私と回りなさい」

まるで何事もないかのように 会話に紛れた言葉。有無を言わせぬ命令口調。瞬間、頭が白く染まる。

まずは……状況整理、だ。俺は同じクラスの女子に、文化祭を回るよう誘われた。唐突に、何の前触れもなく。あまりにも、自然な流れで。

……いやね、これを言われたのが俺以外の男子だってんなら、たとえば大衆に囲まれた最中であっても裸で飛び跳ねられる状況だとは思っよ。外見美人・成績優秀・金持嬢様と三拍子揃った志木城に誘われたんだ、そりゃあ浮かれるのも仕方ないだろうさ。俺だって自分の顔がにやけてないか心配になる。

「……………」

けどな、ここで一旦落ち着いて、文脈をよく考えるんだ。思春期にありがちな自意識過剰にならず、冷静に遡ってみよう。……そうそう、なんやかんやとトークを交わして、問題はその前だ。

この女子高生、俺に向かって『調教』とか言いやがったんだぜ？ 更正なら分かるが、調教だ。おおよそ人間に相応しくない単語だとは思わないか？ それは犬に対する台詞だっつーの。

そして思い出せ、顔面仏頂・女王気質・毒舌乱舞と裏の三拍子揃った志木城にされた辱めの数々を。土下座（お座り）に始まり、犬の鳴きマネ とくれば、おのずと“次の段階”が見えてくるってもんだろう。

「……………なによ。私にここまで言わせておきながら、まさか断るつもりじゃないでしょうね」

騒がしい野次馬が見守る中、志木城は拗ねたようにそっぽを向き、殊勝に俺の返事を待っている。その横顔は普段の志木城からすれば

随分と可愛らしい表情だったが、俺は惑わされないぞ。

一緒に文化祭を回る　つまりそれは、“散歩”という行為で間違いないだろう。俺が首輪をつけた犬で、志木城がリードを持った主人の。

「な、なあ……それは、本気で言ってるのか？」

「あ、当たり前でしょう。こんな事、冗談では言わないわよ」

怒ったように顔を赤くしたってことは、どうやらマジらしい。クソッ、今回ばかりは冗談であって欲しかった！

「ち、ちなみに、巡回コースは決めているのか？」

「……何を言っているの？　私が満足するまでに決まっているじゃない」

ハイ、校内一周コースに決定ですっ！　つか人様の羞恥心を挟むとか、どんだけＳッ気満載なんだよお前は。

……『おいアイツ、断るんじゃねえだろうな』……『もしそうなら許せん。校庭に吊るし上げるべし』……『リア充は罪、リア充は死、リア充は殺』……『あの男の身元を探れ！　今直ぐにだ！』……

……『いつまで待たせんのよ。女の子が可哀想』。男子サイテー』……い、いかん。このままだと俺は、野次馬達に殺されてしまうかもしれない。背に感じる得体の知れない邪気に押し潰されそうだ。

「……西条くん。流石の私でも、これだけ人目に晒されれば恥ずかしいのだけれど」

「うっ！？」

迷っている暇はない、覚悟を決めるんだ西条司！　少しの間だけでも、人間的尊厳を捨てろっ！

「おおし！　分かった、分かりました！　明日の文化祭、是非とも回らせて頂きます！　不肖なワタクシで宜しければ、何処へなりとも連れ回してくださいっ！！」

男らしく言い放つと、さながらカップルでも成立したかのような歓声と、呪詛の混じった舌打ちが巻き起こった。ああ、皆は気付いていない　これは調教の第一歩だということに。

「そ、そう……えらく、威勢がいいわね。なら、私は教室に戻るわ。少しでもビラを残していたら、承知しないから」

口早にそう言っ、志木城は小走りに立ち去った。もしかして、人並みに照れているのだろうか？ ……いや、まさかな。あの志木城に限って、その可能性はないだろう。うん……ない、よな？

「つと」

取り残されている場合じゃない。残っているのはカゴに入っているビラと野次馬だ。両方とも、さっさと片付けなければ。

「あゝ……野次馬の皆さん。よかつたら、このビラを貰って下さーい」

志木城とのやり取りを許可なく見られたんだ。見物料の代価としてビラ一枚や二枚、受け取ってくれてもいいだろうよ。

そう思っていたことが、俺にもありました。

「男らしいのは認めてやんよ。んだがデリカシーがたんねー。不合格」

渡す前に逃げられた。

「勝者の施しは受けん」

なんだか勘違いされている。

「リア充……祝ってやる！！」

たぶん、『呪ってやる』を言い間違えたんだろう。親指を下に向けられていたから分かるぞ。

「クソッ、これが格差社会の現状なのか……っ！ 今すぐ抜本的改革が必要だ！ モテない連合に召集をかけ、共同戦線を」

こっちが渡すのを躊躇うって。

「キミさあゝ、女の子をあんなに待たせちゃ駄目だよ。ビシッと即答しないと、モヤモヤしちゃうんだから」

何故か野次馬の女子に説教された。

「……………」

ポツン、と。あれだけ集まった観衆が、あれよあれよという間に消えていく。正真正銘、俺は取り残されてしまったのだ。主に世

の中から。

折角ちつばけな勇気を奮い立たせてまで、調教の決意をしたというのに……っ！

「どうして、こうなった」

崩れるように膝をつき、天を仰いで頭を抱える。命名、絶望のポーズ。特殊効果は見る者の哀愁を誘う。ってか、嘆いてるだけなんだけど。

「か、感動したッス！」

絶望のポーズにか？ 俺は正面を見ると、両手をギュツと握り締めた好青年が居た。短いスポーツ刈りが特徴的で、やけに瞳が輝いている。色違いの校章から察するに、一年生の後輩か。

「っ……あゝ、その、何の用だい？」

俺は急いで立ち上がりつつ、ズボンについた土を落とした。後輩に情けない姿を見せる訳にはいかない。気持ちを切り替え、手遅れかもしれないが平静を取り戻せ。

そんな俺の心中とは裏腹に、一年生は興奮覚めやらぬ状態で爛々と話しかけてきた。

「さっきのセリフ、超カッコいいッス！ 憧れるッス先輩！ 尊敬しますッス！」

「……いくら後輩だからって、その喋り方は……いや、あえて問うまい」

俺の呟きに『はれ？』と首を傾げる一年生。うむ、今はそれでいい。純粹な彼が……十年後にどう思うかだ。

「で、賛辞はありがたいんだけど……用ってそれだけなのか？」

「そ、そうでしたッス！」

オイ、今の語尾は明らかに要らないだろ。午前中の下っ端語尾といい……流行っているのだろうか。

「さっきの告白に負けないぐらい頑張るんで、見に来て下さいッス！」

突き出されたビラを受け取る。というか、傍から見ればアレは告

白の部類になるのか……俺には分からないが。

一年生から手渡されたビラには、どうやら演劇の公演予定が書かれているようだ。場所は体育館で行われ、時間は明日の午後からで

「演目は……『現代版浦島太郎』？」

「そうッス！ 公演料は一人450円で、カップルだと一割引ッス！」

「演劇にしては、なかなかお手ごろな値段設定だ じゃなくて、『現代版』ってどういうことなんだ？」

「あつ、それは浦島太郎がフリーターで、そこで竜宮城が豪邸な話ッスね！」

訳が分からない。が、分からないなりに興味を引かれるのは確かだ。誰でも知ってるストーリーなだけに、現代版になった時の展開が予想しづらい気がする。

「面白そうだから行ってみたいんだけど……あの志木城 もう一人の女子が何て言うかな。ま、言うだけ言ってみるけど、あんまし期待するなよ」

「はい、ありがとうございまッス！」

元気よくお辞儀して、一年生は純真な笑みを浮かべた。こいつも昼時まで宣伝活動か……お互い大変だな。

「そんじゃあ悪いけど、俺のビラも貰ってくれないか？ コレを消化せんことには演劇も見に行けない」

「もちろんッス！ 他の演劇部員にも渡すんで、8枚貰いまッス！」

「お前………助かる」

いい奴って居るんだな。取り残された世の中も、案外捨てたものじゃない。触発されて、難攻不落な志木城を説得する気が増すってもんだ。

カゴの中のビラを8枚渡す。おお、一気にゴールが近づいてきたぞ。

「へーっ、先輩のクラスは漫画喫茶なんッスね！」

「ああ……忙しかったら来なくてもいいぞ」

「いえいえ、明日は無理なんすけど、今から行かせてもらいまッス！」

「ぬ……むう」

改めてそう言われると、自分のクラスの出し物なのに胸を張ってお勧めできないというのは、なかなか辛いものがある。普通の漫画喫茶なんだけどな。むしろ手抜き感がありありと見えるような作りのくせに基本ボツタクリ設計なので、進んで紹介したくはない。な  
んと言うか、板挟みのジレンマだ。

微かに、俺の中の善意がいそいそとウオーミングアップし始めた。  
好青年の貴重なお小遣いを、汚い奴等クラスメイトに渡してはならない。俺が  
食い止めなくては。

「本当に……気が向いたらでいいんだぞ？」

「なにを仰いまッスか！ こう見えても俺、漫画とかメツチャ好き  
なんッスよ！」

「あ……でもほら、既読の本ばかりかもしれないし。もしそう  
だったら飲み物代だけで損だろ？」

「いや、走り回って丁度喉渴いてたんッス！ こういうのは……  
えーっと……そう、渡りに船ッス！」

乗船するのが泥舟でもいいのか？

「ジューズ代も高いしさ、喉を潤すだけなら出店のほうが安いんじ  
やないか？」

「ですが先輩の誘いを辞退するというのも気が引けますし……そう  
ッスね、行くだけ行って決めるッス！」

そしたら搾り取られるんだって。

うーむ、こいつは手ごわい。無垢なだけに骨が折れそうだ。

ここは一つ、芝居でも打ってみるか。

「ぐっ……ぬぐぐぐぐ！」

腹を抱えて蹲る。我ながら、仮病のバリエーションが実に少ない。  
「どうしたんッスか先輩！？」

「は、腹が、ヤバイことになった。おそらく、うちのクラスのジュースを飲んだ所為だっ！」

「ええ！？　だ、大丈夫ッスか！」

こんな急転直下な芝居で騙される演劇部って……いやいや、俺が言っなって話しだよな。真実味が薄すぎる。

「っ……きつとジューズが腐ってたんだよ。だからさ、お前も行くの止めとけ。」

「保健室！　保健室に行きましょうッス！」

「へ？」

好青年はいきなり俺の脇に潜り込み、ガシッと肩を担いで腰に手をまわした。

この体勢は、後悔しか生まない気がする。

「任してくださいッス！　体力は人一倍あるんで……行くッスよッ！」

「ちょ、待て、うおおおおお！？」

引っ張られるというよりは、引き摺られ。

走るといふよりは、駆ける感じで。

墓穴を掘ったとはいえ、よもや荷車になる気分を味わうとは思わなかった。

「さ、西条くん！？」

吉田は場を弁えない大声を出し、ぐったりとしている俺を見た。

「よお……吉田、か」

薬の匂いが鼻腔の奥まで広がり、少し黄ばんだ白色の壁・床・カーテンが俺を囲む。そう……ここは保健室。

そして驚いている吉田久留巳は、学級委員と文化祭実行委員、さらには保険委員までも兼任しているのだった。この文化祭において

は、まさしく引つ張りダコ。それを容認している教師も教師なのだけれど……ちよつと仕事しすぎだぜ、吉田。

「急患ツス！ 腹痛ツス！ 先輩ツス！！」

「ちつとは落ち着けつての」

ズビシ、と後輩のデコにチョップをかます。体育会系特有の鎮静剤代わりである。

だが、一年生は特に気にした様子もなく、担いでいた肩をストンと下ろした。

「ウツス先輩、気が付いたんツスカ！」

「そもそも気絶してねーよ。まったく無茶苦茶に引き摺りやがつて、制服が破れなかったのは奇跡だな」

「あ……あの、西条くん。け、怪我なの？」

「いや、怪我じゃ、ないんだけれど……」

後輩を騙す為に仮病したとは、口が裂けても言えないわな。

心配そうに見詰める吉田。さて、どうしたものか。

「だから腹痛ツスよ！ 腐ったジュースで、下痢なんツス！」

「おま！？」

女子の前で下痢とか言うな！ 腹下してるとか言え！ あー、ほら、吉田が俯いちまったじゃねえか。

「ち、ちよつと待っててね。便秘のお薬、取ってくるから」

吉田は赤面しながら、薬が収納されている棚へと向かった。なんだろう、後ずさる姿が悲しく映る。またしても、俺のキャラが崩壊したような。

「薬があつて良かったツスね、先輩！」

「……ああ……うん」

わざとじゃない、わざとじゃないんだ。この一年生に悪気はないんだよ。っていうか、こうなった原因は俺にあるのか。

「さ、西条くん。その……あのね！ お薬、飲むタイプと、その……ちゅ、注入タイプがあつて！」

「っ！？」



「ち、注入タイプだとね……い、一緒に流れちゃうから……できれば、飲むタイプがいいと、思うよ」

クラスメイトの可愛い女の子に、便秘薬を差し出される俺。いつそのこと、泣いてしまいたい。

「そ、そうか……じゃあ、ありがたく」

「う、うん。お水、いる？」

「ああ　いやあ、必要ない」

「そう、なんだ」

「……………ゴホン」

「……………うう」

薬を受け取った距離感のまま、ただただ時が流れてゆく。

オイ……………オイッ！　何なんだよ、この空気。気まずいってレベルじゃねーぞ！　まともに吉田の目が見れねえよっ！

「はれ？　さつきから固まって、どうしたんツスか先輩。便所、行かないんツスか？」

だからお前は、どうしてもっとオブラートに包めないんだっ！？　トイレとか厠とか言えいいのに、わざわざ下品な方をチョイスするな！　というか、そういう問題じゃないんだよ！

「……………む、う」

この沈黙度合いは遊園地以来だな　などと、どうにもならない現実を逃避してみる。

うーむ。お礼だけ言って、トイレへ一目散に駆け込むか？　それとも、仮病をバラして誤解を解くか？　けれど、ただけどなあ……………

…ええい！　考えすぎて腹が痛い！

「ん……………」

あれ？　考えすぎると、お腹が痛い？　頭じゃなくて？

ぐぎゅるるるるう。

「はう……！」

腹痛は、波に例えられることが多い。

それは胃や小腸がポンプのように膨張と収縮を繰り返し、おへそ周辺にある神経の束が刺激され脳へと伝達しているから、だそうだ。カップラーメン生活等で体内に潰瘍や炎症などが出来てしまうと、繰り返し蠕動運動時にますます痛みが増すらしい。おまけに蠕動運動は自律神経が司っている為、ストレスを感じたり緊張状態に陥るとポンプの勢いに拍車が掛かる。こういう時に暴食や“大量に水分を取る”等をし、“激しい運動”でシェイクしてしまうと、お腹を下しやすいという訳だ。

要するに、うる覚えの知識を引き出してまで、何が言いたいのかというと。

今世紀最大のビックウェーブが 押し寄せていた。

「う、っ〜！」

嘘から出た実。

みるみる内に青ざめていく顔。腹部を押さえる両手。前のめりに屈む腰。なにもかもが、想定外。

口内で頬の肉を噛み締め、腹痛を激痛で誤魔化そうとしたが失敗に終わる。

腹中のうねりは、止められない。

「だ、大丈夫？ 西条く」

「今すごい音しましたツスけど……あつ、先輩」

「す、すまん！ 俺、トイレ行ってくるから！」

二人の気遣いを半ば無視する形で、俺は保健室から出た。

文化祭ということも相まって、賑やかな長い廊下。この一階にトイレが設置されている箇所は……確か、下駄箱付近だったかッ！

目測では、ギリギリ耐えられる距離だ。

ここで重要なのは、けして走ってはいけないということだろう。上下運動でお腹に刺激を与えてはならない。気持ち急いでの早歩き

に、焦燥を抑える為の妄想力が必要される。加えて、最小の動作で最短のルートを導き出さなければいけないのだ。

「なんで、こういう時に限ってえ……！」

埋め尽くす人の多さに、らしくない泣き言を漏らす。これを掻い潜るのは至難の業だろう。

「二階に迂回するか？ い、いや、階段はキツイし、それなら一階を諦めた方が……」

グギユ、ゴロロロロオ。

「ノウ！？」

反射的に力を入れ、なんとか持ちこたえる。すでに、刻限の猶予は残されていない。決めた、このまま……突っ切るぜ！

そう思い、一歩踏み出そうとした矢先

ドン、と肩がぶつかった。

「はう！ あうゝ」

「おっと、すいやせん。つつい余所見を……ってヤヤツ、またお会いしやしたね！」

「お、お前は……」

現れたのは、短髪下つ端語尾のスマイル男子。午前中に会った時とは違い、今はビラも持つていなさそうだ。ノルマが終わったのだろうか？ 否、そんな事はどうでもいい。

「わ、悪い、急いでんだ。早く、トイレに行かねーと……た、大変なことになる。津波の被害は、デカいんだぞ」

「ハイ？ ……あつ、あゝ、そういう事でやすね。なるほどなるほど、分かりやした」

スマイル男子は俺のことを上から下まで眺めて、何かを悟ったらしい。それはそれで好都合だった。

「ぐつ、分かったんなら退いて」

「おたくには磯崎先生待ちの“借り”がありやすしね。要するに、この廊下を抜けてトイレへ行けばいいでやすよね？ でしたら、ここはアッシに任してくださいよ」

そう言つて、スマイル男子は薄い胸板を叩いた。軽くデジャヴを感じる。なんか、いまいち頼りない。

「ど、どうするんだ？」

「なぐに、アツシの後ろに付いてくれば万事問題ないでやす。アツシ、人を避けるのは得意でやすから」

ゴロン、ゴロロロオ。

腹の音は、今や雷鳴に近い唸りを上げている。

「っ！ 分かった……信じるぞ、信じたぞ、頼むからな！」

「そんな睨まなくても平気でやすつて。んじゃ、行きやすよ」

「お、おう」

それから先 いざ歩き始めてみると、困惑するばかりだった。

「ほいつ、ほいつの、ほいつ」

年越しの神社、休日的大型デパート、どこでもいい　そういう人通りの激しい場所で、自分のペースを保って歩き続けることは出来ないだろう。

談笑しながら隣り合つて歩く人、反対側から向かつてくる人、急に立ち止まる人。それらにすれ違い、時には肩がぶつかり、或いは歩幅を変えて　歩かざるを得ない。

「ほい、ほつ、あらよつと」

なのに、俺とスマイル男子は、早歩きで通っている。歩くペースを一切変えずに、人の流れを見切っているかのように、僅かな隙間を通り抜けて。

「ハイハイ、到着でやす」

下駄箱付近のトイレまで、あつという間に辿り着く。後ろを振り返つてみても、誰一人として俺達を気にしている様子はない。

「……どうなつてんだよ、これ」

「へへへ、ちよつとしたコツでやすよ。アツシも姉御から教わったばかりでやすがね」

人差し指で鼻先を擦りながら、古臭い喜び方をする。ああ……その姿、俺には救世主に見えるぜ。疑つてすまねえな、見直した。

ゴロゴロゴロ……グロオ。

「うつ！ こ、ここまで案内してくれて、サンキューな。俺、もう限界みたいだわ」

「気にしないでください。借りを返しただけ、でやすから。では、アッシはこれにて失礼しやす」

「ちよい待った。折角だし、名前だけでも教えてくれないか？ 俺、西条司ってんだ」

「……そうでやすね。“縁は大切に”でやすから」

にこやかスマイルの男子は、どこかで聞いたことを言つて、礼節に名乗った。

「アッシは尾形 おがたくにきち 尾形那吉と申しやす。どうぞ御見知り置きください、でやす」

危機は去った。命からがらシエルター（便座）に着き、巨大な津波をやりすごしたのだ。この爽快感は、尋常じゃない。世界が美しく見える。

しかし、俺は広告担当にも関わらず、保健室にビラ入りのカゴを忘れてしまったらしい。度重なるミスタイクの連続に、今日は厄日だということを再認識させられた。

「入りにくいよな、常識的に考えて」

保健室の手前で立ち止まる。はあ……逃げ出したい。

「フンフンフン」

耳に聞こえてくる、愉快的メロディ。まずい、やな予感しかしない。

「フーン……よよ、ちよっとちよっと！ キミ、保健室の前で何してるの？」

「……後悔です」

「んん？ キミは……いつかの土下座くん？」

その覚え方は、最優先でやめて欲しい。

「そういうアナタは、保健室の先生ですね。お久しぶりです」

「はあどうも……じゃなくて、何してんだってば」

「だから、取り返しのつかない後悔ですってば」

「マネすんなってば」

「……はい、すいません」

保健室の先生って、どうして女性が多いんだろうか。つかこの学校の教師って、くだけてる人が多すぎるだろ。元凶は校長か、腹黒校長の人選なのか。

「とりあえずさあ、そんなところでウダってないで、中に入ったら？ 用事があるんでしよう」

「用事というか、持ってき忘れた残留思念というか」

「なにさ、キミは高校生にもなつて中二病なのかい？ だったら高校生になれるように、チュウして治すけど？」

「ぜ、全力で遠慮します！」

「ほり、したらばさつさと入れよ高校生」

ガラリと、無慈悲にドアが開かれた。

「あ……さ、西条くん」

「や、やあ、吉田じゃないか。かなり久しぶりだな」

「え？ さ、さっきも会った気がするけど……」

「……うん。まあ、そうだよな」

偶然を装いつているのは、俺だけだった。過去は消せないから過去なのだ。

「そう言えば、あの一年生は？」

「うん、西条くんに宜しくって言って、帰ってたよ」

「……そうか。お礼、出来なかったな」

なんとなくだけれど、もうあの一年生とは会わない気がする。彼には彼の物語があつて、俺と交わったのは、それこそ何かの偶然だったのだろう。寂しいけれど、仕方がない。

「ふうん。土下座くんとは知り合い、ね」

何か言いたそうですね、先生。文句は受け付けませんよ。

「あつ、<sup>あおい</sup>葵先生、お疲れ様です」

「お疲れちゃん、クルクル。あの酒臭いバカは寝てるかな？」

クルクル？ 吉田のあだ名なのだろうか。というか、酒臭いバカ  
って……誰のことだ？

「あ、はい。磯崎先生なら、ベッドで寝てますよ」

うちの担任かよ！ どんだけ生徒に迷惑かければ気が済むんだよ、  
アタは！

「ごめんね〜クルクル。ホントは窓から投げ捨ててもいいんだけど……一応、あれも教師の端くれだから、さ」

ふむ、保健室の先生なだけに、ちゃんとした良識は持ち合わせて  
いるのか。

「縛っておいた方がいいかと思ってね」

前言撤回い！ 泥酔状態の人間を縛るとか、鬼かアナタは！

「す、すいません！ あの……縛るのは可哀想だったので……解い  
てしまいました」

それでいいんだ吉田。人として正しいことをしたぞ！

「ええ〜、もう解いちゃったのぉ？ ツマンナイなあ〜」

頼みます、先生達はもつとお手本になってください。反面教師も  
いいとこだ。

「ん、ん〜？ 反面教師い〜？」

し、しまった！ 最後の心の声が出ていたか。

突如、二十代後半の葵先生は、俺の肩に腕を回した。ウェーブの  
掛かった髪が、俺の耳に当たる。か、顔が近いって！

白衣に付着した柑橘系の甘い香りが、俺の思考をとろけさせる。

や、やばいって！

「そんなことを言う口は、塞いじゃおうかなあ？」

艶かしい指が、ズキリと痛む頬に当たり、次第に唇へ

「だ、だ、ダメーーーーッ!!」

つんざくような声が、室内に響き渡った。

「……………よし、だ?」

「……………クルクルちゃん?」

「……………ふが、おれあ、まらあ飲めるぞぉ……………ぐうぐう……………」

酒臭いバカ(担任)の寝言を契機に、吉田はハッと我に返ったようだ。うおっ、顔がリングゴより赤い。

「あ、あたし……………そ、その、あの……………が、学校で! そういつのはダメだと思いますっ! 葵先生!」

そうか、吉田は破廉恥なことが嫌いなのか、俺も大いに同意見だ。「ふうん……………冗談が効果観面、ね」

葵先生はニヤリと笑い、俺の肩から腕を離れた。この人、さては確信犯かつ!

「あ、葵先生! さ、西条くんから、はな、離れてください!」

「あいあい。ごめんねクルクル。ちよっち大人のイタズラが過ぎたわ。ほり、もうやらないから泣かないで」

「……………うう……………ひどいです、先生」

目に涙を溜める吉田。そこまで怒ることなのか? むう、俺だけ状況が飲み込めてない。

「イジワルしちゃった代わりにさ、クルクルも文化祭に行ってきたよ。ウチはもう十分堪能したから、さ」

オイコラ、今まで保健室に居なかったのは、その所為だったのかよ。生徒を働かせて教師が遊ぶな。

「で、でも……………」

「クルクル、青春は一度きりなんだよ? あのバカはウチにバトンタッチして、楽しみなって。まだ昼食も食べてないんでしょ? クルクルが優しくてお節介さんって事は知っているけど、さ。自分の時間を作った方が、思い返した時に笑えるんじゃないかな。思い出は常に楽しく煌びやかに、ってね」



年長者らしい、とてもいいことを言っただが 散々遊んだ

奴が言っと、説得力皆無だな。

「な、生意気だねえ、土下座くん」

「嘘お！？ また声に出してました！？」

「キミの場合は声に出てなくても、その顔面に出てるんだよ。教師を冷めた目で見るんじゃないよ、この中二病が」

「……すいませんでした」

「だつめえ、許しません。何でもかんでも許されるのは義務教育まで、さ。そうさねえ……」

葵先生は、嘗め回すように俺の全身を見た。い、異様な寒気が襲う。

数秒して……葵先生は思いついたように、ポンと手を叩いた。

「土下座くん。クルクルとのランチ、行ってきたな」

## 第二十九話 自意識過剰だから空回り（後書き）

祝、二万PVです！！ これも全て読者様のおかげ……私としてもモチベーションに繋がります。

しかし、短編を挟んだとはいえ、一ヶ月以上の更新停滞……申し訳御座いません！

プロットは四話先まで出来ているので、執筆ペースを乱さないように適度に頑張りたいと思います。

それでは、次回で文化祭一日目は終了です。三十一話後に間話を入れて、ラフ絵を公開したいと思います。

### 第三十話 勘違いでも幸せ（前書き）

三十話の登場人物

さいじょうつかさ

西条司：主人公、属性は『炎』

よしだくるみ

吉田久留巳：属性は『癒』

どうじまもとちか

堂島元近：元『熱』の属者

なじまつばさ

名島翼：属性は『空』

つるやまこうげつ

鶴山光月：校長

### 第三十話 勘違いでも幸せ

おそらく、世界中を探したってそうは無いだろう。この学校独自の文化祭 『特科修学旅行』を懸けた、商売合戦が行われているのは。

大量発注によって原価を下げ、大量消費による売り上げ一位を目指しているクラスは少なくない。本格的な売り上げ時となるのは一般客が訪れる二日目なのだが、だからといって大量に入荷した商品を全て捌く為には俺達学生の客もバカにできない。

そんな訳で、時刻は昼過ぎだというのに、胃袋を刺激せんばかりの香りを撒き散らしながら正門から校舎にかけて立ち並ぶ出店の数々。ランチのピークが終わったということなので、今度は値下げによる価格競争が勃発しているに違いない。ヘタをすればコンビニより安い商品が出回ってるのかもな。これが柔軟な校風を受け入れ、先輩方から受け継いだコネクションを最大限に活かした結果だ。高校生の本気 侮ってはいけないと思う。

その大通りを行き交う生徒達は、進学校では珍しい自由時間を十分に満喫していると言っているだろう。音楽プレイヤーを再生しながら、片手にジュースやら食べ物なんか持つちゃったりして……辛うじて制服は着用しているものの、行動の制限は無いに等しい。なんたって今日と明日は年に一度の『文化祭』だからな、楽しまなくっちゃ損だろーよ。

でだ、肝心の俺達はどうと。

「……なんか、すまん。一緒に昼食になっちゃって」

先の方を歩いていた足を止め、俺は１メートル後ろに離れている吉田を見た。

「う、ううん！ いいの……その、気にしてないから。あたしの方こそ、ごめんね西条くん。ピラ配り、忙しかったんでしょ？」

「あー、いや、いいんだ。元はと言えば保健室の 葵先生が招い

たことだしな。というか、俺も一区切りつつーか休憩したいところだったし……今日は水だけしか飲んでないから腹減ってたんだ」

「そ、そうなんだ……ごめんね」

「だから吉田は悪くないんだって、何回も謝るなよ」

「うん……あ、ありがとう」

「……お礼を言われるのも違う気がするけど」

笑顔が溢れる、楽しい楽しい文化祭。しかし、それは俺と吉田には当て嵌らない話だ。

「……あー……うん」

互いに視線が合わない。俺は『女子と二人きり』という気まずさからか眼球をキョロキョロと泳がし、吉田は何かを言いたげに足元一点に目がいつている。

「……んん」

なるべく音を出さないように、軽く咳払い。

やばい……正直、相当参っている。

それはそうだろう。『可愛い女の子と食事に行ってきた』と言われ、そのままポーンと外へ放り出されたのだ。これで参らない方がどうかしている……よな？ え？ 俺だけじゃないだろ！？

「その……なんだ」

なんとなくだが、沈黙というのは六種類に分けられると思う。

放心・思考・自制・警戒・驚愕　そして、困惑。いわゆる、何をどうしていいのか分からない状態だ。

「……………あう」

この困惑による沈黙は、セットで呻き声がついてくることが多い。奥手な二人　しかも知り合い以上友達未満のような、大して仲良くない人と居る時に会話の接点を探した末　つつい声が漏れてしまう。そんなある種の本音、苦心の表れではなかるうか。ってか、なんで説明口調なんだよ俺は。

こんな時にわざとらしく空元気を出して『楽しいご飯、美味しいごはん、ゴ・ハ・ン』とか歌ってみせればいいのだろうが、生憎

と俺は斜に構えた現実主義者なので、そんなことをする訳にもいかない。かと言って、ずっと黙ったままというのも物寂しいし……またとない機会だ、音楽やら趣味の話でもしてみるか？ いやいや……俺はお見合い中の口下手野郎かよッ！ だあーっ、もう考えても埒が明かねえ！

俺は「うつし！」と意を決する。ここは深く考えず極めてナチュラルに、目的を絡めた会話を試してみようじゃないか。

「あのさ吉田……好きなモノって、何だ？」

「えっ……えええええ！ すずす、好きな人！？」

完全に声が裏返り、それはもうみるみる内に吉田の顔は赤信号のように染まってグルグルと目を回した。

……おかしい。俺と吉田の間では、圧倒的に語弊がある気がする。まあ、結論として……日本語って難しいよなア！

「も、者じゃなくて物な！ す、好きな人じゃなくて、好きな食べ物だから！」

「あ……あたし、何て答えたらいいんだろう……いつそ素直にッ、ダメダメ！ やっぱり、直接なんて、い、言える訳がないよ！」

「……おい吉田サーン、ヒステリック暴走モードから戻ってこーい」

「でも、他に居ないことは伝えないと、いけないと思うし……あっ、でもでも、それって誰にも興味が無いって取られるかもしれないし……」

「……………」

ちなみに、今の俺の沈黙は思考中ってことだ。

まったく、翼も妄想スイッチが入るところなるし、志木城なんて俺の意見をハナツから聞かねーし、師匠は師匠で口数少ないし……どうして俺の周りに居る連中は、まともに話せない奴等ばかりなんだろうな。

そんな眉間にしわを寄せた俺を見かねたのか、吉田は純朴そうな

眼を携え、宣言するような前のめりの姿勢で、「さ、西条くん、あのね……あたし、す、好きな人は居ないから！　で、でも、異性には興味、あるんだから！」と言った。

対して俺は、「……う、ん……そう、ですか」と曖昧に返すことしかできない。異性に向かって興味津々とか言われてもなあ……挨拶に困る。

そもそも俺は『好きな人』とか訊いてないんだけどさ　何故か心の隅では、ホツとしたような気分になってるから不思議だ。むう、吉田は誰からも好かれてるし、てつきり好きな人も居るんじゃないかって勝手に思い込んでいた。ほら、人に優しくするって自分に余裕がないと出来ないことだと思うから……っか、なに意識し始めてんだよ俺は！　吉田との『恋人関係』はフリ、フリだからっ！　おい体、頬を上気させるんじゃない！！

「そ、そう言えば！　さ、西条くんには……好きな人って、居ないの？」

何をどうすれば『そう言えば』に繋がるんだろう。まったくもって人生というのは謎だらけだ。っと、それはともかく。

「俺は　居ないな」

即答の返事に、「え？」と首を傾げる吉田。

「いやだからさ、漫画や小説なんかで『愛』とか『恋』の定義つっの？　そういうニュアンスはなんとなく分かるんだけど、自分で実感したことがないっつーか」

恥ずかしながら、付き合ったことも本気で人を好きになったことも無かったりする。高校二年にもなって……変、だよな。

「じゃあじゃあ……つつ、付き合ってる人も……居ないの？」

「あ、当たり前だろーが！　そんな人が居たら、吉田と『恋人のフリ』なんか出来るかっての」

「……フリ………そう、だよな」

吉田は見るからに肩を落としガツクリと沈んでしまった。どうしたんだろっ、急に元気がなくなっただようだ。もしかしくなくても、俺

の所為か？……ぐっ、こういう時は話題を代えよう。

「えーっと……でさ、好きな食べ物って何かある？」

「……うう……ない……ないよ。好きな食べ物も、嫌いな食べ物も、何にもない。あはは……」

投げやりな返答に加え、渴いた笑い声をあげられた。うっ、なんだかモヤモヤする　このままじゃ、駄目だ。

「悪い。なんか俺、変なこと言ったかな」

「うっん……違うの、あたしが、勘違いしてただけだから」

勘違いって、さっきの者と物のことだろうか？　だったら恥ずかしいだろうし、やっぱ『好きな人』のトークは避けた方がいいよな  
「まあ気を取り直してさ！　飯食いに行こうぜ！」

「……そだねっ！　あたしも、お腹減ってきちゃった」

「おっ、そいつは行幸」とは言ったものの、この沢山ある出店の中から選ばなくてはいけない。価格競争をしているとはいえ、お財布事情になるべく安い食べ物がいいだろう。

「吉田ー、なんか食べたい物ってあるか？」

「うーん……西条くんにお任せで」

「あいよ」と目を移し、主食になりそうな店を探す。

目に付いたのは、焼きそば屋とお好み焼き屋とたこ焼き屋。この中で最もリーズナブルな物と言ったら、たこ焼きかな。

「そんじゃあ昼食はたこ焼きってことで」

「うん、いいよ。美味しそうだね」と、やっと吉田の表情が笑顔に戻った。笑顔が一番、食欲万歳だ。

はあ……しかし、これで手に持ってる忌々しいビラが無かったら、最高の状況だったんだけどなあ。

心の中で愚痴りつつ、俺達は香ばしい音色を奏でているたこ焼き屋の前まで移動した。

たぶん伝統品なのであろう、たこ焼き専用の熱された鉄板の上には、ジュージューと小麦色の生地が焼かれている。お値段は十個入り350円なり。ここで『350円か、カップラーメン三個分だな』



と換算してしまうあたり、俺の思考はすでに貧乏になってしまったのかもしれない。

「らっしやい！ おつ、まーたカップルか！ かー羨ましいっ！ 文化祭でデートかよ！」

そんな鉄板にも負けないぐらいの暑苦しい来客応対をした人物に、俺は瞠目させられた。

だってそうだろ？ 同じ学校にいる以上、コイツとすれ違うことはあったとしても、話すことはもうないと思っていたんだから。

「 堂島、元近」

「ああ？ なんでフルネーム？ つーかオレ、オマエと会ったことあったっけ？」

野球部のエースピッチャーは、坊主頭に似合い過ぎるねじりハチマキをして 現れた。

あなたの願い事は何ですか？ と問われ、『永遠の愛』という不確定で不安定な答えを出す。それは安易なようでいて、とても純粋で真っ直ぐな 勇気がいる告白。

一人の幸せは世界の重さにつり合い、想いの秤は平等であることを示した。そんな想いに勝てたのは、きつと俺が一人きりじゃなかったからで、堂島とは違う 叶えたい願いが、叶えたい気持ちだが、中途半端じゃなかったからなんだ。

「そっか、憶えてる訳……ないよな」

堂島は灼熱の勝負に敗れ、俺に『とある約束』と真名を託した。それが堂島なりの決着だったのだろうが、生殺与奪の戦いにおける肉体とは別のもう一つの命を……無くしてしまった。

暗黙のルール。他者に真名を晒すと、属者としての記憶が 消

されてしまうということ。

「んあゝ、どつかで会った気がすんだけどなあゝ」

思い出そうとしているその記憶も、おおかた教室で手当てを受けた時のものだろう。だいぶ前の話だし、俺と喋った時間は一分にも満たない。思い出せないのも無理ないか。

「さ、西条くん、この人って……」と吉田が言いかけて、俺は人差し指を口元に当て黙秘を促した。

続けて、「野球部のエースピッチャーなんだ。名前ぐらいは知っててもいいだろ？ 風の噂ってヤツだよ」と堂島の疑念を晴らしてやる。

「あ、なるへそ。そーゆーことが。へへっ……なんつーか、照れるな」

堂島はたこ焼きの生地を竹串でひっくり返ししながら、世辞をすんなり受け取ってはにかむ。こういう単純なところは、素直に羨ましいと思う。

「ほらさ、二日目の花火ってあるだろ？ あれでグラウンドが使えなくなつてよー、野球できねーんだわ」

「……文化祭の日ぐらい、練習休めばいいじゃねーか」

「んな訳にいくかよ！ 来年の甲子園は待つちゃくれねーんだ。一分一秒も無駄に出来ねえっつーの！」

「それで、何でたこ焼きなんてしてんだ？」

「……担任がコーチなんだよ。サボったらスタメンから外すって脅された」

「そいつは……ご愁傷様」

ウチの担任とは違って、堂島のクラスはちゃんと先生が統制してそうだな。その常識が少しでもあれば……いや、みなまで言うまい。「んでカップルさん、パックは二つでいいんかい？」

「カップ……カップ……！」

「お、落ち着け吉田っ！ 誤解、誤解だから！」

いくら俺のことが嫌いだからって、そう毎回過剰に反応しなくて

もいいんじゃないか？　ちょっと傷ついちゃうぞ。

「あんねえ？　カップルじゃねーの？　そんじゃあ350円になっちまうけど」

「……なん、だと？」

「だーから、カップルだと値引きされんだって、ワンパック300円」

諺で『一円を笑う者は一円に泣く』という言葉がある。一円一枚で泣く……それが五十枚ともなれば、それはもうボロ泣きするくらい悲しい末路を辿るということだ。

俺は気付かれないような横目で、吉田の様子を窺う……と、目が合ってしまった。

「ど、どうするの？　西条くん」

身長差という必然的な上目遣いで不意を突かれた問いかけに、思わず赤面してしまう。というか、吉田はどっちでもいいのか！？

また勘違いされちまうのに。

「ぬ、ぬぐぐう……」

モラルを取るか、五十円で泣くか　決めるのは、俺だ。

「さ、350円を二つで……頼む」

「……ふーん、毎度あり。ほんじゃあ合わせて700円な」

は、ははは……身体の毛穴から蒸気が噴出されたみたいだ。五十円分の悲しみを背負った感じ。吉田も勘違いされずに済んだようで、吐息を短く漏らしてる。

「でもよあ、文化祭で男女ペアってことは、どー考えたってカップルじゃん」

相変わらず、堂島の価値観には『女友達』という概念は無いらしい。

「カップルじゃなくなたって、飯ぐらい一緒に食っていいだろ」

「いんや駄目だね。オレみたいのに勘違いされて、そこら中に噂さ

れっぞ。特にそんな可愛い子……オレはタイプじゃねーけど、狙ってる奴等なんかごまんと居るんじゃないか？　したら迷惑だろーよ、色々」と

ああ……実際、迷惑だったさ。お前が俺と志木城の関係を疑った時もな。けど

「その時はその時だ。くだらねえ誤解なんぞ、俺が全部解いちまえばいいだけさ」

「……ぶ、へへへっ、オマエなかなか格好良いじゃん。だつてさー彼女、良かったな」

「えっ、あ、はい……良かった、です」

「ぐっ、だから彼女じゃないし、リアクションに困るから話を振るなっつーの！」

「へいへいっ」と

茶化し笑いを浮かべたまま、慣れた手つきで青海苔とソースをかける。立ち昇る甘辛い匂いに、俺は唾液を分泌させられた。

「……安いわりに、うまそうだな」

「おうよ！　伝統・安心・信頼・自慢のたこ焼きだ！　安さの秘密は、食って確かめな！」

自信満々に言い放って、裾で額の汗を拭う。

……総じて、これで良かったんだと思う。

食い違い、堂島とは言い争って戦いになってしまったけれど、最後には分かり合えたように　俺の“してきたこと”は、間違いじゃないんだ。

俺と吉田は、お釣りを出さないように支払って、たこ焼き屋を後にした。

場所が変わって、校舎中央。木を取り囲んだ中庭のベンチに腰を下ろす。辺りを見回してみるが、俺達以外に座っている人は居ない。一応これでも人気スポットの一角なのだが、なにぶん昼食時から時

間が経っていた為、難なく座れているという訳だ。ところで、女子と木陰のベンチに座るというのもドッキドキなシチュエーションだよな。

ただし、ベンチの端と端に座っていることを除けば、だが。なんにしても、食事というのはテンションが上がる。

「いったただつきまーす！」「い、いただきます」

竹串で取り上げ、モグモグと咀嚼　う、うまい！　表面がカリッとしていながらも、中はフワフワな食感。ソースと青海苔の香りが鼻から抜ける。そして、これは……ッ！

「具はチーズ……みたいだね」

「たこ焼きじゃねー！！」

まあ、それはそれで美味しいんだけど……詐称にはならないんだろうか。

「あ、でも、こつち側にはたこが入ってるよ？」

「へ？」吉田のパックを見ると、左側の具にはチーズが、右側の具にはたこが入っていた。要するに、五個ずつ二種類のたこ焼きが入ってるってことなのか。

「おいしい……これで350円なんだ、安いね」

「だな、それに飽きさせない工夫がされてるから……もぐんぐ……こりゃありピーターも増えるわな」

売れる食品の条件において、『飽きない』というのは結構重要なポイントだと思う。極上のたこ焼きを十個用意して客を飽きさせるより、多種類で常連を作った方がいいに決まってるのだ。

そういう具に使われている角切りチーズの原価も安いしな、ホント本格的というか商売上手というか……恐れ入るぜ。

俺は空腹ということも手伝って、三分たらずでペロリと平らげてしまった。食べ終わったパックに竹串を入れて、ベンチ脇に設置されたゴミ箱へ投下。うむ、育ち盛りの胃袋はこんな間食程度では満たされないな。

そうなると、自然と女の子な仕草でモフモフと食べている吉田に

目がいつてしまう訳で……堂島に言われたからじゃないけれどそこはかとなく、意識してしまう。

「あう……あんまり見られると、は、恥ずかしいな」

「ご、ごめん！」と神速で顔をそらす。「先に食い終わっちまったから……つい」

つい なんなんだろう。分からない。

「あの……たこ焼き屋の人、西条くんに少し似てたね」

「え？ いや、どこがだよ」

堂島は坊主頭だし、顔だって全然似てないと思うんだが。

「なんかね、目標に向かって頑張ってるどころとか……かな」

「それは……そんなの、誰だってそうだろ？ 頑張ってる人なんて居るのかよ」

「あははっ、そーゆーこと言えるのも、西条くんが頑張ってるからなんだよ？」

「っ……そーかい」

褒められたからそっぽを向くって、自分の事ながら子供みたいな照れ隠しだ。つたく、いつまで経っても捻くれてやがる。

……あーあ、腹減った。

「よかつたら、これも食べる？」

「いいのか！？」

「う、うん。朝ごはん、たくさん食べてきちゃったから……ちよつとお腹一杯で」

「んあ？ でもさつきは『お腹減った』って言ってたような……？」

「あ、あれは違って！ その、だから、もう……とにかく、あたしの分も食べてよ！」

「うおっ！」二人の隙間を埋めるかのように、たこ焼きのパックが差し出された。なんだか理不尽に怒られて、釈然としないんだが……せつかくの厚意だから貰っておこう。「そんじゃあ、ありがたく……」と手を伸ばし、そして硬直する。

俺の竹串が 無い。

どこへやった？ そりゃあゴミ箱の中に決まってる。何で？ 食べ終わって捨てたからでしょう。

……重力でリングが落ちることよりも明白な事実、当惑してしまふのが人間という生物。

現実はいつだって残酷で、俺に厳しい。

パックには五つのたこ焼きと、吉田の竹串。もしも……もしも話だけでも、この竹串を俺が使ってしまったら……か、かか間接キスということになるのだろうか。いや、考えるまでもない。そう……なる、よな。どうしようもなく、そうなってしまう。

「西条くん？」

そうだ、ゴミ箱からあさるというのはどうだろう……いやあ、普通に引かれるって！ あっ、じゃあ口で直接くわえれば　って、どうしてそんなこと考えちゃったんだよ、俺！　いかん、落ち着け、パニくるな。冷静に現状を分析すれば、おのずと答えが出るはずだ。「と、取らないの？」

たこ焼きが重かったのか、吉田の細い腕はフルフルと震えている。早く取ってあげないと可哀想だ。

「……では、頂きます」

不本意ながら　むんずつと、手で鷲掴み。そのまま口に放り込む。

「むぐむぐ……ゴクン……」ごちそうさま」

「どう、いたしまして」

「……………」

この沈黙は、明らかに警戒されているのだろう。きょとんと見詰められる。

はは、ははは……俺、まーた吉田に嫌われちゃったなあ！　もう泣くッ！

「串……使ってよかったのに……」

「グス……え？」

「な、なんでもないよ！　なんでもない」

吉田は今までのペースとは違って、パクパクと残りのたこ焼きを食べようとしている。ああ、そんなに急ぐと。

「けほ……けほ！」喉につつかえたのか、案の定むせてしまったようだ。

「少し待ってろ、飲み物買ってくるから」

苦しそうな吉田を見て、俺は一も二もなくすつくと立ち、方向転換　出店の方に走った。ん？　ジュース代？　さあて、なんのとだか。

「ンクンク……ぷはあ、楽になったみたい。ありがとう、西条くん」  
「いいって、それよか、あんまし慌てて食べるなよ。消化に悪いしさ、今みたいに喉つまらせるだろ」

早食い野郎が何言ってるんだか。けれど、吉田は「うん、ごめんね」と申し訳なさそうに苦笑する。

人が良すぎるのも、考えようだ。

「……そうやって謝るの、禁止な」

「え？」

「前から思ってたんだけどさ……お前、ちょっと謝りすぎだって。大して悪いことなんてしてないじゃんか」

「……そうかも、しれないけど……あ、あはは、癖になっちゃったのかも」

「癖にするなよ、そんなもん。これは親の受け売りなんだけど、言葉ってのは使えば使うほど軽くなっちゃうんだとき。年中謝ってる奴とそうじゃない奴……どっちが重いのかなんて、比べてみれば一目瞭然だろ？　それに謝られると、俺にも非があるんじゃないか？　かっと思っちゃう。悪いことしてねーのに、雰囲気ですら謝ってたら尚更だ。自分を小さく卑下して、自信まで失ったら……辛いだけだ」

「……うん」



「あゝっ、説教つぽくなっただけだし、俺……吉田には笑ってて欲しいっていつか」

「あれねえ？ 吉田さんと司くんじゃないか」

さも出来すぎた偶然を装ったような口調で、俺の前に出現した獲物。

携帯ゲームを片手で器用に操作し、もう片方の手にはわた菓子ときたもんだ。

見間違えるはずも無い。通りかかったのは誰あろう、“元”親友の名島翼その人である。

ここで会ったが何とやら。汗にまみれた積年（午前中）の恨み……今あ、ここで晴らすッ！

「あ、名島く」

「つ・ば・さ・くううううん！！」

「うわわっ、某キャラクターっぽいよ司くん！」

手を振ろうとした吉田を無視。残りのビラを手に掴んでダッシュ、レスリングよろしく全速力で翼の腰まわりへタックル が、寸前のところで避けられる。

「危なっかしいな。そんな血走りながら興奮しちゃって、どうしたの？」

「お前の所為だろーがっ！」

惰性でヨロケながらも、声を眼で追いかけると……翼はベンチを取り囲んだ木の枝にブランブランと座っていた。ドア要らずの『どこもドア』、サヤ人の『瞬間移動』 もとい『空』の特殊能力、空間転移だ。

「ば、バカッ、学校で使ってんじゃねーぞ！」

「ちゃあんと周りは確認したよ。左右前後方上下万事問題ないし」「つらつらと中国語みたいな漢字並べやがって、そういう問題じゃ

」

「あるでしょ。要は見られてなければいいんだから」

口元は笑っているが……今日の翼は、なんだか知らんけど機嫌が悪い。つーか、いい加減にそのゲーム動かすのは止める。

「ねえ、司くん。『二兎を追う者は一兎をも得ず』って……知ってるよね」

「んだよ、いきなり」

「もう一つ忠告すると『傷は浅い方が治りが早い』、かな」と翼は下を向き、吉田を窺うように見た……のかもしれない。前髪に隠れて判断できない。

「忠告つて、訳が分かんねーよ」

「あとは自分で考えてね、じゃないと……ゲームオーバーになっちゃうよ?」

「ああ? それつて、どういう意味」

一閃先には、もう居ない。

「吉田さーん、それじゃあねー。司くん、ピラ配り頑張つてよーっ!」

「屋上……この、待ちやがれ!」

「まったねー、名島くん」

吉田はのほほんと手え振ってる。チクシヨウ……逃がした。かき回すだけかき回しやがって、まるで台風だな。翼め……意味深な台詞だけ言つて行くなつてーの。

「なんの用だつたんだろうね、名島くん」

「分かんねえ……偶然通つただけじゃねーの?」

そう言つて、俺と吉田は空を見上げたまま黙する。

翼からの忠告……忠告ねえ? 何に対する何の忠告なんだろう。『あとは自分で考えて』つて、考える取っ掛かりすら無いじゃんか。俺にどーしろつてんだ。

「西条くんつて、名島くんと……仲、いいよね」

そよ風の中に溶け込むように、吉田がボソツと呟いた。今の一方的にからかわれた状況を見て、どうして仲良しだとか思っただかな。

けど、まあ……一笑して否定する場面でもなさそうだ。

「吉田にだつて居るだろ？ バカなことして、バカな話で盛り上げる友達ぐらいさ……あいつはその一人つてだけ」

「それでも、羨ましいよ」と小声で喋る。「あたしってね、中学校卒業してからこっちに引越して……だから、西条くんや名島くんみたいに、古い友達って居ないんだ。放課後もね、委員会が忙しくて遊ぶ友達も居ないし……あゝでも、休み時間とかは楽しいよ。みんな優しいし、大好き」

取り繕ったような声に青空から振り返れば、吉田の複雑そうな表情が待ち受けていた。普段の明るい吉田とは、思えなかった。胸が高鳴り、『俺でよければ』と口走りそうになる。不安を苛立ちに換えて、俺は口を開く。

「入ってる委員会、やめちまえば？」

俺の口を尖がらせた物言いに、吉田は「え？」と呆ける。俺と吉田の距離。前より近くで接するようになって、心の内で感じていたこと。

「自分のしたいことが出来ねーなら、やめちまえ。羨ましいと思うのなら、手に入れる。人に優しくするってのは難しくて誰にでも出来ることじゃないけどさ、『自分を削って』まですることじゃねーだろうよ」

偉そうに言うつもりはない だけど、俺にはこんな言い方しか出来ないから。

「もっと、我がままでも……いいんじゃないか？」

そう、言った。

「……………」

この沈黙は、一体何だろう。怒りや反論を自制しているのであれば、完全に俺のお節介で終わる。ウザイと罵られるかもしれないし、口も利いてくれなくなるかもしれない。やっちゃった……後悔先に

立たず、だ。

吉田は静かに目を閉じて、ゆっくりと目を開けた。

「……ダメだよ、あたし」吉田はベンチから立ち上がり、俺の瞳を見る。決意したように、正面から、見続ける。「ずっと憧れてたのに、変わらなくちゃって思ってたのに……身体も、心も、動いてなかった」

微かに、『臆病なだけじゃ始まらない。歩み寄らないと好転しない』とオマジナイのような声が聞こえた。

「さ、西条くん。あたしの我がまま……聞いてくれる？」

震えているのは俺なのか、それとも吉田？ 分からない。分からないから、訊いてみる。

「ああ……言ってみな」

吉田は言い掛けて、掠れた空気だけを出して、また吸って、今度は深呼吸。

そして

「明日の文化祭……あたしと、回って下さい」

文化祭一日目、金曜日の午後二時十五分 クラスメイトの吉田久留巳に、初めて我がままを言われた瞬間であった。

「ぜえ……はあ、ぜえ……はあ……やっと、見つけたぜ」

息も絶え絶え、校内・校外中を駆け回り、そろそろ夕方になるうとする茜空。そんな天に物申すような真っ赤なスーツを着こなしている白髪サングラス。俺は肩で息を吐きながら不気味かつ豪華な正門ゲートで、ようやく捉えることができた。

「ホッホッホッ、首尾どうじゃい若人よ」

「はっ……ご覧の通りだよ、腹黒校長」

校長に空っぽになったカゴを見せ付ける。これで俺の勝ち　ノ  
ルマ達成だ。

「それはご苦労じゃったな」んじゃバイキューン、と手を上げその  
場を去ろうと踵を返す。

「ちよつ！　オイ……は？　そ、それだけ？」

「なーにを期待しとったんじゃ知らんがの、なんだかんだでワシ  
の文化祭……楽しめたじゃろ？」

「　　うつ！？」

そのたった一言で、あたかも今日一日を悟られた気がした。

「汗水垂らすは若人の特権、偲び堪えうるは老人の余得。人生の重  
みは受難で増せ、勤勉親しみ娯楽を享受し進めよ若者」

校訓を捨て台詞に、校長は遠くなる。

「……………そつか……………やられたぜ、畜生」

祭りには必ず主役が必要である。学校の文化祭ともすれば、生徒  
が催す文化そのものが主役になるのだろう。

保護者でも教師でもなく　生徒。

文化とは形であったり、そうではなかったり　様々な表わし方  
をする。

例えばそれは、無形の経験なのであって、この文化祭で感じた全  
てが自ら築きあげた文化（やり方）なのかもしれない。人への接し  
方だったり、効率的な工夫だったり、笑いあった時間だったり  
自分の人生で活かせること、思いを刻むこと。

「そーゆーことなんだろう？　校長先生」

目先の『特科修学旅行』や『商売合戦』なんかは単なる過程で、  
『本当に学ばせたいこと』は別だったんだよな。

俺は校長の掌の上で踊って……笑っていた。

なんとって今日と明日は年に一度の『文化祭』だから、楽しま  
なくっちゃ損だろーよ。

### 第三十話 勘違いでも幸せ（後書き）

だいぶ遅れてしまいましたが、文化祭編の一日目が終了です。  
この調子で間髪入れずに二日目を執筆致します。

それでは、次回は西条くんが選んだ答えからスタートです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9363n/>

---

真理の原理

2011年11月19日20時32分発行